

博士学位請求論文

指導教員 李冬木 教授

魯迅と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介

佛教大学大学院

文学研究科文学専攻

張宇飛

目次

要旨

序章.....	1
第一節 研究動機	1
第二節 研究方法	3
第三節 論文構成	4
第一章 周樹人の「文芸運動」におけるロシア文学の受容の概観.....	9
第一節 周樹人の日本留学	9
第二節 明治期におけるロシア文学の翻訳と紹介の実態	15
第三節 先行研究	21
1. 課題に関する資料の確認	22
2. 80年代までの研究史.....	26
3. 80年代から21世紀までの先行研究.....	27
4. 新世紀以来の先行研究	29
第二章 スラブ民族における「摩羅詩人」	
明治期におけるプーシキンとレールモントフの翻訳・紹介と周樹人.....	33
はじめに	33
第一節 明治期におけるプーシキンの翻訳・紹介と周樹人	33
1. 先行研究	33
2. 明治期におけるプーシキンの紹介と周氏兄弟のプーシキン論	35
3. 明治期におけるプーシキンの翻訳と周樹人	38
第二節 明治期におけるレールモントフの翻訳・紹介と周樹人	41

1. 先行研究	41
2. 明治期におけるレールモントフの紹介と周氏兄弟のレールモントフ論	43
3. 明治期におけるレールモントフの翻訳と周樹人	45
第三章 社会と人生の暗黒面を描写する小説家	
明治期におけるゴーゴリの翻訳・紹介と周樹人	49
はじめに	49
第一節 魯迅とゴーゴリ	49
第二節 先行研究	51
第三節 明治期におけるゴーゴリの紹介と周樹人	54
第四節 明治期におけるゴーゴリの翻訳と周樹人	60
第四章 明治期に盛んに翻訳されたロシアの小説家	
明治期におけるツルゲーネフの翻訳・紹介と周樹人	69
はじめに	69
第一節 魯迅とツルゲーネフ	69
第二節 明治期におけるツルゲーネフの紹介と周樹人	72
第三節 明治期におけるツルゲーネフの翻訳と周樹人	76
第五章 周樹人が愛したロシアの小説家	
明治期におけるチェーホフの翻訳・紹介と周樹人	84
はじめに	84
第一節 魯迅とチェーホフ	84
第二節 明治期におけるチェーホフの紹介と周樹人	86
第三節 明治期におけるチェーホフの翻訳と周樹人	88
第四節 チェーホフの「大事件」と魯迅の「兎と猫」の類似性	95

第六章 留日時期から注目していたロシアの小説家

明治期におけるコロレンコとゴーリキーの翻訳・紹介と周樹人.....	102
はじめに	102
第一節 明治期におけるコロレンコの翻訳・紹介と周樹人	102
1. 先行研究	102
2. 明治期におけるコロレンコの紹介と周樹人	104
3. 明治期におけるコロレンコの翻訳と周樹人	110
第二節 明治期におけるゴーリキーの翻訳・紹介と周樹人	112
1. 先行研究	112
2. 明治期におけるゴーリキーの紹介と周樹人	113
3. 明治期におけるゴーリキーの翻訳と周樹人	118

第七章 『域外小説集』に登場するロシアの小説家

明治期におけるアンドレーエフとガルシンの翻訳・紹介と周樹人.....	122
はじめに	122
第一節 明治期におけるアンドレーエフの翻訳・紹介と周樹人	122
1. 先行研究	122
2. 明治期におけるアンドレーエフの紹介と周樹人	124
3. 明治期におけるアンドレーエフの翻訳と周樹人	128
第二節 明治期におけるガルシンの翻訳・紹介と周樹人	131
1. 先行研究	131
2. 明治期におけるガルシンの紹介と周樹人	133
3. 明治期におけるガルシンの翻訳と周樹人	136

第八章 若き日の周樹人に影響を与えたロシアの小説家

明治期におけるトルストイとドストエフスキーの翻訳・紹介と周樹人.....	139
はじめに	139
第一節 明治期におけるトルストイの翻訳・紹介と周樹人	139
1. 先行研究	139
2. 明治期におけるトルストイの紹介と周樹人	141
3. 明治期におけるトルストイの翻訳と周樹人	144
第二節 明治期におけるドストエフスキーの翻訳・紹介と周樹人	148
1. 先行研究	148
2. 明治期におけるドストエフスキーの紹介と周樹人	149
3. 明治期におけるドストエフスキーの翻訳と周樹人	154
終章.....	157
第一節 日本留学時期の周樹人はなぜロシア文学を愛読したのか	157
第二節 明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介は周樹人の「文芸運動」及び後の創作 に対して何の影響を与えたのか.....	161
第三節 明治期におけるロシア文学の翻訳は清末時期におけるロシア文学の翻訳にとっ てどのような意味を持っているのか及び清末ロシア文学の受容史における周樹人の位置づ け.....	165
第四節 今後の課題	169
注釈.....	171
参考文献.....	203
付録1 参考年表（1902－1912年）	216
付録2 日本留学時期の周樹人が目睹したロシア文学に関する日本語訳の書目	225
付録3 清末時期における日本語訳をもとに翻訳したロシアの文学作品	227

謝辭..... 230

要旨

魯迅（1881-1936）の本名は周樹人である。1918年に「魯迅」という筆名を用いて短篇小説「狂人日記」を発表したことで有名になり、その後の生涯は長らく中国文壇の中心にあった。「周樹人」はなぜ「魯迅」になったのか。その内在的な精神メカニズムはどのようなものか。この問題については、過去の多くの先行研究が周樹人（以下、日本留学時期の魯迅を「周樹人」と呼ぶ）の日本留学時期（1902-1909）に注目しており、また、大量の実証研究を通じて、魯迅思想の内包における進化論、国民性の改造、個性主義などの内容は何れも留学時期に置かれた明治30年代の思想文化と密接に関連していることを証明している。言い換えれば、日本留学時期の周樹人は、明治期の文芸雑誌や書籍を大量に接触して読むことによって、次第に自分の精神理念を構築し、自己確立と個人主体の精神過程を完成させたのである。1909年に周氏兄弟が外国文学を翻訳した『域外小説集』の出版から、魯迅が後に「狂人日記」の創作について「頼みの綱としては、以前に読んだ百余篇の外国作品」という回想まで、こうした史実は明治期の文芸雑誌と書籍の中で、日本語に翻訳された外国文学作品が非常に重要な位置を占めていることを示している。さらに、周氏兄弟の回想や関連史料の発掘によって、これらの外国文学作品の中で、ロシア文学は周樹人が非常に注目している内容であることが明らかになった。日本留学時期の周樹人がロシア文学に注目したのは、日露戦争と明治期における数多くのロシア文学が日本語に翻訳されたこと背景と切り離すことはできない。日本留学時期の周樹人は日本語に翻訳されたロシア文学を通して、自分の審美基準と価値傾向に合致するロシアの作品を求めて、自分の文学観を構築し始めたということは明らかである。

日本留学時期に、最初にロシア文学に接触してから、魯迅が逝去する前まで、ロシア・ソ連文学に対する閲読と翻訳は魯迅の生涯の中の重要な仕事になった。そのため、「魯迅とロシア文学の関係」という課題は魯迅研究において重要なテーマである。その中で、日本、特に日本明治期（1868-1912）におけるロシア文学の翻訳と紹介がどのような役割を果

たしたのか、部分的に実証されたが、未だ十分に検証されていない。本論では、留学時期の周樹人と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介の関わりを明らかにし、明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介がその後、文学者になった魯迅にとってどのような意味を持っているのかを検討する。

本論は日本留学時期の周樹人の閲読史に着目し、彼の精神構築とロシア文学との関係を重点的に検討する。明治期のロシア文学翻訳の背景の下で、周樹人がロシア文学の収集、閲読、紹介と翻訳したことは、何れも彼がロシア文学に対する注目を表している。一方、周樹人が注目したロシアの作家及び作品は、彼のその時の審美基準や価値傾向に一致するということを示している。例えば、個性を主張する浪漫主義詩人たちに対する関心から、自由を求めるロシアの詩人プーシキン（1799-1837）、レールモントフ（1814-1841）は、他の6人の詩人と共に周樹人の執筆した「悪魔派」詩人の系譜を構成している。もう一つは、「しばしば傲慢不遜な人物を全篇の主人公として描いている」作品に注目していたので、周樹人はロシア文学の中の「狂気」を帯びた作品に注意していた。また、ロシア人が自由を求める革命精神に注目していたので、ロシア文学では人生を暴露して、専制に反抗して、自由を求めて、日常を描写する文学の特徴にも共鳴感を引き起こした。他方、周樹人が注目したロシアの作家及び作品はすでに「周樹人」から「魯迅」という精神成長の過程における重要な文芸資源になっていることがわかる。ロシア文学は周樹人の文芸運動に大量の参考資料と翻訳底本を提供しただけでなく、後に作家になった魯迅に豊富な文学資源を提供した。本論は周樹人が留学時期に日本語の翻訳・紹介を通じて接した11人のロシアの作家との史実的関連を調査することを目的とし、さらにロシア文学が「周樹人」から「魯迅」までの精神的成長過程においていかに重要な役割を果たしているのかを検討する。具体的には以下の八章、および付録「参考年表（1902-1912年）、日本留学時期の周樹人が目睹したロシア文学に関する日本語訳の書目、清末時期における日本語訳をもとに翻訳したロシアの文学作品」で構成されている。

序章

第一章 周樹人の「文芸運動」におけるロシア文学の受容の概観

第二章 スラブ民族における「摩羅詩人」

明治期におけるプーシキンとレールモントフの翻訳・紹介と周樹人

第三章 社会と人生の暗黒面を描写する小説家

明治期におけるゴーゴリの翻訳・紹介と周樹人

第四章 明治期に盛んに翻訳されたロシアの小説家

明治期におけるツルゲーネフの翻訳・紹介と周樹人

第五章 周樹人が愛したロシアの小説家

明治期におけるチェーホフの翻訳・紹介と周樹人

第六章 留日時期から注目していたロシアの小説家

明治期におけるコロレンコとゴーリキーの翻訳・紹介と周樹人

第七章 『域外小説集』に登場するロシアの小説家

明治期におけるアンドレーエフとガルシンの翻訳・紹介と周樹人

第八章 若き日の周樹人に影響を与えたロシアの小説家

明治期におけるトルストイとドストエフスキーの翻訳・紹介と周樹人

終章

以下、それぞれの章の要旨をまとめる。付録の紹介は省略する。

序章では研究動機、研究方法及び論文構成を述べる。本論文は実証研究の方法を用い、留学時期の周樹人のロシア文学の受容について考察する。具体的に以下の手順に従って留学時期の周樹人がロシア文学から受容したものを明らかにする。まず、歴史事実として、日本留学時期の周樹人の「文芸運動」を考察する。とりわけ周樹人とロシア文学の関わりに注目する。留学時期の周樹人の創作、翻訳、蔵書及び親友の回想などを通して、周樹人の「文芸運動」におけるロシア文学がどのような意味を持っていたかについて検討する。

次に、明治期におけるロシア文学の翻訳と紹介を考察する。明治期におけるロシア文学についての紹介、評論、研究書、翻訳物及び訳者、掲載雑誌の情報などを収集する。以上のロシア文学に関する文献資料と周樹人の「文芸運動」の関わりを探し求め、両者の関連を検討する。最後に、明治期におけるロシア文学の翻訳物と後に文学者になった魯迅の文学作品との関連性を考察する。各テキストに関係した資料の分析を通して、日本留学時期の周樹人がロシア文学から受容したものを検討する。本研究の目的として、周樹人の創作は彼が愛読したロシア文学から何を取り入れ、いかなる影響を与えられたのかについて考察する。

第一章では、周樹人の「文芸運動」におけるロシア文学の受容の概観を考察する。全体像から周樹人と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介の関係を把握する。第一章は全三節により構成される。第一節と第二節はそれぞれ周樹人の日本留学の概観と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介の実態を考察する。周樹人の日本留学の実態を考察し、事実関係として、周樹人の「文芸運動」と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介の関わりを検討する。第三節では、中国と日本における「魯迅と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介」に関する研究の史的考察である。

第二章以後では、第一章の考察を踏まえて、日本留学時期の周樹人と明治期におけるプーシキン、レールモントフ、ゴーゴリ（1809-1852）、ツルゲーネフ（1818-1883）、チェーホフ（1860-1904）、ゴーリキー（1868-1936）、コロレンコ（1853-1921）、アンドレーエフ（1871-1919）、ガルシン（1855-1888）、トルストイ（1828-1910）、ドストエフスキー（1821-1881）などの11人のロシアの文学者、それぞれの受容について、具体的に展開している。

第二章では、中島長文、北岡正子などの学者が「摩羅詩力説」（1908）におけるプーシキンとレールモントフのテキスト部分の材源を調査した上で、さらに周作人（1885-1967）の回想文を確認し、日本留学時期の周樹人がどのテキストを通してプーシキンとレールモ

ントフに接触したかを再確認し、また、周樹人がどのようにプーシキンとレールモントフをスラブ民族の「摩羅詩人」として受容したのかを再考した。その他、本章では、『小説訳叢』に収録される昇曙夢（1878-1958）が翻訳したプーシキンの小説「心づくし（原名「彼得大帝の黒人」）」が明治文壇で起きた論争を調査することによって、『小説訳叢』に収録される訳本の翻訳品質と周樹人の閲読傾向を考察する。

第三章では、周樹人における「社会と人生の暗黒面を描写する小説家」ゴーゴリの受容について考察する。本章は秦野一宏、李冬木などの学者が明治期におけるゴーゴリの受容の調査をもとに、日本留学時期の周樹人とゴーゴリの関連を検討し、「摩羅詩力説」におけるゴーゴリについてのテキストを確認する。上記の考察を通して、日本留学時期の周樹人はどのようなルートで発狂した経験を持つロシアの天才ゴーゴリに注目し始めたのか。また、ゴーゴリの「社会と人生の暗黒面を描写する」小説は周樹人に何をもたらしたのかを検討する。その他、魯迅の小説「孔乙己」（1919）とゴーゴリ的小説「外套」（1842）の関連については、多くの先行研究が言及されているが、本章では『小説訳叢』に収録された西本翠蔭（1882-1917）が翻訳した日本語訳の「外套」と「孔乙己」の関連を検討することを目的とする。

第四章では、周樹人におけるツルゲーネフの受容について考察する。明治期におけるツルゲーネフの翻訳・紹介と周樹人の関係を考察し、当時の周樹人のツルゲーネフ観を検討する。周樹人は日本留学時期に、ツルゲーネフに関するテキストを書き残していなかった。ツルゲーネフの作品を翻訳する計画があったが、最終的には発表しなかった。そのため、本章では、『小説訳叢』に収録されるツルゲーネフの小説及び『域外小説集』に関連するツルゲーネフの小説と明治期のツルゲーネフの翻訳状況との関わりを通して、日本留学時期の周樹人がどのようなルートでツルゲーネフの作品に接触して読んだかを考察する。

第五章では、周樹人におけるチェーホフの受容について考察する。明治期におけるチェーホフの翻訳・紹介の考察を通して、周樹人とのつながりを着目する。それから、第五章

ではチェーホフの小説「大事件」（1886）が魯迅の小説「兎と猫」（1922）を創作するときの一つの参考素材であることを証明しており、また筆者は魯迅の小説「兎と猫」とチェーホフの小説「大事件」の対比を通して、二つの作品の物語の内容と展開は非常に似ていることを明らかにしている。筆者は「大事件」における子猫が黒犬に食べられた部分、人間が小動物に対して生死の態度を描写する部分が魯迅の創作「兎と猫」にインスピレーションを与えたと推測している。

第六章では、周樹人におけるコロレンコ、ゴーリキーの受容について考察する。第六章は全二節により構成される。第一節では、明治期におけるコロレンコの翻訳・紹介の考察を通して、周樹人とコロレンコの関連を検討する。以上の整理を通じて、小山内薫

（1881-1928）が雑誌『新小説』で発表した評論「露国の小説家ウラヂミール・カラレンコ」が周樹人の「摩羅詩力説」のもう一つ材源であることを明らかにする。小山内薫のこの文章は明治期におけるコロレンコを最も全面的に紹介した文章である。この文章の中で、コロレンコの小説「末光」についての紹介はちょうど魯迅の「摩羅詩力説」の結論部分が参照した内容である。この材源の発見は日本留学時期の魯迅が明治期の刊行物の外国文学の評論や翻訳を通して、自らのテキストに引用したことを呈して、「魯迅とコロレンコの関係」という課題の研究、ひいては日本留学時期の魯迅と外国文学、とりわけロシア文学の受容という研究に資するものであると考える。第二節では、明治期におけるゴーリキーの翻訳・紹介の考察を通して、周樹人とゴーリキーの関連を検討する。李冬木の明治期におけるゴーリキーとニーチェ・ブーム及び周樹人の三者関係に関する先行研究をもとに、明治期のゴーリキー文学とニーチェの関連を改めて整理することによって、日本留学時期の周樹人が「ニーチェ主義」を持つロシアの作家ゴーリキーとどのように接触したかをさらに検討する。

第七章では、周樹人におけるアンドレーエフ、ガルシンの受容を考察する。第七章は全二節より構成される。第一節では、まず、周樹人とアンドレーエフの関係に関する研究の

史的考察を行う。次に、明治期におけるアンドレーエフに関する評論文や日本語訳の作品を調査することによって、先行研究に漏れがあった日本留学時期の周樹人とアンドレーエフの関連を補足する。第二節では、まず、明治期におけるガルシンの翻訳・紹介を調査する。主に馬場孤蝶（1869-1940）の評論文「ガルシンと其作品」と二葉亭四迷（1864-1909）訳の「四日間」の改訳を通して、周樹人はなぜ戦争体験と発狂経験を持つロシアの作家、ガルシン及びその作品に興味を持っているのかを考察する。

第八章は全二節より構成される。第一節では、周樹人におけるトルストイの受容を考察する。明治期におけるトルストイの翻訳・紹介の考察を通して、とりわけ、明治思想界におけるトルストイの受容と周樹人の関わりを検討する。第二節では、周樹人におけるドストエフスキーの受容を考察する。明治期におけるドストエフスキーの翻訳・紹介の考察を通して、周樹人との関連を検討し、周樹人がドストエフスキーの何れの作品に接したかを推測し、周樹人がドストエフスキーに対してなぜ「敬服」し、「どうしても愛しえない」という理由を明らかにしようとする。

終章では、前八章の考察を踏まえて、周樹人の「文芸運動」と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介の関係をまとめる。次の三つの課題を通して、留学時期の周樹人と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介の関わりをさらに深く分析した。一つ目は、日本留学時期の周樹人はなぜロシア文学を愛読したのか。二つ目は、明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介は周樹人の「文芸運動」及び後の創作に対していかなる影響を与えたのか。三つ目は、明治期におけるロシア文学の翻訳は清末時期におけるロシア文学の翻訳にとってどのような意味を持っているのか、及び清末ロシア文学の受容史における周樹人の位置づけである。上述の考察を通して、明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介は周樹人の文芸活動に数多くの参考資料と翻訳底本を提供し、また、ロシア文学の中の人物像、物語の題材、表現の手法、言語の形式にも周樹人の後の文学創作に豊富な文学素材を提供したことがわかった。つまり、「周樹人」から「魯迅」への内的精神のメカニズムにおいて、ロシア文

学、とりわけ明治期における翻訳・紹介されたロシア文学の出版物は極めて重要な役割を果たしている、と本博士論文は結論づけている。本論では、以下の三つの課題の考察について十分に行うことができなかつたので、今後の課題として研究を続け、展開していくつもりである。一つ目は、日本語訳のほかに、留学時期の周樹人と英訳本、ドイツ語訳本のロシア文学の関わりについては探求すべき問題である。二つ目は、本論では、一部分の日本語訳のロシア小説と魯迅の作品との関連については検討したが、この課題には引き続き掘り下げていく必要がある。三つ目は、本論は「魯迅とロシア文学」という課題の一部となっている。周樹人とロシア文学及び後のソビエト文学との関連は、明治期におけるロシア文学を起点とした延長線にあるのは言を俟たないから、「留学後の魯迅と日本語訳のロシア文学」というテーマを続けて研究する価値がある。

鲁迅与日本明治时期的俄罗斯文学译介

鲁迅（1881-1936）原名周树人，因1918年以“鲁迅”为笔名发表短篇小说《狂人日记》而蜚声文坛，并在此后的生涯中始终居于中国文坛的中心。“周树人”何以成为“鲁迅”？其内在的精神机制是怎样的？关于这一问题，既往的诸多先行研究都将目光投向周树人（下文均将留学时期的鲁迅表述为“周树人”）于1902年至1909年的日本留学时期，并通过大量的实证研究证明鲁迅思想内涵中的进化论、改造国民性、个性主义等内容均与其留学时期所处的明治三十年代的思想文化背景有密切关联，换言之，留日时期的周树人正是通过大量接触并阅读明治时期的文艺杂志、书籍来逐渐构建自己的精神理念，完成确立自我、塑造个人主体的精神历程。从1909年周氏兄弟出版专门译介外国文学的《域外小说集》，到鲁迅后来谈及《狂人日记》的创作时“所仰仗的全在先前看过的百来篇外国作品”的说法，这些史实都可以说明在明治时期的文艺杂志与书籍中，被翻译成日文的外国文学作品占据着非常重要的位置。而根据周氏兄弟的回忆以及相关史料的发掘可知，在这些外国文学作品中，俄罗斯文学是周树人非常关注的内容。留日时期的周树人之所以关注俄罗斯文学，与在日俄战争的时代背景下明治文坛大量介绍并翻译俄罗斯文学有关。可以看出，留日时期的周树人正是立足于明治文坛这一阅读平台之上，寻求那些与自己审美标准和价值倾向相契合的俄罗斯作品，逐渐开始构建自己的文学观。

从留日时期从事文艺运动时最早接触俄罗斯文学开始，直到鲁迅逝世前，对俄苏文学的阅读与翻译已然成为鲁迅生平中的一项重要的工作。因此“鲁迅与俄罗斯文学的关系”也已成为鲁迅研究中的重要课题。在这一课题中，有关日本明治时期（1868-1912）的俄罗斯文学译介究竟发挥了什么作用这一问题，虽然已有部分先行研究进行过调查验证，但对这一问题的研究还是缺乏较为充分的全面考察。本论文旨在明确留学时期的周树人与日本明治时期俄

罗斯文学译介的关联，并进一步探讨明治时期俄罗斯文学译介对后来成为作家的鲁迅有何意义。

本论文着眼于留日时期周树人的阅读史，重点探讨他的精神建构与俄罗斯文学之间的关系。在日本明治时期俄罗斯文学译介的背景下，周树人对俄罗斯文学的搜集、阅读、介绍和翻译，均体现出了其对俄罗斯文学的关注和钟爱。一方面，这说明周树人所关注的俄罗斯作家及作品都与其彼时的审美标准和价值倾向相契合。例如，由于对张扬个性的浪漫主义诗人的关注，反抗极权、追求自由的俄罗斯诗人普希金（1799-1837）、莱蒙托夫（1814-1841）就与其他六位诗人共同构成了周树人笔下的“恶魔派”诗人谱系；再比如，由于关注那些“每以骄蹇不逊者为全局之主人”的作品，周树人便把目光投向俄罗斯文学中那些带有“狂气”的作品；另外，由于关注俄罗斯人民追求自由的革命精神，俄罗斯文学中揭露人生、反抗专制、崇尚自由、描写日常的文学特征也引起了周树人的共鸣。另一方面，也可以看出周树人所关注的俄罗斯作家及作品已成为“周树人”到“鲁迅”这一精神成长过程中的重要文艺资源。俄罗斯文学不仅为周树人的文艺运动提供了大量的参考材料和翻译底本，也为日后成为作家的鲁迅提供了丰富的文学资源。本论文旨在通过调查周树人与其在留学时期通过日文译介接触到的 11 位俄罗斯作家的史实关联，进一步探讨俄罗斯文学在从“周树人”到“鲁迅”这一精神成长历程中是如何发挥关键作用的。本论文具体由以下八章内容及附录部分（参考年表（1902-1912 年）、留日时期周树人阅读过的有关俄罗斯文学的日译书籍、晚清时期以日译本为底本翻译的俄罗斯文学作品）构成。

序章

第一章 周树人及其“文艺运动”对俄罗斯文学的接受概况

第二章 斯拉夫民族的“摩罗诗人”

明治时期的普希金、莱蒙托夫译介与周树人

第三章 描绘社会人生之黑暗的小说家

明治时期的果戈理译介与周树人

第四章 明治时期被广泛翻译的俄罗斯小说家

明治时期的屠格涅夫译介与周树人

第五章 周树人钟爱的俄罗斯小说家

明治时期的契诃夫译介与周树人

第六章 留日时期开始关注的俄罗斯小说家

明治时期的柯罗连科、高尔基译介与周树人

第七章 《域外小说集》中登场的俄罗斯小说家

明治时期的安特莱夫、迦尔洵译介与周树人

第八章 影响青年周树人的俄罗斯小说家

明治时期的托尔斯泰、陀思妥耶夫斯基译介与周树人

末章

下文分别总结每一章的主旨内容，有关附录的介绍在此省略。

序章主要论述研究动机、研究方法及论文结构。本论文采用实证研究的方法来考察留学时期的周树人对俄罗斯文学的接受概况。具体按照以下步骤来明确这一问题。作为史实调查、首先来考察留日时期周树人的“文艺运动”，尤其关注周树人与俄罗斯文学的关联。主要通过周树人留学时期的创作、翻译、藏书以及友人的回忆，进一步讨论俄罗斯文学对于周树人的“文艺运动”具有何种意义。其次，考察日本明治时期俄罗斯文学译介的基本概况。搜集明治时期被翻译成日文的有关俄罗斯文学的介绍、评论、翻译、研究以及相关译者、刊载杂志的基本信息，寻求这些文献资料与周树人的“文艺运动”之间的关联，进一步探讨两者之间的关系。最后，考察明治时期的俄罗斯文学译介与后来成为作家的鲁迅的文学创作的关联。具体通过相关文本的比较与分析，进一步探讨留学时期的周树人对俄罗斯文学的接受情况。本研究的另一目的在于考察周树人钟爱的俄罗斯文学对其后来的文学创作有何影响。

第一章主要考察周树人及其“文艺运动”对俄罗斯文学的接受概况，从整体把握周树人与日本明治时期的俄罗斯文学译介的关系。第一章共由三节组成。第一节与第二节分别考察

周树人日本留学的概况与日本明治时期俄罗斯文学译介的基本情况，从史实关系的角度来探讨周树人的“文艺运动”与明治时期俄罗斯文学译介的关联。第三节主要整理中国学界和日本学界有关“鲁迅与日本明治时期的俄罗斯文学译介”这一课题的研究史。

第二章以后的内容，主要在第一章考察的基础上，进一步调查留日时期的周树人对普希金、莱蒙托夫、果戈理（1809-1852）、屠格涅夫（1818-1883）、契诃夫（1860-1904）、高尔基（1868-1936）、柯罗连科（1853-1921）、安特莱夫（1871-1919）、迦尔洵（1855-1888）、托尔斯泰（1828-1910）、陀思妥耶夫斯基（1821-1881）等 11 位俄罗斯作家的接受情况。

第二章主要考察周树人对斯拉夫民族的“摩罗诗人”普希金与莱蒙托夫的接受概况。本章在中岛长文、北冈正子等学者对《摩罗诗力说》（1908）中涉及普希金与莱蒙托夫文本部分的材源调查的基础上，进一步确认先行研究中并未涉及的周作人（1885-1967）的相关回忆文章，再次确认留日时期的周树人通过哪些文本接触到了普希金与莱蒙托夫，而普希金与莱蒙托夫又怎样以斯拉夫民族的“摩罗诗人”的身份被周树人阅读。此外，本章通过重点调查《小说译丛》中收录的昇曙梦（1878-1958）翻译的普希金小说《彼得大帝的黑人教子》在明治文坛引起的论争情况，来考察周树人《小说译丛》中收录译本的翻译质量以及周树人的阅读趣味。

第三章主要考察周树人对“描绘社会人生之黑暗的小说家”果戈理的接受概况。本章在秦野一宏、李冬木等学者对明治时期果戈理文学译介概况调查的基础上，来探讨留日时期的周树人与果戈理的关联，并确认了先行研究中未曾涉及的《摩罗诗力说》中涉及果戈理一处文本的出处。通过上述考察本章将重点探讨留日时期的周树人是通过哪些途径开始关注到了有过发疯经历的俄罗斯天才果戈理，而果戈理的“描绘社会人生之黑暗的小说”又给青年周树人带来了什么。此外，有关鲁迅的小说《孔乙己》（1919）与果戈理小说《外套》（1842）的关联已有诸多先行研究提及，而本章旨在探讨《小说译丛》中收录的西本翠荫（1882-1917）翻译的日译本《外套》与《孔乙己》的关联。

第四章主要考察周树人对屠格涅夫在接受概况。通过调查明治时期屠格涅夫的译介与周树人的关联，来探讨彼时周树人的屠格涅夫观。由于周树人在留日时期并未留下与屠格涅夫相关的文字，虽有翻译屠格涅夫作品的计划，但最终并未成功发表。因此本章重点通过《小说译丛》中收录的日译屠格涅夫小说以及《域外小说集》（1909）中涉及的屠格涅夫小说与明治时期屠格涅夫翻译状况的关联，来考察留日时期的周树人有可能接触并阅读过哪些屠格涅夫的作品。

第五章主要考察周树人对契诃夫在接受概况。首先通过先行研究对明治时期契诃夫译介概况的整理，来梳理留日时期的周树人与契诃夫的关联情况。通过上述调查，发现契诃夫小说《变故》在日本明治时期被翻译了九次，其中多篇都发表在周树人留日时期非常关注的文艺杂志上。在此基础上，本章旨在证明契诃夫的《变故》（1886）是鲁迅创作小说《兔和猫》（1922）的参考素材之一。通过对比，发现鲁迅小说《兔和猫》的故事内容和情节发展都与契诃夫小说《变故》具有高度的相似性。因此笔者推测《变故》中描写的小猫被大黑狗吃掉的内容、以及作者对待幼小生命的态度都为鲁迅创作《兔和猫》提供了灵感。

第六章主要考察周树人对柯罗连科和高尔基在接受概况。第六章共由两节组成。第一节主要通过调查先行研究未曾涉及的明治时期柯罗连科的译介概况，来探讨留日时期的周树人与柯罗连科的关联。通过以上调查，笔者确认了小山内薫（1881-1928）发表在杂志《新小说》上的《俄国的小说家 弗拉基米尔·柯罗连科》一文是鲁迅创作《摩罗诗力说》所借助的又一篇材源。小山内薫的这篇文章是明治时期介绍柯罗连科最全面的一篇评论文章，该文中关于柯罗连科小说《最后的光芒》的介绍部分正是鲁迅在《摩罗诗力说》结尾处引用柯罗连科作品所参考的内容。该材源的发现再次证明了鲁迅在留学时期借助日本的杂志阅读大量外国文学的评论与翻译，并将吸收的内容反映在自己留学时期的创作文本中，同时也推进了“鲁迅与柯罗连科关系”这一课题的研究。第二节主要通过调查明治时期高尔基的译介概况，来探讨周树人与高尔基的关联。在李冬木对明治时期的高尔基与尼采热以及周树人三者关系的先

行研究的基础上，本论通过重新梳理明治时期高尔基文学与尼采的关联，来进一步探讨留日时期的周树人是怎样接触到具有“尼采主义色彩”的俄罗斯作家高尔基的。

第七章主要考察周树人对安特莱夫和迦尔洵的接受概况。第七章共由两节组成。关于“鲁迅与安特莱夫关系”已有大量先行研究涉及，第一节首先梳理有关“鲁迅与安特莱夫关系”这一课题的研究史，然后重新调查明治时期安特莱夫文学的译介概况，在此基础上，对先行研究有所遗漏的留日时期的周树人与安特莱夫的有关联系进行补充。第二节调查先行研究未曾涉及过的明治时期迦尔洵文学的译介概况，主要通过马场孤蝶（1869-1940）的评论文章《迦尔洵及其作品》与二叶亭四迷（1864-1909）翻译的迦尔洵小说《四日》的改译情况，来考察周树人为何对具有战争体验与发疯经验的俄罗斯作家迦尔洵及其作品情有独钟。

第八章共由两节组成。第一节主要考察周树人对托尔斯泰的接受概况。通过昇曙梦等人的回忆文章来梳理明治时期托尔斯泰文学的译介概况，特别是通过调查托尔斯泰在明治思想界的接受概况，来探讨留日时期的周树人与托尔斯泰的联系。第二节主要考察先行研究鲜有涉及的留日时期的周树人对陀思妥耶夫斯基的接受概况。通过考察明治时期陀思妥耶夫斯基文学的译介概况，进一步调查留日时期的周树人与陀思妥耶夫斯基的关联，推测周树人有可能接触过哪些陀思妥耶夫斯基的作品，并试图明确青年周树人为何对陀思妥耶夫斯基“敬服”而“总不能爱”的理由。

在前八章调查的基础上，末章主要总结周树人的“文艺运动”与日本明治时期俄罗斯文学译介的关系，并试图通过以下三个问题来进一步深入分析留学时期的周树人与明治时期俄罗斯文学译介的关联。第一、留日时期的周树人为何对俄罗斯文学情有独钟；第二、明治时期的俄罗斯文学译介对周树人的文艺运动乃至其后来的创作产生了什么影响；第三、明治时期的俄罗斯文学翻译对晚清俄罗斯文学翻译有何影响，周树人又处于中国近代俄罗斯文学翻译史的什么位置。通过对这三个问题的考察，可以确认明治时期俄罗斯文学译介为周树人的文艺运动提供了大量参考材料和翻译底本，俄罗斯文学中的人物形象、故事题材、表现手法、语言方式也为周树人日后的文学创作提供了丰富的文学素材。可以说，从周树人到鲁迅的内

在精神机制中，俄罗斯文学、尤其是明治时期译介的俄罗斯文学出版物发挥了重要的作用，这也是本博士论文的研究结论。另外，本论关于以下三个课题的考察还有不足之处，将作为今后的课题继续展开研究。第一，除日译本外，留学时期的周树人与英译本、德译本俄罗斯文学作品集的关联也是值得探讨的课题；第二，本论虽然探讨了部分日译俄罗斯小说与鲁迅作品的关联，但笔者认为这一课题还有继续深入挖掘的空间；第三，本论属于“鲁迅与俄罗斯文学”研究的一部分。周树人与俄罗斯文学的关联肇始于他留学时期所接触到的明治俄罗斯文学，他后来与苏联文学的关系也处于这条延长线上自不待言。因此，笔者认为“留学结束后的鲁迅与日译俄罗斯文学的关系”这一课题还有进一步研究的价值。

序章

「魯迅とロシア文学の関係」という課題は魯迅（1881-1936）研究において重要なテーマである。その中で、日本、特に日本明治期（1868-1912）におけるロシア文学の翻訳と紹介がどのような役割を果たしたのか、部分的に実証されたが、未だ十分に検証されていない。本研究では、留学時期の周樹人と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介の関わりを明らかにし、明治ロシア文学がその後、文学者になった魯迅にとってどのような意味を持っているのかについて考察する。

第一節 研究動機

魯迅は『京報副刊』のアンケートに答える時に、次のように語っている。「私は、少ししか——あるいはまったく——中国の書物を読まず、たくさん外国の書物を読むのがよいと思う」¹。『魯迅手跡和蔵書目録』によれば、魯迅の蔵書は3670種を有し、その中で、中国語の蔵書は1945種、外国語の蔵書は1815種である。李冬木の統計によると、中国語と外国語はそれぞれに蔵書の52%と48%を占めている。「殆んど半分ずつである」という結論を出している。²そして、魯迅の蔵書で、ロシア文学は重要な部分を占めている。孫郁の統計によると、「魯迅のロシア文献蔵書で文学作品を主として、約60数人の文学者、20数人の思想家に及んでいる。ロシア蔵書で、中国語訳と木版画を除き、またロシア語の資料は86点、日本語訳の資料は164点、ドイツ語訳と英語訳の資料は151点を有する」³。

また、蔵書を除き、魯迅は数多くの外国作品を翻訳している。その中で、ロシア文学は極めて重要な部分を占めている。許広平（1898-1968）は魯迅のロシア文学を翻訳することについて次のように回想する。「ソビエト文学（ロシア文学を含む）を翻訳と紹介することは、魯迅の生涯の革命運動において極めて重要な部分を占めている」。許広平の統計によると、魯迅の約600万字の著作において、ソビエト文学の翻訳と紹介は約160万字に達し、彼の全著作の四分の一を占めている（全翻訳の半分以上を占めている）⁴。王友貴の統

計には、「魯迅の生涯において、ロシアとソビエト文学と理論の翻訳が約 142 万字に達している。彼の全翻訳において 59.5%を占めており、最も大きいシェアを持っている」とある。

5

ロシア文学について、魯迅自らは以下のようなことを述べている。「ロシア文学は他の外国文学より豊富だと思う」、「中国とロシアの間は思いがけない関係があるようだ。中国とロシアの文化と経験はある共通的な関係があるようだ。その他、私もゴーゴリ、ツルゲーネフ、ドストエフスキー、アンドレーエフ、シェンキエヴィチ、ニーチェ、シラー等の作品を好んである」⁶。疑いなく、ロシア文学は文学者と翻訳者としての魯迅に大きな影響を与えた。しかしながら、魯迅はいつからロシア文学を注目し始めたのか。魯迅は「私はどのようにして、小説を書き始めたか」（1933）において自分の「文芸運動」について次のように述べる。

探す作品が叫び声や反抗だったから、勢い東欧に傾くことになった。それでバルカン諸小国の作家のものが特に多かった。また熱心にインド、エジプトの作品を捜したことがあるが、入手できなかった。当時、もっとも愛読した作者は、ロシアのゴーゴリ (N. GOGOL) とポーランド (H. SIENKIEWITZ) のシェンキエヴィッチだった。日本のものでは、夏目漱石と森鷗外であった。

（「私はどのようにして、小説を書き始めたか」、竹内実訳）

言うまでもなく、魯迅は日本留学時期において、はじめてロシア文学に出会った。周作人（1885-1967）は当時の外国作品資料を集めることについて次のように回想する。

毎月の初めに各種の雑誌が出ると、私たちは蚤取り眼でさがして、一篇でもロシア文学に関する紹介なり翻訳なりがあると、必ず買ってきて、その部分だけ切り取って保存しておいた。⁷

(「魯迅について その二」、松枝茂夫訳)

回想からわかるのは、日本留学時期の周氏兄弟が明治期の文芸雑誌に掲載されたロシア作品を通してはじめてロシア文学に出会ったことである。1966年9月、北京魯迅博物館は意外にも「魯迅留日時期の二冊の日本式装丁のスクラップ」を入手し、後に、『小説訳叢』と名付けた。⁸『小説訳叢』には、10篇の明治期日本語訳のロシア小説がスクラップされている。この意外な発見は周作人の回想の正しさを確認できる。

魯迅の文学創作はロシア文学から多くの影響を受けていることがすでに先行研究で指摘されている。しかしながら、魯迅と日本語訳のロシア文学、特に日本明治期におけるロシア文学の翻訳と紹介の関連について、未だ十分に検証されていない。本論では、日本留学時期の魯迅と日本明治期におけるロシア文学の翻訳と紹介の関連に着眼し、明治ロシア文学は後に文学者になった魯迅にとってどのような意味を持っているかについて考察したい。

第二節 研究方法

本研究は、実証研究の方法を用い、留学時期の周樹人のロシア文学の受容について考察する。歴史事実として、周樹人の日本留学実態及び明治期におけるロシア文学の翻訳と紹介の実態を調査する。その後、それぞれのテキスト関係の分析を通して、周樹人がロシア文学から受容したものを明らかにする。

第一、日本留学時期の周樹人の「文芸運動」を考察する。とりわけ周樹人とロシア文学の関わりに注目する。留学時期の周樹人の創作、翻訳、蔵書及び親友の回想などを通して、

周樹人の「文芸運動」におけるロシア文学がどのような意味を持っていたかについて検討する。

第二、明治期におけるロシア文学の翻訳と紹介を考察する。明治期におけるロシア文学についての紹介、評論、研究書、翻訳物及び訳者、掲載雑誌の情報などを収集する。以上のロシア文学に関する文献資料と周樹人の「文芸運動」の関わりを探し、両者の関連を検討する。

第三、明治期におけるロシア文学の翻訳物と後に文学者になった魯迅の文学作品との関連性を考察する。それぞれのテキスト関係を分析し、周樹人がロシア文学から受容したものを検討する。

本研究の目的として、周樹人の創作は彼が愛読したロシア文学から何を取り入れ、何の影響を与えられたのかについて考察する。

第三節 論文構成

本論文は全八章からなり、その概要は以下の通りである。

序章では研究動機、研究方法及び論文構成を述べる。

第一章では、周樹人の「文芸運動」におけるロシア文学の受容の概観を考察する。全体像から周樹人と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介の関係を把握する。第一章は全三節により構成される。第一節と第二節はそれぞれ周樹人の日本留学の概観と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介の実態を考察する。周樹人の日本留学の実態を考察し、事実関係として、周樹人の「文芸運動」と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介の関わりを検討する。第三節では、中国と日本における「魯迅と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介」に関する研究の史的考察である。

第二章以後では、第一章の考察を踏まえて、日本留学時期の周樹人と明治期におけるプーシキン、レールモントフ、ゴーゴリ、ツルゲーネフ、チェーホフ、ゴーリキー、コロレンコ、アンドレーエフ、ガルシン、トルストイ、ドストエフスキーなどの11人のロシアの文学者、それぞれの受容について、具体的に展開している。

第二章では、中島長文、北岡正子などの学者が「摩羅詩力説」におけるプーシキンとレールモントフのテキスト部分の材源を調査した上で、さらに周作人の回想文を確認し、日本留学時期の周樹人がどのテキストを通してプーシキンとレールモントフに接触したかを再確認し、また、周樹人がどのようにプーシキンとレールモントフをスラブ民族の「摩羅詩人」として受容したのかを再考した。その他、本章では、『小説訳叢』に収録される昇曙夢が翻訳したプーシキンの小説「心づくし（原名「彼得大帝の黒人」）」が明治文壇で起きた論争を調査することによって、『小説訳叢』に収録される訳本の翻訳品質と周樹人の閲読傾向を考察する。

第三章では、周樹人における「社会と人生の暗黒面を描写する小説家」ゴーゴリの受容について考察する。本章は秦野一宏、李冬木などの学者が明治期におけるゴーゴリの受容の調査をもとに、日本留学時期の周樹人とゴーゴリの関連を検討し、「摩羅詩力説」におけるゴーゴリについてのテキストを確認する。上記の考察を通して、日本留学時期の周樹人はどのようなルートで発狂した経験を持つロシアの天才ゴーゴリに注目し始めたのか。また、ゴーゴリの「社会と人生の暗黒面を描写する」小説は周樹人に何をもたらしたのかを検討する。その他、魯迅の小説「孔乙己」とゴーゴリ的小説「外套」の関連については、多くの先行研究が言及されているが、本章では『小説訳叢』に収録された西本翠蔭が翻訳した日本語訳の「外套」と「孔乙己」の関連を検討することを目的とする。

第四章では、周樹人におけるツルゲーネフの受容について考察する。明治期におけるツルゲーネフの翻訳・紹介と周樹人の関係を考察し、当時の周樹人のツルゲーネフ観を検討する。周樹人は日本留学時期に、ツルゲーネフに関するテキストを書き残していなかった。

ツルゲーネフの作品を翻訳する計画があったが、最終的には発表しなかった。そのため、本章では、『小説訳叢』に収録されるツルゲーネフの小説及び『域外小説集』に関連するツルゲーネフの小説と明治期のツルゲーネフの翻訳状況との関わりを通して、日本留学時期の周樹人がどのようなルートでツルゲーネフの作品に接触して読んだかを考察する。

第五章では、周樹人におけるチェーホフの受容について考察する。明治期におけるチェーホフの翻訳・紹介の考察を通して、周樹人とのつながりを着目する。それから、第五章ではチェーホフの小説「大事件」が魯迅の小説「兎と猫」を創作するときの一つの参考素材であることを証明しており、また筆者は魯迅の小説「兎と猫」とチェーホフの小説「大事件」の対比を通して、二つの作品の物語の内容と展開は非常に似ていることを明らかにしている。筆者は「大事件」における子猫が黒犬に食べられた部分、人間が小生物に対して生死の態度を描写する部分が魯迅の創作「兎と猫」にインスピレーションを与えたと推測している。

第六章では、周樹人におけるコロレンコ、ゴーリキーの受容について考察する。第六章は全二節により構成される。第一節では、明治期におけるコロレンコの翻訳・紹介の考察を通して、周樹人とコロレンコの関連を検討する。以上の整理を通じて、小山内薫が雑誌『新小説』で発表した評論「露国の小説家ウラヂミール・カラレンコ」が周樹人の「摩羅詩力説」のもう一つ材源であることを明らかにする。小山内薫のこの文章は明治期におけるコロレンコを最も全面的に紹介した文章である。この文章の中で、コロレンコの小説「末光」についての紹介はちょうど魯迅の「摩羅詩力説」の結論部分が参照した内容である。この材源の発見は日本留学時期の魯迅が明治期の刊行物の外国文学の評論や翻訳を通し、自らのテキストに引用したことを呈して、「魯迅とコロレンコの関係」という課題の研究、ひいては日本留学時期の魯迅と外国文学、とりわけロシア文学の受容という研究に資するものであると考える。第二節では、明治期におけるゴーリキーの翻訳・紹介の考察を通して、周樹人とゴーリキーの関連を検討する。李冬木の明治期におけるゴーリキーとニーチ

エ・ブーム及び周樹人の三者関係に関する先行研究をもとに、明治期のゴーリキー文学とニーチェの関連を改めて整理することによって、日本留学時期の周樹人が「ニーチェ主義」を持つロシアの作家ゴーリキーとどのように接触したかをさらに検討する。

第七章では、周樹人におけるアンドレーエフ、ガルシンの受容を考察する。第七章は全二節より構成される。第一節では、まず、周樹人とアンドレーエフの関係に関する研究の史的考察を行う。次に、明治期におけるアンドレーエフに関する評論文や日本語訳の作品を調査することによって、先行研究に漏れがあった日本留学時期の周樹人とアンドレーエフの関連を補足する。第二節では、まず、明治期におけるガルシンの翻訳・紹介を調査する。主に馬場孤蝶の評論文「ガルシンと其作品」と二葉亭四迷訳の「四日間」の改訳を通して、周樹人はなぜ戦争体験と発狂経験を持つロシアの作家、ガルシン及びその作品に興味を持っているのかを考察する。

第八章は全二節より構成される。第一節では、周樹人におけるトルストイの受容を考察する。明治期におけるトルストイの翻訳・紹介の考察を通して、とりわけ、明治思想界におけるトルストイの受容と周樹人の関わりを検討する。第二節では、周樹人におけるドストエフスキーの受容を考察する。明治期におけるドストエフスキーの翻訳・紹介の考察を通して、周樹人との関連を検討し、周樹人がドストエフスキーの何れの作品に接したかを推測し、周樹人がドストエフスキーに対してなぜ「敬服」し、「どうしても愛しえない」という理由を明らかにしようとする。

終章では、前八章の考察を踏まえて、周樹人の「文芸運動」と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介の関係をまとめる。次の三つの課題を通して、周樹人と明治ロシア文学の関わりをさらに深く分析した。(1) 留学時期の周樹人はなぜロシア文学を注目したのか。(2) 明治ロシア文学は周樹人の「文芸運動」にとってどのような意味を持っているのか。(3) 明治ロシア文学は清末ロシア文学の受容にとってどのような意味を持っているのか及

び清末ロシア文学の受容史における周樹人の位置づけである。また、本研究の不足点や、今後の課題などを述べる。

第一章 周樹人の「文芸運動」におけるロシア文学の受容の概観

第一節 周樹人の日本留学

まず、『中国現代文学事典』における「魯迅」の記載を参照しながら、魯迅の生涯について簡単に述べる。

魯迅、本名は周樹人、幼名は周樟寿。字は豫才。1881年9月25日、浙江省紹興の官僚の家に生まれる。少年時代、祖父が科挙の不正事件で入獄、ついで父が病死して家が没落。1898年、南京の江南水師学堂に入学したが、間もなく南京の江南陸師学堂附設砵務鐵路学堂に入学し、嚴復による近代西欧思想の翻訳や変法派系の出版物などに接した。1902年卒業後、官費留学生として日本に派遣され、東京の弘文学院に学んだ。1904年、仙台医学専門学校に入学したが、半ばで文学に志を転じて退学、東京に戻った。1906年6月から1909年8月、独逸語専修学校で独逸語を学びながら、いわゆる「文芸運動」に従事した。

1909年に帰国し、杭州、紹興で教師をする中で辛亥革命を迎え、1912年、臨時政府の教育部員になり、同年、政府の移転に従って北京に移住した。辛亥革命後の反動の空気の中で金石や墓誌拓本の収集に沈潜するうち文学革命を迎え、友人の勧めに応じて「狂人日記」（1918）を『新青年』に発表（この時に初めて魯迅の名を使用）、以下「孔乙己」、「故郷」、「阿Q正伝」などを続々と発表し、文学革命に実質を与えるとともに、中国近代文学の基礎を築いた。

1925年、北京文化界の新旧対立を背景に起った北京女子師範大学の校長排斥運動で学生の側を支持、当局側及びこれを支持する文化人と激しく論争した。1926年、三・一八事件では激しく軍閥政府を弾劾、同年8月、北京を去って厦門大学教授に就任したが、

そこの空気に不満で、1927年1月、さらに広東に移った。広東では中山大学教授を務めたが、四・一二クーデターに抗議して辞任した。

1927年秋、上海に移って許広平と同居、1929年に長子海嬰をもうけた。上海ではプロレタリア文学を提唱する創造社、太陽社から激しい批判を浴びたが、かえってその革命観、文学観の安易さについて応酬、革命文学論争を展開した。1930年2月、国民党の言論弾圧に反対する中国自由運動大同盟に、また3月、中国左翼作家連盟の結成に参加した。1936年、文芸界における抗日統一戦線のあり方をめぐって起こった国防文学論戦で上海の共産党員文学者周揚、夏衍などの現状認識の甘さやセクト主義に対しても厳しい批判を含んだ一連の見解を発表した。1936年10月19日、結核、喘息などのため死亡した。

著作は小説集『呐喊』（1923）、『彷徨』（1926）、『故事新編』（1936）、散文詩集『野草』（1927）、回想録風の作品集『朝花夕拾』（1928）、評論集14冊がある。また翻訳にも力を注ぎ、全著作にほぼ匹敵する分量の翻訳がある。⁹

（丸山昇等編『中国現代文学事典』、313-315頁を参照）

魯迅の生涯から確認できるのは、魯迅が1902年から1909年まで、日本で約8年間留学していることで、『魯迅年譜』の記録を通じて、魯迅の日本留学時期は1902年3月24日（旧暦2月25日）から1909年8月中旬（旧暦6月16日から7月16日）、和暦に変えると、明治35年3月から明治42年8月中旬である。魯迅の日本留学を説明する前に、「周樹人」という概念を述べなければならない。李冬木は「<周樹人>から<魯迅>へ—留学時代を中心に—」で「周樹人」という概念を提起し、次のように述べている。

つまり「周樹人」と「魯迅」を相対的に区別し、作家として誕生した後の「魯迅」をもって、それ以前の周樹人を解釈しないということである。このように二つの点を考慮

するのは、一つには、周樹人が当時身をおいた歴史の現場を復元し、それによって後の魯迅に関する膨大な解釈がそれ以前のその部分の歴史的観察によってなされた影響をできるだけ捨象することを意図するからである。さらにもう一点、できるかぎり等身大の周樹人を見ることで、彼が実際に直面した歴史的環境、思想、文化的な背景や時代の精神に向き合い、今日的な知識や理解でもって高みから見下ろすような解釈を加えないということである。¹⁰

つまり、日本留学の時、まだ「魯迅」は存在せず、単なる清国留学生の一人の周樹人にすぎない。そのため、本研究は「周樹人」という概念を取り入れ、留学生周樹人の視点から出発し、周樹人と明治ロシア文学のかかわりを探求したい。日本留学の物事を考える時に、特殊的説明がなければ、本論は全て「周樹人」という概念に従うことである。

周樹人の日本で約8年間の留学時期は、大まかに三つの重要な段階に分けることができる。第一は、1902年3月から1904年6月までの東京弘文学院で留学生生活をしながら日本語を学んでいた段階。第二は1904年6月から1906年6月までの仙台の医学専門学校で医学を学んでいた段階。第三は1906年6月から1909年8月まで再び東京に戻り、独逸語専修学校でドイツ語を学びながら「文芸運動」に従事した段階である。まず、第一の段階において、東京弘文学院と周樹人の在学状況については、北岡正子の研究『魯迅 日本という異文化のなかで:弘文学院入学から「退学」事件まで』（関西大学出版部、2001年3月）を参照して頂きたい。周樹人は日本語を学ぶこと以外、ユゴー（1802-1885）の「哀塵」（第5期、1903）をはじめ、浙江省出身の留学生が主宰する雑誌『浙江潮』に「斯巴達之魂」（第5期、第9期、1903）、「説鉦」（第8期、1903）、「中国地質略論」（第8期、1903）、「地底旅行」（全2回、第10期）等の文章を掲載している。また、井上勤（1850-1928）の『九十七時二十分間月世界旅行』に基づいて、科学小説『月界旅行』（東京進化社、1903）

を翻訳している。また、東京弘文学院在学中、周樹人は国民性、進化論等の問題についての関心を持ち始める。

第二の段階において、周樹人は主として仙台の医学専門学校で医学を勉学する。仙台における魯迅の記録を調べる会が編集する『仙台における魯迅の記録』（平凡社、1978年2月）において、周樹人の仙台活動について詳細な調査がある。医学の学ぶこと以外、この段階において、周樹人はまだ日本語訳の底本に基づいて科学小説「造人術」（『女子世界』第4、5期、1905）と『地底旅行』（南京啓新書局、1906年3月）を訳し、中国の鉱産現状の調査について『中国鉱産志』（上海普及書屋、1906年5月）を出版している。

第三の段階において、独逸語専修学校でドイツ語を学びながら「文芸運動」に従事している。独逸語専修学校及び周樹人の在学状況について、北岡正子の『魯迅 救亡の夢のゆくえ：悪魔派詩人論から「狂人日記」まで』（関西大学出版部、2006年3月）を参照して頂きたい。また、「文芸運動」について、周樹人自身は「呐喊・自序」（1922）において、こう語っている。

彼らの精神を変えることだ、そして精神を変えるのに有効なものとなれば、私は、当時は当然文芸を推すべきだと考え、こうして文芸運動を提唱しようと思った。東京の留学生には法律政治、物理化学さらに警察、工業を学ぶものはたくさんいたが、文学や芸術をやる者はいなかった。しかし、冷淡な空気のなかでも、さいわい、数人の同志が見つかり、そのほか、なくてはならぬ数人も集まった。相談のすえ、第一歩としては当然雑誌を出すことになった。誌名は「新しい生命」の意味をとり、私たちは当時、みないくらか復古に傾いていたから、単に『新生』と呼んだ。

（「呐喊・自序」、丸山昇訳）

この回想から確認できるのは、当時の周樹人は中国人の精神を変えるために、文芸運動を提唱していることである。具体的な行動は雑誌『新生』の刊行を通して、文学と芸術についての新しい思想を中国に紹介したいとしていることである。しかしながら、結局、人材不足と資金難で雑誌『新生』の出版計画は実現しなかった。その後、周樹人は読書、資料収集、翻訳活動、論文執筆に取り組むことになった。雑誌『新生』の出版のため、周樹人は外国小説を翻訳しており、若干の論文を執筆することもあった。『新生』の計画は流産したが、周氏兄弟が共訳した『域外小説集』第一、二冊を出版することになった。また、主に河南省出身の留学生が主宰する雑誌『河南』に「人間の歴史」（第1号、1907年12月）、「摩羅詩力説」（第2、3号、1908年2、3月）、「科学史教篇」（第5号、1908年6月）、「文化偏至論」（第7号、1908年8月）、「裴象飛詩論」（第7号、1908年8月）、「破惡声論」（第8号、1908年12月）等論文を掲載した。2冊の『域外小説集』と『河南』に掲載した6篇の論文は周樹人の「文芸運動」の成果だと言えよう。

『河南』に掲載された論文を通じて、日本留学期の周樹人の思想を考察することができる。とりわけ、論文「摩羅詩力説」と「文化偏至論」はそれぞれに「早期魯迅」の文学観と思想観を表している。したがって、こうした論文は長い間、魯迅研究者たちの関心と呼んでいた。もう一つ注意すべきことは、こうした論文と当時明治期の流行思潮の関係である。例えば、北岡正子の長年にわたる詳細な調査、研究により、「摩羅詩力説」の中核なる内容は、主に11冊の本と幾篇の文章を拠り所とすることが明らかになった。¹¹中島長文の調査により、「人間の歴史」の内容は、底本として、3冊の進化論についての本を拠り所とすることを明らかにした。¹²宋声泉の調査により、「科学史教篇」は殆ど木村駿吉（1866-1938）の著作『科学之原理』（金港堂、明治23年4月）の緒言「科学歴史の大観」に基づいて翻案したものであることがわかった。¹³清水賢一郎、¹⁴李冬木、¹⁵汪衛東¹⁶らの実証研究では、「文化偏至論」と「摩羅詩力説」におけるイプセン（1828-1906）、ニーチェ（1844-1900）、シュティルナー（1806-1856）に関するテキストと明治期の流行思潮の関

連を明らかにした。こうした実証研究により、当時の周樹人がいかに勤勉に読書し、いかに外国思想文化を受容し、いかに自らの言説を作り上げるのかなどの問題を明らかにしている。また、本研究はとりわけ、「摩羅詩力説」におけるロシア文学者に関するテキストと明治ロシア文学の関係を着目し、別に考察する予定である。

出版した二冊の『域外小説集』は周樹人の「文芸運動」のもう一つの成果である。藤井省三の研究により、『域外小説集』出版の同年、日本の雑誌がこの事件を報道したことがわかる。¹⁷雑誌『日本及日本人』第508号（明治42年5月1日、1909年5月1日）には、次のような記事が載った。

日本などでは、欧州小説が盛んに購買される方であるが、支那人も、夫れにカブれた訳でもなからうが、青年の間には、矢張りちよいちよ読まれて居る、本郷に居る周何がしと云う、未だ二十五六才の支那人兄弟などは、盛んに英独両国の泰西作物を読む、そして「域外小説集」と云った三十銭ばかりの本を東京で拵へて、本国へ売付ける計画を立て、已に第一編は出た、勿論訳文は支那語であるが、一般清国学生の好んで読むのは、露国の革命的虚無的作物で、続いては独逸、波蘭あたりのもの、単独な佛蘭西物などは、餘り持て囃すされぬさうぢや。

この記事を通して、周氏兄弟をはじめ、当時の清国留学生はロシア及びポーランド、ドイツ文学に関心を持っていることがわかる。『域外小説集』は周氏兄弟が弱小民族の文学を中心に、ポーランド、ロシア等の国々の作品を翻訳する小説集である。第一冊を1909年4月に出版し、シェンキェヴィチ（1846-1916）の「楽人揚珂」、チェーホフ（1860-1904）の「戚施」、「塞外」、ガルシン（1855-1888）の「邂逅」、アンドレーエフ（1871-1919）の「謾」、「黙」、ワイルド（1854-1900）の「安楽王子」などの5人7篇の作品を含める。第二冊を1909年7月に出版し、アホ（1861-1921）の「先駆」、ポー（1809-1849）の「黙」、

モーパッサン（1850-1893）の「月夜」、ムラゾヴィチ（1863-1927）の「不辰」、「摩訶末翁」、シェンキェヴィチの「天使」、「灯台守」、ガルシンの「四日」、ステプニャク（1852-1897）の「一文銭」などの7人9篇の作品を含める。その中で、アンドレーエフの「謾」、「黙」及びガルシンの「四日」は周樹人の手によって翻訳したもので、ほかの作品は全て周作人の訳である。その他、「新訳予告」により、以下の作品も翻訳する予定である。第一冊はワイルドの「黄離」、ビョルンソン（1832-1910）の「父」、「人生闘争」、アンデルセン（1805-1875）の「寥天声絵」、ツルゲーネフ（1818-1883）の「畢旬大野」、「猶太人」、ガルシンの「絳花」、アンドレーエフの「赤咲記」、レールモントフ（1814-1841）の「並世英雄伝」、ミクサート（1847-1910）の「神蓋記」を含める。第二冊はワイルドの「杜鵑」、ツルゲーネフの「莓泉」、コロレンコ（1853-1921）の「海」、「林籟」、アンデルセンの「和美洛斯壟上之華」、シェンキェヴィチの「粉本」、モーパッサンの「人生」などの作品を含める。上掲する文学者及び作品名から見ると、ロシア作品は重要な部分を占めている。既に出版した二冊の小説集において、4人7篇の作品を含め、全体の約半分を占めている。また、周樹人が訳した3篇は全てロシアの小説である。周作人、許寿裳（1883-1948）の証言により、周樹人は主にドイツ語訳を通して、周作人は主に英語訳を通して外国小説を翻訳していた。崔文東の調査では、『域外小説集』の底本（ドイツ語版と英語版）を明らかにしていた。¹⁸しかしながら、周樹人は翻訳した時に、日本語版を参照する場合もあった。例えば、二葉亭四迷の『血笑記』に基づき、アンドレーエフの小説「紅笑」を翻訳していた。¹⁹したがって、周樹人が注目した外国作品、とりわけロシア作品と明治期の翻訳文壇の関連について、本研究では考察する予定である。

上述では、周樹人の文学活動を中心として、彼の「文芸運動」の成果を重点的に取り上げ、日本留学時期の三つの段階を概観している。

第二節 明治期におけるロシア文学の翻訳と紹介の実態

「明治期ロシア文学翻訳年表稿」により、ロシア文学の翻訳と紹介は明治期の後半 20 年間に集中している。明治 15 年（1882）の日本初のロシア小説「露国虚無党事情」から、明治 45 年（1912）まで合計 650 篇以上のロシア文学作品が日本語に翻訳された。²⁰翻訳されたロシアの作家はプーシキン（1799-1837）、トルストイ（1828-1910）、ツルゲーネフ、ステプニャク、レー尔蒙トフ、ドストエフスキー（1821-1881）、ゴーゴリ（1809-1852）、ゴンチャロフ（1812-1891）、ゴーリキー（1868-1936）、チェーホフ、コロレンコ、アンドレーエフ、ガルシン、バリモント（1867-1942）、ソログープ（1863-1927）等の十数人である。明治期のロシア文学訳者たちは多種類（ロシア語、英語、ドイツ語、フランス語等を含む）の底本を参照して明治文壇にロシア文学を紹介している。『裏錦』14 巻 164 号（1906 年）に掲載された「露国文学の紹介者」を通して、当時のロシア文学の翻訳と紹介の実態をうかがうことができる。

露の詩聖プシキンは八杉文学士に依りて紹介せられ、トルストイ伯のアンナ、カレニナは柴田氏に依りて英訳から重訳せられた嗟峨の舎、二葉亭、魯庵の諸氏は固より露文学の紹介者として特筆せらる可き文士である、我が駿河台の出身者中にはゴーゴリの著者たる昇曙夢氏等一二の文士が露国文学を以て社会に名を識れて居る位で今日の所露国文学は英文学を通じて我が邦に紹介せられて居る有様である。山田枯柳氏は英露の語に通ずる学者なれば確に露国文学を以て世に鳴る可き使命を持して居るそして其筆力は学理の方面よりも詩の方面に長じて居る。加島汀月氏も確に詩家たる天才のある文士である露国文学は又君の嗜好する所である。露国文学の精華が是等文士の手によりて日本に紹介せられ文学上の日露同盟が是等文士の手腕に依りて成立せん事を深く望むのである。

明治期において、ロシア文学を翻訳・紹介する担い手としての昇曙夢（1878-1958）は回想文「ロシア文学の伝来と影響（明治胎生期の思出）」（ソヴェト研究者協会文学部会編『ロシア文学研究 第2集』、新星社、1947年）で明治期におけるロシア文学の受容を概観する。この回想文によれば、明治期におけるロシア文学の伝来と影響は、大体ツルゲーネフの伝来と影響、トルストイの伝来と影響、ドストエフスキーの伝来と影響とゴースキーとチェーホフの伝来などの四つの部分に区分することができる。ツルゲーネフの伝来について、ツルゲーネフの小説『父と子』と明治期の虚無党思潮の関係をはじめ、二葉亭四迷（1864-1909）の翻訳小説「あひびき」、「めぐりあひ」などの作品を代表的成果として紹介している。トルストイの伝来について、森體の訳書『泣花怨柳 北欧血戦余塵』をはじめ、森鷗外（1862-1922）、小西増太郎（1862-1940）、尾崎紅葉（1868-1903）などの翻訳小説、徳富蘆花（1868-1927）の『トルストイ伝』及び日露戦争を契機として明治思想界におけるトルストイ・ブームの実態を回想している。ドストエフスキーの受容については、主に内田魯庵（1868-1929）の翻訳小説『罪と罰』とその影響である。ゴースキーの代表的翻訳者としては、馬場孤蝶（1869-1940）、長谷川天溪（1876-1940）、二葉亭四迷、相馬御風（1883-1950）が挙げられる。チェーホフの場合は、瀬沼夏葉（1875-1915）、馬場孤蝶、小山内薫（1881-1928）と昇曙夢本人が主な翻訳者である。昇曙夢の回想は一次資料として、明治ロシア文学の実態に関して、貴重な手がかりを提供している。その他、1953年に昇曙夢はまた「日本文学と露西亜文学」（『比較文学—日本文学を中心として』、矢島書房、1953年10月）を執筆し、明治・大正期において日本文壇がロシア文学から多くのものの受け取りについて紹介している。

当然、こうした隆盛を極めたロシア文学の翻訳・紹介の背景と周樹人の日本留学期とほぼ重なっていた。周樹人は明治期での翻訳・紹介を通して、19世紀のロシア文学者に接した。明治期において、約650篇のロシア文学作品を除き、多くの翻訳小説集、伝記作品が出版され、ロシア文学に関する研究や評論文章にも多く掲載されている。筆者の調査によ

ると、その代表的なものとして以下のものが挙げられる。代表的翻訳小説集は次の通りである。

	訳者	作品名	出版社	出版年
1	百嶋冷泉	『トルストイ小説集』	内外出版協会	明治40年4月
2	馬場孤蝶	『泰西名著集』	如山堂	明治40年7月
3	二葉亭四迷	『カルコ集』	春陽堂	明治41年1月
4	瀬沼夏葉	『露国文豪 チェホフ傑 作集』	獅子吼書房	明治41年10月
5	昇曙夢	『白夜集』	章光閣	明治41年11月
6	上田敏	『心』	春陽堂	明治42年6月

代表的伝記作品は次の通りである。

	作者	作品名	出版社	出版年
1	上田駿一郎 (編)	『トルストイ伯及其家 庭』	同文館	明治35年1月
2	橘堂(編)	『ゴルキイ』	民友社	明治35年6月
3	昇曙夢	『露国文豪ゴーゴリ』	春陽堂	明治37年6月
4	八杉貞利	『詩宗プーシキン』	時代思潮社	明治39年6月

代表的評論文章は次の通りである。

	作者	文章名称	掲載雑誌	掲載時期
1	昇曙夢	プシキン論	『新小説』8年11 巻	明治36年10月
2	昇曙夢	イワン・ツルゲネエフ	『新声』11巻2 号	明治37年1月

3	昇曙夢	ドストエーヴスキイの人生観	『教育界』5巻1、2号	明治38年11、12月
4	八杉貞利	文豪プーシキン評論	『時代思潮』3巻25号	明治39年2月
5	内田魯庵	トルストイ研究のしるべ	『火鞭』2巻3号	明治39年5月
6	昇曙夢	ゴーリキイの傑作と其の世界観	『早稲田文学』10号	明治39年10月
7	小山内薫	露国の小説家ウラヂミール・カラレンコ	『新小説』11年12巻	明治39年12月
8	二葉亭四迷	露国の象徴派	『早稲田文学』22号	明治40年9月
9	二葉亭四迷	ゴーリキイとアンドレーエフの近業	『趣味』2巻10号	明治40年10月
10	昇曙夢	アンドレーエフの傑作と其人生観	『早稲田文学』27号	明治41年2月
11	二葉亭四迷	露西亜文壇の傾向	『キヌタ』	明治41年4月
12	馬場孤蝶	マクシム・ゴルキイ	『慶應義塾学報』129、130号	明治41年4、5月
13	馬場孤蝶	ガルシンと其作物	『文章世界』3巻13号	明治41年10月
14	瀬沼夏葉	チェホフについて	『新潮』10巻3号	明治42年3月
15	瀬沼夏葉	チェホフの短編と脚本	『文章世界』5巻4号	明治43年3月

上掲の考察を通して、ロシア文学の翻訳と紹介は主に明治 30、40 年代に集中していることがわかる。なぜ明治後半 20 年間に於いて数多くのロシア文学に関する著作、評論、翻訳小説が発表されるのかについては、日露戦争の背景を抜きにして正しく考察できないと考えられる。日露戦争の背景下、日本文壇におけるロシア文学の受容について、柳田泉は次の見解を示している。

時代は日露戦争から二十年も経っていなかったが、日本は戦争では勝っても、文学では却って支配された。人生の美醜両面をつくして、その真実を究めようというロシア文学の力は、恐ろしいものであった。それは、時代をも、政治をも、社会をも指導する立場にあった。それは、ロシア国民にとって、殆んど一つの宗教であったといえる。日露戦後、日本にも自然主義文学というものが生まれたが、到底それほどの天才を示しはしなかったし、またわずかにその技巧の一半を消化したに止まっていた。要するに、戦争では勝ったが、文学では、日本は敗けたのである。日本とロシアとの関係は、長いこと複雑な不幸な経験をくり返してきたが、このロシア文学全盛のときに至って、心からロシア国民を愛しロシア文学を愛した。従って、文壇も、創作という点は日本的であっても、その内容、その気分の底にはロシア的なところが多かったのである。ひとり文学ばかりでない、それが現実には、青年の理想を形成することにも関係した。白樺派の人道主義、新しき村のトルストイ主義などは、ロシア文学と無縁なものを見ることは出来なからう。²²

(「明治、大正時代のロシア文学の移入」、1969 年)

ここで、ロシア文学の「人生の美醜両面をつくして、その真実を究めよう」という力の役割を非常に強調している。

以上の明治期におけるロシア文学の受容、代表的翻訳小説集、伝記作品、評論文などの考察を通して、明治期におけるロシア文学の翻訳と紹介の実態を大まかに把握することができよう。

第三節 先行研究

「魯迅と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介」の研究は基本的に「魯迅とロシア文学」との関係の一環として取り上げられてきた。「魯迅とロシア文学」という比較研究は、中国においては、早くも40年代から研究者の手によって取り組み始められた。その後、この課題に関する研究は続々と出現し、多くの成果が挙げられている。しかしながら、中国における研究方法や問題意識及び資料不足などの原因の影響で、90年代まで「魯迅と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介」は研究問題として取り上げられていなかった。

この問題に関する最も早い研究なのは、70年代に日本人の研究者の手によって取り組みはじめられた。その後、80年代から、日本の学术界は実証研究の方法により、この課題について貴重な参考文献を提供し、大きな貢献を果たした。一方、中国の学术界においては、90年代からこの課題を注目し始めており、とりわけ、21世紀に入ると、この課題に関する数篇の力作が掲載され、「魯迅と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介」という研究の新しい段階に入った。

本節では、「魯迅と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介」という研究の史的考察を行うことにする。まず、確認できる範囲における日本留学時期の周樹人と明治ロシア文学の関わりに関する資料をまとめ、それから、80年代までの「魯迅とロシア文学」の研究課題の概観を考察する。第二段階においては、80年代から21世紀までの中日両国における「魯迅と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介」の研究史を振り返り、第三段階においては、21世紀以降の中日両国におけるこの課題に関する先行研究をまとめる。研究史の整理を通

じて、この研究課題の史的発展を明らかにし、未だに検討すべき課題を明らかにしようと考え。

1. 課題に関する資料の確認

この課題の先行研究をまとめる前には、まず周樹人及び同時代人がこの課題に関連する回想を確認すべきである。周樹人は日本留學生活について極めて少ない回想を残している。日本留學時期におけるロシア文学との関わりについて、前に述べた周樹人は留學時期におけるロシアの文学者ゴーゴリを愛読したこと以外は、まだ次の二つの回想を書き残している。一つ目は「即座支日記」（1926）におけるツルゲーネフの小説と「虚無主義者」の関係について、このように述べている。

中国人は、以前、ロシアの「虚無党」という三字を聞いただけで肝をつぶして震え上がり、今のいわゆる「赤化」などより、もっとひどいものだった。が、実際には、そんな「党」はあるはずもない。ただ、「虚無主義者」、または「虚無思想家」というのはある。これはツルゲーネフ（I. Turgenev）がつくり出した名で、神を信せず、宗教を信せず、一切の伝統と権威を否定して、自由意志にもとづいた生活への復帰をねがう人物をさして言ったものである。²³

（「華蓋集続編・即座支日記」、中川俊訳）

二つ目は、「ドストエーフスキイの7」（1936）におけるこのように語っている。

回憶して見ると若かったときに偉大な文学者の作品を読んで其の作者を敬服すれども、どうしても愛し（え）ないものは二人有った。一人はダンテで其の『神曲』の煉獄の中に自分の愛する異端が居って、或るものは斜面の岩壁に重い石を押し上げて居る。……もう一人即ちドストエーフスキイであった。²⁴

(「且介亭雜文二集・ドストエーフスキイの」、今村与志雄訳)

周樹人の極めて少ない回想によれば、若い時代の周樹人がゴーゴリ、ドストエーフスキー、ツルゲーネフの作品を注目しはじめている。また、前に述べた『小説訳叢』は実物として、周樹人と明治ロシア文学の関わりの証左を提供している。周樹人がスクラップされている『小説訳叢』は次の10篇の明治期日本語訳のロシア小説を含める。²⁵

プーシキン:

①「心づくし(原名「彼得大帝の黒人」)(翻訳小説)」、昇曙夢訳、『新小説』第12年第2巻、明治40年(1907)2月1日。

ゴーゴリ:

②「狂人日記」、二葉亭主人訳、『趣味』第2巻第3-5号、明治40年(1907)3月-5月。

③「むかしの人」、二葉亭主人訳、『早稲田文学』〔第二次〕第5号、明治39年(1906)5月1日。

④「外套」、西本翠蔭訳、『文芸倶楽部』第15巻第8号、明治42年(1909)6月1日。

レールモントフ:

⑤「宿命論者」、栗林枯村訳、『新古文林』第1巻第10号、明治38年(1905)12月。

⑥「東方物語」、嵯峨の家主人訳、『文芸倶楽部』第11巻第13号、明治38年(1905)10月1日。

ツルゲーネフ:

⑦「妖婦伝」、嵯峨の山人訳、『新小説』第8年第3巻、明治36年(1903)3月1日。

⑧「水車小屋」、嵯峨の山人訳、『新小説』第8年第10巻、明治36年(1903)9月1日。

⑨「くさ場」、昇曙夢訳、『新小説』第9年第10巻、明治37年(1904)10月1日。

⑩「森林」、長光迂人訳、『新古文林』第1巻第7号、明治38年(1905)10月。

弟である周作人は周樹人より、日本留学時期について詳しい回想を記録している。とりわけ、若い周樹人とロシア文学の関わりについて「魯迅について 其二」（「關於魯迅之二」、1936）と「ロシア語を学ぶ」（「知堂回想録 七九 学俄文」、1961）などの文章に集中している。その中で、最も詳しい回想を記録するのは「魯迅について 其二」である。『域外小説集』とロシア文学の関連について、次のように語っている。

『域外小説集』二冊中には都合英米佛各一人一篇、露四人七篇、波蘭一人三篇、ボスニア一人二篇、フィンランド一人一篇を収めてある。この振りわけから多少の特性が見出される。即ち一はスラブ系統を偏重したこと、一は被圧迫民族を偏重したことである。そのうちロシアのアンドレエフ（Leonid Andrejev）作二篇、ガルシン（V. Garshin）作一篇は、豫才が独逸訳から翻訳したものだ。豫才はなぜか知らんがアンドレエフが大好きだった。しかし私がわかって好きだと思ふのは短篇『齒痛』（Ben Tobit）と『絞殺された七人』及び『大時代の小人物の懺悔』の二冊だけだ。当時日本ではロシア文学の翻訳はまだ盛んでなく、わりに早くそしてやや多く紹介されたのはツルゲエネフぐらゐのものだった。私達も熱心に彼の作品を集めたが、それはただ珍重するだけで、別に翻訳する気はなかった。毎月の初めに各種の雑誌が出ると、私達は蚤取り眼でさがして、一篇でもロシア文学に関する紹介なり翻訳なりがあると、必ず買ってきて、その部分だけ切り取って保存しておいた。²⁶

（「魯迅について 其二」、松枝茂夫訳）

同じく回想文において周樹人とロシア文学者の関わりについてこう述べている。

これら多くの作家中、豫才が最も好んだのはアンドレエフだった。ことによればこれは李長吉を愛することと少し関係があったかも知れない。もっとも確かにさうと断定で

きないが。この外にガルシンがあった。その『四日』の一篇はすでに『域外小説集』中に記載した。又『紅い花』は、レールモントフ(M. Lermontov)の『当代の英雄』、チェーホフ(A. Tecekhov)の『決闘』と共に好きだったがつひに訳されなかった。又コロレンコ(V. Korolenko)が大好きだったが、その後私がその『マカールの夢』一篇を訳したきりだ。ゴルキーはすでに有名で『母』も各種の訳本が出てゐたが、豫才はあまり注意しなかった。そして彼が最も影響を受けたのは実はゴーゴリ(N. Gogol)だった。もっとも『死せる魂』はまだ二の次で、第一に重要なのはやはり短編小説の『狂人日記』『イワン・イワーイキッチとイワン・ニキフォロキッチの喧嘩』喜劇『検察官』等であった。²⁷

(「魯迅について 其二」、松枝茂夫訳)

「ロシア語を学ぶ」(「学俄文」)においては、周樹人と明治期におけるロシア文学の受容について回想を書き残している。

当時ロシア文学の翻訳の人材は日本でも欠乏していて、しばしば目にするのは長谷川二葉亭と昇曙夢の二人のみだった。たまたま翻訳が雑誌などに発表されているのを目にすると、昇曙夢はまだ忠実な訳だが、二葉亭は自らが文人であるゆえに、訳文の芸術性が高く、つまりはより日本化されていて、忠実度では劣る。私たち材料を求めている者からすると、参考の資料とはなっても、翻訳において依拠するところとはできなかつた。

28

(「知堂回想録 七九 学俄文」、大東和重訳)

周氏兄弟の回想以外、他の同時代の人物も周樹人と明治ロシア文学の関わりについて回想を書き残している。例えば、許寿裳は『域外小説集』における魯迅訳の「謾」、「黙」及び「四日」がドイツ語訳の底本に基づいて素直に翻訳したものだとは回想し、²⁹郭沫若

(1892-1978)は「疑いなく、早期の魯迅はきっとチェーホフの影響を与えられたのである」という見解を示している。³⁰また、アグネス・スメドレー(1892-1950)は「魯迅は医学を学ぶことと同時に、日本語の勉強によってトルストイの著作を訳している」という回想を残している。³¹

2. 80年代までの研究史

張夢陽が編集する『1913-1983 魯迅研究學術論著資料匯編』によると、1980年まで「魯迅とソビエト文化」(「魯迅と蘇聯文化」)に関する研究は「十月革命前」と「十月革命後」に分けており、以下の通りである。³²

(1) 十月革命前

趙景深「魯迅と柴霍夫——在復旦大學講演」、『文學週報』第8卷第19期、1929年6月。

溶「屠爾格涅夫和魯迅」、『天南』(上海)第5期、1935年9月10日。

(蘇)羅果夫作、見之訳『魯迅と俄国文學』、書目情報不明。

林林「魯迅和果戈里」、『崇高的憂郁』、文獻出版社、1941年1月。

馮雪峰「魯迅和俄羅斯文學的關係及魯迅創作的獨立特色」、『人民文學』第1卷第1期、1949年10月25日。

(2) 十月革命後

劉平格「魯迅と高爾基」、『藝風』(月刊)(杭州)第1卷第1期、1933年11月1日

羊「高爾基と魯迅」、『益世報』(天津)、1936年6月20日

潔兮「魯迅と高爾基」、『華北日報』、1936年11月1、2日

魏伯「魯迅と高爾基」、『群鷗月刊』(北平)第1卷第2期、1937年1月28日

巴人「魯迅と高爾基」、『魯迅風』(半月刊)(上海)第17期、1939年7月20日

勞難「魯迅為什麼是中國的高爾基」、『現代周刊』(檳榔嶼)第1卷第25期、1939年7月

17日

羅蓀「蘇聯文芸的介紹者——魯迅先生」、『中蘇文化』（月刊）（重慶）第4卷第3期、

1939年10月1日

靖華「魯迅先生在蘇聯」、『中蘇文化』（月刊）（重慶）第4卷第3期、1939年10月1日

錫金「魯迅与高爾基」、『中学生活』（月刊）（上海）第2卷第1期、1939年11月15日

景宋「魯迅眼中的蘇聯」、『時代雜誌』（周刊）（上海）第6年第41期、1946年10月19日

以上の調査を通して、1930年代から80年代まで中国における「魯迅とロシア文学」に関する研究史を概観できる。こうした研究においては、主に比較文学の研究方法を取り、魯迅とロシア文学者（ゴーリキーが最も多い）または魯迅の作品とロシアの文学作品を比較し、研究を行うことになる。しかしながら、研究方法、問題意識、資料不足等の原因で、30年代から80年代まで中国の魯迅研究界においては、未だに「魯迅と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介」という研究を課題として取り扱われていなかった。

70年代に日本人の研究者の手によってこの課題にはじめて取り組みられた。管見の限りでは、1974年4月、雑誌『颯風』第6号に掲載された中島長文の論文「藍本「摩羅詩力説」第七章」ははじめて留学時期の周樹人とロシア文学のつながりをとらえたものである。この論文では、実証研究の方法を採り、「摩羅詩力説」第七章におけるロシア詩人プーシキンとレールモントフに関する藍本を明らかにした。綿密な考察により、周樹人とプーシキン・レールモントフとその周辺に存在する英語訳と日本語訳のロシア文学についての著作、評論の関連事実を発掘した。この力作は当時「摩羅詩力説」の材源を調査している北岡正子に重要な材料を提供している。この論文の掲載は、「魯迅と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介」という課題だけにとどまらず、「摩羅詩力説」の研究及び周樹人の文学観構成についても深遠な影響を与えている。

3. 80年代から21世紀までの先行研究

80年代に入ると、中国研究界におけるなお「魯迅とロシア文学」の研究という課題を重

視している。とりわけ、80年代初期においては、いくらかの「魯迅とロシア文学」に関する研究書が出版されている。1981年には、張華の『魯迅と外国作家』（『魯迅和外国作家』、陝西人民出版社）と韓長経の『魯迅とロシア古典文学』（『魯迅与俄羅斯古典文学』、上海文藝出版社）が出版される。『魯迅と外国作家』においては、魯迅とロシアの文学者エロシェンコ、トルストイ及びチェーホフの関係をとり上げて分析している。『魯迅とロシア古典文学』においては、魯迅とロシア古典文学及びロシア文学のリアリズム主義との関係に基づき、魯迅とアルツィバーシェフ（1878-1927）、ゴーゴリ、トルストイ、チェーホフのつながりが論じられる。1983年10月には、王富仁の『魯迅前期小説とロシア文学』（『魯迅前期小説与俄羅斯文学』、陝西人民出版社）が出版される。この著述においては、魯迅前期小説の創作とゴーゴリ、チェーホフ、アンドレーエフ、とアルツィバーシェフの文学的関連を検討している。1985年9月、李春林は『魯迅とドストエフスキー』（『魯迅与陀思妥耶夫斯基』、安徽文藝出版社）を出版し、全面的に魯迅とドストエフスキーの関連を把握して考察を行っている。以上の先行研究から確認できるのは、80年代の中国においては、「魯迅とロシア文学」の課題は非常に研究者に重視されるが、「日本留学時期の周樹人とロシア文学」との関連についてはなお、ほとんど触れられていない。1991年になると、中国人の研究者ははじめて実証の研究方法を採用して周樹人の『小説訳叢』を取り組み始めた。魯迅研究博物館に務めた研究者・姚錫佩は『小説訳叢』を「魯迅蔵書研究」の一環として取り上げており、はじめて世に『小説訳叢』の中身を紹介している。

80年代に入ると、「魯迅とロシア文学」も日本人の研究者にとっては常に関心を払ってきた課題である。谷行博の「「謾・黙・四日」-上-魯迅初期翻訳の諸相」（132号）「「謾・黙・四日」-下-魯迅初期翻訳の諸相」（135号）が『大阪経大論集』に掲載された。この研究は『域外小説集』における周樹人訳の3篇のロシア小説を着目し、同時期の日本語訳の同作と比較し、周樹人のロシア文学の受容及び翻訳態度を考察したものである。とりわけ、周樹人の翻訳と二葉亭四迷の翻訳小説「四日間」及び明治期におけるアンドレーエフの受容

について、貴重な文献資料を提供している。1982年5月から、北岡正子の中島長文の先行研究を踏まえて、中島長文の調査による「摩羅詩力説」第七章の藍本を照らし合わせながら、周樹人の材源の取捨について検討を行なっている。後にこの部分を著作『魯迅文学の淵源を探る——「摩羅詩力説」材源考』（汲古書院、2015年6月）に収録している。1985年4月、藤井省三の『ロシアの影：夏目漱石と魯迅』（平凡社）を出版し、この著作は比較文学分野の力作として知られており、研究界に大きな衝撃を与えたものである。この研究は夏目漱石と魯迅、それぞれにロシア文学者のアンドレーエフの受容を着目し、日本文学と中国文学におけるロシア文学の受容という背景を視野に入れて、新たな角度から明治末期のアンドレーエフの受容と夏目漱石、魯迅の関わりを検討したものである。以上の史的考察を通して、日本における80年代の周樹人と明治ロシア文学についての課題は実証と比較の二種類の方法を採って研究を展開していることがわかる。90年代になると、竹内良雄は姚錫佩の『小説訳叢』の紹介を踏まえて、『小説訳叢』とその周辺に存在する雑誌、翻訳小説（ロシア小説を含め）の調査を行い、『慶応義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』第15号に「魯迅の初期文学観の成立を探る——魯迅自身が編んだ「小説訳叢」をもとに」（1995年）を掲載される。さらに一言述べておきたいのは、この論文は同年、王惠敏より中国語に翻訳され、『魯迅研究月刊』（1995年第7期）に掲載された。

80年代から21世紀までの「魯迅と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介」という課題は、中日両国の学界は何れも、80年代までの研究より、新たな資料の発見に伴い、新しい問題意識をもって、さらに多角的にわたって展開している。

4. 新世紀以来の先行研究

まず、中国におけるこの20年間の先行研究をまとめる。2006年、研究者の陳漱渝は姚錫佩の『小説訳叢』の紹介を踏まえて、『小説訳叢』に収録する日本語訳のロシア小説の中国語訳名を確認し、魯迅文学との関連を検討している（「尋求反抗和叫喊的呼声——魯迅

最早接觸過哪些域外小說？」、『魯迅研究月刊』、2006年第10期）。同年5月、青島大学の潘青は「留日時期の疎通と対話——魯迅と十九世紀のロシア文学」（「留日時期的溝通与対話——魯迅与十九世紀俄羅斯文学」）を修士論文として、はじめて全体像から留学時期の魯迅と彼が留学時期に出会ったロシア文学の関わりを調査した。しかしながら、明治期のロシア文学の翻訳・紹介に関連する知識体系、時代背景及び文献資料を殆んど導入していないので、全面的に「魯迅と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介」を把握することが困難だろう。もう一つは、調査不足の問題も存在している。例えば、潘青は留学時期の魯迅が少なくともプーシキン、レールモントフ、ゴーゴリ、ツルゲーネフ、アンドレーエフ、ガルシン、チェーホフなどの7人以上のロシアの文学者を接触した見解を示しているが、筆者の調査では、上記の7人を除き、周樹人の周辺にはステプニャク、トルストイ、ドストエフスキー、コロレンコ、ゴーリキー、アレクセイ・トルストイなどの6人の作家が存在している。したがって、留学期の周樹人の周辺は少なくとも13人以上のロシアの文学者が存在したことを明らかにすることができる。2011年4月、張麗華は著作『現代中国「短篇小説」的興起:以文類形构為視角』（北京大学出版社）において明治期のアンドレーエフの小説「心」と魯迅の「狂人日記」の関連を発掘し、新たな研究視野を学界に提供している。2016年10月、范国富は日本留学時期の魯迅とトルストイの関わりを取り上げ、論文「魯迅留日時期の思想建築におけるレフ・トルストイ」（「魯迅留日時期思想建构中的列夫・托爾斯泰」、2016年第10期）を『魯迅研究月刊』に掲載している。2018年、魯迅の「狂人日記」が発表された百年後、「狂人日記」との深い関連性を持つゴーリキーの小説「二狂人」（二葉亭四迷訳）が新たに発見される。『文学評論』においては、2018年第5期に李冬木の「明治時代的“狂人”言説与魯迅的「狂人日記」」と汪衛東の「「狂人日記」影響材源新考」を掲載し、魯迅の「狂人日記」と明治期におけるロシア小説の関連性を示している。2020年、『文学評論』第5期においては、再び李冬木の「「狂人」的越境之旅——从周樹人与「狂人」相遇到他的「狂人日記」」を発表する。この論文は、明治期における「狂人」に

関する評論や翻訳小説の調査を行い、ロシア小説における「狂人」に関する作品を重点に置いており、詳細な考察と斬新な方法を通して、全面的に「狂人日記」と外国文学、とりわけ、ロシア文学との関わりを考察したものである。学界に大きな衝撃を与えると同時に、問題意識や研究方法にも多くの新たな見解を示している。もう一つ補充しておきたいのは、2015年3月、孫郁の著作『魯迅とロシア』（『魯迅与俄国』、人民文学出版社）を出版していることである。『魯迅とロシア』は日本留学時期の魯迅とロシア文学の関連を重点的に置いてないが、多角的に文学者としての魯迅の生涯とロシア文学の関わりを考察を行ったもので、数多くの「魯迅とロシア文学」に関する一次資料を学界に示している。

21世紀に入った日本学界においては、「魯迅と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介」の研究は中国の研究より少ない。管見の限りでは、以下の3点である。2001年1月、林敏潔は「「誠」と「愛」——魯迅訳「謾」と「黙」について」を『東方学』101号に掲載し、留学時期の魯迅がアンドレーエフの小説を翻訳する動機を明らかにしている。李冬木の論文「狂人の誕生：明治期の「狂人」言説と魯迅の「狂人日記」」（佛教大学『文学部論集』103号、2019年3月）と「「狂人」の越境の旅：周樹人と「狂人」の出会いから彼の「狂人日記」まで」（佛教大学『文学部論集』105号、2021年3月）は上記の『文学評論』に掲載された論文の日本語訳である。

以上の研究史の考察を通して、以下のことが明らかになる。まず、「魯迅と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介」を課題として取り上げられたのは潘青の修士論文のみである。しかしながら、問題意識や明治ロシア文学に関する資料不足などの原因で、全面的にこの課題を詳細に検討できないと考えている。次に、研究者は殆ど、「摩羅詩力説」におけるロシア文学についてのテキスト、実物としての『小説訳叢』、「狂人日記」とロシア文学のつながりなどの問題を中心に、留日時期の周樹人と明治期におけるプーシキン、レールモントフ、アンドレーエフ、ゴーゴリ、ゴーリキーの受容について論じている。しかしながら、当時の周樹人が愛読するツルゲーネフ、チェーホフ、ガルシン及びコロレンコ

などの文学者の明治期における受容については殆ど触れられていない。最後に、当時の周樹人は愛読したロシア文学がいかに関彼の文学創作に影響を与えたのかについて、「狂人日記」以外の作品には殆ど言及していない。逆に言えば、魯迅の文学創作、魯迅とロシア文学の関係からみると、明治ロシア文学はどのような役割を果たし、どのような意味を持っているかについての考察はまだ不十分である。本論では、先行研究を踏まえて、全面的に日本留学時期の周樹人と明治期における 11 人のロシア文学者の受容実態を考察し、具体的に上記に提起する問題を明らかにするために、さらに深めて研究を展開したいと思う。

第二章 スラブ民族における「摩羅詩人」

明治期におけるプーシキンとレールモントフの翻訳・紹介と周樹人

はじめに

周樹人は日本留学時期からロシアの文学者プーシキン、レールモントフの作品を読み始め、「摩羅詩力説」におけるプーシキンとレールモントフを「スラブ民族における「摩羅詩人」」と高い評価を与えている。それと同時に、明治期の文芸雑誌に掲載するプーシキン、レールモントフの小説を切り取って保存し、『小説訳叢』にスクラップしている。言うまでもなく、留学時期の周樹人はプーシキン、レールモントフの作品を愛読することを明らかにしている。周樹人の文学者の生涯においては、プーシキン、レールモントフの作品を翻訳していないが、プーシキン、レールモントフ文学に関する著作を多く購入している。つまり、彼は留学時期から、プーシキン、レールモントフ文学に関心を抱き続けている。本章は先行研究を踏まえて、周作人のテキストにおけるプーシキン、レールモントフに関する部分を取り入れ、これまで殆ど論じられない『小説訳叢』におけるプーシキン、レールモントフの小説と明治期のプーシキン、レールモントフの翻訳実態の関わりを整理し、留学時期の周樹人のプーシキン観、レールモントフ観をそれぞれに再考する。

第一節 明治期におけるプーシキンの翻訳・紹介と周樹人

1. 先行研究

周樹人の生涯においては、プーシキン³³の作品を翻訳したことがなく、書き残したプーシキンに関するテキストにも極めて少ない。「摩羅詩力説」におけるプーシキンの生涯及び文学に関する評論以外、他のテキストを通して、周樹人のプーシキン観を窺うのは極めて困難だろう。周樹人は「摩羅詩力説」においては、プーシキンが「幼時より詩をつくり、文学界にはじめてロマン主義をおこし、大いに有名になる」と称し、「はじめてバイロンの詩を読み、偉大さに深い感銘を受け、思想にも表現にも新境地をひらき、短詩もバイロ

ンに倣った」と述べている。それから、周樹人もプーシキンの代表作「コーカサスの捕虜」、
「ジプシー」と「エヴゲーニイ・オネーギン」を紹介している。最後に、周樹人はブラン
デスがプーシキンに対する評価を引用し、「厭世主義の外形をとり」、「ついに皇帝の権
力に服し、平穩に過ごした」と結論付ける。周樹人は明らかに「摩羅詩力説」においては、
プーシキンよりもう一人の「摩羅詩人」レールモントフの愛国観に賛同している。

中島長文と北岡正子の調査を通して、「摩羅詩力説」におけるプーシキンに関する材源
は次の通りである。

①八杉貞利『詩宗プーシキン』、時代思潮社、1906年

②G. Brandes Impression of Russia Translated from The Danish by Samuel C. Eastman London,
Walter Scott、出版年不詳 Preface 1889³⁴

その他、姚錫佩等の先行研究を通して、『小説訳叢』における1篇のプーシキン小説を
収録している。書目情報は次の通りである。

「心づくし（原名「彼得大帝の黒人」）（翻訳小説）」、昇曙夢訳、『新小説』第12年第
2巻、明治40年（1907）2月1日。³⁵

陳漱渝の研究を通して、この小説の中国語訳名は「彼得大帝的黒人教子」と確認している。

³⁶以上の先行研究の考察を通して、日本留学時期の周樹人はプーシキン文学に注目すること
が明らかである。また、俞航は論文「魯迅眼中的俄国詩人：形象学視野下的「摩羅詩力説」」
においては、形象学の研究方法を採り、周樹人は自らが作った基準系に基づき、プーシキ
ン観・レールモントフ観を形作られたことを検討している。³⁷

以上の先行研究により、「摩羅詩力説」第七章におけるテキストに基づいて、日本留学
時期の周樹人のプーシキン観、レールモントフ観を検討している。しかしながら、実際に、
周作人による英語訳のロシア文学に関する資料はもう一つの重要なルートである。また、
『小説訳叢』におけるプーシキン、レールモントフの小説と明治期におけるロシア文学の
繋がりにも殆ど重視されていない。本論は周作人のテキストにおけるプーシキン、レール

モントフに関する部分を取り入れ、そして、これまで殆ど論じられない『小説訳叢』におけるプーシキン、レールモントフの小説と明治期のプーシキン、レールモントフの翻訳実態の関わりを整理し、留学時期の周樹人のプーシキン観、レールモントフ観をそれぞれに再考したい。本節はプーシキンの部分を考察する。

2. 明治期におけるプーシキンの紹介と周氏兄弟のプーシキン論

まず、ここで、プーシキンについて簡単に紹介しておく。プーシキンはロシアの詩人である。退役陸軍少佐である貴族の子として、モスクワに生まれた。12歳の時、ペテルブルグ近郊に開校されたリツェイ（学習院）に入った。1817年、リツェイを卒業し、外務院に就職した。政治的な詩が手書きで広まり、1820年に南ロシアへ追放された。1837年、妻ナターリヤを追い回していた近衛士官ダンテスに決闘を申し込むことを余儀なくされ、決闘で致命傷を負い死去した。³⁸佐藤繁好の「日本におけるプーシキン書誌(翻訳・研究・紹介文献目録)第一編(1883-1944)」によれば、明治期におけるプーシキンに言及する文献が少なくとも60部以上がある。³⁹筆者はこの整理を踏まえて、全面的にプーシキンを紹介する文献は以下の通りである。

- ①小西増太郎「露国文学と文豪プーシキン氏」、『六合雑誌』163、165号、1894年7月、9月。
- ②嵯峨の屋「露国の天才プーシキンとゴーゴリ」、『古反古』、民友社、1897年3月。
- ③昇曙夢「プシキン論」、『新小説』第8巻第11号、1903年10月。
- ④秀湖訳「抒情詩人プシキン」、『火鞭』1巻3号、1905年11月。
- ⑤八杉貞利「文豪プーシキン評論」、『時代思潮』3巻25号、1906年2月。
- ⑥八杉貞利『詩宗プーシキン』、時代思潮社、1906年6月。
- ⑦曙夢生「詩人プーシキン」、『日本及日本人』462号、1907年7月。
- ⑧昇曙夢「露国詩人と其詩5：プーシキン」、『露西亜文学研究』、隆文館、1907年12月。

中島長文と北岡正子の調査を通して、「摩羅詩力説」におけるプーシキンの生涯を紹介する部分は主に八杉貞利の『詩宗プーシキン』を参考した。しかしながら、プーシキンに対する評価は、周樹人が八杉貞利のテキストを引用しなく、ブランデス（1842-1927）の『露国印象記』（Impression of Russia）を参考している。注目したいのは、周樹人がプーシキンを論じるテキストの中で、また「国民性」を使った表現があり、「獣愛」の概念をまとめたものであり、北岡正子はこの二つの概念を参考にした材料源を分析しているので、ここでは説明しない。⁴⁰明らかに、周樹人はロシアの学者ピーピン（1883-1904）の観点を認めながら、「ロシアにプーシキン出でてより、文学界ははじめて独立した」と述べ、プーシキンがロシア文学史における創始者の地位を肯定しているが、全体的にはプーシキンの晩年に表した「獣性愛国」に対する批判は明らかで、プーシキンはただバイロン厭世主義の「外形」を模したと言われる。

周作人はブランデスの『露国印象記』とクロポトキン（1842-1921）の『露西亜文学の理想と現実』は「19世紀のロシア文学を語るよい参考書である」と高評価している。周作人の回想により、「摩羅詩力説」第八章の材源ブランデスの英語版の『波蘭印象記』は周作人の翻訳を通して、周樹人に伝えたのである。したがって、同じく英語版の『露国印象記』と『露西亜文学の理想と現実』にも周作人の翻訳を通して周樹人に伝えた可能性が高い。⁴¹周作人は「自己について」（「關於自己」、1937）において、周氏兄弟にとっては『露国印象記』と『露西亜文学の理想と現実』の影響及びプーシキン・レールモントフに対する評価について、次のように語っている。

『露西亜文学の理想と現実』は私に与えてくれた影響はほぼブランデスの『露国印象記』と同じである。この二作は何れも文学を語る時に社会の役割を強調し、文章と思想を重要視させ、このような先入観は私に与えてくれる影響は現在まで続けている。私は若い時にレールモントフに対しての感服が今まで忘れられない。彼の「木齊劑」を見つ

からないので悔しんでいる。それと同時にプーシキンに対しての不満がある。プーシキンはロシアのバイロンと称されており、しかしながら、彼はバイロンのような自由への追求と偽善への憎悪に欠けている。クロポトキンは次のように語っている。

「晩年にはもう読者たちに近づくことができない。彼らはニコライ一世の軍隊がポーランドに屈服してからロシアの武力を賛美するのは詩人のやるべきことではないと思っている」。

ブランデスにもこう言っている。「プーシキンが少年の時の自由に対する信仰は中年時代になって、獣性の愛国主義に降伏した」。彼はまたプーシキンが1831年に書いた「ロシアを誹謗するもの」という詩を例にとって、ロシアが武力でポーランドの独立運動を圧迫することを弁護するために作った。昨今の価値は異なり、プーシキンの名声はとても高い。実情について私たち素人には分からないが、先入観が多いとはいえ、上記の二人の話はまだ信頼できると思う。⁴²

(周作人「關於自己」、筆者訳)

周作人の回想により、周氏兄弟は『露国印象記』と『露西亜文学の理想と現実』を重視する原因を明らかにし、また側面的に周氏兄弟のプーシキン観、レールモントフ観を反映している。「摩羅詩力説」においては、プーシキンとレールモントフがバイロンをはじめとする摩羅詩人の中に取り入れたが、実際にプーシキンはただ過渡的な人物の一人に過ぎない。逆に周氏兄弟から見れば、レールモントフは真正にバイロン思想を継承する詩人である。したがって、「摩羅詩力説」におけるプーシキンを論ずる部分の最後に「バイロンの摩羅の思想は、かくてプーシキンを経てレールモントフに伝えられる」と結論付ける。周作人の回想と中島長文、北岡正子二氏の考証のように、周氏兄弟は当時、プーシキンに対して非常に不満に思っていたのは、クロポトキンの『露西亜文学の理想と現実』とブランデスの『露国印象記』におけるプーシキンに対する論述を受けたからである。

3. 明治期におけるプーシキンの翻訳と周樹人

「明治翻訳文学年表・プーシキン編」により、明治16年(1883)から明治42年(1909)までの26年間でわずか以下の27部のプーシキンの作品が日本語に翻訳されたにすぎず、明治16年高須治助訳の「露国奇聞/花心蝶思録」(「大尉の娘」)、明治19年高須治助訳の「露国情史スミスマリー之伝」(「大尉の娘」)、明治26年石川残月庵訳の「偽皇子」(「ボリス・ゴドゥノフ」)、明治26年林丘子訳の「御苑の露」(「大尉の娘」)、明治26年嵯峨の屋お室訳の「漁夫と魚との童物語」(「漁師と魚の話」)、明治28年無名氏訳の「アンジェロ」(「アンジェロ」)、明治33年嵯峨の屋お室訳の「うき草」、明治34年訳者不記訳の「決闘」(「その一発」)、明治35年嵯峨の屋お室訳の「巴黎の夫人」(「ピョートル大帝の黒人」)、明治35年佐伯訳の「漁夫物語」(「漁師と魚の話」)、明治36年嵯峨の屋お室訳の「冬の夜の野道」、明治37年足立北鷗、徳田秋声訳の「露国軍事小説/士官の娘」(「大尉の娘」)、明治37年昇曙夢訳の「ポルタワの激戦」、明治37年雄島浜太郎訳の「露国小説/帰る雲」(「吹雪」)、明治37年鹿又琴香訳の「葬具商」(「葬儀屋」)、明治38年三津木春影訳の「射撃」(「その一発」)、明治38年黒田撫泉訳の「露国小説/形見の手紙」、明治38年昇曙夢訳の「吹雪」(「吹雪」)、明治38年橋本春雨訳の「すて児」、明治39年昇曙夢訳の「海少女」(「ルサルカ」)、八風訳の「葬具師」(「葬儀屋」)、明治39年増田合川訳の「雪あらし」(「吹雪」)、明治39年小宮破霄訳の「三枚札」(「スペートの女王」)、明治40年昇曙夢訳の「心づくし」(「ピョートル大帝の黒人」)、明治40年梧桐夏雄訳の「決闘」(「その一発」)、明治40年荒井恒雄訳の「駅通局長」(「駅長」)、明治41年秋元蘆風訳の「露西亜詩華」、明治42年与謝野寛、茅野蕭々訳の「一撃」(「その一発」)、明治43年魚住衛訳の「葬儀屋」(「葬儀屋」)。⁴³

以上の調査によると、周樹人が集めたプーシキンの小説「心づくし(原名「彼得大帝の黒人」)」は明治期においては、2回に翻訳されている。「心づくし(原名「彼得大帝の黒

人）」の発表の5年前（明治35年8月、1902年8月）に嵯峨の屋お室によってはじめて翻訳され、「巴黎の夫人」を標題として雑誌『太平洋』第3巻第32、33号に発表された。⁴⁴しかしながら、昇曙夢の訳本と比べると、嵯峨の屋お室の訳本は一部の翻案小説だと言える。この作品は主人公のロシアの名前をすべて日本語の名称に変えて、任意で内容を添削して、ただ原作の大体の内容だけを翻訳している。それに比べて、昇曙夢の訳本はかなり成熟しているが、それでも当時は疑問と批判を受けている。

ここで訳者昇曙夢の生涯を簡単に紹介しておく。昇曙夢の本名は昇直隆である。鹿児島県奄美大島に生まれた。明治28年（1895）、正教神学校（通称ニコライ神学校）へ入学の志を抱いて上京し、明治29年（1896）9月、同校に入学し、明治36年（1903）7月卒業し、母校の講師となった。在学中、正教青年会雑誌『使命』に明治35-36年、ゴーゴリの文語体の評伝を連載し、のち『露国文豪ゴーゴリ』と題して刊行し、明治40年（1907）12月それまで新聞雑誌に書いた論文随筆を集めて『露西亜文学研究』を出し、翌明治41年（1908）12月翻訳集『白夜集』を出した。明治43年（1910）5月、第二翻訳集『露西亜現代代表的作家六人集』を出し、明治45年（1912）6月には第三翻訳集『毒の園』を出した。さらに明治43年（1910）、ゴーリキーの『どん底』、大正元年（1912）、クープリンの『決闘』、大正三年（1914）ドストエフスキーの『虐げられし人々』、ソログープの劇曲『死の勝利』などの翻訳を出し、大正4年（1915）、著書『露国現代の思潮及文学』を出し、大正6年（1917）、ロシア革命に起きると、『露国革命と社会運動』を出し、大正12（1923）年にはロシアを視察し、翌年『赤露見たままの記』などを出し、日本にプロレタリア文学が起るにしたがい、革命後のロシア文学の動向と作品をつぎつぎに紹介、翻訳していた。第二次世界大戦後は故郷奄美の日本復帰運動に尽力した。⁴⁵

明治41年（1908）11月に章光閣から昇曙夢の訳作『白夜集』を出版している。『白夜集』にはツルゲーネフの「草場」、「凄艶」、プーシキンの「吹雪」、「黒人」、「海少女」、コロレンコの「奇火」、チャーホフの「壺扶斯」、「拳銃」、ゴーリキーの「悪魔」など

の5人9篇の作品が収録されている。この9篇の作品の中には『白夜集』の出版前から文芸雑誌で発表された作品がいくつかあるが、『小説訳叢』に収録されている「心づくし」（『白夜集』における「心づくし」の標題は「黒人」に変更される）と「草場」の2篇の小説も収録される。しかし、わずか一ヶ月後、評論家の馬場孤蝶が『東京二六新聞』で「『白夜集』を読みて」という9つの評論文を連続して発表し、昇曙夢訳に対する厳しい批判を展開している。⁴⁶馬場孤蝶は英語訳本のテキストに基づき、『白夜集』の中の「草場」、「凄艶」、「吹雪」、「黒人」などの小説の翻訳方法に焦点を当てて疑問を呈している。昇曙夢は『東京二六新聞』で馬場孤蝶に対して答え、その中の多くの作品は学生時代に翻訳されたものだと言明する。多くの欠点を自覚しているが、出版を急いでいるだけで、直せないものである。⁴⁷その後、昇曙夢は「心づくし」が自分の翻訳した小説ではなく、すでに亡くなった満洲の友人が翻訳したものだと言明しているが、その友人の名前は公開されていない。⁴⁸

馬場孤蝶の批判で、昇曙夢に自分の問題を意識させる。「『白夜集』は一年後れて出版された。全く試訳時代のもので、殊に集中の二三編は神学校在学中世に発表しようといふ覚悟もなく手をつけたもので、語学の力は未熟、邦語の知識は貧弱、その上文章が如何にもゴツゴツして居て読むに堪へない。唯原文に忠実にといふ外に誇るべき何等の苦心をも待たない」⁴⁹。糸内裕子は昇曙夢訳の「草場」とロシア語原文を比べて「誤訳が多い」、「草場」にはロシア語を意識せずに一般読者として読んだ場合にも疑問を感じる訳が多いことも確かである」のような結論を出している。⁵⁰

以上の事件を通して、周樹人が日本に留学していた頃に読んだ昇曙夢の翻訳したロシア小説は、正しく昇曙夢本人が述べたように「試訳時代の産物」である。馬場孤蝶が挙げた多くの『白夜集』の誤訳例は、昇曙夢の翻訳の信憑性を当時大いに論争された。周作人が回想していた昇曙夢の「まだ忠実な訳」とは少し異なっている。周氏兄弟が当時の文壇で『白夜集』の翻訳についての論争に注目しているかどうかは分からないが、周樹人がこの

小説の翻訳を選んでいないことは明らかである。そのため、私は昇曙夢の翻訳したロシア小説も彼らが情報を入手し、広く読まれているルートと資料だけだと推測している。特筆すべきなのは、荒井由美の考証によると、「心づくし」という訳作の一部が「誤訳、文章がぎこちなく、日本語で表現されていない」とされていたが、発表2年後、ジャーナリストの陳景韓（1878-1965）がこの作品の第四部分をベースに翻訳し、「俄帝彼得」と題している。⁵¹陳景韓は日本語に基づいてロシアの小説を3篇翻訳している。「俄帝彼得」のほか、チャーホフの「生計」とアンドレーエフの「心」もある。小説「心」は上田敏が翻訳したアンドレーエフの作品で、原題は「思想」で、同じく昇曙夢の『白夜集』が出版されたことで論争が起こったように、『心』は出版後も明治期におけるロシア文学の翻訳問題に関する論争を引き起こしている。⁵²ただ、今回の昇曙夢は批評された者から批判の発信者になった。

筆者が不思議に思うのは、この二つの論争の中で、論争に満ちた二つの訳作は陳景韓によって中国語に翻訳されたことである。陳景韓の根拠となるこの二つの日本語の原本は明治文壇で論争されているが、翻訳された漢訳本は誤訳、漏訳の現象に満ちている。「心」の翻訳状況について、李冬木は「陳景韓の翻訳は無残という他なく、多くの重要な心理描写が訳し漏れており、日本語の表現が多くみられ、訓読の毒に当たっている」という指摘をしている。⁵³筆者は「俄帝彼得」と昇曙夢の底本「心づくし」を比較して、同様の問題を発見した。例えば、原文は「一言で言へば彼れは純粹の露西亜貴族であった」⁵⁴。これを陳景韓の翻訳は「平居一言一笑純然俄国古風」⁵⁵。明らかに日本語の「一言で言えば」を誤訳して「一言で笑う」の「一言」となり、このような誤訳は多く見られ、「俄帝彼得」という翻訳はプーシキンの原作からかけ離れている。

第二節 明治期におけるレールモントフの翻訳・紹介と周樹人

1. 先行研究

プーシキンに対する態度と同じで、周樹人もレールモントフ⁵⁶の作品を翻訳したことがなく、「摩羅詩力説」第七章における周樹人はレールモントフをスラブ民族のもう一人の「摩羅詩人」と見なし、彼の生涯と代表作品を重点的に紹介する以外は、他のテキストからは周樹人のレールモントフ観を見るのが困難である。北岡正子は『「摩羅詩力説」材源考』で先行研究を行っており、「摩羅詩力説」におけるレールモントフに関する4種類の材源は次の通りである。

①G. Brandes Impression of Russia Translated from The Danish by Samuel C. Eastman London, Walter Scott、出版年不詳 Preface 1889

②P. Kropotkin Russian Literature (Ideals and Realities) London, Duckworth & Co. 1905

③昇曙夢「レルモントフの遺墨」、(『太陽』12-12 1906) - 『露西亜文学研究』、隆文館、1907年。

④昇曙夢「露国詩人及其詩 六 レルモントフ」、(初出誌不詳) - 『露西亜文学研究』、隆文館、1907年。⁵⁷

その他、姚錫佩等の先行研究を通して、『小説訳叢』に次の2篇のレールモントフの小説を収録している。

①「宿命論者」、栗林枯村訳、『新古文林』第1巻第10号、明治38年12月。

②「東方物語」、嵯峨の家お室訳、『文芸倶楽部』第11巻第10号、明治38年10月。⁵⁸

陳漱渝の研究を通して、この2篇の小説の中国語訳名は「歌手阿希克・凱里布」と『現代の英雄』の中の「宿命論者」であることがわかる。⁵⁹また、『域外小説集』の第一巻の新訳予告によると、レールモントフの『並世英雄伝』（『現代の英雄』）も周氏兄弟が中国語に翻訳する予定の作品であった。周作人は雑誌『天義報』に掲載された「中国人の愛国」（「中国人之愛国」、1907年11月）で、レールモントフの「愛国」を賞賛している。上記の先行研究により、周樹人は間違いなく日本留学時期にレールモントフの作品に対して大きな興味を持っていたと判断できる。

2. 明治期におけるレールモントフの紹介と周氏兄弟のレールモントフ論

ここで、レールモントフについて簡単に紹介しておく。レールモントフはロシアの詩人、小説家である。退役陸軍大尉の子として、モスクワで生まれた。3歳の時母と死別し、祖母に引き取られて、莫大な資産を持つアルセーニエフ家の単独相続人となった。1834年、近衛騎兵学校を卒業し、近衛騎兵連隊騎手に任官した。1837年、決闘で死んだプーシキンを悼む詩「詩人の死」を書き、首都の評判となったが、革命への呼びかけと見なされ、逮捕された。1841年、口論して決闘の申し込みを受け、決闘で殺された。⁶⁰明治期のレールモントフ紹介の概況に関する先行研究は見られない。筆者の整理を通して、レールモントフを紹介する文献は以下の通りである。

- ①小西増太郎「〈論説〉露国文豪レルモントフ氏及び氏の世界観」、『六合雑誌』172-175号、1895年4月-7月。
- ②城南生「詩伯レルモントフ」、『使命』37号、1902年。
- ③加島汀月「露国の慷慨詩人レルモントフ」、『青年界』2巻13号、1903年10月。
- ④秀湖生（白柳秀湖）「露国詩人レルモントフ」、『火鞭』第1巻第5号、1906年1月。
- ⑤昇曙夢「レルモントフの遺墨」、『太陽』第12巻第12号、1906年9月。
- ⑥無記名「露国の詩人レルモントフと其の誌稿」、『文章世界』第4巻第3号、1909年2月。

以上の6篇は何れもレールモントフに関する評論文であるが、明治期にレールモントフに関する専門書が出版されたことは発見されていない。

周作人の回想と北岡正子の研究によると、周氏兄弟のレールモントフに対する理解は、殆どブランデスの『露国印象記』とクロポトキンの『露西亜文学の理想と現実』の二つの著作に由来している。周樹人は「摩羅詩力説」第七章におけるレールモントフの「悪魔」、
「ムツィリ」、「現代の英雄」、「イズメイル・ベイ」などの作品に言及し、重点的に長

詩「悪魔」と「ムツィリ」を紹介し、周作人の「当時、レールモントフの長詩「ムツィリ」を読むことができないから、非常に残念なことだ」という回想からみると、周氏兄弟が当時非常にクロポトキンが紹介した『ムツィリ』を重視していたか、この詩をまだ読んでいなかったことがわかった。⁶¹プーシキンの「獣性愛国」に対する批判と違い、周氏兄弟はレールモントフに対して敬服の気持ちを示している。特にレールモントフの愛国に対して、兄弟共に高く評価を与える。周樹人はレールモントフが「消極の観念」、「奮戦抵抗」を有していることを肯定した以外に、周樹人はまた、クロポトキンの観点を踏襲し、ロシアの田舎、村人の生活を愛し、そして自由を愛するコーカサスの人々を称えてやまない。周作人も評論「中国人の愛国」においては、レールモントフの愛国について、次のように称賛している。

ロシアにはレールモントフがいて、詩人として生まれ、愛国心を大切にし、情実を顧みて、草野が広々としていることにあり、時には野花を見て、農家は質素で、かなり太古に近い。普通の志士の愛国行為は盲目的に野愛に従い、血剣をもって祖国の光栄のため、いわゆる「獣性愛国者」である。レールモントフの愛国行為は普通の志士と違うことである。⁶²

(周作人「中国人之愛国」、筆者訳)

周作人はこの点でプーシキンの名前を出していないが、「摩羅詩力説」の論述を結び付けると、「獣性の愛国者」はちょうど周氏兄弟がブランデスのプーシキンに対する批判の言葉を借りていることがわかる。クロポトキン、ブランデス、昇曙夢などの影響を受けて、全力を尽くして抵抗し、自由と愛国を追求するという点で、周氏兄弟はレールモントフの高い評価を与える。このことから推測すると、周氏兄弟が日本留学時期のレールモントフに対する全体的な印象は主にクロポトキンの『露西亜文学の理想と現実』という著作の中

でのレールモントフの紹介に由来している。ちなみに、後に周作人が北京大学で「ヨーロッパ文学史」と「19世紀ヨーロッパ文学史」の二つの課程を教授する時に、この二つの課程の講義を編集し、『近代欧州文学史』という書名で出版しており、この著作の中で、ロシアの詩人プーシキンとレールモントフが紹介されている。宋剣の考察によると、『近代欧州文学史』におけるプーシキンとレールモントフに関する部分の材源は主にブランデスの『露国印象記』とクロボトキンの『露西亜文学の理想と現実』の二つの著作であることを明らかにしている。⁶³ここから分かるのは、周作人が日本留学時代に読んだこの二つの「19世紀のロシア文学を語るよい参考書」はすでに自分のロシア文学を研究する基礎資料となっている。

3. 明治期におけるレールモントフの翻訳と周樹人

「明治翻訳文学年表・レールモントフ編」によると、明治24年（1891）から明治40年（1907）まで15篇のレールモントフの作品が日本語に翻訳された。それぞれ、嵯峨の屋お室訳の「カザツクの児守歌」（明治24年12月、「コサックの子守歌」）、小金井喜美子訳の「浴泉記」（明治25年10月、「公爵令嬢メリー」、『現代の英雄』第二部）、森鷗外訳の「ぬけうり」（明治25年12月、「タマニ」、『現代の英雄』第二部）、影竹子訳の「アシュク、ケリブ」（明治28年12月、「アシク・ケリブ」）、足立北鷗訳の「土耳其奇談葡萄棚」（明治35年9月、「アシク・ケリブ」）、加島汀月訳の「ソネット」（明治36年2月、「十四行詩」）、ゆき子訳の「宿営の二夜」（明治36年11月、「タマニ」、『現代の英雄』第二部）、加島汀月訳の「カフカスの囚はれ人」（明治37年2月、「カフカスのとりこ」）、嵯峨の屋御室訳の「当代の露西亜人」（明治37年4月、「ベーラ」、『現代の英雄』第一部）、昇曙夢訳の「ポロディノの激戦」（明治37年5月、「ボロジノの戦い」）、大島蘭秀訳の「宿命信者」（明治38年7月、「運命論者」、『現代の英雄』第二部）、嵯峨の屋お室訳の「東方物語」（明治38年10月、「アシク・ケリブ」）、栗

栗林枯村訳の「宿命論者」（明治38年12月、「運命論者」、『現代の英雄』第二部）、栗林枯村訳の「肖像画」（明治39年4月）、森鷗外訳の「宿命論者」（明治40年2月、「運命論者」、『現代の英雄』第二部）である。⁶⁴また、これ以外に、学者の調査によると、嵯峨の屋御室訳の「当代の露西亜人」はその後、呉禱により中国語に翻訳され、小説「銀鈕碑」を発表する。⁶⁵これははじめて中国語に翻訳されたレールモントフの小説である。⁶⁶

以上が確認された明治期に日本語に翻訳された15部のレールモントフの小説で、レールモントフの代表作『現代の英雄』が最も多く翻訳された作品で、7作品にも及んでいる。小金井喜美子（1871-1956）、森鷗外、ゆき子、嵯峨の屋お室、大島蘭秀、栗林枯村らの6人の翻訳者は『現代の英雄』の全部の内容を日本語に翻訳するのではなく、その一部分を翻訳している。森鷗外とゆき子は「現代の英雄」の「タマニ」を翻訳し、大島蘭秀、栗林枯村、森鷗外は「現代の英雄」の「宿命論者」の部分を翻訳している。森鷗外はこの作品をかなり重視しており、「現代の英雄」の中の二つの部分を翻訳しており、妹の小金井喜美子も明治25年（1892）10月から明治27年（1894）6月まで、雑誌『志がらみ草紙』に翻訳小説「浴泉記」を連載している。⁶⁷

明治期に日本語に翻訳された『現代の英雄』はレールモントフの作品の半分近くを占めているので、周樹人は日本留学時期もこの作品に注目しており、彼は「摩羅詩力説」でこの小説の名前を「並世英雄伝」と呼び、『域外小説集』でもこの作品を翻訳する計画があるが、この作品の全文を翻訳するつもりなのか、それともその一部なのかはまだ明らかになっていない。周樹人が所蔵する栗林枯村が翻訳する「宿命論者」も、まさに『現代の英雄』の最後の部分である。周樹人が日本留学時期に、最初に明治の翻訳者たちが翻訳した『現代の英雄』の内容を読んだ。留学後もこの作品の日本語訳に関心を持っていることが確認される。『魯迅目睹書目 日本書之部』によると、周樹人の蔵書には、大正9年（1920）の高坂義之が翻訳する『現代の英雄』と昭和3年（1928）の中村白葉が翻訳する『現代のヒーロー』がある。⁶⁸魯迅は後にまた友人に頼んで自分の収集したドイツの訳本『現代の英

雄』を馮至（1905-1993）に転送して、馮至がこの本を翻訳することができることを望んでいる。⁶⁹以上の史実を通して、魯迅が小説『現代の英雄』を非常に重視していることが明らかになる。

もう一つ注目すべき翻訳作品は嵯峨の屋お室（1863-1947）が翻訳する「東方物語」である。「東方物語」は明治38年（1905）10月に雑誌『文芸倶楽部』に掲載されたが、この作品は嵯峨の屋御室が翻訳する前に二つの訳本が発表された。明治28年（1895）10月に影竹子は雑誌『裏錦』に「アシュク、ケリブ」を発表し、明治35年（1902）に足立北鷗は『読売新聞』9月14日、9月21日、9月28日に発表している。この作品はレールモントフがコーカサスに追放された時に作られた作品で、トルコでは誰もが知っている童話である。訳者の嵯峨の屋御室は明治期で重要なロシア文学の紹介者で、周樹人は日本留学時期に少なくとも彼の手によって翻訳された3篇の小説を集めていた。嵯峨の屋御室の生涯について以下のように述べておく。嵯峨之屋御室の本名矢崎鎮三郎、別号は嵯峨之山人、潮外、探美などである。東京外国語学校露語科卒業した。在学中、下級の長谷川辰之助と知り合い、また共立学舎の英学者振八の知遇を得て、感化を受けた。二葉亭四迷に小説家を勧められ、「初恋」、「野末の菊」などの多くの小説とロシア文学の翻訳小説を発表した。⁷⁰また、嵯峨の屋御室は「文学者としての前半生」という回想文で自分が在学中でロシア文学に接する様子について、次のように語っている。

毎日其書籍室へ通ひました、ツルゲーネフ、プーシキン、レールモントフ、ゴーゴリなどの作に親しく接近することが出来又後になって、ツルゲーネフの諸作を翻訳致しましたのも、皆此商業の書籍室で致しましたのです。⁷¹

（嵯峨の屋御室、「文学者としての前半生」）

以上の調査からわかるように、周樹人は日本留学時代にレールモントフの愛国観に感心するだけでなく、レールモントフの文学創作にも注目している。「摩羅詩力説」で紹介されるレールモントフの詩のほか、レールモントフの代表作『現代の英雄』も周樹人が重視している作品である。

第三章 社会と人生の暗黒面を描写する小説家

明治期におけるゴーゴリの翻訳・紹介と周樹人

はじめに

ゴーゴリは魯迅の文学創作に影響を与えた作家であり、日本留学時期において周樹人が愛読したロシア文学者の一人である。周樹人は「摩羅詩力説」におけるゴーゴリを「社会人生の暗黒面の描写によって著名である」と評価している。また、明治期の文芸雑誌に掲載する3篇のゴーゴリの小説を切り取って保存し、『小説訳叢』にスクラップしている。留学後、周樹人は依然としてゴーゴリ文学に関する著作を多く購入し、留学時期から注目するゴーゴリ文学に関心を抱き続けており、晩年まで、ゴーゴリの長篇小説『死せる魂』（1841）を翻訳している。本論は現在まで殆ど論じていない日本留学時期におけるゴーゴリの受容を考察する。明治期におけるゴーゴリ文学の翻訳・紹介の考察を通して、周樹人とゴーゴリ文学の関わりに着目し、日本留学時期の周樹人のゴーゴリ観を考察する。また、『小説訳叢』における「外套」とのち魯迅の小説「孔乙己」の関連性を検討する。

第一節 魯迅とゴーゴリ

ゴーゴリ⁷²は魯迅が愛したロシアの文学者である。魯迅は何度も自分の文学創作に対するゴーゴリの影響について言及していた。「私はどのようにして、小説を書き始めたか」という文章で、若い頃ゴーゴリは最も愛読した作者の一人であったと述べ、⁷³「『中国新文学大系』「小説二集」序」で、自分が「狂人日記」を創作した時にゴーゴリの同名作品の影響と啓発を受けたことに言及している。⁷⁴また、魯迅本人も積極的にゴーゴリの文学作品を中国に紹介し、翻訳することに力を尽くしている。1934年9月、魯迅はゴーゴリの中篇小説「鼻」を翻訳し、同月、雑誌『訳文』に立野信之（1903-1971）の評論文をもとに翻訳した「ゴーゴリ私観」（「果戈理私観」）を発表した。1935年には、魯迅はドイツ語訳本と日本語訳本をもとにゴーゴリの長篇小説『死せる魂』を翻訳した。魯迅本人はゴーゴリを

重視している以外、また韋素園（1902-1932）、孟十還（1908-?）などの若い翻訳者にゴーゴリの作品を翻訳するように激励している。以上の整理を通して、魯迅は中国のゴーゴリ受容史における重要な役割を果たしたことがわかった。⁷⁵

魯迅が書き残したゴーゴリに関するテキストを通じて、ゴーゴリの諷刺方法と「ほとんど何事も起こらなかった悲劇」（涙を含んで微笑）は魯迅に深い印象を残していることが明らかになった。ゴーゴリの諷刺手法について、魯迅は「諷刺について」と「「諷刺」とは何か」の二つの文章で言及している。「諷刺について」で、魯迅はゴーゴリの作品を例として外国作品の諷刺を述べている。「その「外套」（韋素園の訳、『未名叢刊』に収められる）の大小の役人や、「鼻」（許遐の訳、『訳文』誌に発表）に出てくる紳士、医師、閑人などという典型は、いまの中国でもやはり見かけられる」。この文章の中で、魯迅は諷刺作品が大体写実的ものだと考えている。⁷⁶「「諷刺」とは何か」の中でも魯迅はゴーゴリの諷刺の才能を称賛し、普通の方法でも、「ゴーゴリの手にかかったなら、きっと出色の諷刺作品になったろうと思う」と述べている。⁷⁷また、魯迅は「ほとんど何事も起こらなかった悲劇」の中で、自分が『死せる魂』を翻訳することを通して、ゴーゴリ文学の特徴を次のようにまとめて語っている。「これらの、ごく日常的な、あるいはまったく何事も起こらなかった悲劇は、声なき言葉と同じく、詩人がその形象を描き出さなかったなら、なかなか気が付かない。しかし、人々は、英雄的な、特異な悲劇に滅亡する者は少ないのである。ごく日常的な、あるいは、まったく何事も起こらなかったような悲劇に生命をすりへらされる者が多い」⁷⁸。いうまでもなく、魯迅が把握したゴーゴリ文学という二つの重要な要素は何れも本人の文学創作に深く影響している。また、自分の翻訳したゴーゴリの小説「鼻」と「死せる魂」の「訳者附記」を執筆する以外、何度もゴーゴリの演劇作品「検察官」に言及していた。

疑いなく、魯迅は日本留学時期にはじめてゴーゴリの作品を読んだのである。魯迅が最初にゴーゴリに言及したテキストは留日時期に執筆した「摩羅詩力説」である。この文章

で魯迅はゴーゴリの紹介を展開していないが、ゴーゴリの名前は二度に言及した。「社会と人生の暗黒面を描写によって著名である」、「秘められた涙の痕と悲しみの色とで、ロシアの人々を奮い起たせた。彼を、カーライルの称賛崇拜せる人物イギリスのシェークスピア (W. Shakespeare) になぞらえるものもある」と評価している。この評価を通して、当時の周樹人からみると、ゴーゴリは「秘められた涙の痕と悲しみの色」で「社会と人生の暗黒面を描写」する小説家として位置づけられることがわかった。

第二節 先行研究

「魯迅とゴーゴリ」の関係についての研究は、現在まで魯迅と外国の作家、魯迅とロシアの作家関係における重要な課題である。1941年1月には、文献出版社から出版した林林の『崇高的枕蓐』の中に「魯迅とゴーゴリ」（「魯迅和果戈理」）という文章が収められた。著者はゴーリキーより魯迅の文学創作はゴーゴリの影響を受けていると推測した。⁷⁹その後、竹内実、⁸⁰韓長経、⁸¹王富仁、⁸²彭定安、⁸³寇志明、⁸⁴孫郁⁸⁵などの研究者も「魯迅とゴーゴリの関係」について研究論文を発表した。以上の先行研究を通して、「魯迅とゴーゴリ」という課題の研究史において、研究者らは以下の四つの問題に注目していることが明らかになった。(1) 魯迅が日本留学時期に最初にゴーゴリの作品に注目して読んだこと。(2) 魯迅本人の回想に基づいて、二つの小説「狂人日記」の比較研究を行うこと。(3) 魯迅が読んだゴーゴリの作品に基づいて、二人の作家の他の作品と思想を比較研究すること。(4) 魯迅が晩年に翻訳したゴーゴリの作品「死せる魂」、「鼻」などを研究することである。しかしながら、先行研究史においては、魯迅が日本留学時期に、ゴーゴリの作品を読むルートについての具体的な研究に欠けていると考える。管見の限りでは、唯一李冬木の論文「「狂人」の越境の旅：周樹人と「狂人」の出会いから彼の「狂人日記」まで」が明治期におけるゴーゴリの紹介と評論を整理していた。⁸⁶筆者は、日本留学時期の周樹人が、ゴーゴリに関する作品や評論をどのように接して読んでいたかを明らかにしないと、

周樹人がなぜゴーゴリを自分の最も好んだ作家の一人と見なしているのかを明らかにするのは困難だと考えている。したがって、本論では李冬木の研究に基づいて、明治期におけるゴーゴリの受容史を重点的に整理し、周氏兄弟の文章に基づいて周樹人が日本留学時期に見たのはどのような「ゴーゴリ」であったのかを分析し、その上でさらにゴーゴリの作品が魯迅の創作にどのように影響していたのかを考察したい。

また、日本留学時期の周樹人とゴーゴリの接点については、上記の「摩羅詩力説」で二箇所と言及した以外、もう一つの周樹人が明治の文芸雑誌を通じてゴーゴリを読むルートを提供している。姚錫佩、陳漱渝などの研究により、魯迅が日本留学時期において少なくとも以下の3篇のゴーゴリの小説を日本の雑誌から閲読していたことがわかる。

- ①「狂人日記」、二葉亭主人訳、『趣味』第2巻第3-5号、明治40年（1907）3月-5月。
- ②「むかしの人」、二葉亭主人訳、『早稲田文学』第5号、明治39年（1906）5月1日。
- ③「外套」、西本翠蔭訳、『文芸倶楽部』第15巻第8号、明治42年（1909）6月1日。⁸⁷

周作人は周樹人が日本留学時期に、ゴーゴリに対する関心を次のように回想している。

そして彼が最も影響を受けたのは実はゴーゴリ（N. Gogol）だった。もっとも『死せる魂』はまだ二の次で、第一に重要なのはやはり短編小説の『狂人日記』『イワン・イワーイキッチとイワン・ニキフォロキッチの喧嘩』喜劇『検察官』等であった。⁸⁸

周作人の回想文には二つの点が注目に値する。一つ目には、周作人は魯迅が当時最も重視していたのはゴーゴリの短篇小説だと指摘した。二つ目に、周作人が『狂人日記』、『イワン・イワーイキッチとイワン・ニキフォロキッチの喧嘩』、喜劇『検察官』などの具体的な小説の題目を指摘したこと。また、周作人はもう一つの回想文「魯迅の文学修養」（「魯迅的文学修養」、1956）でも、魯迅の創作に影響を与えた外国人の作家は、「第一はもちろんロシアのゴーゴリである」⁸⁹と述べている。それだけではなく、周作人は「外国小説」

(1944)の中で、周作人本人にとっては「ロシアのゴーゴリとポーランドのシェンキェヴィッチは、十年読まないことがあるが、心の中では忘れられない」⁹⁰と回想している。また、周作人は「ロシアの大作家」（「俄国大作家」、1945）の中で、自分が最初に読んだゴーゴリに関する著作を次のように回想している。

本棚には一冊の紫色の表紙の書籍がある。書名は『ロシアの大作家』。これは私が最初に東京に来たときに購入したもので、1906年の冬であった。当時私はまだ日本語を話せず、この本の定価は2.5円である。私は10円の紙幣を支払ったが、丸善書店の小僧は5円だと思い、2.5円だけを返してくれた。私は日本語でやりとりすることができないので、損をして帰るしかなかった。原作の著者はフランスの「迭布」、イギリスの「陀耳」が注釈を加えており、1886年にアメリカで出版している。「陀耳」はまたトルストイの小説「コサック」の訳者で、私より一歳下である。このように言ってもいい本とは限らないが、今見たらまた引っ張り出してみたくなる。この書面と様式、レイアウトも全部好きで、そして、彼は最初にこの三大作家について教えてくれた。すなわちゴーゴリ、ツルゲーネフとトルストイのことである。私にとって忘れられないのは、とりわけゴーゴリで、ゴーゴリの著作といえば、「死せる魂」、「タラス・ブーリバ」、「ディカーニカ近郊夜話」などがある。その中の一節を思い出すと、何年か前においしいお菓子を食べたような味で、記憶の中でいつまでも消えない。この老先生の苦笑が一番忘れられない。特に彼が発狂して死んだことを覚えている。だからこの笑いはもっと面白い。⁹¹

（周作人「俄国大作家」、筆者訳）

上述から、周作人もゴーゴリを大変好み、ゴーゴリは周氏兄弟が日本留学時期に共同で関心を持って読んだ作家であることが明らかになった。また、周作人は自分の論文「哀弦篇」（1908）の中で簡単にゴーゴリの生涯と代表作も紹介している。⁹²現在わかっている資

料から判断すると、周氏兄弟は中国で最初にゴゴリに関心を持ち、その評論文の中でも早くゴゴリに言及した人である。

第三節 明治期におけるゴゴリの紹介と周樹人

ここで、ゴゴリについて簡単に紹介しておく。ゴゴリはロシアの小説家である。ウクライナの小地主の子として、ミルゴロドに生まれた。ネージンの中学校を卒業して、1828年にペテルブルグへ出た。内務省の下級官吏となった。1931年、『ディカニカ近郷夜話』を出版し、新進作家として認められた。⁹³秦野一宏の整理により、ゴゴリの名前は他の多くのロシアの作家と同様、明治20年代前半に日本に紹介された。⁹⁴最初にゴゴリ及びその作品を紹介したのは明治29年(1896)11月に西海枝静(1868-1939)が雑誌『江湖文学』に発表した「露国文豪ゴゴリの傑作レウヰゾルを読む」である。この文章では、自分がゴゴリの墓地に参拝した様子を紹介し、ゴゴリの生涯とその代表作「検閲官」を簡単に述べている。⁹⁵明治30年(1897)11月、彼はまた『帝国文学』に「露国文学と農民」を発表し、ゴゴリの作品「死せる魂」の粗筋を紹介している。⁹⁶明治30年(1897)、嵯峨之屋主人は「露国の天才プーシキンとゴゴリ」を発表し、ゴゴリとプーシキン、レールモントフは「露国文学界の三傑」と称し、「ゴゴリの滑稽は如何なる作を読むも、世を憂へ、国を慨し、民を愛し、人を憐む、涙漣々の文字でないものは有ません。彼は社会の實際生活を観察して、其社会の各階級に充満する不完全を見て、始め笑って亦直に泣きました」と述べている。また、嵯峨之屋主人はゴゴリの代表作「死せる魂」と「検閲官」を紹介している。⁹⁷この文章では、嵯峨之屋主人はゴゴリをロシアの天才詩人として扱い、プーシキンやレールモントフとともに日本文壇に紹介した。このようにロシアの三詩人を紹介する叙述様式は周樹人が「摩羅詩力説」第七章の冒頭でプーシキン、レールモントフ、ゴゴリを紹介した内容に似ている。明治30年(1897)5月、桂英子は雑誌『新小説』に

「露国の滑稽作家」を發表し、ゴーゴリはロシアの代表的な滑稽作家の一人であると述べている。それから、重点的にゴーゴリの作品『結婚』を紹介する。⁹⁸

明治20年代から明治30年代の初期にかけて、ゴーゴリの紹介は殆ど評論文にとどまり、まとまった紹介はまだなされていない。しかし30年代半ばに至り、24歳の昇曙夢は明治35年（1902）4月からニコライ正教神学校に所属する雑誌『使命』に前後12篇の長文「露国文豪ゴーゴリ」を掲載している。明治37年（1904）6月に春陽堂から著作として出版し、18章の内容から構成され、全面的にゴーゴリの生涯、創作、思想を紹介している。その中の4、5、6章及び11章「最後の傑作「死魂霊」」は専らゴーゴリの文学創作を紹介している。これは日本初のゴーゴリに関する著書だけでなく、また昇曙夢の最初の著作である。この著作が出版されてしばらく後、文壇では次のように評価されている。

本書は一面よりはゴーゴリの上に下したる秩然周到なる評論たるは無論、自づと露西亜文学の全盛時代と称せらるる所謂四十年代文学の潮勢を窺ふに足るべく、又一面よりは天才が辛酸、深刻を極めたる内部生活の崎嶇委曲を描ける伝記小説とも謂ひ得べき也。本書が情趣津々、読者をして倦ましめざる所以のもの実に茲に存ずるなり伝記文学の振はざる今日、本書の出づる誠に文壇の珍を称すべし。⁹⁹

李冬木はこの『露国文豪ゴーゴリ』には周樹人との三つの関連に注意する必要があると指摘した。第一に、作者の立言は、ロシア文学が紹介された時の本末転倒な不公平さを正すことにあり、これによりゴーゴリに対し、明確な文学の定位を与え、彼はプーシキンと同じようにロシア文学の「黄金時代」を代表し、最近のロシア文学の源泉であり、前提であり、基礎と巧妙の所在であるとした。次は「ゴーゴリ」に関するイメージを作ったことである。「天才」、「内心の生活」、「現代思潮の神髓」は、昇曙夢のゴーゴリ観を代表しているが、しかし彼はゴーゴリの「天才」のイメージを塑像すると同時に、この「天

才」が世間には許容されず、迫害を受けている側面を強調した。第三に、「外套」と「狂人日記」に関する紹介である。この両篇の作品は、二人の主人公が似通っており、「ペテルブルグに於ける中等社会の一面を写し」ていた。¹⁰⁰この指摘に基づいて、『露国文豪ゴーゴリ』はまた周樹人との一点の直接関連があると考えられる。周樹人は「摩羅詩力説」でゴーゴリの名前は二度に言及していた。第一章で「十九世紀前葉、はたしてゴーゴリ (N. Gogol) が現れ、秘められた涙の痕と悲しみの色とで、ロシアの人々を奮い立たせた。彼を、カーライルの称賛崇拜せる人物イギリスのシェークスピア (W. Shakespeare) になぞらえるものもある」と述べる。明らかに、周樹人がここでゴーゴリを絶賛するのはロシア人に影響力のある文豪であり、一般的な観点を引用している。ゴーゴリはイギリスの文豪シェークスピア (1564-1616) に匹敵すると言われている。しかしながら、この観点は周樹人がどこから引用したのか。次の昇曙夢の『露国文豪ゴーゴリ』の第一章「緒論」を見ていこう。「緒論」では以下のロシアの青年文学者二人の対話から始まった。

曾て露西亜に二人の青年文学者ありき。一日相共に古今東西の文学を評論し来りて遇々故国の事に及ぶや、其一人は曰く、『露西亜は文明の発達に於て西欧諸国に劣ること数歩、而して見よ、彼女は能くダンテ、セクスピアの如き偉大なる天才を産出し得るや否や』。他の一人答へて、『友よ、何れ夫れ故国を辱かしむるの甚しき、我ゴーゴリは將に露西亜のセクスピアに非ずや』と。言ひ終るや否や二人相顧みて思はず微笑したりと云ふ。¹⁰¹

この対話には「ゴーゴリは將に露西亜のセクスピアに非ずや」という表現が出ている。このテキストの対比を通して、周樹人が昇曙夢の『露国文豪ゴーゴリ』を読んだことが明らかになった。

この著作が出版した後も、昇曙夢は、ゴーゴリに関心を持ち続けていた。まず、昇曙夢は『露国文豪ゴーゴリ』を執筆したと同時に、ゴーゴリの「春の宵」、「生命」、「母の涙」などの3篇の作品を翻訳した。それから、彼は続けていくつかのゴーゴリに関する評論を発表した。例えば、昇曙夢は明治41年（1908）4月に雑誌『早稲田文学』に「露国の自然主義」を発表している。この文章ではロシア文学の自然主義を重点的に紹介し、当時日本文壇で流行していた自然主義文学の討論にロシア文学を取り入れることを目的としている。また、昇曙夢はこの文章でゴーゴリをロシアの自然主義文学の元祖にして、そしてゴーゴリの文学の中の「国民文学」と「国民性」の概念を提起している。

ゴーゴリの作物は皆な国民文学と云う事が出来る。何故ならば何れも国民性の活躍なる表現に富んで居るからだ。然し文藝上の国民性なるものは多くの人の考へて居る如く、作物の資格ではなくして、矢張自然主義の必然的条件として見るべきものである。元來文藝上の国民性なるものは其国民の性情、氣質、風俗、習慣等の真実なる表現に外ならない。而して是等のものは各国民独特の生活に於て現はさるるが故に、其生活を真実に写しきへすれば国民性は自づから其中に浮んで来る。夫故に国民性なるものは細心の研究も何も要ったものではない。作家は唯だ其国民の生活を忠実に観察する丈で充分である。¹⁰²

これは日本留学時代に国民性の問題に関心を持っている周樹人を引きつける可能性が高いと考えている。この文章は間接的に周樹人が日本留学時代に、ゴーゴリを愛した理由にも答えているのではないかと考える。

明治42年（1909）、ゴーゴリの生誕百年にあたり、多くの雑誌がゴーゴリの記念文章を掲載し、日本社会の注目を集めている。筆者がまとめた範囲では、明治42年（1909）3月から明治42年5月にかけて、次の11篇の記念文が掲載されている。

- ①加島汀月「ゴーゴリ祭」、『国民新聞』、明治42年3月31日、明治42年4月6日。
- ②昇曙夢「煩悶の人ゴーゴリ（近代露文学の特徴）」、『読売新聞』明治42年4月8日。
- ③草野柴二「百年祭に当れるゴオゴリ」、『東京二六新聞』、明治42年4月18日、明治42年4月19日、明治42年4月21日。
- ④「露国文壇消息<ゴーゴリ祭景況について>」、『東京二六新聞』、明治42年4月26日。
- ⑤「ゴーゴリ誕生百年祭」、『早稲田文学』42号、明治42年5月。
- ⑥露生、「ゴーゴリ（百年祭の文豪）」、『日本及日本人』第508号、明治42年5月1日。
- ⑦「杜翁のゴーゴリ論」、『東京二六新聞』、明治42年5月3日。
- ⑧「ゴーゴリ祭」、『学燈』13巻5号、明治42年5月。
- ⑨「ゴーゴリの百年祭」、『新小説』14巻5号、明治42年5月。
- ⑩曙夢「露国写実主義の創始者（ゴーゴリの誕辰百回紀に際して）」、『太陽』15巻6号、明治42年5月。
- ⑪ランデス、岡村千秋訳「ゴールの印象」、『文章世界』4巻6号、明治42年5月。¹⁰³

ゴーゴリの生誕百年の時に、これほど多くの雑誌や新聞にゴーゴリの記念文章が掲載されている。これは、ゴーゴリが日本文壇に与えた影響が当時の人々の心に深く浸透したと言わざるを得ない。この11篇の中でも特に注目すべきことは、昇曙夢がゴーゴリの生誕百年にあたり、『読売新聞』に掲載された「煩悶の人ゴーゴリ（近代露文学の特徴）」である。この文章では、昇曙夢がゴーゴリの苦悩と発狂の原因を重点的に紹介し、「ゴーゴリの煩悶も矢張個人的憂鬱質とか精神病とか云ふ狭い病理学的範囲を脱して、最も広い時代精神とか社会の気持ちと云ふ側に移って居る」¹⁰⁴と述べている。魯迅の最初の白話文小説「狂人日記」の「狂人」のイメージは、ゴーゴリの小説「狂人日記」の九等文官「ポプリシチン」の影響を受けている。この点はすでに多くの先行研究により指摘された。しかしながら、狂った人の「狂人」のイメージが「狂人」のゴーゴリとその背後にある時代精神の影

響を受けている可能性があるかどうかは、殆ど論じられていないが、周作人はかつて魯迅の「狂人日記」を評論した二つの文章の中で、ゴーゴリ本人も精神病の経験があったことに言及している。¹⁰⁵そのため、魯迅の「狂人日記」における狂人のイメージの由来は、ゴーゴリなどのロシアの作家の「狂人」だけではなく、ゴーゴリなどの狂気の体験をしたロシアの作家や、その背後にある「時代精神」にも遡ると考えている。ちなみに、昇曙夢は、本人もゴーゴリという狂気の体験に影響を受けたことがあった。本人は次のように語っている。

私が当時のゴーゴリに捧げた崇拜と情熱とは今から追懐すると怖ろしい程であった。為には幾度か神経衰弱に囚はれて不眠の夜を苦しんだらう。晩年のゴーゴリが狂ふがままに自らの原稿を悉く積んで一片の煙と焼き拂ひ了る辺りを書いた時分など、自分迄妙な気になって無断寄宿舎を鎌倉へと飛出して周囲の人を騒がした事もあった。¹⁰⁶

昇曙夢と同じように、ゴーゴリの「狂人日記」を翻訳する前後に、二葉亭四迷は狂気の体験を強調した。中村星湖（1884-1974）は「二葉亭四迷論」の中で次のように述べられている。

青年時代に呉博士の『精神啓微』や『精神病者の書態』を愛読して親しく博士を訪うたと言ふのは単に人間の心理研究の為であったかも知れず、また晩年撰んでゴーゴリの『狂人日記』やゴリキイの『二狂人』を訳して、

「狂人を書いてはさすがに自ら狂しただけに、ゴリキイよりはゴーゴリの方がすぐれて居る」

と言ったのも、一時の興であったかも知れぬ。が然し、其間の消息を模索して、私は二葉亭氏が自らの神経質を知って居たやうに考へられる。『狂人日記』を訳すころ

「近頃狂人になりさうな気がしてならない」

と誰やりに話したさうである。それは一種のヒポコンデリイでもあらうが、ヒポコンデリイにも神経質の人でなければ成るわけがない。¹⁰⁷

ここから分かるように、ゴーゴリ本人の狂気の経歴とその狂人像は、日本文壇に作品を紹介し、翻訳した二葉亭四迷と昇曙夢に影響を及ぼした。この二人の翻訳者の評論と翻訳により、ゴーゴリの狂気の経験と芸術創作中の狂人像はまたロシア文学を求める周樹人にも伝えている。

以上の調査により、明治20年代にゴーゴリが最初に日本に紹介され、明治30年代に初めてゴーゴリの伝記作品が出版されている。また明治40年代にゴーゴリの生誕百年にあたって、ゴーゴリの生涯と創作を大量に日本社会に紹介されている。ゴーゴリとその文学についての紹介はますます全面的になったばかりでなく、作家としてのゴーゴリも様々なイメージが作り出している。例えば「露国の天才」、「露国の滑稽作家」、「露西亜のセクスピア」、「国民性」、「国民文学」を表現する文学者、「煩悶の人」などの様々なゴーゴリ像は留学生の周樹人の周辺に存在している。

第四節 明治期におけるゴーゴリの翻訳と周樹人

ゴーゴリの作品が明治文壇で翻訳されたことについては、昇曙夢は「日本文学と露西亜文学」で次のように回想している。

上田敏（明治七-大正五）も文集『みをつくし』（明治三四年）の中にゴーゴリの『ウクライン五月の夜』を訳している外、ツルゲーネフ、ゴーリキイ、アンドレーエフ等の短編を、重訳ではあるが、得意の美文体で訳出している。もっともゴーゴリの作品は明治三〇年代に二葉亭訳の『肖像画』、『むかしのひと』、『狂人日記』が出ており、

古くは民友社時代に徳富蘆花がゴーゴリの代表作『タラス・ブーリバ』も『老武者』と題して訳出し、その後更に柴田流星が同じ作を『蛮勇』という標題で訳している。全集としては原語訳による『ゴーゴリ全集』が昭和九年にナウカ社から出版された。¹⁰⁸

昇曙夢はこの文章で、上田敏、二葉亭四迷、徳富蘆花(1868-1927)、柴田流星(1879-1913)などの四人のゴーゴリ作品の訳者に言及し、「五月の夜」、「肖像画」、「むかしのひと」、「狂人日記」、「タラス・ブーリバ」などの作品に触れた。「明治翻訳文学年表・ゴーゴリ編」によると、明治26年(1893)から明治44年(1911)までの18年間で21部のゴーゴリの作品が日本語に翻訳された。これは明治期における翻訳されたロシア文学の3%を占めている。¹⁰⁹それぞれ、明治26年上田敏訳の「ウクライナの夜」(「五月の夜(または水死女)」)、明治27年残月庵主人訳の「カザックの鉄騎」(「タラス・ブーリバ」)、明治28年徳富蘆花訳の「老武者」(「タラス・ブーリバ」)、明治29年残月庵主人訳の「弥生の夕」(「五月の夜(または水死女)」)、明治30年二葉亭四迷訳の「肖像画」(「肖像画」)、明治30年今野愚公訳の「結婚」(「結婚」)、明治32年今野愚公訳の「狂人日記」(「狂人日記」)、明治33年上田敏訳の「大野のたびね」(「タラス・ブーリバ」)、明治34年上田敏訳の「南露春宵」(「五月の夜(または水死女)」)、明治34年上田敏訳の「露西亜の大野」(「タラス・ブーリバ」)、明治36年昇曙夢訳の「春の宵」(「五月の夜(または水死女)」)、明治36年昇曙夢訳の「生命」(「アラベスキ」)、明治36年塚原渋柿、柴田流星訳の「蛮勇」(「タラス・ブーリバ」)、明治36年昇曙夢訳の「母の涙」(「タラス・ブーリバ」)、明治39年二葉亭四迷訳の「昔の人」(「むかし気質の地主」)、明治39年英蟬花訳の「ヅニエプル河」(「恐ろしき復讐」)、明治40年二葉亭四迷訳の「狂人日記」(「狂人日記」)、明治41年昇曙夢訳の「降誕」(「アラベスキ」)、明治42年西本翠蔭訳の「外套」(「外套」)、明治44年楠山正雄訳の「検察官」(「検察官」)、明治44年高須梅溪訳の「求婚」(「結婚」)である。

この18年間で「タラス・ブーリバ」、「五月の夜（または水死女）」、「狂人日記」などの作品が重訳されている。ゴーゴリの明治期の翻訳について、秦野一宏は訳本の検証を通して、次のように指摘した。「上田（敏）はゴーゴリから＜美文＞だけを切りとることで、ゴーゴリを歪めて移植してしまったのだ。明治28年の徳富蘆花訳「老武者」（『タラス・ブーリバ』）、36年の昇曙夢訳「春の宵」（『五月の夜』）、39年の英蟬花訳「ゾニエプル河」（『恐ろしき復讐』）なども、上田訳と同種の歪みをもっている。このような中であって、二葉亭四迷の存在は特異である」¹¹⁰。ここで、訳者二葉亭四迷について簡単に紹介しておく。二葉亭四迷の本名は長谷川辰之助である。日本近代の小説家、翻訳家である。東京外国語学校露語部を卒業し、1899年任東京外国語学校の教授に就任した。代表作は小説『浮雲』、『平凡』、『其面影』等である。日本文壇にツルゲーネフ、トルストイ、ゴーゴリ、ゴーリキー、ガルシン、アンドレーエフ等のロシアの文学者を紹介し、日本近代文学の発展に大きな影響を与えた。¹¹¹周樹人は日本留学時期から二葉亭四迷の作品に注目し、後に博文館から出版する『二葉亭全集』（坪内雄藏、内田貢編、1926年11月-1927年6月、東京朝日出版社）を購入している。¹¹²魯迅と二葉亭四迷の関係について多くの先行研究でも考察を行っている。¹¹³二葉亭四迷が翻訳した「狂人日記」は今野愚公の誤訳を訂正し、文調にも細やかな注意が払われており、徹底的な俗語化を行っていたが、¹¹⁴秦野一宏は「「狂人日記」で二葉亭が採用したのは、東京方言をベースにした都会の、下品でぞんざいな言葉使いである」、「式亭三馬あたりを参照したと思われる俗な言い回しが、至るところにちりばめられているのも特徴的だ」¹¹⁵と述べている。また、秦野一宏は二葉亭四迷訳の「むかしのひと」に対しての考察も行っている。考察を通して、彼は次の結論を出している。「引用部分からも察することができるが、原文では老地主夫婦の名が執拗に繰り返されている。具体的にいえば、アフナーシー・イワーノヴィチが69回、プリヘーリヤ・イワーノヴナが77回用いられている。二葉亭は最初の紹介を除いて、それらをすべて削除してしまった。そしてその代わりに、「お爺さん」を53回、「お婆さん」を68回使用している、まさに

大改造だ」、「おそらく、二葉亭の脳裏にあったのは、われわれ日本人になじみ深い昔話のお爺さんとお婆さんのイメージだったのではないか」¹¹⁶。

二葉亭四迷は「余が翻訳の標準」で自分の翻訳観についてこう語っている。「文体は其の人の詩想と密着の関係を有し、文調は各自に異ってゐる。従つてこれを翻訳するに方つても或る一種の文体を以て何人にでも当て嵌める訳には行かぬ。ツルゲーネフはツルゲーネフ、ゴルキーはゴルキーと、各別にその詩想を会得して、厳しく云へば、行住座臥、心身を原作者の儘にして、忠実に其の詩想を移す位でなければならぬ」¹¹⁷。二葉亭四迷はここで「詩想」という概念を提起し、「忠実に其の詩想を移す」ことであると主張している。周作人は「ロシア語を学ぶ」の中で、二葉亭四迷の翻訳が「訳文の芸術性が高く、つまりはより日本化されていて、忠実度では劣る」と思い、「翻訳において依拠するところとはできない」¹¹⁸。しかしながら、秦野一宏の研究を通して、二葉亭四迷のゴーゴリ訳は確かに他の訳者より忠実であるが、訳文において「日本化される」要素が多いであることを明らかにしている。したがって、周樹人は二葉亭四迷訳のゴーゴリの「狂人日記」と「むかしのひと」を集めたが、この2篇の作品を翻訳する計画はなかった。

また、筆者の考察を通して、ゴーゴリの「狂人日記」の英語訳にも日本留学時期の周氏兄弟の周辺に存在している。周作人は「『域外小説集』——〈新生〉乙編」（1961）でこう語っている。

快適に住んでいる。部屋の南西の隅に置いてある机で、静かに何かをすることやちょっと翻訳することができる。未生に持って行かせたステプニャクの「一文銭」とクロボトキンの「西伯利亞紀行」は『民報』に掲載された。ステプニャクは有名なロシアの革命家である。この小説は自国で農民に遊説した時に作ったもので、地主、牧師が農民を搾取することがとても滑稽に描かれている。イギリスの文学者ヴォイニッチが編訳した

『ロシアのユーモア』（『俄国的詼諧』）に収録されている。彼女が有名な小説『あぶ』の作者であることも言及に値するものである。¹¹⁹

（周作人「『域外小説集』——〈新生〉乙編」、筆者訳）

周作人の回想文を通して、筆者は『あぶ』の作者ヴォイニッチ (Ethel Lilian Voynich、1864-1960) が編集する『ロシアのユーモア』の原本を確認している。原作名は The humour of Russia、1895 年 London、Walter Scott から出版している。ステプニャクはこの著作の序言を執筆している。この翻訳集は 19 篇のロシア小説を収録し、周作人が翻訳したステプニャクの「一文銭」 (The story of a kopeck) の底本を除いて、ゴーゴリ、ドストエフスキー、シチェドリソフ (1826-1889) などのロシア文学者の作品を収録している。ゴーゴリの「狂人日記」にも 1 篇のロシアの滑稽小説として収録される。そのため、ゴーゴリの「狂人日記」の英語訳にも日本留学時期の周氏兄弟の周辺に存在している。

周樹人が集めたもう一つのゴーゴリの小説は西本翠蔭の訳作「外套」である。訳者の西本翠蔭 (1882-1917) は早稲田大学英文科を卒業し、明治 39 年 (1906) 彩雲閣の創立に参加し、明治 40 年 (1907) より雑誌『趣味』の編集責任者を担当した。愛顧をうけている二葉亭四迷の翻訳や随筆を同誌に掲載するなど、文学雑誌としての性格を打出し、新文学の推進に貢献した。¹²⁰西本翠蔭の生涯を通して、彼は英語訳本によってゴーゴリの小説「外套」を翻訳し、かつゴーゴリの作品の翻訳に力を入れてきた二葉亭四迷の影響でこの小説を翻訳した可能性が高い。

「外套」と魯迅の文学創作の関連については、竹内好 (1910-1977) は最初に「第一は「孔乙己」である。魯迅の中で一番人に親しまれる作品である。やや誇張した筆致で描かれた愚直な人物の醸し出す哀愁と、短篇小説としての手法の綿密さによって、群を抜いている。

「葉」のアンドレエフ的に対してゴオゴリ的と称し得るもの」と指摘している。¹²¹韓長経は『魯迅とロシア古典文学』の中でも次のように指摘した。「「外套」と「孔乙己」の中の

小人物に対する同情、小説の深い調子はすべて一脈相通ずるところがある」¹²²。姜錚は「魯迅はどのようにゴーゴリを参考にしたのか」（「魯迅怎樣借鑒果戈理」）の中でも、「孔乙己」が明らかにゴーゴリの「外套」の影響を受けていることを指摘している。¹²³しかしながら、上記の先行研究では、日本語訳の「外套」が魯迅の創作に与えた影響については論じられていないが、本論は西本翠蔭が翻訳した「外套」の日本語訳本と「孔乙己」の小説のプロットを比較するつもりである。本論の重点は二つの小説の主人公の外貌、社会地位と職業、名前、遭遇と結末などの五つの方面の類似性から論証する。

一つ目は、二つの小説の主人公の外見を描く時にも似ているところがある。「外套」の主人公アカキの外見は次のように描かれている。

其男は一是は隠す訳にゆかぬ一頗る風采のあがらぬ、身長の低い薄痘痕の、髪のかちやけに、額の少し禿げあがった、双方のこめかみと頬とが皺くちやになった一店卸しはこれ位にして……¹²⁴

「孔乙己」で、主人公孔乙己外見は以下のように描写している。

孔乙己は立ち飲みのくせに長衣を着ているただ一人の人物だった。背ばかり高く、青白い顔をして、しわのあいだにいつも傷痕があった。ぼうぼうのごま塩のあごひげを生やしていた。着ていたのは長衣とはいっても、汚れていたしよれよれで、十年以上の繕いも洗いもしていないようだった。¹²⁵

つまり、この二人は比較的だらしのないイメージで、人物の外在イメージからこの二人の主人公の貧困を表現している。

二つ目は、孔乙己とアカキの社会地位と職業にも類似性がある。アカキは一人の「永久

の書記補」である。

所謂“永久の書記補”で一弱いものいぢめの例の悪い癖の新聞記者が愚弄物にする気の毒な人間の一人である。

彼はもう地位が上がらないので、いぢめの対象になったのである。孔乙己も「とうとう試験に受からず」、「秀才に片足もかからなかった」ので、同じくいぢめや嘲笑の対象にもなったのである。孔乙己も「字がうまかったので、人に書物の筆写をしてやっては、なんとか食いつないでいた」。

三つ目は二人の名前は類似性がある。アカキの名前は「お父さんはアカキだから、アカキと云ったら好いでせう」。孔乙己の名前も「姓が孔だったため、人が手習いの手本の「上大人孔乙己」というわかったようなわからぬような言葉のなかから取って、孔乙己というあだ名をつけた」。孔乙己、阿Q、祥林嫂などのような正式な名前がないことは、魯迅小説の人物の共通の特徴の一つとなっている。名前を勝手につけることは、更にこれらの小人物の低い社会の地位を現し、これもゴゴリの「外套」が魯迅の創作に対する啓発だかもしれない。

四つ目は二人の主人公の遭遇についてである。アカキと孔乙己は同じようによく周りの人々にいぢめられた。アカキの場合は次のようである。

若い同僚は何しろ口の悪い輩ばかりだから、宜い玩弄物のつもりで嘲笑かす。目前で彼の生活向の事から、七十何歳になる下宿の主婦の事を見て来たやうに噂する。どうもアカキは主婦と怪しいやうだと云って、彼の所へ行って、いつ主婦と華燭の典をお挙げなさると問う。そうかと思へば又頭の上へ紙片を振り撒いて雪が降って来たらしいと調戯ふ。

孔乙己もよくお客から「顔にまた新しい傷がふえたな」、「また人のものを盗んだな」、「どうして秀才に片足もかからなかったんだい」などの問題に聞かれて笑われた。

最後は二人の運命もよく似ていて、最終的には死に向かっている。また、主人公が似たような特徴を持っているほか、二つの作品は物語の発生場所と人物設定にも似ているところがある。例えば、日本語訳の「外套」は次のようにはじめられている。

露西亜の某省に……

省の名はお預りにして置いた方がよい。

小説の冒頭ではぼかした手法で小説の具体的な地名を省略し、「露西亜の某省」に取って代わり、「孔乙己」も同じように、具体的な地名を省略し、「魯鎮」を使っている。また、魯迅の他の作品にもよく「魯鎮」を使っており、このような文章の技巧はゴーゴリから来るかもしれない。また、「外套」には一人の「大人物」が設置されており、「孔乙己」には「丁举人」が設置されている。以上の考察を通して、日本語訳のゴーゴリの「外套」は人物設定、構造配置、創作技術などにおいても、「孔乙己」への影響は明らかである。

以上の先行研究やゴーゴリ文学が明治文壇で紹介され、翻訳されたことから、明治期の翻訳者がゴーゴリに対する集中に翻訳・紹介は留学生の周樹人を引きつけて、ゴーゴリに関心を持ち始めたことがわかった。とりわけ、昇曙夢の著作『露国文豪ゴーゴリ』の出版と二葉亭四迷などの翻訳作品は文芸運動をしている周樹人を引きつけ、後に創作に影響を与えたのである。また、明治期における「露国の天才」、「露国の滑稽作家」、「露西亜のセクスピア」、「国民性」、「国民文学」を表現する文学者、「煩悶の人」などの様々のゴーゴリ像を現し、とりわけ世間に許されず、迫害されて気が狂った天才作家の姿には、「苦笑」と「発狂死」の体験が周作人の長年の後も忘れられないが、いつもゴーゴリに注目していた

周樹人の心を打ったに違いない。周樹人は日本留学時代に日本語に翻訳されたゴーゴリの作品を読んだからこそ、ロシアの作家ゴーゴリが好きになり、生涯の創作と翻訳活動をゴーゴリと結んだと言えよう。

第四章 明治期に盛んに翻訳されたロシアの小説家

明治期におけるツルゲーネフの翻訳・紹介と周樹人

はじめに

ツルゲーネフは明治期に「わりに早くそしてやや多く紹介された」（周作人語）ロシアの文学者である。周氏兄弟は留学時期から日本語訳などの外国語訳のツルゲーネフの作品を集めており、その中の幾らかの小説も翻訳するつもりであった。本論では、周氏兄弟の回想に基づいて、明治期におけるツルゲーネフの翻訳・紹介と周樹人の関係を考察し、当時の周樹人とツルゲーネフの関連を検討する。とりわけ、『小説訳叢』と『域外小説集』におけるツルゲーネフの小説と明治期におけるツルゲーネフの翻訳の関わりを通して、留学時期の周樹人におけるツルゲーネフの受容を再考する。

第一節 魯迅とツルゲーネフ

魯迅はツルゲーネフ¹²⁶の作品を翻訳したことがない。魯迅の書き残したテキストの中では、ツルゲーネフに対する言及も極めて少ない。「天才の出るまえ」（1924）の中で、魯迅は「大勢の人が、トルストイやツルゲーネフやドストエフスキーの名は聞きあきています。でも、彼らの作品がどれだけ中国に訳されたでしょうか」¹²⁷と述べている。「即座支日記」の中で、魯迅はツルゲーネフの小説と「虚無主義者」の関係について、次のように述べている。「中国人は、以前、ロシアの「虚無党」という三字を聞いただけで肝をつぶして震え上がり、今のいわゆる「赤化」などより、もっとひどいものだった。が、実際には、そんな「党」はあるはずもない。ただ、「虚無主義者」、または「虚無思想家」というのはある。これはツルゲーネフ（I. Turgeniev）がつくり出した名で、神を信せず、宗教を信せず、一切の伝統と権威を否定して、自由意志にもとづいた生活への復帰をねがう人物をさして言ったものである」¹²⁸。魯迅は「『奔流』編校後記（一～十二）」（1928-1929）の中で、ツルゲーネフの有名な「人生をいかに観察したかを知ることができる」論文「Hamlet und

Don Quichotte」を紹介している。¹²⁹また、魯迅はかつて孫伏園（1894-1966）に対して、自分の小説「葉」はアンドレーエフの小説「歯痛」とツルゲーネフの作品「労働者と白き手の人」の影響を受けたと語った。¹³⁰上述のテキストを通して、魯迅は、ツルゲーネフが創立した「虚無思想」と論文「ハムレットとドン・キホーテ」に対して、より詳細な論述があり、中国におけるツルゲーネフの受容に非常に関心を持っていることがわかった。

魯迅は、日本留学時期にはじめてツルゲーネフの作品に触れており、以下の4篇の明治期に日本語に翻訳されたツルゲーネフの小説を集めた。

①「妖婦伝」、嵯峨の家お室訳、『新小説』第8年第3巻、明治36年3月。

②「水車小屋」、嵯峨の家お室訳、『新小説』第8年第10巻、明治36年9月。

③「くさ場」、昇曙夢訳、『新小説』第9年第10巻、明治37年10月。

④「森林」、長光迂人訳、『新古文林』第1巻第7号、明治38年10月。¹³¹

また、『域外小説集』では周氏兄弟がツルゲーネフの小説を翻訳する計画もあり、『域外小説集』の第一巻の予告にはツルゲーネフの小説「畢旬大野」、「猶太人」があり、『域外小説集』の第二巻の予告にはツルゲーネフの小説「猶太人」とツルゲーネフの「莓泉」がある。¹³²周作人も「知堂回想録 七八 翻訳小説（下）」においては、日本留学時期に触れたツルゲーネフの作品については、次のように述べている。

初めての出馬に成功して、200元を手に入れた。これはとても大きな数で、外国の本がたくさん買えるようである。お金がまだ届いていない前に、まず蔡谷清から百元を借りて、丸善書店に行って英訳のツルゲーネフ選集を購入した。全部で十五冊である。一冊に二、三枚のガラス板のイラストがある。価格は六十シリングだけで、日本円の三十元に相当し、本当に公正である。私たちはツルゲーネフに感心したが、どういうわけか、彼の小説を翻訳したことがなかった。感心のせいか、なかなか手が出せないだろう。¹³³

また、「魯迅について 其二」の中で、周作人はこのように回想している。

当時日本ではロシア文学の翻訳はまだ盛んでなく、わりに早くそしてやや多く紹介されたのはツルゲーネフぐらゐのものだった。私達も熱心に彼の作品を集めたが、それはただ珍重するだけで、別に翻訳する気はなかった。¹³⁴

周作人の回想を通して、当時の周氏兄弟は、日本の翻訳者の手によって大量に紹介されたツルゲーネフに対して、非常に注目していた。彼らはツルゲーネフの作品は翻訳していないが、ツルゲーネフ文学に関する資料をたくさん集めたことが明らかになった。また、姚錫佩の研究により、現存する魯迅蔵書の中に15部のドイツ語訳のツルゲーネフ著作がある。姚錫佩の推測では、この15部の著作は周樹人が日本留学時代に丸善書店を通じて購入したのかもしれない。¹³⁵

周樹人は日本留学時期の創作において、特にツルゲーネフに言及していないが、周作人は「ロシア革命と虚無主義の区別を論ずる」（「論俄国革命与虚無主義之別」）という文章の中で、ツルゲーネフの小説『父と子』に言及した。この文章は周作人がクロポトキン『ある革命家の手記』（『一个革命家的自伝』）から訳したものである。周作人はこの文章では重点的に、「有名な小説『父と子』のバサーロフの「虚無主義」の真相を解説し、「虚無党」の歪曲伝説について世間の信頼できないことを指摘している」と述べていた。また、魯迅は自分にこの文章を節訳して劉師培（1884-1919）に送って、そして『天義報』に発表するように伝えた。¹³⁶「魯迅とツルゲーネフ」に関する先行研究においては、姚錫佩の論文「蔵書から魯迅とツルゲーネフの文学淵源を見る」（「從蔵書看魯迅与屠格涅夫的文学淵源」）の中で、魯迅が所蔵するドイツ語訳本、日本語訳本のツルゲーネフの作品を整理した上で、ツルゲーネフ文学が魯迅の創作に対する影響を分析した。この論文では、重点的にツルゲーネフの小説「多余人日記」、講演「ハムレットとドンキホーテ」及び散

文詩と魯迅作品の関連を検討した。¹³⁷また、ツルゲーネフと魯迅の関係については、多くの先行研究が『散文詩』と『野草』の影響関係を考察した。例えば、秋吉収は「魯迅とツルゲーネフ」の中で魯迅の『野草』とツルゲーネフの『散文詩』との関係を整理した。¹³⁸

以上の整理を通して、周氏兄弟は、日本留学時期に多くのツルゲーネフの作品を集めたことと推測することができる。本論では、日本留学時期の周氏兄弟の周辺のツルゲーネフを中心に、周氏兄弟が接触する可能性のあるツルゲーネフ文学に関する資料を考察する。

第二節 明治期におけるツルゲーネフの紹介と周樹人

まず、ここで、ツルゲーネフについて簡単に紹介しておく。ツルゲーネフはロシアの作家である。貴族の家柄で騎兵大佐の子としてオリョールに生まれた。父は破産したが、広大な領地と農奴を持つ母の下で育てられた。少年時代は、多くの家庭教師がつけられて教育を受けた。1827年、一家は子の教育のためにモスクワに移住した。ペテルブルグ大学を卒業したのち、ベルリン大学に遊学した。ツルゲーネフを有名にしたのは、『獵人日記』であり、その後知識人階級の社会的役割を自覚し、多くの作品を発表した。晩年は、パリで生活した。¹³⁹ツルゲーネフは最初に日本文壇に紹介されたロシアの作家の一人で、日本の近代文学に大きな影響を与えた外国の作家の一人である。ツルゲーネフの文学は日本近代文学に対する影響関係について、以下の代表研究がある。木村毅「ツルゲエネフと日本文壇」（『砂浜散策』、信正社、1936年）、昇曙夢「日本文学と露西亜文学」（『比較文学——日本文学を中心として』、矢島書房、1953年10月）、安田保雄「ツルゲーネフ」（福田光治編『欧米作家と日本近代文学 第三巻 ロシア・北欧・南欧篇』、教育出版センター、1976年1月）等である。その中で、昇曙夢は「日本文学と露西亜文学」の中で、最初にツルゲーネフの受容と明治初期の自由民権運動の関連について、次のように述べている。

ツルゲーネフは周知の如く、ロシヤで始めてニヒリスト（虚無主義者）という語を小説『父と子』の中に使ったばかりでなく、虚無党の運動を二、三の作品に取扱った作家で、晩年をパリで送り、一八八三年（明治十六年）に同地で客死した。その頃日本ではちょうど国会開設の大詔が降って、明治十四年を中心として、その前から自由党の活躍が目覚ましく、自由民権の運動が盛んで、その志士の中にはロシヤの虚無党の勇敢な行動に共鳴する者もあって、その関係から、この一派はパリの新聞を通して、ツルゲーネフを亡命中のロシヤ虚無党の大將とでも思ったらしく、お蔭でツルゲーネフの名は大いに興味を惹いたというわけである。降って明治十四年・五年頃には虚無党に関する文献が五六種を出て、それらの書にはツルゲーネフのこと、殊に『父と子』の主人公バザーロフの思想がやや詳しく紹介されているので、それが当時的一部青年の好奇心を唆ったのである。この風潮に刺戟されたのか、わが国におけるロシヤ文学紹介の先駆者二葉亭四迷も明治一九年には『通俗虚無党形気』という標題で『父と子』の翻訳をしかけているが、これは未完訳のまま発表されずに終わった。¹⁴⁰

昇曙夢の回想で、ツルゲーネフの作品『父と子』では初めてニヒリスト（虚無主義者）という言葉が使われており、また、ツルゲーネフの作品には「虚無党」という部分もあるので、自由民権運動をしている日本の自由党人は、ロシアの虚無党の動きに注目し、そのためツルゲーネフも当時の日本社会の各界の注意を受け始めた。虚無主義や虚無党などの概念が日本社会に紹介されるにつれて、虚無党と関連した多くの文学作品が日本文壇に翻訳されるようになった。例えば、川島忠之助訳の『虚無党退治奇談』（1882）、宮崎夢柳訳の『虚無党実伝記 鬼啾啾』（1885）などの作品である。その後、この翻訳の風潮にも清末の文壇にも影響を与えており、李艶麗の統計により、1904年から1912年まで、14部の虚無党を題材にした小説が中国語に翻訳された。¹⁴¹魯迅は後に清末時期の外国文学の翻訳状況を回想した時に、ロシア文学について次のように語っている。

ロシア文学については、いささかも知ることがなかった。——ただし、自分の内心ではわかっていたとしても、我々には教えてくれなかった、「先覚者」である二、三の先生方は、もちろん例外である。しかし、べつの面においては、すでに共感するところがあったのである。当時、比較的革命的であった青年で、ロシアの青年が革命的で、暗殺の名手であることを知らないものがあつたらうか。特に忘れられないのは、ソフィアである、半ば以上は、彼女が美しい娘であつたことによるとはいへ。現在の国産の作品に、よく「ソフィ」と行った名前がでてくるが、その淵源はここにある。¹⁴²

『日本及日本人』第508号(1909年5月1日)に掲載された最初に周氏兄弟が文芸運動に従事した記録を紹介する記事も「一般清国学生の好んで読むのは、露国の革命的虚無的作物で、続いては独逸、波蘭あたりのもの、単独な佛蘭西物などは、餘り持て囃すされぬさうぢや」と記している。¹⁴³疑いなく、周樹人は当時多くの虚無党を題材にした作品に触れただけでなく、虚無党と虚無主義の区別を明らかにするために、英語を理解できる周作人に「ロシア革命と虚無主義の区別を論ずる」という文章の翻訳を頼んだことである。また、1926年に執筆する「即座支日記」の中で、虚無党とツルゲーネフの小説の中での「虚無主義」の区別を述べていた。

1888年、二葉亭四迷はツルゲーネフの小説「あひびき」と「めぐりあひ」を翻訳した。発表後まもなく、この二つの訳作は当時の明治文壇に大きな影響を与えた。昇曙夢の回想によると、この影響は主に二つの面に現れている。一つ目は言文一致の文体への影響である。「もし『浮雲』を日本における言文一致小説の最初の模範だったとすれば、『あひびき』や『めぐりあひ』は当時の翻訳文体の殻を打破って、新しい翻訳小説の先縦を示したものと言えよう」¹⁴⁴。もう一つは明治文壇の青年作家への影響である。「当時の青年で、『あひびき』や『めぐりあひ』によって、始めて新鮮な西欧小説の微妙な自然描写に接して、

崇高なる文学の意義を了解し、進んで新文学の開拓を志すに至ったものは決して少くなかった。独歩の『武蔵野』、蘆花の『自然と人生』、藤村や花袋の小品等何れもその現れと見るべきものであろう¹⁴⁵。こうした回想によると、国木田独歩（1871-1908）は明らかにツルゲーネフの文学から影響を受けた明治の青年作家の一人である。周氏兄弟が共訳する『日本現代小説集』（1923）には、国木田独歩の小説「少年の悲哀」と「巡查」が収録されており、国木田独歩を紹介する「作家紹介」の中で「彼の芸術はツルゲーネフ (Turgenniev) を師とする」¹⁴⁶と言及されている。

「あひびき」と「めぐりあひ」の二つの訳作が発表された後、明治文壇はツルゲーネフの作品の翻訳ブームを迎えただけでなく、ツルゲーネフの生涯と文学創作に対する評論文も多く登場した。例えば、花袋生の「文豪ツルゲーネフ」（『太陽』2巻21号、22号、明治29年10月、11月）、西海枝静の「ツルゲーネフの『煙』」（『帝国文学』3巻2号、明治30年2月）、曙夢生の「史伝 ツルゲネフ逸伝」（『使命』58号、明治37年）、昇曙夢の「ハムレット及びドン・キホーテ」（『太陽』12巻5号、7号、明治39年4月、5月）、中澤臨川の「ツルゲーネフの自然観」（『新古文林』3巻1号、明治40年1月）、草野柴二の「ツルゲネフ論」（『新潮』6巻5号、明治40年5月）、八杉貞利の「ツルゲーネフの「ルーヂン」」（『新小説』13巻4号、明治41年4月）、片山孤村の「ツルゲネフの虚無主義」（『中央公論』第23年8号、明治41年8月）、相馬御風の「ツルゲーネフ、態度、人」（『早稲田文学』第48号、明治42年11月）等である。以上の評論文の中で、周樹人と最も近い関係にあるのは、昇曙夢が翻訳したツルゲーネフの講演文「ハムレット及びドン・キホーテ」だと考えている。この文章は後に昇曙夢の著作『露西亜文学研究』（隆文館、1907年12月）に収録されている。『露西亜文学研究』は周樹人が「摩羅詩力説」を執筆する際に参考にした材源の一つである。¹⁴⁷魯迅は後に「『奔流』編校後記（一～十二）」の中で、特にツルゲーネフの論文「Hamlet und Don Quichotte」を紹介し、こ

の論文を通じて、ツルゲーネフが「人生をいかに観察したかを知ることができる」と評価し、また、この論文の内容について、以下のように述べている。

それで Turgenjew は、なんら煩悶することなく、理想に燃えて勇猛果敢に事をなすことを「Don Quixote type」とし、一生、瞑想と懐疑に生き、何事もなしえない Hamlet と対照した。のちに、この理想を追い求めるだけの「Don Quixoteism」に対して、現実を見定めて勇猛果敢に事をなすのを「Marxism 式」と称する者もあらわれた。¹⁴⁸

銭理群は著作『豊富的苦痛——ドン・キホーテとハムレットの東進』（『豊富的痛苦——堂吉訶徳与哈姆雷特的東移』）の中で、周氏兄弟が日本留学時代に、ツルゲーネフ、『ドン・キホーテ』の日本語訳、「ハムレット」の日本語訳を調査し、「ドン・キホーテとハムレットの東進において、日本も重要な一環を構成している」と考えている。しかし、この問題については、銭理群は「日本の学者、作家の評論が中国の作家に与えた影響に関する事実はまだ殆ど発見されていない」と指摘した。¹⁴⁹以上の考察を通して、筆者は昇曙夢の『露西亜文学研究』に収録された「ハムレット及びドン・キホーテ」という日本語訳は、周樹人が最初に読んだツルゲーネフのこの論文のルートかもしれないと推測している。

第三節 明治期におけるツルゲーネフの翻訳と周樹人

上記に述べた通りに、周作人は「当時日本ではロシア文学の翻訳はまだ盛んでなく、わりに早くそしてやや多く紹介されたのはツルゲエネフぐらゐのものだった」と述べている。周作人の回想を検証するために、筆者は明治期におけるツルゲーネフの翻訳作品の調査を行っている。「明治翻訳文学年表 ツルゲーネフ編」により、明治 21 年（1888）から明治 45 年（1912）まで 160 部のツルゲーネフの作品を日本語に翻訳されたことがわかり、明治期における翻訳されたロシア文学の 24% を占めている。¹⁵⁰この数字は周作人の記憶に誤り

がないことを証明できる。それぞれ、明治21年二葉亭四迷訳の「あひびき」（「獵人日記・あひびき」）、明治21年二葉亭四迷訳の「めぐりあひ」（「奇遇」）、明治22年五七居士訳の「憂国憐才/美人草」（「その前夜」）、明治22年五七居士訳の「あらしの花/美さほ草紙」（「その前夜」）、明治23年森鷗外訳の「馬鹿な男」（「散文詩・あほう」）、明治23年森鷗外訳の「羅馬」（「まぼろし」）、明治23年宮崎湖処子訳の「二羽の鳩」（「散文詩・はと」）、明治24年森鷗外訳の「該撒」（「まぼろし」）、明治25年翠（今井忠治）訳の「薄命娘」（「不幸な女」）、明治26年残月庵主訳の「小児と馬術の稽古」、明治27年探美生（嵯峨の屋お室）訳の「林と野と」（「獵人日記・森と曠野」）、明治29年嵯峨の家お室訳の「唾の恋」（「ムムウ」）、明治29年嵯峨の家お室訳の「かきおき」（「不幸な女」）、明治29年嵯峨の家お室訳の「実業主と其子」、明治29年二葉亭四迷訳の「片恋」（「アーシャ」）、明治30年竹村智童訳の「ツルゲーネフ氏随見随記」（「散文詩」）、明治30年二葉亭四迷訳の「夢がたり」（「夢」）、明治30年二葉亭四迷訳の「うき草」（「ルージン」）、明治30年竹村智童訳の「時」（「時計」）、明治31年二葉亭四迷訳の「猶太人」（「ユダヤ人」）、明治31年徳富蘆花訳の「山守」（「獵人日記・狼」）、明治31年古松軒主人訳の「無一文」（「無一文」）、明治31年二葉亭四迷訳の「くされ縁」（「ペトウシコフ」）、明治33年嵯峨の屋お室訳の「田舎美術家」（「獵人日記・歌うたひ」）、明治34年上田敏訳の「散文詩」（「散文詩」）、明治34年上村左川訳の「おもかげ」（「クララ・ミリッチ」）、明治34年嵯峨の屋お室訳の「田舎家」（「獵人日記・ホーリとカリニヌイチ」）、明治35年武井自適訳の「死」（「散文詩」）、明治35年嵯峨の屋お室訳の「大伯父」（「三つの肖像画」）、明治35年瀬沼夏葉、尾崎紅葉訳の「投書家」（「散文詩」）、明治35年瀬沼夏葉、尾崎紅葉訳の「神の宴」（「散文詩」）、明治35年白水郎訳の「いまはの恋」（「獵人日記・郡の医者」）、明治35年瀬沼夏葉訳の「髑髏」（「散文詩・されこうべ」）、明治35年嵯峨の屋お室訳の「雨窓奇談」（「犬」）、明治35年国木田独歩訳の「非凡人」（「アンドレイ・コーロソフ」）、明治35年加島汀

月訳の「鳥うち」（「獵人日記・エルモライと粉屋の女房」）、明治35年上田敏訳の「露西亜の言葉」（「散文詩・ロシア語」）、明治35年田山花袋訳の「悲痛の調」（「ヤーコフ・パーシニコフ」）、明治35年栗原古城訳の「世のをはり」（「散文詩・世のおわり」）、明治36年栗原古城訳の「雀」（「散文詩・雀」）、明治36年嵯峨の屋お室訳の「妖婦伝」（「エルグーノフ中尉の話」）、明治36年嵯峨の屋お室訳の「郡の医者」（「獵人日記・郡の医者」）、明治36年栗原古城訳の「白鳩」（「散文詩・はと」）、明治36年蜻蛉子訳の「海上」（「散文詩・船の旅」）、明治36年小栗風葉訳の「へそ日記」（「余計者の日記」）、明治36年栗原古城訳の「山媛」（「散文詩・ニンフ」）、明治36年内海月杖訳の「恋」（「初恋」）、明治36年窪田通治訳の「生ける屍」（「獵人日記・生神様」）、明治36年嵯峨の家主人訳の「山番」（「獵人日記・狼」）、明治36年栗原古城訳の「おとなひ」（「散文詩・おとずれ」）、明治36年嵯峨の屋お室訳の「水車小屋」（「獵人日記・エルモライと粉屋の女房」）、明治36年嵯峨の屋お室訳の「隣の家」（「獵人日記・わが隣人ラヂーロフ」）、明治37年山田枯柳訳の「夢まぼろし」（「勝ち誇れる恋の歌」）、明治37年流星子訳の「縁外縁」（「けむり」）、明治37年雄島浜太郎、木村北溟訳の「二度恋」（「ファウスト」）、明治37年内海月杖訳の「おとづれ」（「散文詩・おとずれ」）、明治37年国木田独歩訳の「決闘家」（「決闘家」）、明治37年瀬沼夏葉訳の「髑髏」（「散文詩・されこうべ」）、明治37年吉川英男訳の「虚影」（「散文詩」）、明治37年夏葉女史訳の「すずめ」（「散文詩・雀」）、明治37年中島孤島訳の「形見の日記」（「もう十分だ」）、明治37年橋本青雨訳の「間諜」（「ユダヤ人」）、明治37年山田枯柳訳の「海のほとり」（「夢」）、明治37年藤井紫影訳の「散文詩」（「散文詩」）、明治37年内海月杖訳の「夕座」（「初恋」）、明治37年昇曙夢訳の「くさ場」（「獵人日記・ビージェンの草原」）、明治37年藤井紫影訳の「散文詩」（「散文詩・マーシャ」）、明治38年二葉亭四迷訳の「行文揃わぬ借着とあってよろけて稿も分からずや」（「貴族団長宅の朝食」）、明治38年ちよいん訳の「森と野」（「獵人日記・森と曠野」）、明治38年

三宅野花訳の「物乞い」（「散文詩・乞食」）、明治38年梧桐夏雄訳の「田舎世界」（「獵人日記・森と曠野」）、明治38年紫影生訳の「夢」（「夢」）、明治38年中村春雨訳の「泉のほとり」（「獵人日記・苺の泉」）、明治38年小栗風葉訳の「一本杉」（「曠野のリア王」）、明治38年長光迂人訳の「森林」（「ポーレシエの旅」）、明治38年畑荷香訳の「やま番」（「獵人日記・狼」）、明治38年三宅野花訳の「とつくに花」（「散文詩」）、明治38年衣が浦人訳の「秋の野山」（「獵人日記・あひびき」）、明治39年柳川晴葉訳の「車輪の響き」（「獵人日記・音がする！」）、明治39年二葉亭四迷訳の「樺の林」（「獵人日記・あひびき」）、明治39年内海月杖訳の「まどゐ」（「散文詩」）、明治39年漆花訳の「みそら」（「散文詩」）、明治39年鼠の助訳の「暁暮霧靄」（「獵人日記・森と曠野」）、明治39年中村孤月訳の「鳩」（「散文詩・はと」）、明治39年中村孤月訳の「森林の女神」（「散文詩・ニンフ」）、明治39年中村孤月訳の「雀、犬」（「散文詩・雀、犬」）、明治39年昇曙夢訳の「凄艶」（「勝ち誇れる恋の歌」）、明治39年長藤子訳の「浮草」（「ルージン」）、明治40年岡村野水訳の「森林の逍遙」（「ポーレシエの旅」）、明治40年荒井恒雄訳の「雨やどり」（「獵人日記・狼」）、明治40年茅野蕭々訳の「父子」（「他人のパン（食客）」）、明治40年杉雨訳の「夜宿」（「獵人日記・エルモライと粉屋の女房」）、明治40年風声訳の「海の上」（「散文詩・船の旅」）、明治40年岡田美之代訳の「狼の権」（「獵人日記・狼」）、明治40年山田枯柳訳の「夢まぼろし」（「勝ち誇れる恋の歌」）、明治40年馬場孤蝶訳の「狼」（「獵人日記・狼」）、明治40年荒井恒雄訳の「隣の男」（「獵人日記・わが隣人ラザーロフ」）、明治40年相馬御風訳の「恋と恋」（「その前夜」）、明治40年水上夕波訳の「春潮」（「春の水」）、明治40年栗嶋狭衣波訳の「ひとり娘」（「貴族団長宅の朝食」）、明治40年相馬御風訳の「二人の友」（「その前夜」）、明治40年生田長江訳の「石」（「散文詩・岩」）、明治40年宮地竹峰訳の「臨終」（「父と子」）、明治40年正宗白鳥訳の「お政」（「散文詩・マーシャ」）、明治40年正宗白鳥訳の「最後の会見」（「散文詩・されこうべ」）、

明治41年平塚明子訳の「はらから」（「散文詩・ふたりの兄弟」）、明治41年小林愛雄訳の「乞丐」（「散文詩・乞食」）、明治41年島江子訳の「散文詩」（「散文詩」）、明治41年草野柴二訳の「二人老爺」（「プーニンとパブリン」）、明治41年馬場孤蝶訳の「断頭台」（「トロプマンの処刑」）、明治41年相馬御風訳の「エレンの日記」（「その前夜」）、明治41年田吹笛川訳の「追想記」（「もう十分だ」）、明治41年清見春波訳の「庭の小路」（「処女地」）、明治41年さすらへひと訳の「その夕」（「その前夜」）、明治41年原田讓二訳の「田舎医者」（「獵人日記・郡の医者」）、相馬御風訳の「ヴェニスの春」（「その前夜」）、明治41年草野柴二訳の「ユダヤ人」（「ユダヤ人」）、明治41年日野生訳の「何思ふ」、明治41年小栗風葉訳の「春怨」（「不幸な女」）、明治41年大貫晶川訳の「極光」（「散文詩」）、明治41年相馬御風訳の「その前夜」（「その前夜」）、明治41年青木秀峰訳の「散文詩」（「散文詩」）、明治41年吉江孤雁訳の「苺の清泉」（「獵人日記・苺の泉」）、明治41年衛藤東田訳の「煙」（「けむり」）、明治41年二葉亭四迷訳の「うき草」（「ルージン」）、明治41年小栗風葉訳の「春潮」（「春の水」）、明治41年吉江孤雁訳の「山番」（「獵人日記・狼」）、明治41年吉江孤雁訳の「ツルゲーネフ短編集」（『獵人日記』）、明治41年馬場孤蝶訳の「処女地」（「処女地」）、明治41年相馬御風訳の「散文詩四編」（「散文詩」）、明治42年天沼匏村訳の「蠅」（「散文詩」）、明治42年小栗風葉訳の「春潮」（「春の水」）、明治42年晶川畔客訳の「ツルゲネフ散文詩」（「散文詩」）、明治42年吉川白甲訳の「明日」（「散文詩」）、明治42年晶川畔客訳の「絞首にせい」（「散文詩」）、明治42年相馬御風訳の「散文詩三編」（「散文詩」）、明治42年相馬御風訳の「父と子」（「父と子」）、明治42年吉田白甲訳の「自然」（「散文詩」）、明治42年斎藤野の人訳の「ルケルヤ」（「獵人日記・生神様」）、明治42年戸川秋骨訳の「村医者」（「獵人日記・郡の医者」）、明治42年草野柴二訳の「薄命女」（「不幸な女」）、明治42年戸川秋骨訳の「獵人日記」（『獵人日記』）、明治42年吉江孤雁訳の「幻影」（「まぼろし」）、明治42年仲田勝

之助訳の「門口」（「散文詩」）、明治43年吉田白甲訳の「山答問」（「散文詩」）、明治43年山崎貞訳の「世の終わり」（「散文詩」）、明治43年山崎貞訳の「散文詩」（「散文詩」）、明治43年吉江孤雁訳の「ツルゲーネフ集」（「散文詩」）、明治43年山崎貞訳の「上帝の饗宴」（「散文詩」）、明治43年山崎貞訳の「敵手」（「散文詩」）、明治43年相馬御風訳の「貴族の家」（「貴族の巢」）、明治43年仲田勝之助訳の「セニリア」（「散文詩」）、明治44年夕葵之助訳の「終焉」（「もう十分だ」）、明治44年馬場孤蝶訳の「断頭台」（「トロプマンの処刑」）、明治44年米川正夫訳の「街道の対話」、明治45年木下利玄訳の「訪ずれ」（「散文詩・おとずれ」）、明治45年海原曙雲訳の「恋の力」（「散文詩・春の水」）である。

この160部の日本語訳のツルゲーネフの小説の中で、少なくとも以下の三つの点は周樹人と密接な関係があると考えている。一つ目は上記に述べた通りに、『小説訳叢』における「妖婦伝」、「水車小屋」、「くさ場」、「森林」などの作品を集めたことである。数量的にみると、ツルゲーネフの小説の収録数は『小説訳叢』に収録される4人の作家の中で最も多い。これは周樹人のツルゲーネフに対する関心を反映していると言えよう。『小説訳叢』に収録されるツルゲーネフの作品に基づいて、陳漱渝、姜異新などの研究者も「くさ場」と「村芝居」、「妖婦伝」と「祝福」の類似性を指摘し、ツルゲーネフの作品は魯迅の創作に対する影響を考察している。¹⁵¹また、陳漱渝は『小説訳叢』に収録されるロシア小説の翻訳問題を以下のように指摘した。「当時の日本語訳の外国作品の翻訳は厳密な直訳ではなく、任意に添削し、題名、人名を勝手に改竄している」と述べており、このような状況は、好き勝手な「林紓翻訳モード」に近いとし、まして訳文自体には誤りがあると指摘している。陳漱渝は作品「妖婦伝」の例を挙げ、「妖婦伝」の中の人物は全部日本人の名前に変えた（小説の主人公を久山加太郎と改名した）。ツルゲーネフの全集の中では対応できる題名が全く見つからず、同じ状況は他のいくつかの作品にも反映されている。¹⁵²陳漱渝は小説「妖婦伝」の中で「任意に添削し、題名、人名を勝手に改竄している」と指摘した

が、筆者は「妖婦伝」と中国語に翻訳された「葉爾古諾夫中尉的故事」（「エルゲーノフ中尉の話」）という二つの小説を対比してみると、嵯峨の屋御室が全体としてほぼそのまま翻訳していることが明らかになった。¹⁵³

二つ目は、竹内好は魯迅が二葉亭四迷より「ツルゲーネフに親しめなかった」と述べている。¹⁵⁴筆者は、この判断が事実ではないと思う。理由は上記の周樹人がツルゲーネフの小説を集めたほか、『域外小説集』では周氏兄弟がツルゲーネフの小説を翻訳する計画があったが、前二冊の売れ行きが悪くて実現できなかったからである。『域外小説集』の第一巻後の予告にはツルゲーネフの小説「畢旬大野」、「猶太人」があり、『域外小説集』の第二巻の予告にはツルゲーネフの小説「猶太人」とツルゲーネフの「莓泉」がある。崔文東は『域外小説集』の底本を考証した時に、「周氏兄弟は皆ツルゲーネフが好きで、魯迅蔵書におけるすでに購入したドイツ語訳本の15種類を含み、周作人は15冊の英語選集を購入した。翻訳するつもりツルゲーネフの「畢旬大野」、「莓泉」、「猶太人」などの3篇の作品——前2篇は『獵人日記』によるもので、何れも魯迅の蔵書ではないので、この『小説訳叢』の中の「白淨草原」の日本語訳（「くさ場」）を参考できる以外、周作人によって英語訳から翻訳するしかない」と述べている¹⁵⁵。以上の明治期におけるツルゲーネフの翻訳の考察を通して、他の2篇の小説「莓泉」と「猶太人」は明治期にも日本語訳があることが確認することができる。周樹人もこれらの訳本に触れた可能性が高い。そのため、周樹人は「ツルゲーネフに親しめなかった」のではなく、むしろツルゲーネフの作品に注目し続けている。

三つ目は散文詩集『野草』とツルゲーネフの『散文詩』の関連である。先行研究によれば、ツルゲーネフの『散文詩』は明らかに魯迅の散文詩集『野草』に影響を与えている。¹⁵⁶その中で、秋吉収は著作『魯迅 野草と雑草』の中で、「「散文詩」の単篇の翻訳は一八九七（明治三〇）年北村透谷訳「麻雀」に始まり、詩集では一九一〇（明治四三）年草野柴二訳「散文詩」を嚆矢とする。魯迅は日本留学時代からツルゲーネフに注目していた」¹⁵⁷。

上記の明治期におけるツルゲーネフの翻訳の考察を通して、「散文詩」は多く翻訳されたツルゲーネフの作品の一つとして知られている。とりわけ、周樹人が注目する上田敏、森鷗外などの翻訳者にもツルゲーネフの「散文詩」を訳したことがある。そのため、周樹人は日本留学時期にすでにツルゲーネフの「散文詩」を読んでいる可能性が高いと推測する。

第五章 周樹人が愛したロシアの小説家

明治期におけるチェーホフの翻訳・紹介と周樹人

はじめに

チェーホフは魯迅が愛したロシアの小説家である。魯迅は日本留学時期にはじめてチェーホフの作品に触れており、周氏兄弟が共訳する『域外小説集』で2篇のチェーホフの小説を収録した。本論では、魯迅とチェーホフ関係の先行研究をもとに、明治期におけるチェーホフの受容と日本留学時期の周樹人のつながりを考察し、重点的に周樹人の周辺に存在するチェーホフ作品の調査を行う。この調査を通して、小説「大事件」は明治期に9回に翻訳されており、また、その中の多くは当時の魯迅が注目する文芸雑誌に掲載されたことがわかった。さらに、筆者の考察を通じ、小説「大事件」の英語版と最初の中国語版にも魯迅の関心の範囲である可能性が高いことを確認している。一方では、筆者は魯迅の小説「兎と猫」とチェーホフの小説「大事件」の対比を通して、二つの作品の物語の内容と展開は非常に似ていることを明らかになった。そのため、小論は「大事件」における子猫が黒犬に食べられた部分、人間が小生物に対して生死の態度を描写する部分が魯迅の創作「兎と猫」にインスピレーションを与えたと推測している。

第一節 魯迅とチェーホフ

チェーホフ¹⁵⁸は魯迅が非常に関心を持ったロシアの作家である。魯迅自身が「チェーホフは私の大好きな作家である」と述べている。¹⁵⁹魯迅と周作人は、日本留学時期にはじめてチェーホフの作品に触れており、二人は東京で文芸運動に従事する時にチェーホフに関心を持った。周氏兄弟が共訳する『域外小説集』にも「威施」（「莊中」）¹⁶⁰、「塞外」2篇のチェーホフの小説を収録した。魯迅が1906年に作成した購買ドイツ語書目によって知ることができ、チェーホフの『決闘』と『女巫及其他中篇小説』の二冊は全部購入する予定であった。¹⁶¹この二冊の書名は魯迅の蔵書のドイツ語訳のチェーホフの作品内に見つけ出すことが

でき、魯迅が当時にこの二冊の本を購入した可能性が高いと推測する。¹⁶²日本留学時代にチェーホフの作品に触れて以来、臨終に至るまで魯迅はチェーホフの作品に関心を持ち続けている。彼は多くの日本語訳本、ドイツ語訳本と漢訳本のチェーホフ作品集を収集しているだけでなく、¹⁶³1934年から1935年までの間にチェーホフの8篇の短編小説を翻訳し、『悪い子供とその他の奇聞』を標題として、1936年に上海聯華書局から出版している。魯迅はチェーホフの作品を読むことを好んだだけでなく、その文学創作にも深くチェーホフの影響を受けている。周作人の回想によると、チェーホフの小説『決闘』も周氏兄弟の『域外小説集』の翻訳計画内にある。¹⁶⁴また、魯迅と同時期の郭沫若、郁達夫（1896-1945）¹⁶⁵なども魯迅の文学創作はチェーホフの影響を深く受けっていると考えている。とりわけ、郭沫若は「魯迅は若い時にきっとチェーホフの影響を深く受けたに違いない」と断言している。

166

趙景深（1902-1985）は最初に生活、題材、思想、作風などの四つの方面から魯迅とチェーホフの生涯と創作に対して深い比較を行った。¹⁶⁷趙景深の魯迅とチェーホフの比較研究の延長線上で、張華、¹⁶⁸韓長経、¹⁶⁹王富仁、¹⁷⁰孫郁¹⁷¹などの学者も魯迅とチェーホフの二人の作家の作品の異同を検討している。先行研究を踏まえて、研究者たちは周樹人が日本に留学している時期にチェーホフの日本語訳の「黒衣の僧」、「六号室」を読んだことがあると相次いで推測しているが、この二つの作品は何れも魯迅の「狂人日記」の創作に影響する可能性がある。¹⁷²また、研究者は、チェーホフの小説「しいッ」は魯迅の小説「幸福な家庭」との関連、¹⁷³周作人の翻訳によるチェーホフの「威施」は魯迅の小説「石鱈」との関連、¹⁷⁴チェーホフの小説「苦悩」は魯迅の小説「祝福」との関連などについて、¹⁷⁵研究を行っている。

以上の史実と先行研究から分かるように、チェーホフは魯迅の文学創作に影響を与えた重要なロシアの文学者であることは間違いない。

第二節 明治期におけるチェーホフの紹介と周樹人

まず、ここで、チェーホフについて簡単に紹介しておく。チェーホフはロシアの作家、劇作家である。食料雑貨店の子として南ロシアのタガンログに生まれた。16歳の時、父親が破産して一家はモスクワに夜逃げしたため、モスクワ大学医学部に入学したチェーホフは、ユーモア雑誌に様々なペンネームで短編やコントを書きまくり、家族を養った。大学を卒業し自宅で開業し、博士論文の準備をすすめたが、その間も小説を書き続けていた。1897年の大咯血で本格的な療養の必要を感じて、1899年にヤルタに土地を買い求めて移住した。『三人姉妹』、『桜の園』はここで完成された。しかし『桜の園』が初演された1904年にはもはや衰弱がはげしく、療養の甲斐なく44歳でその生涯を終えた。¹⁷⁶明治期におけるチェーホフの受容については、柳富子の論文「明治・大正期のチェーホフ」を参照して頂きたい。柳富子の調査によると、日本で最初にチェーホフを紹介する文献はジャーナリストの角田浩々歌客（1869-1916）の手によるもので、「劍南」を筆名にして、明治37年（1904）3月6日に『読売新聞』に「露国文学の研究とアントン・チェホフ」という文章を発表した。¹⁷⁷また、角田浩々歌客はチェーホフの小説「大椿事」、「流人」、「小守歌」などの作品も翻訳した。同年10月、長谷川天溪（1876-1940）は雑誌『文芸倶楽部』に「魯国作家 チェーホフ氏逝く」を発表した。この文章はワリツエフスキーの『魯国文学史』におけるチェーホフに関する内容を引用し、日本文壇にチェーホフの生涯を簡単に紹介した。¹⁷⁸同じ明治37年（1904）10月、沢潟水舎主人は雑誌『新小説』に「露国文豪チェホフ」を発表した。¹⁷⁹この文章は全二部により構成される。第一部分はチェーホフの生涯についての紹介、第二部はロシアの文学評論家の論述に基づいてチェーホフの文学創作に対する評論である。また、柳富子の調査により、この文章の「最初の部分のチェーホフ小伝を石川残月庵からの寄稿を参酌してまとめたところから推して、ニコライ神学校系の人ではないかとも思われる。因みに石川残月庵は、ニコライ神学校の機関紙『心海』と女子神学校発行の『裏錦』で編集、論文執筆、翻訳を行っており、神学校系統で中心人物のひとりで

あった」¹⁸⁰。明治39年(1906)8月、石川残月はまた「残月生」を筆名として雑誌『太陽』に「露国文豪チェーホフの書翰」を發表した。¹⁸¹一ヶ月後、小山内薫は「鸚鵡公」を筆名として『帝国文学』に「露国二作家の遺墨」を發表した。この文章は同時期昇曙夢の「レルモントフの遺墨」(『太陽』12巻12号、1906)を引用し、「チェホフは皮肉なる中に真面目なる所ある男なり。レルモントフは徹頭徹尾可愛い男なり」と述べている。¹⁸²北岡正子の考証により、昇曙夢の「レルモントフの遺墨」は「摩羅詩力説」第七章の材源の一つである。¹⁸³そのため、周樹人が明治期の文芸雑誌の中でロシア文学に関する資料を探している時、チェーホフ文学を紹介する評論文と出会った可能性が高い。

明治41年(1908)5月、『文章世界』第3章第6号に「近代三十六文豪」を掲載した。チェーホフもその「近代三十六文豪」の一人である。¹⁸⁴同年6月、安成貞雄は『文庫』に「チェホフ論」を發表した。この文章では以下の四部のチェーホフに関する資料書を紹介した。

(1) ワリスゼウスキイの『露国文学史』、(2) クロポトキンの『露国文学に於ける理想と現実』、(3) ブラック、モンクの訳者の序文、(4) メレヂコウスキーの「チェホフ論」。¹⁸⁵その中で、北岡正子の考証により、クロポトキンの『露国文学に於ける理想と現実』(英語版)も「摩羅詩力説」第七章の材源の一つである。¹⁸⁶そのため、周樹人はこの著作の中でチェーホフ文学に関わる部分を閲読したことがわかる。

明治42年(1909)、馬場孤蝶は2月、3月に『慶應義塾学報』と『早稲田文学』に「新訳チェーホッフ短篇集」と「チェーホッフ短篇集」を發表した。この二つの文章で、馬場孤蝶は主にイギリスのロング(Robert Edward Crozer Long、1872-1938)が翻訳する二冊のチェーホフの翻訳小説集を紹介した。¹⁸⁷また、馬場孤蝶はこの英語版の翻訳小説集に基づいてチェーホフの「六号室」、「途上」、「牡蠣」等作品を翻訳した。¹⁸⁸同年3月、瀬沼夏葉は雑誌『新潮』に「チェホフに就て」を發表し、チェーホフの小説と劇作の解説を通してチェーホフの文学創作を紹介した。¹⁸⁹同月、山田松濤も雑誌『新小説』に「チェホフとコロレンコ」を發表し、チェーホフとコロレンコの文学創作の比較を行なっている。¹⁹⁰同年5

月、瀬沼夏葉は『早稲田文学』に「叔父ワアニャ」を発表し、チェーホフの劇作品「叔父ワアニャ」の粗筋を述べている。¹⁹¹同月、小山内薫は『文章世界』に「チェエホフの診察」を発表し、チェーホフの長篇小説『決闘』を次のように評価している。

吾人は嘗てツルゲエネフといふ医者がルジンといふ近代人を診断した報告を読んで切實な感じに打たれたものだ。併し吾人はチェエホフがアラエウスキイといふ人間を診察した「決闘」といふ報告書を読んで、一層痛切な感じに打たれる。

アラエウスキイはルジンよりもっと吾人の時代に近い人である。ルジンは中々奇抜なところのある人間だが、アラエウスキイは真に平凡な弱い人間である。「自分」といふものに絶望した人間にとって、アラエウスキイほど身近い人間はない。¹⁹²

小山内薫は周樹人の日本留学時代に注目した外国文学を紹介する評論家の一人でもある。¹⁹³彼はチェーホフの短篇小説「居眠り」や「悪行」などを翻訳したほか、チェーホフの長編小説『決闘』を翻訳し、『新思潮』や『読売新聞』で連載、後に本にして出版している。周作人はチェーホフの小説『決闘』も『域外小説集』を翻訳する計画の中にあると述べたが、周樹人も丸善書店を通じてこの作品のドイツ語版を買ったので、周樹人は早くも小山内薫の紹介と翻訳を通してチェーホフ長編の小説『決闘』に関する情報を得たかもしれない。

第三節 明治期におけるチェーホフの翻訳と周樹人

昇曙夢は明治期におけるチェーホフの受容について、次のように語っている。

チェーホフの傳來はゴーリキイより一兩年後のことで、その紹介の第一人者は何と言っても瀬沼夏葉女史である。女史の譯に成る「寫眞帳」と「道迷ひ」とが何れも明治三

十六年の「文藝倶楽部」に載ったのが最初であらう。その後も女史は幾種かの短篇と戯曲とを譯してゐる。……その後三十八年には小山内薫譯の「居眠り」が「七人」に、三十九年には孤蝶譯の「六號室」と「途上」とが何れも「藝苑」に、四十年一月には小山内譯の「悪行」が「明星」に現れ、四十一年には僕の譯した「拳銃」（「ヴァロージャ」）と「窒扶斯」が何れも単行本「白夜集」の中に収められた。かくてチェーホフの價値が漸く一般に認められるやうになると、四十年十月から二ケ年に亘って小山内薫の長篇「決闘」が讀賣新聞に連載せられ、四十一年には夏葉女史の「チェーホフ傑作集」が単行本として發行された。チェーホフの眞珠の如き短篇の形式とその優れたユーモアとは、その當時から一部の作家の間に非常にもてはやされたが……。¹⁹⁴

昇曙夢の回想によると、チェーホフが日本に紹介された時期はゴーリキーより遅い。「明治翻訳文学年表チェーホフ」によると、明治期における翻訳されたチェーホフの作品は104件に達し、明治期における翻訳されたロシア文学の15.6%を占めている。¹⁹⁵発表期間は主に明治36年（1903）から明治45年（1912）に集中しており、この期間はちょうど周樹人の日本留学時期（1902-1909）と重なっている。

筆者は重点的に1903年から1909年までの6年間に発表された60部の日本語訳チェーホフの小説名の現在の日本語訳名を確認した。以下の通りを列挙する。¹⁹⁶

瀬沼夏葉、尾崎紅葉訳の「月と人」（明治36年8月、「別荘の人びと」）、瀬沼夏葉、尾崎紅葉訳の「写真帖」（明治36年10月、「アルバム」）、尾崎紅葉訳の「路迷ひ」（明治37年1月、「道に迷った人びと」）、角田浩々歌客訳の「大椿事」（明治37年3月6日、13日、「大事件」）、桐生悠々訳の「配所の月」（明治37年5月、「追放されて」）、正宗白鳥訳の「不運くらべ」（明治37年6月、「敵」）、角田浩々歌客訳の「流人」（明治37年6月、「追放されて」）、瀬沼夏葉訳の「里の女」（明治37年7月、「女房ども」）、瀬沼夏葉訳の「叱ッ！」（明治37年7月、「しいッ」）、角田浩々歌客訳の「小守歌」（明

治 37 年 7 月 3 日、10 日、「ねむい」）、瀬沼夏葉訳の「余計者」（明治 37 年 9 月、「余計者」）、薄田斬雲訳の「黒衣僧」（明治 37 年 10 月、「黒衣の僧」）、桐生悠々訳の「変り者」（明治 37 年 11 月、「ロスチャイルドのバイオリン」）、瀬沼夏葉訳の「艶福男」（明治 38 年 1 月、「幸福な男」）、胆山生訳の「虚偽」（明治 38 年 5 月、「家で」）、小山内薫訳の「居眠り」（明治 38 年 5 月、「ねむい」）、西村渚山訳の「睡魔」（明治 38 年 9 月、「ねむい」）、瀬沼夏葉訳の「村役場」（明治 39 年 1 月、「照会」）、藤井紫影訳の「大事件」（明治 39 年 1 月、「大事件」）、馬場孤蝶訳の「六号室」（明治 39 年 2 月、「六号室」）、瀬沼夏葉訳の「虚瀬」（明治 39 年 2 月、「失敗」）、桐谷生訳の「記念の胡弓」（明治 39 年 2 月、「ロスチャイルドのバイオリン」）、瀬沼夏葉訳の「六号室」（明治 39 年 4 月、「六号室」）、馬場孤蝶訳の「途上」（明治 39 年 7 月、「旅中」）、桐谷生訳の「稚き伴侶」（明治 39 年 9 月、「大事件」）、草野柴二訳の「胡蝶」（明治 39 年 11 月、「浮気な女」）、岡村野水訳の「猫児」（明治 40 年 3 月、「大事件」）、茅野蕭々訳の「小猫」（明治 40 年 7 月、「大事件」）、草野柴二訳の「泥鴨」（明治 40 年 7 月、「ウオローヂヤ」）、小山内薫訳の「決闘」（明治 40 年 10 月、「決闘」）、昇曙夢訳の「窒扶斯」（明治 40 年 11 月、「チフス」）、堀竹雄訳の「家庭教師」（明治 41 年 1 月、「家庭教師」）、瀬沼夏葉訳の「たはむれ」（明治 41 年 1 月、「たわむれ」）、小山内薫訳の「悪行」（明治 41 年 1 月、「不気味なできごと」）、生田長江訳の「父」（明治 41 年 2 月、「父」）、瀬沼夏葉訳の「官吏の死」（明治 41 年 4 月、「小役人の死」）、大内白月訳の「コブリン博士」（明治 41 年 9 月、「黒衣の僧」）、吉田白甲訳の「宿縁」（明治 41 年 10 月、「不幸」）、瀬沼夏葉訳の「良犬」（明治 41 年 10 月、「高価な犬」）、草野柴二訳の「唱歌女」（明治 41 年 11 月、「コーラス・ガール」）、瀬沼夏葉訳の「意地悪」（明治 41 年 11 月、「意地わるな少年」）、昇曙夢訳の「拳銃」（明治 41 年 11 月、「ウオローヂヤ」）、瀬沼夏葉訳の「雄弁家」（明治 41 年 12 月、「雄弁家」）、瀬沼夏葉訳の「悪鏡」（明治 42 年 1 月、「ゆがんだ鏡（クリスマス物語）」）、嵯峨之家訳の「あ

ひ引」(明治42年1月、「アガーフィア」)、瀬沼夏葉訳の「彼女だ」(明治42年1月、「実は彼女だった」)、楠山正雄訳の「下女が婚礼する」(明治42年2月、「料理女の結婚」)、G生訳の「園丁長の古譚」(明治42年2月、「園丁主任の話」)、馬場孤蝶訳の「牡蠣」(明治42年2月、「かき」)、松原至文訳の「牡蠣」(明治42年3月、「かき」)、瀬沼夏葉訳の「申告簿」(明治42年3月、「苦情帳」)、瀬沼夏葉訳の「叔父ワアニヤ」(明治42年5月、「ワーニヤ伯父さん」)、松原至文訳の「接吻」(明治42年5月、「接吻」)、荒野放浪訳の「きやめれおん」(明治42年6月、「カメレオン」)、瀬沼夏葉訳の「煙草の毒害」(明治42年6月、「タバコの害について」)、生方敏郎訳の「悲しみ」(明治42年7月、「悲しみ」)、作者不詳訳の「一事件」(明治42年9月、「大事件」)、小山内薫訳の「決闘」(明治42年11月、「決闘」)。

以上の各雑誌、新聞に掲載された60篇のチェーホフの日本語訳小説のほか、明治41年(1908)10月に昇曙夢の評価による「チェーホフ紹介の第一人者」¹⁹⁷と称された瀬沼夏葉(1875-1915)は『露国文豪 チェーホフ傑作集』(獅子吼書房)を出版し、瀬沼夏葉が発表した13篇のチェーホフの短篇を収録している。¹⁹⁸また、この60篇のチェーホフの小説は『新小説』、『趣味』、『新古文林』、『帝国文学』、『太陽』などの周樹人が留日時期によく読んだ文芸雑誌に多く発表されていることがわかる。したがって、この60篇の日本語訳のチェーホフ小説と瀬沼夏葉訳の一部の小説集は何れも留学生の周樹人が読んだ可能性があるかと推測している。

チェーホフの作品が最初に日本に翻訳された9年間に、4部の作品が重訳されている。その中で、「六号室」、「黒衣の僧」、「追放されて」と「大事件」は、前の3作品は重訳が2回行われ、最後の1作品の「大事件」は7回翻訳されている。周樹人が留学を終える明治最後の3年においては、小説「大事件」にまた2冊の日本語訳本が現れ、これにより、明治期の最後の9年間だけで、チェーホフの小説「大事件」が9回翻訳されたことが明らかになった。以下はこの9冊の訳本の具体的な関連情報である。

番号	発表時期	訳者	訳名	掲載情報
1	明治 37 年 3 月	角田浩々歌客	大椿事	『大阪朝日新聞』（6 日、13 日）
2	明治 39 年 2 月	藤井紫影	大事件	『帝国文学』第 12 巻第 2 号
3	明治 39 年 3 月	なでしこ (小山内薫)	猫児	『新古文林』第 2 巻第 3 号
4	明治 39 年 9 月	桐谷生	稚き伴侶	『趣味』第 1 巻第 4 号
5	明治 40 年 3 月	岡村野水	猫児	『新古文林』第 3 巻第 3 号
6	明治 40 年 7 月	茅野蕭蕭	小猫	『明星』
7	明治 42 年 9 月	佚名	一事件	『新潮』第 11 巻第 3 号
8	明治 43 年 3 月	山崎貞	大事件	『大陸作家小品』、博文館
9	明治 43 年 7 月	野上白川	出来事	『日本青年』

一篇の小説に対する翻訳が短い 7 年の間に 9 回にも及んでおり、このような状況は多く見られない。これは明治期の日本のチェーホフ受容史における重要な位置にあると考える。さらに注目すべきは、上記の複数の訳本は何れも「ロシア文学の紹介と翻訳」を探している周樹人の周辺に存在していることである。標題からみると、ロシア語の原文

「событие」は「事件、出来事、出来事」という意味がある。これらの訳者の中で小山内薫と岡村野水は「猫児」と訳しており、茅野蕭蕭は「小猫」と訳しており、桐谷生は「稚き伴侶」と訳している。この 4 人の翻訳者は明らかに小説の内容によって標題を調整したが、他の 5 人の翻訳者は基本的にロシア語の原意に基づいて訳している。また、明治日本の 9 部の「大事件」の訳者の中には、少なくとも以下の三つの作品が注目されている。

一つ目は、角田浩々歌客が翻訳した「大椿事」である。上述に述べた通りに、角田浩々歌客は最初にチェーホフを日本に紹介する評論家である。「大椿事」も最初に日本に翻訳した「大事件」の訳本である。

二つ目は、小山内薫（筆名：なでしこ）が『新古文林』第2巻第3号に翻訳作品「猫児」を発表したことである。他の翻訳よりも、周樹人が小山内薫の「猫児」に触れた可能性が高いと思う。理由は以下の通りである。まず、周樹人は日本留学時代に雑誌『新古文林』から2篇のロシアの小説を集めたことがあり、それはそれぞれ栗林枯村が翻訳した「宿命論者」（1巻10号、1905年12月）と長光迂人が翻訳した「森林」（1巻7号、1905年10月）である。また、小山内薫は『文章世界』に掲載された「チェエホフの診察」の中で「大事件」という小説に言及した。彼は医者であったチェーホフの診察レベルが非常に高いと次のように指摘している。「かれは男の診察もうまいが、婦人科も中々上手だ。殊にその小児科に至っては敵手なしだ——「眠い頭」「大事件」「牡蠣」などは何れもその方の報告である。かれが精神病者の好い医者であったことも、「六號室」といふ報告を見れば分かる」¹⁹⁹。この評価からみると、小山内薫は小説「大事件」をチェーホフが子供を描いた傑作と見ていることがわかる。

三つ目は、山崎貞が翻訳する「大事件」について紹介しておく。「大事件」は博文館が発行する『英語世界叢書（七）大陸作家小品』に収録されており、英語学習の教材として英和対訳の形式をとっており、大量の注釈が加えられている。「大事件」はこの本に収録された最初の作品で、訳者が注釈で「“Black Monk, ” 及び “Kiss” といふ英訳が丸善や中西屋に来て居る、両書とも短編を十ばかりづつ収めてある」²⁰⁰と説明する。筆者が調査したところ、この本に収録されている英語の原文はイギリスの翻訳者ロングが翻訳した『黒衣の僧』（原名：The black monk and other stories）という著作であることが明らかになり、山崎貞はこの英訳本を参考にして「大事件」を翻訳したことは明らかである。

ロングの翻訳小説集『黒衣の僧』は明治時期の日本文壇に大きな影響を与えた。日本の近代小説家正宗白鳥（1878-1962）は経験者として、英訳チェーホフ翻訳集が丸善書店に入った時のセンセーションを次のように回想している。

丸善に、「ブラックモンク」「黒衣の僧」と題された英訳の短篇集が到着したので、青年文学者の間にチェーホフの名が喧伝されるやうになったのだ。

次に輸入される英訳のチェーホフ短篇集は、「キツス」と題された赤表紙本であったが、私はそれを小山内薫の紹介によって知った。……小山内氏が、チェーホフの「牡蠣」の大要を巧みに話した。子供が牡蠣を殻ごと食べたことが私の興味をそそつた。「桜の園」の話も、小山内氏から聞かされたので、庭の桜を切る音で幕になる斬新な新劇に心が惹かれた。²⁰¹

この英訳本は The Black Monk（「黒衣の僧」）、On the Way（「旅中」）、A Family Council（「問題」）、At Home（「家で」）、In Exile（「追放されて」）、Rothschild's Fiddle（「ロスチャイルドのバイオリン」）、A Father（「父」）、Two Tragedies（「敵」）、Sleepyhead（「ねむい」）、At the Manor（「地主屋敷で」）、An Event（「大事件」）、Ward No. 6（「六号室」）等の12部の小説を収録している。この目録によると、『域外小説集』に収録されている周作人の翻訳によるチェーホフの小説「威施」と「塞外」両作品の英語版が見つけることができる。At the Manor（「地主屋敷で」）と In Exile（「追放されて」）である。そのため、周作人はこの英語訳を底本としチェーホフの作品を読んで翻訳した可能性が高いと推測することができる。また、樽本照雄は、論文「吳禱の漢訳チェーホフ」においては、薄田斬雲が『太陽』雑誌に発表した訳作「黒衣僧」の底本を確認した。この底本は英訳小説集『黒衣の僧』の The Black Monk であることを確認した。²⁰²即ち、中国で初めてチェーホフの小説を翻訳した吳禱は、薄田斬雲の「黒衣僧」によって小説「黒衣教士」に訳されたもので、これはこの英訳小説集が中国でチェーホフの翻訳に間接的に影響したことを証明している。

この英訳本には小説 An Event（「大事件」）の英語版が収録されており、これは周氏兄弟が日本留学時期に小説「大事件」の英訳本を手に入れていたことを意味している。した

がって、上述の9部の「大事件」の日本語訳本のほかに、ロングが翻訳した英訳本『黒衣の僧』も魯迅がチェーホフ小説「大事件」に接触するもう一つの道である。

三宝政美の「中国におけるチェーホフ——1920年代の翻訳・紹介を通して」の調査によると、小説「大事件」が最初に中国語に翻訳されたのは1921年4月で、『婦人雑誌』7巻5号に掲載され、訳名は「小猫」で、訳者は克斎である。²⁰³魯迅の小説「あひるの喜劇」（8巻12号）、「幸福な家庭」（10巻3号）、雑文「ノラは家を出てからどうなったか」（10巻8号）、訳文「魚の悲しみ」（「魚的悲哀」）（8巻1号）、「ごく短い小説」（「一篇很短的伝奇」）（8巻2号）、「ひよこの悲劇」（8巻9号）（「小鶏的悲劇」）などの多くの作品が『婦人雑誌』に掲載されており、魯迅も『婦人雑誌』を通して「大事件」という作品に触れる可能性があることを明らかにしている。

以上の調査から分かるように、明治期の文芸雑誌に頻繁に登場する日本語訳の「大事件」やロングが翻訳する『黒衣の僧』に収録されている英訳本「大事件」、はじめて中国語に翻訳された『婦人雑誌』に掲載される「大事件」は、すべて周樹人が接触できるテキストである。そのため、チェーホフに関心を持っていた魯迅が、「大事件」という小説に接触して読んだ可能性が高いと推測することができる。

第四節 チェーホフの「大事件」と魯迅の「兎と猫」の類似性

『晨報副刊』（1922年10月10日）に掲載された魯迅の小説「兎と猫」は現在まで殆ど研究者に重視されていない作品である。この小説が発表されてしばらく後、魯迅は自らこの作品を日本語に翻訳し、藤原鎌兄が主宰する『北京週報』第47号新年特別号（1923年1月1日）に掲載された。²⁰⁴これは恐らく魯迅の生涯において、唯一自分の小説を翻訳したもので、当該作品は後、1923年8月北京新潮社より出版された小説集『呐喊』に収録された。周作人は『「呐喊」衍義』で、「兎と猫」に対して殆んど説明をしてない。（原文は「「兎と猫」について、私は特に説明したいことはない」）²⁰⁵。李長之（1910-1978）は「「兎と

猫」は、すばらしい芸術品とは言い難い」と評価している。²⁰⁶竹内好は「兎と猫」は、「「抒情的」が身边雑記的になった」小品だと考えている。²⁰⁷銭理群は中国の中学生、小学生が「「兎と猫」を読んで魯迅の広い心を感じ取れるのである」とすすめている。²⁰⁸「兎と猫」の作品思想の研究については、論争の用地がないが、作品の創作動機については、これまでの研究が殆んど触れられていない。管見の限りでは、胡徳才がこの問題を取り上げて考察している。胡徳才は「兎と猫」の物語の筋立てと配置、主人公の設置と表現手法の運用は明らかにエロシエンコの童話の影響の痕跡があると考えており、魯迅の「兎と猫」とエロシエンコ（1890-1952）の「ひよこの悲劇」の比較研究を行っている。²⁰⁹しかしながら、筆者は魯迅のチェーホフ閲読史を通じて、作品の内容と粗筋からみれば、チェーホフの「大事件」と共通性が多い。そのため、本論はチェーホフの小説「大事件」は魯迅が小説「兎と猫」を創作するときの一つの参考素材であると推測している。

チェーホフの「大事件」は1886年11月24日に「ペテルブルグ新聞」第323号『エッセイ』に発表され、1887年ペテルブルクで出版されたチェーホフ小説集『暗闇の中で』に収録された。²¹⁰筆者は、「大事件」と「兎と猫」というこの2篇の小説を閲読することを通じ、この2篇の作品が物語の内容とプロットの発展上で、高度な類似性があることを発見した。

1. 粗筋

「大事件」は主に六歳の男の子ワーニャと四歳の女の子ニーナが家の母猫が三匹の子猫を生んだことに気づき、それに対して非常な興味を抱いたことを述べている。彼らは子猫の誕生は人生の最優先事項と見なし、普通していることや遊びを忘れてしまった。しかし、子猫は父親に嫌われ、父親は子供たちが家で子猫を育てることを厳しく禁じ、結局、子猫たちはすべて、叔父に連れてきた大きな黒犬に食べられてしまい、二人の子供は悲しく泣いたが、大人たちは子猫が死んだことについては無関心だった。

魯迅は小説「兎と猫」で以下のように描写している。屋敷の奥の三太太(第三婦人)は対の白兎を買って、子供に見せようとしたが、ほどなく子ウサギを生み、近隣の人を惹きつ

け、見に来てきて、家がにぎやかになってしまった。しかしその直後、三太太は二匹の小さな兎が黒猫に食べられたことを発見したのである。その結果、作者は小さな生命を失ったことに感慨を持ち、創造主は「実際あまりにも無造作に生命をつくり、またあまりにも無造作にこわすことだ」²¹¹と考えた。

小説の内容からみると、二つの作品の最大の類似点は、作品の中の小動物の出現である。「大事件」は、子猫が子供に愛され、大切にされる過程から、大きな黒犬に食べられるまでの過程を示し、「兎と猫」は、小さな兎が子供に愛され、大きな黒猫に食べられるまでの過程を示している。何れも鮮やかな言葉を使い、小動物のリアルな表情や子供たちの内面の変化を表現している。

2. 筋の展開

「大事件」の筋の展開は、主に二人の子供と子猫の関係を中心に展開している。まず、ワーニャとニーナの二人の子供は子猫の誕生に興味津々で幸せだった。しかし、大人たちは子供たちのこの童心から出る好奇心と喜びに対し冷淡に扱っており、子猫を捨てたいとさえ思っていた。二人の子供にとって、「子猫たちは、この世に生まれてきたことによって、まるでホット・ニュースか、焦眉の問題のように、他の一切のものを陰に押しやり、前面に進みでてきたのだ」²¹²。しかし、二人の子供が、叔父に、叔父の勧めで両親に子猫を子供部屋に運んで住むようになることを心から頼んだ時、子猫は叔父が連れてきた大きな黒犬に食べられたのである。悪い知らせが来ると、子供たちは涙を流したが、大人たちは落ち着いて、大きな黒犬の食欲に驚き、笑いさえしたのである。小説の粗筋は複雑ではない。子猫の誕生に対する子供の好奇心と喜びから、子猫の為に父親の怒りを買って、子供は怒られ、そして最後に子猫が黒犬に食べられたことに対する子供と大人の全く違う反応を描いている。要するに、この小説は子供の視点から「子猫が大きな黒犬に食べられた」という物語である。

「兎と猫」の粗筋は、主に作者の角度から観察した一対の白兎の子ウサギの誕生成長か

ら、大きな黒猫に食べられるまでの過程を中心に展開している。作品の筋の展開からいうと、二つの小説の最大の類似点は小動物の兎と猫を対象として、小動物の誕生から大きな黒犬または大きな黒猫に食べられるまでの過程を通して、それぞれに作者が述べたいことを表現している。

二つの小説はストーリーの内容とプロットの展開は似ているが、作品の主旨は異なっていることを指摘しておく必要がある。チャーホフは、子猫が生まれてから食べられるまでの過程を通して、「子供たちの教育や生活において、家畜というものはほとんど目につかぬ程度にはあるが、疑いもなく有益な役割を演じているものだ」と説明することに焦点を当てる。彼は次の例を挙げて説明している。

われわれの中で、逞しい、が大らかな牡犬や、部屋住みの狆や、籠の中で死んで行った小鳥や、バカなくせに高慢ちきな七面鳥や、われわれが気晴らしに尻尾を踏んでひどく痛い目に合わせても、許してくれるやさしい猫のおばさんなどを、おぼえていない者があるだろうか？わたしには時折り、これら家畜に本有の忍耐心や、忠実や、寛容や、誠意などの力は、蒼白いしなびたカルル・カルロウィチの長たらしいお説教だの、水は酸素と水素から成り立つことを子供らに証明しようと努める女家庭教師の、要領を得ぬ長広舌などよりも、よっぽど強く効果的に子供の心に作用するのではないか、という気がすることさえあるほどだ。²¹³

(「大事件」、神西清訳)

この小説は正に両親、叔父など大人等の家畜に対する冷淡で無関心な態度を通して、子供たちの独特の質素を描写し、それと同時に、大人が子供の無邪気さを抑えていることも側面から示している。そして、「兎と猫」においては、兎の誕生から食べられるまでの過程を通して、「生命」についての作者の見解を次のように示している。

夜半、灯の下で考える。あの二つの小さな生命は、誰にも知られぬままに、いつとも知れず失われてしまって、生物史上になんの痕跡ものこしていない。エスさえ一声も吠えなかった。そこで、昔のことを思い出す。以前、私が会館に住んでいたころ、朝早く起きると、大きな槐の木の下一面に鳩の羽毛が散らばっていた。明らかに鷹の餌食になったのだったが、午前の雑役が来て掃除してまえば、跡かたもなくなり、ここで一つの生命が断たれたことなど誰も気づきはしない。また西四牌楼を通過して、一匹の小犬が馬車に轢かれて死にかけているのを見たこともあった。帰りには、何もなくなっていた。片づけてしまったのだろう。通行人がしきりに行きかっていたが、そこで一つの生命が断たれたことなど誰も知りはずまい。夏の夜、窓の外で蠅のジージーと長く引く声が聞こえるが、あれはきっと蠅取り蜘蛛にかみつかれたのだったろう。しかし私は、これまでそれを心にとめたことはなかったし、他の人は耳にさえしなかったろう……

もし造物主も責められるべきであるとすれば、実際あまりにも無造作に生命をつくり、またあまりにも無造作にこわすことだ、と私は思う。²¹⁴

(「呐喊・兔と猫」、丸山昇訳)

この一節は、魯迅の友人である許寿裳に「二匹の小さな白い兔が消えたので、次のような悲しい言葉を言った」、「このところを通して、魯迅の偉大な心を見ることができる」²¹⁵と評価されている。この描写は魯迅が生命への配慮を反映していると学者によって常に考えられた。²¹⁶許寿裳が述べた通りに、「彼は人間の生命を尊重し、保護するだけでなく、小動物の生命にも大事に扱うことである」²¹⁷。

上記の分析に基づき、筆者は閲読の手順または小説のプロットの類似性から見ると、魯迅がチェーホフの「大事件」を読んだ可能性が非常に高いと考えている。また、以上で述べたように、日本に留学していた時期に周樹人の周辺に存在した日本語訳のチェーホフの

小説を調査したところ、小説「大事件」は明治期に日本の翻訳者によって非常に重視されていたことがわかり、当該作品は当時9回も翻訳され、この作品は当時、周樹人が注目していた文芸雑誌に数多く掲載されている。その上、英語訳の「大事件」と最初の中国語訳の「大事件」も魯迅の周辺に存在している。魯迅は「兎と猫」を創作する前に、チェーホフの「大事件」を読んだ可能性が高いと推測できる。

「大好きな作家」として、チェーホフの小動物が生まれてから食べられるまでの描写過程が、魯迅を引き付け、感動させた可能性が高い。しかしながら、「兎と猫」と「大事件」の二つの小説の中で、小さな生物の生命の弱さを表現する文章手法は非常に似ていると思うが、二つの小説の中で作者が伝えたい主旨はやはり少し異なっている。小説「大事件」は子供と大人が小動物に対する態度の違いを表現することに重きを置くことである。子供は子猫が来たことを喜び、子猫が黒犬に食べられたことに対しても非常に悲しい気持ちを表しているが、大人が小動物に対する態度はとても冷やかで、子供とは正反対である。チェーホフは「子供たちの教育や生活において、家畜というものはほとんど目につかぬ程度にはあるが、疑いもなく有益な役割を演じているものだ」と考え、子供たちの小さな生命に対する愛を浮き彫りにしているが、大部分の親たちはまったく意識していない。そのため、小説「大事件」は大人が子供の童心の扼殺と損傷に力を入れて表現している。「兎と猫」は主に「私」が二匹の兎が黒猫に食べられているのを見た後、「あまりにも無造作に生命をつくり、またあまりにも無造作にこわすことだ」を改めて考え、「生物史上になんの痕跡ものこしていない」として命を落とした小動物たちに同情し始めている。「兎と猫」は小さい生物、小さな生命への尊重を反映しているが、「大事件」の中で子供の童心を傷つける部分を反映していない。しかし、魯迅のもう一つの作品「凧」（散文詩集『野草』に収録）のテーマは「大事件」と似ている。子供に対しての「精神虐殺」の物語も述べる。ただ、「大事件」は大人と子供の子猫に対する態度の違いで、大人の無関心と子供の愛情を表しており、「凧」は、だらしのない凧好きの弟に対する兄のお仕置きを通じて、

弟の童心を扼殺する兄の姿を表している。「大事件」は子供の天性を象徴する小動物を選んでいるが、「凧」はおもちゃで子供の天性を象徴している。

「大事件」と「兎と猫」は共に短くて深い小説である。以上の調査と分析を通して、チャーホフの小説「大事件」は魯迅の「兎と猫」の参考になる素材の一つだと考える。特に「大事件」では小動物が大動物に食べられる部分、小動物の生死に対する態度を描写した部分が魯迅の創作「兎と猫」にインスピレーションを与えたと推測している。しかし、魯迅は「大事件」のテーマを完全に模倣することではなく、小動物が大動物に食べられたという部分を参考にして、これを借り、小さな生命が簡単に失われることへの感慨を訴えており、同時に、より多くの人々に、小さな生命に注目し、すべての個人に注目するよう呼びかけている。

第六章 留日時期から注目していたロシアの小説家

明治期におけるコロレンコとゴーリキーの翻訳・紹介と周樹人

はじめに

コロレンコとゴーリキーは周樹人が留日時期から注目していたロシアの小説家である。本論では、留学時期の周樹人におけるコロレンコ、ゴーリキーの受容について考察する。まず、明治期におけるコロレンコの受容を整理し、小山内薫が雑誌『新小説』で発表した評論「露国の小説家ウラヂミール・カラレンコ」が魯迅の「摩羅詩力説」のもう一つ材源であることを明らかにする。この評論の中で、コロレンコの小説「末光」についての紹介はちょうど魯迅の「摩羅詩力説」の結論部分が参照した内容である。この材源の発見は留日時期の魯迅が明治期の刊行物の外国文学の評論や翻訳を通して、自らのテキストに引用したことを呈して、「魯迅とコロレンコの関係」という課題の研究、ひいては留日時期の魯迅と外国文学、とりわけロシア文学の受容という研究に資するものであると考える。それから、先行研究を踏まえて、明治期におけるゴーリキーの受容を整理し、明治期におけるゴーリキー文学、ニーチェの超人主義と周樹人の関連を補足する。

第一節 明治期におけるコロレンコの翻訳・紹介と周樹人

1. 先行研究

コロレンコ²¹⁸は魯迅が留日時期から注目していたロシアの小説家である。魯迅は「文芸と革命」で次のように語っている。「外国では、革命軍が興る以前に国を追われたルソー、極辺の地へ流されたコロレンコがいた……」²¹⁹「中国とロシアの文字の交りを祝す」で「コロレンコから寛容を学び」と述べている。²²⁰魯迅が書き残したテキストの中で、最初にコロレンコに言及したのは1908年の「摩羅詩力説」である。魯迅は留日時期の1908年、筆名「令飛」を使い、清国留学生が主宰する雑誌『河南』第2期、第3期に文学論「摩羅詩力説」を発表している。「摩羅詩力説」は魯迅の初期文学観形成の重要な文献として、

研究者に重視されてきた。「摩羅詩力説」の第九章の後半部分は全篇に対しての総括である。周樹人は当時の中国で「精神界の戦士」が足りないことを痛感していた。たとえ「精神界の戦士」を生まれて出ても衆人に扼殺されてしまうことを免れない。これによって、周樹人は中国の「蕭条」状態に対して楽観的な考え方を持っていない。また「次なる維新の声が、もう一度上がるであろうことも、先の維新に照らして疑いがない」と断言した。全篇の結論部分に、周樹人はロシア作家コロレンコの小説「末光」²²¹のあるプロットを引用し、当時の中国精神界の「蕭条」状態をたとえた。この引用されたコロレンコのテキストは伊藤虎丸によれば、魯迅の初期評論の「寂寞と慨嘆を表す」モチーフの代表例である。²²²まず、原文の叙述を下記に引用する。

ロシアの文学者コロレンコ (V. Korolenko) の「最後の光」に、シベリアで老人が子供に読み方を教えている場面がある。本には桜やうぐいすが出てくるが、シベリアは氷に閉ざされた厳寒の地であるため、このようなものはない。老人はそこで、「この鳥は桜の木に止まって、首をのばして美しい声で鳴くのだよ」と説明して聞かせる。すると子供は、じっと考えこむ。如何にも、子供は蕭条の中にいて、その本当の美しい声を聞くことはできぬが、先達の解説を聞くことはできたのである。だが、わが中国には、蕭条を破るその先達の声さえない。然れば、われらにあってはじっと考えこむばかりなのか、やはりただじっと考えこむばかりなのか。²²³

この論述はこれまでに知られていた魯迅とコロレンコの作品が関係を構成している最初の証拠である。周作人の回想によれば、魯迅は留日時期にコロレンコを特に好んだという。²²⁴その他、周氏兄弟が共訳した『域外小説集』第二冊の「新訳予告」の中にもコロレンコの小説「海」と「林籟」を翻訳の計画があった。²²⁵ここから推測できるのは、留学時期の周樹人がコロレンコについての文学作品、評論を読んだ可能性が大きいということである。

「魯迅とコロレンコの関係」という課題についての先行研究は極めて少ない。管見の限りでは、周新萍の論文「魯迅とコロレンコ簡論」（「魯迅与柯羅連科簡論」）のみが二人の作家の関係を検討している。²²⁶ただし、この論文では「摩羅詩力説」で引用したコロレンコの作品の材源に言及していない。本論は明治期におけるコロレンコを受容を整理し、「摩羅詩力説」で引用したコロレンコの作品の材源を考察するつもりである。

2. 明治期におけるコロレンコの紹介と周樹人

ここで、コロレンコについて簡単に紹介しておく。コロレンコはロシアの小説家、評論家である。裁判所官吏を務める貴族の子として、ウクライナのジトミールに生まれた。ペテルブルグ工科大学、モスクワの農業大学に学んだが、ナロードニキ運動に参加して、追放、逮捕、流刑され、転々としてシベリアの極寒の地ヤクート地方に赴いた。その間に小説を書き始め、1883年、『マカールの夢』によって作家としての地位を獲得した。1906年からペテルブルグに住み、ナロードニキの雑誌『ロシアの富』を主宰した。²²⁷明治期におけるコロレンコについての評論文章は、筆者の調査する限りでは、以下の6点がある。

- ①「誰か果してトルストイ伯の後継者たる可きか」、『帝国文学』第9巻第2号『海外騒壇』（明治36年2月、1903）。
- ②小山内薫「露国の小説家ウラヂミール・カラレンコ」、『新小説』第11年第12巻（明治39年、1906年）、7-17頁。
- ③昇曙夢「コロレンコの傑作」、『露西亜文学研究』に収録する。明治40年（1907）12月、隆文館。
- ④二葉亭四迷「露西亜文壇の傾向」、『キヌタ』（明治41年4月1日、1908年）。
- ⑤山田松濤「チェホフとコロレンコ」、『新小説』第14年第3巻（明治42年3月、1909年）。
- ⑥「露国の文学」『太陽』第16巻第2号（明治43年、1910年）。

これらの評論文章を照らし合わせると、筆者は「摩羅詩力説」におけるコロレンコ作品に関する材源は小山内薫の評論文章「露国の小説家ウラヂミール・カラレンコ」であると考える。「摩羅詩力説」の第九章における引用したコロレンコの作品の材源は次の通りである。

『終りの光』は西伯利亞に流された貴族の裔なる老人と其孫が日出を見る所を叙した、美しいスケッチである。淋しき西伯利亞の夜、老人が孫に読本を教へてゐる處などは、何とも云へぬ書振りである——ドオデエも『老人』と云ふ短編に、四辺の寂莫たる中に、小児が声を上げて本を読む處を書いて成功して居るが、彼とは又別の味が——「ナイチンゲール」と云ふ鳥の名が読本に出て来た、西伯利亞に育った少年は此美しい鳥の名を知らない、『ナイチンゲールって、何?』と訊く、『鳥ぢや』と老人が答へる。聽て又『桜の樹』と云ふ字が出て来た、少年は又『何?』と訊く、『樹ぢや、其鳥が其樹に留るのぢや。』『留るの?何故?大きい鳥なの?』『小さな鳥ぢや。美しい声で歌ふぞ。』『美しい声で歌ふの?』少年は読むのを止めて暫し思に沈む。²²⁸ (下線、引用者)

この評論は主にロシア作家コロレンコの生涯と代表作品を紹介している。「摩羅詩力説」の第九章における引用した材料はちょうど小山内薫がコロレンコの小説「末光」を紹介したところである。

管見の限りでは、小山内薫のこの文章は明治期における最も早く、最も全面的にコロレンコを紹介する評論である。この評論は1906年1月に発行する雑誌『テムブル・バア』(Temple Bar)でジー・エッチ・ベリス(G. H. Perris)という作者の論文に基づいてまとめた。雑誌『新小説』第11年第12巻7-19頁に発表し、この文章の7-9頁は大体19世紀以来のロシア文学の発展状況を紹介した。「露西亜文学史の暗夜は一百年の永きに続いた」と言い、プーシキン以来、ロシア文学は「始めて国民文学は広い穏やかなものとなるので

ある。ここに至って露西亜文学は唯に特質ある文学としてのみならず、幽囚時代の露西亜魂の剛胆、柔和、勇気等の雄弁なる証言として存在するであらう。ウラヂミール・カラレンコは上に述べた二つの時代を連ぐ鎖と見做して可からう」。さらにコロレンコの生涯を紹介した。主に彼の流刑経験を紹介した。1881年新帝アレクサンドル3世への忠誠の誓いを拒んで東シベリアのヤクート地方へ流刑した。流刑時期におけるコロレンコは『マカルの夢』、『サハリエンの一罪囚』、『終りの光』等のシベリアの流刑経験をテーマとして描いた。小山内薫はこの時期の創作のため、コロレンコは「忽ち露西亜現代作家の第一流の登った」と評価した。文章の12-18頁で主にコロレンコの代表作品『盲楽人』、『二つの心』、『マカルの夢』、『西伯利亜旅行日記』、『サハリエンの一罪囚』、『終りの光』等を紹介した。その中で、コロレンコの代表作『マカルの夢』を紹介した。小山内薫は「『マカルの夢』が始めて世に出た時は、トルストイが『我が懺悔』や『我が宗教』を以て公衆を悩ましてる時であった、ガルシンの『赤き花』が社会のヒステリアをして愈々重態に陥らしめた時であった」²²⁹を評価したことから、筆者は周氏兄弟がこの文章を通して初めて『マカルの夢』という作品を知ったと推測している。「魔羅詩力説」の材源はこの文章の第17頁で『終りの光』についての紹介部分である。

この材源を掲載した雑誌『新小説』は明治期における文芸雑誌である。日本近代文学館編『日本近代文学大事典・第五巻』によれば、この雑誌は出版時期から2期に分けられる。第1期は明治22年(1889)1月から明治23年(1890)6月まで、第2期は明治29年(1896)7月から大正15年(1926)11月までである。第1期は春陽堂主和田篤太郎の依頼をうけて雑誌刊行の準備を進めていた須藤南翠が、新聞の仕事などに追われているうちに、明治21年(1888)10月、金港堂から山田美妙(1868-1910)主宰の『都の花』が出版されてしまったため、先手を取られた春陽堂は、とりあえずこれに対抗すべく旧作をあつめて『小説萃錦』を刊行し、あらためて、新作をうたい『新小説』を刊行した。第2期は当時出版界の雄であった博文館が、日清戦争の時運に乗じて『太陽』や『文芸倶楽部』を創刊したのに

刺激されての発刊だが、おおかたの書肆が旧作家の作しか採らなかった情勢の中で、多く
新作家を登用することをもって特色とした。編集は幸田露伴（1867-1947）、石橋忍月
（1865-1926）、後藤宙外（1867-1938）等が担当する。泉鏡花（1873-1939）の「高野聖」
や田山花袋（1871-1930）の「布団」等名作は『新小説』で発表した。²³⁰『新小説』は数多
くの日本文学を発表したばかりでなく、多くの外国文学の紹介や翻訳も刊行していた。そ
の中で、ロシア文学が大きな比重を占める。例えば、尾形国治は不二出版の「『新小説』
解説・総目次・索引」で『新小説』に掲載する外国文学の紹介について次のように述べて
いる。「昇曙夢がゴゴリの小品を紹介し（明治36年3月）、アンドレーエフをとり上げ
（明治43年7月-8月）、小山内薫がコロレンコを論じ（明治39年12月）、上田敏がイブ
センを論じ（明治40年3月）、八杉貞利がツルゲーネフの「ルージン」を紹介、論じてい
るのも、この頃である（筆者による：この頃は明治30、40年代）」²³¹。

『新小説』に掲載するロシア文学の紹介文章を除き、ロシア文学の翻訳も周樹人が当時
に注目した内容の一つである。姚錫佩の実証的研究によって、周樹人は留日時期で雑誌『新
小説』から4篇のロシア小説を集めた、という事実が明らかにされている。竹内良雄は魯
迅が留日時期における日本の雑誌からたくさんの外国小説を集めたという事実に基づき、
魯迅が利用した明治期の文芸雑誌に発表した外国小説を統計した。²³²とりわけ『新小説』に
掲載した外国作品の作者ツルゲーネフ、チェーホフ、トルストイ、ガルシン、プーシキン、
アンドレーエフ、シェンケヴィチ、ゴーリキー、モーパッサン等は何れも魯迅が留学時
期に非常に注目した作家である。例えば、『域外小説集』に収録したガルシンの「四日」、
²³³シェンケヴィチの「灯台守」、²³⁴チェーホフの「塞外」²³⁵等作品、何れも『域外小説集』
が刊行するまで『新小説』で日本語訳を発表した。このほか、最先端的研究によって、魯
迅の「狂人日記」を影響するゴーリキーの「二狂人」も『新小説』に掲載した。²³⁶

以上の事実が明らかにしたのは、『新小説』に掲載したロシア文学の紹介と翻訳は留日時期の周樹人にとって不可欠な文芸資料である。小山内薫のコロレンコ論もその中の一点のものであるということである。

前出の『日本近代文学大事典』に基づき、材源の作者小山内薫を簡単に紹介しておく。小山内薫は日本近代の出演家、詩人、小説家、劇作家、演劇評論家である。明治14年(1881)に陸軍軍医正の長男として広島に生まれた。周樹人と同じ年である。明治35年(1902)東京帝大英文科入学、森鷗外主宰の『万年草』にメーテルランクの『群盲』などの翻訳をよせて認められた、鷗外の観潮楼に出入りするうちに、鷗外の弟の三木竹二や伊原青々園、それに新派の伊井蓉峰らを知るにおよんで、演劇への興味は急速にたかまった。さらに明治37年(1904)『帝国文学』の編集委員となり、「鸚鵡公」の筆名で劇評をはじめ、「なでしこ」の筆名で処女劇曲『非戦闘員』を発表した。明治42年(1909)市川左団次と共に自由劇場を組織、新劇の開拓に努め、大正13年(1924)土方与志と共に築地小劇場を創設、表現派やゴーリキー、チャーホフらの劇曲を上演した。²³⁷

以上、「摩羅詩力説」におけるコロレンコの作品についての材源を確認したが、次に周樹人はなぜ、どのようにこの小山内薫の文章を引用したのかについて自分の考えを以下に述べる。まず、周樹人のコロレンコの「末光」についての論述と小山内薫の「末光」についての紹介を比較し、周樹人の引用部分と小山内薫の文章で使ったものが一致しているかどうかを検討する。小山内薫の「露国の小説家ウラヂミール・カラレンコ」によれば、「末光」と「西伯利亜旅行日記」、「サハリエンの一罪囚」等はすべてシベリア生活を描く作品である。小山内薫は「末光」に対する紹介で主に老人と子供の会話を描いている。周樹人が引用した内容は、本論の第二章で小山内薫が「末光」を紹介した部分である。小山内薫の「末光」を紹介した部分が周樹人の心に大きな印象を焼き付けた。これによって、周樹人はコロレンコの作品「末光」に注目し、またこの部分を「摩羅詩力説」の結論部分に反映していた。だが、周樹人はこの部分を小山内薫の文章を単にそのまま訳したのではな

く、ここに自分の考えを述べたのである。これは「摩羅詩力説」第九章の後半部分にあらわれている。

周樹人は「摩羅詩力説」第四章から第九章の前半部分までバイロン、シェリー、プーシキン、レールモントフ、ミツキェヴィッチ、スウォヴァツキ、クラシンスキ、ペターフィ等の「摩羅詩人」を紹介し、第九章の後半部分で全文をまとめた。まとめの一つの要点として、当時の中国に対する以下の問題を提起した。「いま、中国において、精神界の戦士たるものはいずこにいるであろうか。至誠の声をあげ、われらを、善、美、剛毅に導くものがあるだろうか。あたたかき声をあげて、われらを荒涼たる寒冷より救い出すものがあるだろうか。国はかくも荒廃した。しかも、賦して天下に訴え後世に遺したエレツヤの如き、最後の哀歌すら、いまだ生まれ出ていない。生まれぬのではない。生れで出でても衆人に扼殺されてしまうのだ。そのいずれか一方、あるいは両方を兼ねているならば、中国は遂に蕭条となる」²³⁸。周樹人はこの段落で、「精神界の戦士」が少ないまたは「精神界の戦士」が「衆人に扼殺された」ので「中国が遂に蕭条」であるという観点を述べている。

「蕭条」という言葉は「摩羅詩力説」第一章の始まりのところでも使用されている。周樹人は「古代国家の文化史をひもとく者は、時代を下り巻末に至るや、必ず凄然たる思いに襲われるであろう。あたかも春暖より秋冷に入るが如く、いのち萌え立つ兆しなく万物みな枯れるさまを、何と言うべきか、しばらく蕭条と言っておこう」²³⁹。ここに見えるのは、「蕭条」は清国留学生周樹人が当時の中国に対する印象を表したキーワードの一つである。「摩羅詩力説」の最後の段落だけで、「蕭条」という言葉が4回も使われている。また、「蕭条」と似ている言葉「荒寒」、「荒」等もしきりに出現している。これは伊藤虎丸が指摘した内容である。魯迅の初期評論のモチーフは「寂寞と慨嘆を表す」である。「摩羅詩力説」の例以外、伊藤虎丸は「破悪声論」の「心声」の失われた嘆きをあげた。²⁴⁰

周樹人は当時の中国の蕭条状況に対する寂寞と慨嘆を明らかにした後で、彼が「摩羅詩力説」の結論部分でコロレンコの商品「末光」の老人と子供の会話を引用したことは、彼

の意図をより明確にしている。周樹人は文学作品の具体的な例を通して当時の中国の蕭条たる状況を表現したいと考えたのである。作品の場面はシベリアである。厳しく寒い風景は、蕭条の場面と一致している。そして、シベリアで生まれた子供が「桜の木」や「うぐいす」が分からないように、蕭条たる環境における当時の中国人は「摩羅詩人」や「精神界の戦士」の新文化、新思想が聞こえないのである。趙瑞蕪（1915-1999）は「摩羅詩力説」の結論部分を次のように評価した。「この結論部分はよくまとめられていて、絶妙な構想といえよう。深い感情が溢れている。真実に生き生きして二十世紀の初期における一人の中国を愛する若い知識人の深く考え込みの面影を描き出している。また、もっと大事なのは、魯迅が「好音」と「先覚」の熱烈な憧れを表し、「中国の蕭条」を恨みながら「中国の蕭条」を破る道を探しつつある」ことである。²⁴¹筆者はこの指摘が極めて重要であることと考えたが、既にみてきたように、この引用の材源が明らかになった以上、この結論部分について次のように述べている。この結論部分は小山内薫がコロレンコの作品「末光」を紹介した部分を周樹人が巧みに引用した部分である。シベリアで生まれた子供が「桜の木」や「うぐいす」を分からずに、蕭条たる環境における当時の中国人が「摩羅詩人」や「精神界の戦士」の新文化、新思想を聞こえないという例えを使い、自分の論点を強調していた。この引用の次に、周樹人は「摩羅詩力説」の最後で自分の優れた慨嘆を表した。「如何にも、子供は蕭条の中において、その本当の美しい声を聞くことはできぬが、先達の解説を聞くことはできたのである。だが、わが中国には、蕭条を破るその先達の声さえない。然れば、われらにあつてはじっと考えこむばかりなのか、やはりただじっと考えこむばかりなのか」²⁴²。これこそが周樹人が「摩羅詩力説」で述べたかったことであろう。

3. 明治期におけるコロレンコの翻訳と周樹人

まず、明治期におけるコロレンコの受容を調査する。明治期におけるコロレンコの日本語訳作品は10部である。明治期におけるロシア文学作品翻訳の1.5%に過ぎない。それぞ

れ、明治36年(1903)から45年(1912)まで、コロレンコの日本語訳作品は次の通りである。明治36年内海月杖訳の「堂守」(「年老ひたる鐘楼守」)、明治38年(1905)吉川英男訳の「鐘楼守」(「年老ひたる鐘楼守」)、明治39年(1906)昇曙夢訳の「奇火」(「あかり」)、明治41年(1908)山本迷羊訳の「音楽師」(「盲目の音楽家」)、明治41年(1908)梅宿訳の「マカールの夢」(「マカールの夢」)、明治41年(1908)楠山正男訳の「マカールの夢——聖誕祭の夜がたり」(「マカールの夢」)、明治42年(1909)秋田雨雀訳の「悪い仲間」(「悪い仲間」)、明治42年(1909)松原至文訳の「復活祭の前夜」(「復活祭の前夜」)、明治42年(1909)三津木春影訳の「短日」、明治45年(1912)森鷗外訳の「樺太脱出記」(「鷹の島脱獄囚」)である。²⁴³この10部の日本語訳のコロレンコの作品は『域外小説集』第二冊の「新訳予告」の「海」と「林籟」を含まれていない。これによって、周氏兄弟は日本語で「海」と「林籟」を読んだ可能性を排除することができる。このほか、周氏兄弟が留日期に注目したコロレンコの「マカールの夢」は二種類の日本語訳がある。そのため、周氏兄弟はこの2種類の日本語訳を通して、「マカールの夢」を読んだ可能性がある。

また、崔文東の考証により、周樹人は日本留学時期に、以下のコロレンコの3部のドイツ語訳小説集を集めたことが明らかになった。第一部はDas Meer. In schlechter Gesellschaft. Zwei Erzählungen (Reclam, 1893、中国語訳：『大海、在坏伙伴中：两篇叙事』)である。この中で小説「海」を収録した。第二部はSibirische Novellen (Reclam, 1891、中国語訳：『西伯利亚小説集』)である。第三部はDer Wald rauscht (Leipzig, 1903、中国語訳：『林嘯』)である。小説「林嘯」(日本語訳「森はざわめく」)以外はまた「復活祭の前夜」(In der Osternacht)、「マカールの夢」(Der Traum des armen Makar)等の作品を収録した。²⁴⁴この3冊のドイツ語訳本を通して、『域外小説集』の中で計画的に翻訳する「海」と「林籟」の二つの小説が収録されているので、周樹人は日本留学時期に、主にこの3冊のドイツ語訳を通じて、コロレンコの小説を読んだことが明らかになった。

第二節 明治期におけるゴーリキーの翻訳・紹介と周樹人

1. 先行研究

魯迅は1929年にゴーリキー²⁴⁵の短篇小説「悪魔」を翻訳し、1934年にその論文「私の文学修養」（「我的文学修養」）を翻訳した。1934年9月から1935年4月まで、ゴーリキーの「ロシアの童話」（「俄羅斯的童話」）を翻訳した。1926年に魯迅は董芳秋訳のゴーリキーの小説集『自由をかちとる波』（「争自由的波浪」）に「小序」を書いており、1933年に魯迅は曹靖華（1897-1987）訳のゴーリキーの小説集『一月九日』に「小序」を書いた。魯迅は「「他媽的」について」の中で「Gorkyの小説には無頼漢が多数登場する」と述べており、²⁴⁶「葉紫『豊収』序」の中で「わたし自身は、ボッカチオ、ユゴーの書を読むよりも、むしろチェーホフ、ゴーリキーの書を読みたい」と述べている。²⁴⁷『「自由をかちとる波」小序』の中で「ゴーリキーを描く人生も、やはり生き生きしているが、大半は旧式の出納簿となるにすぎない」と述べており、²⁴⁸「ゴーリキー『一月九日』訳本の小序」の中で、中国の古い知識階級が共鳴できなかった理由について、次のように紹介している。

ツルゲーネフ、チェーホフといった作家が中国の読書界で大いに称賛されていたころ、ゴーリキーに注意をはらう人はあまりいなかった。たまに一、二篇の翻訳があっても、彼の描いた人物が変わっているからというだけにすぎず、決して何か重大な意味があると考えてのことではなかった。

この原因は、今では非常にはっきりしている。彼が「底辺」の代表者で、プロレタリアートの作家であったからだ。彼の作品に対して、中国の古い知識階級が共鳴できなかったのは、まことに当然のことである。²⁴⁹

以上のテキストを通して、魯迅がゴーリキーを重視した一つの重要な原因として、ゴー

リキーの作品の中で多くの下層人物を描いていることが挙げられる。魯迅はゴーリキーとトルストイが自分の文学創作に対する影響はあまりないと述べたが、²⁵⁰魯迅が収蔵している多くのゴーリキーの訳本からみれば、魯迅はゴールキーの文学作品に関心を持ち続けている。

魯迅は日本留日の時にゴーリキーの文学作品に注目しはじめた。彼の日本留学時期に創作と翻訳のテキストには、ゴーリキーを専門的に紹介する文字が残されていないが、周氏兄弟が共訳する『域外小説集』でチェーホフの作品「塞外」を紹介した時に、ゴーリキーの名前に言及した。「塞外」という作品は、「綏蒙」の言葉を借りて、不幸な人は絶望から絶に転じ、蓋もロシア民の特性であり、すでに後ゴーリキーの小説の中の人物と似ている²⁵¹。周作人は「魯迅について 其二」で次のように回想している。「ゴルキーはすでに有名で『母』も各種の訳本が出てゐたが、豫才はあまり注意しなかった」²⁵²。周作人の回想からみると、日本留学時期の周樹人は、ゴーリキーにあまり興味を持っていなかったようである。しかし、研究が進むにつれて、周作人のこの回想はその後の研究によって徐々に修正されてきた。まず、姚錫佩が「魯迅が見たゴーリキー」（「魯迅眼中的高爾基」）の中で周樹人が留学時期に6部のドイツ語訳のゴーリキー小説集を買ったことを確認することによって、「20世紀の初めに、魯迅はゴーリキーの作品を捜し求めることに十分注意した」という結論を出した。²⁵³その後、李冬木、汪衛東は二葉亭四迷によって翻訳されたゴーリキーの作品「二狂人」が魯迅の「狂人日記」の創作に影響した重要な材源であることを発見した。²⁵⁴その上で、李冬木は昇曙夢の回想文に基づいて、また日本文壇がニーチェ主義の影響でゴーリキーを迎えることを発見し、ニーチェ、ゴーリキーと周樹人の精神関係をさらに深く考察した。²⁵⁵本論は先行研究を踏まえて、さらに明治期におけるゴーリキーの受容と周樹人のつながりを考察するつもりである。

2. 明治期におけるゴーリキーの紹介と周樹人

ここで、ゴーリキーについて簡単に紹介しておく。ゴーリキーはロシア（ソ連）の作家である。19世紀末から20世紀にかけてのロシア文学界の中心的存在である。文学面だけではなく政治や革命運動に果たした役割も大きく、ソビエト文学の中でも例外的な地位を与えられており、社会主義リアリズムの創始者と呼ばれている。プロレタリア文学というジャンルの文学の開拓者として、ソビエト初期の文学のみならず同時代の世界文学にも大きな影響を与えた。²⁵⁶明治期におけるゴーリキーの受容について、ブルナ・ルカーシュの論文「ゴーリキー文学受容史」を参照して頂きたい。ブルナ・ルカーシュの調査によれば、ゴーリキーが日本に紹介されたのは明治35年（1902）である。この年から、ゴーリキーの経歴、作品の内容、思想、文体の特徴などの評論文が日本の各種新聞と雑誌に掲載されはじめた。とりわけ、『慶應義塾学報』（第50号、1902年3月）に掲載された「露国新文豪マクシム・ゴルキイ（史伝）」と『慶應義塾学報』（第52号、1902年6月）に掲載された「ゴルキイの人世論」は日本で最初にゴーリキー文学を紹介した二つの文章である。また、ブルナ・ルカーシュの調査により、千葉柴草、伊藤撲堂が共著する『ゴルキイ』（1902年6月）は日本で最初のゴーリキーの伝記作品である。その後、ブルナ・ルカーシュは、ゴーリキー作品の翻訳者二葉亭四迷と昇曙夢の業績を紹介し、またゴーリキー文学は明治自然主義と社会主義の二大流派作家に与えた影響を整理した。²⁵⁷

昇曙夢は「ロシヤ文学の伝来と影響（明治胎成期の思出）」で明治期におけるゴーリキーの受容について、こう語っている。

ゴーリキイの名が我が文壇に始めて紹介されたのは明治三十四五年頃で、その頃から既に彼の作品がぼつぼつ翻訳されてゐる。明治三十四五年といへば西紀一九〇一、二年に相当し、恰度ゴーリキイの文名がロシヤ本國で頂點に達して、更に外國までに轟いた頃である。

當時我が文壇はロマンチズム思潮の全盛期で、その一兩年前から高山樗牛・登張竹

風等によってニーチェの個人主義的思潮が盛に宣傳せられ、思想界はまさに狂飆時代を現出した。そしてニーチェ主義の影響の下に個性の発揚、自我の擴充、理想への憧憬といったやうな気持が、新しい生命を文学に注ぎ込んで、個性の覚醒を促して止まなかった。かういふ時代にゴーリキイが迎へられたのは極めて当然のことであらう。我が讀書界は最初から彼をニーチェ流の超人主義の作家として受け入れたのである。²⁵⁸

ブルナ・ルカーシュの調査と同じ、昇曙夢もゴーリキイが最初に日本に紹介されたのは明治35年(1902)であることを指摘した。昇曙夢の回想を通して、ゴーリキイの作品は明治文壇に紹介された時に、「思想界はまさに狂飆時代を現出した」。「狂飆時代」の出現は同時期に起こったニーチェ・ブームに深く関わってきた。昇曙夢は「ニーチェ流」の超人主義作家ゴーリキイが当時の明治文学青年に何をもたらしたかを次のように思い出した。

殊に當時のロマンチックな青年とゴーリキイの間には、その理想に於て、その氣分、欲求に於て相通ずる何物かがあった。彼等はゴーリキイに於て何よりも先づ偉力と勇猛と人生の美とを空想してゐるロマンチストを見たのである。彼の作品の中に新しい世界に對する思想的情熱が大きく波打つてゐるのを感じたのである。彼は最初からその夢と空想と改造の叫びとを以て、退屈な散文的生活の中にその雄々しい姿を現した。それが當時の青年にひどく受けられたのであった。つまり彼等は人間として進むべき眞實の人生と社會とをゴーリキイに於て學ばんとしたのである。²⁵⁹

日本留学時期における周樹人のニーチェへの関心と明治期におけるゴーリキイの受容とニーチェの関連については、李冬木の先行研究を参照して頂きたい。²⁶⁰本論ではさらに昇曙夢のもう一つの文章で、ゴーリキイ文学とニーチェの超人主義の関連については、補足しておく。明治38年(1905)10月、昇曙夢は雑誌『時代思潮』第2巻第21号(明治38年

10月)に「文学者ゴリキイ」を發表し、この文章で次のようにゴリキイ文学とニーチェの超人主義の關係を論じている。

斯の如きは是れゴリキイ派の文学者が試みたる妄想的「超人主義」の一般なり。是れ一は形式的文明に対する思潮の反動に由来するものありと雖も、兎に角斯かる愧づべき現象の生じたるは文壇の恥辱なり。蓋彼等の所謂「超人」の理想なるものは一代の人心を駆りて無辺の倫理的荒野に放つに非ざれば今日の文明社会をして原始の野蛮的状态に立返らしむる所のものなり。²⁶¹

その後、昇曙夢は、とりわけゴリキイの「マーリワ」と「ハンと彼の息子」の二つの小説の例を挙げて説明した。小説「マーリワ」は、放蕩しながらも自分の独立の尊嚴を保つヒロイン「マーリワ」を描いており、彼女と父のワシリ及び息子のヤコフの葛藤を描いている。昇曙夢はこの作品について、次のように評価している。

人生に於て著者の描きし如き事實の存するは吾人も亦之を認む。然れども斯かる純粹の動物的生活を詩化して、之を愛情と自由の広闊なる理想に対する本能的衝動の如く見做すに至りでは一『マリワ』の著者が試みし如く一是れ既に『超人』に対する希求に非ずして、直ちに『非人』に対する傾向と言はざるべからず。²⁶²

また、昇曙夢は「ゴリキイの『超人的』理想は其の『汗の父子』なる小説に於て最も極端に現はされたり」²⁶³と述べている。「ハンと彼の息子」はハンと息子の二人が同じコサックの少女を好きになり、お互いに譲りたくないで、二人は少女を崖から海に落とすことにした。少女は恐れることなく、敢然と海に投げ込まれたが、少女は海に投げ込まれた後、ハンも海に投げ込まれ、永遠に愛する少女に付き添うことを選んだ。昇曙夢は「汗父

子と、ゴサック少女の磐石の如き精神は斯の如し」と思い、「マクシム・ゴーリキイが豪傑主義の理想亦斯の如し」²⁶⁴と述べている。

周氏兄弟が注目しているもう一人の翻訳者二葉亭四迷は、ゴーリキイに対する評論にも注目すべきである。二葉亭四迷は明治38年(1905)から明治40年(1907)までの約3年間に「猶太人の浮世」、「ふさぎの蟲」、「灰色人」、「二狂人」、「乞食」などの5篇のゴーリキイの小説を翻訳している。また、二葉亭四迷は「露国文学談片」(『太陽』、明治40年4月)と「ゴーリキイとアンドレーエフの近業」(『趣味』、明治40年10月)の二つの文章でゴーリキイの代表作品を紹介している。上記に述べた通りに、周作人は「ゴルキイはすでに有名で『母』も各種の訳本が出てゐたが、豫才はあまり注意しなかつた」と述べているが、筆者は「明治翻訳文学年表 ゴーリキイ編」を確認した後、明治期には小説「母」が日本語に翻訳されたことはなかったことを明らかにしていた。しかし、二葉亭四迷は「ゴーリキイとアンドレーエフの近業」では、ゴーリキイの新作「母」について、次のように紹介している。

「母」は材を矢張今日の革命運動に取つたもので、一労働者が時勢に感憤して、革命思想を仲間中へ熱心に宣傳してゐる中に、遂に自分のお袋をも仲間に引張り込んで、親子して、赤旗を押立てて示威運動に出懸ける。その間の曲折波瀾を描いたもので、是れズボールニク、ズナーニヤ(雑誌)に載つてゐるのだが、未完だから此先どうなるか分らない。併し今日まで公にされた部分だけ見ても、小説といふよりは、寧ろゴーリキイの社会主義に小説の衣を掛けたといった方が適當で、ゴーリキイが名を為した傑作チェルカーシなどとは、餘程行方が違つてゐるらしい。²⁶⁵

周氏兄弟が二葉亭四迷の評論文によって、ゴーリキイの作品「母」を初めて知ったかどうかは分からないが、以上の考察を通して、ゴーリキイは「ニーチェの個人主義」を代表

するロシア人の作家として、周樹人の注目を集めた可能性が高い。一例をあげると、1929年、魯迅はゴーリキーの短篇小説「悪魔」を訳した後、「訳者附記」で「悪魔」の創作時間について、以下のように述べている。「本文から想像してみるに、二十世紀の初めのもので、当然社会主義の信者になっているが、ニーチェ色がまだかなり濃厚なときであったと思われる」。²⁶⁶ここから分かるように、20世紀初期のゴーリキーは魯迅に「ニーチェ色がまだかなり濃厚なとき」という印象を残した。

3. 明治期におけるゴーリキーの翻訳と周樹人

「明治翻訳文学年表 ゴーリキー編」によると、明治期における80部のゴーリキーの作品が日本語に翻訳された。これは明治期における翻訳されたロシア文学の12%を占めている。²⁶⁷それぞれ、明治35年无名氏訳の「野菊」（「マカール・チェドラー」）²⁶⁸、明治35年正宗白鳥訳の「鞭の響き」（「結論」）、明治35年无名氏訳の「古王宮」（「ハンとその息子」）、明治35年大塚楠緒子訳の「藻屑」（「ハンとその息子」）、明治35年上田敏訳の「鷹の歌」（「鷹の歌」）、明治35年森しづか訳の「今昔」（「仲間」）、明治35年森皚峰訳の「変物」（「無礼者」）、明治35年桐生悠々生訳の「海の藻屑」（「ハンとその息子」）、明治35年上田敏訳の「老女」（「イゼルギリ婆さん」）、明治35年馬場孤蝶訳の「秋の一夜」（「秋の一夜」）、明治35年長谷川天溪訳の「彼女の恋」（「ボレーシ」）、明治37年徳田秋声訳の「コサックの少女」（「ハンとその息子」）、明治37年栗原古城訳の「行列」（「結論」）、明治37年国府犀東訳の「高原の黑夜」（「曠野」）、明治37年鳥居素川訳の「木賃宿」（「どん底」）、明治38年大島蘭秀訳の「燃える心臓」、明治38年二葉亭四迷訳の「猶太人の浮世」（「カインとアルテム」）、明治38年中尾漕浦訳の「悪魔」（「悪魔に就て」）、明治38年鳥徑訳の「箒木」（「ボレーシ」）、明治38年徳田秋江訳の「ウォルガの河霧」（「筏の上」）、明治38年三津木春影訳の「浪」、明治38年自笑軒不醉訳の「悪魔」（「悪魔に就て」）、明治38年徳田秋声訳の「俠義人」

（「マカール・チェドラー」）、明治39年二葉亭四迷訳の「ふさぎの虫」（「憂鬱」）、明治39年二葉亭四迷訳の「灰色人」、明治39年国木田独歩訳の「人生」（「人生の面前で」）、明治39年徳田秋声訳の「時」、明治39年野上白川訳の「人の命」（「人生の面前で」）、明治39年西村酔夢訳の「ころころ石」、明治39年村上鳥徑訳の「野中の一夜」（「曠野」）、明治39年梧桐夏雄訳の「曠野」（「曠野」）、明治39年明石雨石訳の「悪魔」（「悪魔に就て」）、明治40年幸徳秋水訳の「同志よ」（「同志よ」）、明治40年自笑軒主人訳の「善魔」（「再び悪魔に就て」）、明治40年中村春雨訳の「無法者」（「無礼者」）、明治40年二葉亭四迷訳の「二狂人」（「誤り」）、明治40年中村孤月訳の「彼の少女」（「廿六人一人」）、明治40年瘦迂叟訳の「小猫」（「ザヅウブリナ」）、明治40年AM生訳の「オルロツフ夫妻」（「オルコフ夫妻」）、明治40年馬場孤蝶訳の「あだ枕」、明治40年二葉亭四迷訳の「乞食」（「アルヒーブ爺とレーニカ」）、明治40年中島孤島訳の「堤防工事」（「コレワーノフ」）、明治40年エスエス訳の「姦婦」（「結論」）、明治40年小栗風叶訳の「強き恋」（「マーリワ」）、明治40年エスエス訳の「チェルシカ」、明治41年堺利彦訳の「カムレード」、明治41年深井天川訳の「生命の法廷」、明治41年橋本春雨訳の「驕れる女」（「マカール・チェドラー」）、明治41年昇曙夢訳の「悪魔」（「悪魔に就て」）、明治42年神崎沉鐘訳の「春朝」、明治42年中村孤月訳の「暮れゆく海」（「マーリワ」）、明治42年中村孤月訳の「マルバ」（「マーリワ」）、明治42年平田半四郎訳の「遺伝の罪」、明治42年馬場孤蝶訳の「国事探偵」（「国事探偵」）、明治42年田岡嶺云訳の「三人」（「三人」）、明治42年相馬御風訳の「暑さと寒さ」、明治42年无名氏訳の「奈落」（「どん底」）、明治42年細越夏村訳の「青猫」（「ザヅウブリナ」）、明治42年无繁生訳の「乞食心」、明治42年相馬御風訳の「破れたる堤」、明治42年高瀬精太訳の「情夫」（「ボレーシ」）、明治42年相馬御風訳の『短編六種 ゴーリキー集』、明治43年无名氏訳の「筏師」（「筏の上」）、明治43年本間久訳の「相棒」（「二人泥棒」）、明治43年昇曙夢訳の「どん底」（「どん底」）、明治

43年広島観一訳の「悪魔」（「悪魔に就て」）、明治43年小山内薫訳の「夜の宿」（「どん底」）、明治44年瀬沼夏葉訳の「クリミヤ物語」（「ハンとその息子」）、明治44年仲田勝之助訳の「老婆イゼルギル」（「イゼルギリ婆さん」）、明治44年吉田喜代大訳の「ワーシカの赤ちゃん」（「赤いワーシカ」）、明治44年里見淳訳の「Pogrom」（「Pogrom」）、明治44年吉田兩耳生訳の「お転婆」（「ワレニカ・オレソオフ」）、明治45年林久男訳の「亡霊」、明治45年荒畑寒村訳の「告白」（「懺悔」）、明治45年秦豊吉訳の「太陽の子」（「太陽の子達」）（1912）等である。

以上の整理を通して、以下の二つの作品を注目する必要がある。一つ目は、明治期における5回に翻訳された「悪魔に就て」である。1929年、魯迅は川本正良の訳本をもとにゴーリキーの「悪魔」（「悪魔に就て」）を翻訳した。魯迅は上記の明治期の訳本に基づいて翻訳していないが、しかし、日本に留学していた頃は、「悪魔に就て」の日本語訳に触れた可能性が高いである。

二つ目は、二葉亭四迷が翻訳したゴーリキーの小説「二狂人」（「誤り」）である。上述に述べた通りに、研究者の考察により、「二狂人」は魯迅の「狂人日記」に影響を与えた一つの重要な作品だと考えられる。本論では、二葉亭四迷がなぜ小説の題目「誤り」を「二狂人」に翻訳したのかという問題だけを補足しておく。二葉亭四迷は「小説の題のつけ方」の中で、次のように語っている。

いつかの「二狂人」あれも寧ろ「二人狂乱」とでもした方が好いかも知れぬが、二人狂乱では何だか両花道から所作事でもって躍って出さうで変だから、矢張り「二狂人」として了った。何ちかと云や、ゴルキーの方が骨が折れない。²⁶⁹

周作人は「二葉亭は自らが文人であるゆえに、訳文の芸術性が高く、つまりはより日本化されていて、忠実度では劣る」と述べている。²⁷⁰二葉亭四迷は作品本名の「誤り」を「二狂人」に変えた方法も「日本化」の一例と見られるのである。

第七章 『域外小説集』に登場するロシアの小説家

明治期におけるアンドレーエフとガルシンの翻訳・紹介と周樹人

はじめに

周樹人は日本留学時期から、アンドレーエフとガルシンの作品を読みはじめた。1909年、周樹人はドイツ語の訳本に基づいて、アンドレーエフの小説「謾」、「黙」、ガルシンの小説「四日」を翻訳し、『域外小説集』に収録した。留学後も周樹人は一貫してこの二人のロシアの文学者に関心を抱き続けており、数多くの日本語訳やドイツ語訳を通じて、アンドレーエフ、ガルシンの作品を読み、翻訳していた。とりわけ、魯迅はアンドレーエフの作品が自分の小説の創作に影響を与えたことを何度も述べている。本章では、明治期におけるアンドレーエフ、ガルシン文学の翻訳・紹介の考察を通して、周樹人とアンドレーエフ、ガルシン文学の関わりに着目し、日本留学時期の周樹人のアンドレーエフ観、ガルシン観を考察するものである。

第一節 明治期におけるアンドレーエフの翻訳・紹介と周樹人

1. 先行研究

周樹人は日本留学時期にアンドレーエフ²⁷¹の小説「謾」（「嘘」）と「黙」（「沈黙」）を翻訳し、『域外小説集』に掲載した。また、アンドレーエフの長篇小説「赤咲記」（「血笑記」）も翻訳する予定であった。1921年9月、魯迅はアンドレーエフの「黯澹的烟霧里」（「霧の中」）と「書籍」（「書籍」）の二つの小説を翻訳した。その後、魯迅は自らアンドレーエフの二つの作品「黒假面人」（「黒い仮面」、李霽野訳）と「紅的笑」（「血笑記」、梅川訳）を校正した。周作人も留学時期の周樹人とアンドレーエフの関係についてこのように述べた。「これら多くの作家中、豫才が最も好んだのはアンドレーエフだった。ことによればこれは李長吉を愛することと少し関係があったかも知れない」²⁷²。周樹人は、数多くの日本語訳とドイツ語訳のアンドレーエフの作品を集めて読んだだけでなく、ア

ンドレーエフの写真を北京西三条の「老虎尾巴」の書齋に飾っていた時期もあった。²⁷³アンドレーエフの作品が自分の小説の創作に影響を与えたことは何度も述べている。²⁷⁴

「魯迅とアンドレーエフの関係」という課題について、これまで多くの研究者たちが注目してきた。相浦晃²⁷⁵、谷行博²⁷⁶、王富仁²⁷⁷、藤井省三²⁷⁸、程麻²⁷⁹、竹内良雄²⁸⁰、林敏潔²⁸¹、張麗華²⁸²、梁艷²⁸³、陳紅²⁸⁴、小川利康²⁸⁵、李冬木²⁸⁶、崔文東²⁸⁷などの学者が二人の作家の関係を検討した。その中の多くの学者は、明治期と清末民初におけるアンドレーエフの受容について重点的に調査している。そこで、本論では、先行研究を踏まえて、明治期におけるアンドレーエフの受容を整理し、日本留学時期の周樹人はどのような経緯でアンドレーエフの文学に接触したのかを検討する。

明治期におけるアンドレーエフの受容を紹介する前に、まず周樹人のアンドレーエフ論を整理する必要がある。周樹人は具体的に、以下のようにアンドレーエフの創作特徴について述べている。まず、1909年に出版された『域外小説集』において、周樹人はアンドレーエフの作品は「神秘的にして深い意味を有し、自ら一家を成している」と紹介している。²⁸⁸1921年9月、魯迅はアンドレーエフの小説「黯澹的烟靄里」と「書籍」を訳した後で、「訳者附記」を執筆した。その中で、アンドレーエフの生涯と代表作を紹介し、また、アンドレーエフの創作特徴について、このように述べた。「アンドレーエフの作品には、厳粛なる現実性と、深みと繊細さが常に含まれており、象徴的印象主義と写実主義とを調和させている。ロシア作家の中で、彼の作品のように、内面の世界と外面の表現との差異を融合し、霊肉一致の境地を現出させうる者は一人として存在しない。彼の著作は、象徴的、印象的雰囲気にあふれているが、それでもその現実性は失われていない」²⁸⁹。また、周樹人は1925年9月30日、許欽文（1897-1984）への手紙の中に、アンドレーエフの戯曲「往星中」の内容を紹介し、アンドレーエフの思想の根底は「一、人生は恐るべきものである（人生に対する悲観）。二、理性は虚妄である（理想に対する悲観）。三、暗黒は大きな威力をもっている（道徳に対する悲観）」と述べている。²⁹⁰上記のテキストを通して、周樹人が

アンドレーエフの創作には象徴主義と現実主義があり、神秘性もあり、絶望的で厭世的で悲観的な作家であると考えている。

2. 明治期におけるアンドレーエフの紹介と周樹人

ここで、アンドレーエフについて簡単に紹介しておく。アンドレーエフはロシアの作家である。小官吏の子として、ロシア西部のオリョールに生まれた。モスクワ大学を卒業し、弁護士事務所の助手となった。その傍ら、小説を書き始めた。1905年の革命の際は外国に逃れ、その後フィンランドに住んだ。20世紀初頭、一時期ロシアで最も人気のあった作家で、明治40年代から大正期にかけて日本で多くの翻訳が行われた。²⁹¹ 上述した先行研究を踏まえて、筆者は明治期におけるアンドレーエフとその作品を紹介した以下の20篇の評論文を整理した。

- ①上田敏「鏡影録」、『芸苑』巻第8、明治39年8月。
- ②長谷川二葉亭「ゴーリキーとアンドレーエフの近業」、『趣味』2巻10号、明治40年10月。
- ③昇曙夢「アンドレーエフの傑作と人生観」、『早稲田文学』27号、明治41年2月。
- ④二葉亭四迷「露西亜文壇の傾向」、『キヌタ』、明治41年4月。
- ⑤昇曙夢「露国文壇の新傾向」、『文章世界』3巻11号、明治41年8月。
- ⑥エリセイエフ「最近の露国文壇」、『趣味』、明治42年1月。
- ⑦昇曙夢「最近の露西亜文壇」、『学灯』13年2号、明治42年2月。
- ⑧相馬御風訳「アンドレーエフ論」、『早稲田文学』40号、明治42年3月。
- ⑨小宮豊隆「レオニド・アンドレーエフ論」、『ホトトギス』12巻7号、明治42年4月。
- ⑩昇曙夢「露国新進作家自叙伝」、『早稲田文学』45号、明治42年8月。
- ⑪昇曙夢「露国文学に於ける狂的分子」（上）、（中）、（下）、『東京二六新聞』、明治42年8月5日、8月6日、8月7日。

- ⑫昇曙夢「最近露西亜文学談—アンドレーエフが名を成したる所以其の他二三の新作家に就て」、新小説 14 年 9 卷、明治 42 年 9 月。
- ⑬馬場孤蝶「〔講話〕 アンドレーエフの『七就刑者』」、『早稲田文学』 47 号、明治 42 年 10 月。
- ⑭「露国の文学」、『太陽』 16 卷 2 号、明治 43 年 1 月。
- ⑮昇曙夢「アンドレーエフの新曲『アナテマ』梗概」、『文章世界』 5 卷 9 号、11 号、12 号、明治 43 年 7 月、8 月、9 月。
- ⑯山田枯柳「アンドレーエフの文学的生活（大学時代・裁判記事を書く・始めて著名す・ゴルキイの感化・文学者たるの自覚）」、『新小説』 15 年 1 卷、明治 43 年 11 月。
- ⑰昇曙夢「アンドレーエフ・レオニード論」、『太陽』 17 卷 2 号、明治 44 年 2 月。
- ⑱昇曙夢「アンドレーエフの作風」、『新潮』 14 卷 3 号、明治 44 年 3 月。
- ⑲相馬御風「アンドレーエフ一面観」、『露西亜文学』、明治 44 年 4 月。
- ⑳昇曙夢「気分の文学と事実の文学(アンドレーエフの芸術を論ず)」、『早稲田文学』 67 号、明治 45 年 6 月。

先行研究によると、上田敏は日本で最初のアンドレーエフの作品の翻訳者であり、アンドレーエフを日本に紹介した最初の人でもある。²⁹² 上田敏は、アンドレーエフの小説「旅行」（明治 39 年 1 月、2 月）を初めて翻訳した 7 ヶ月後に『芸苑』巻第 8（明治 39 年 8 月）の「鏡影録」に、アンドレーエフについて次のように記している。「嘗て一篇をこの『芸苑』に紹介した露西亜の作家 LEONIDAS ANDREIJEF も、ほかに著しき小品数多あり。露西亜文学を好む人多きわが文壇にまだ広く知られざるは何故ぞ」²⁹³。明治 39 年（1906）にはアンドレーエフが明治文壇で知られていなかったことから、上田敏が明治文壇にこのロシアの新しい作家に注目するよう呼びかけたことがうかがえる。

上田敏に続き、二葉亭四迷が四つの文章の中でアンドレーエフとその作品に触れている。谷行博は二葉亭四迷の「露国の象徴派」における象徴主義の紹介と魯迅がアンドレーエフ

を紹介したテキストと比較し、二葉亭四迷と魯迅のアンドレーエフ文学の特徴評価の一致を指摘した。²⁹⁴この四つの文章の中で、二葉亭四迷はとりわけ「ゴーリキーとアンドレーエフの近業」と「露西亜文壇の傾向」の二つの文章の中でアンドレーエフの作品を紹介した。「ゴーリキーとアンドレーエフの近業」においては、二葉亭四迷がアンドレーエフの近作「人の一生」と「イスカリオテのユダ」の粗筋を紹介した。「露西亜文壇の傾向」においては、二葉亭四迷はまた「賊」と「深淵」の二つの小説を紹介した。注目すべきことは、二葉亭四迷のアンドレーエフの近作「賊」に対する紹介である。

賊の汽車に乗って旅行する内、ふと後ろから追手がかかったやうな気持がする、と停車場にいゐる巡查の眼が意味あって自分を視てゐるやうに思ふ。汽車が走る、窓から見える、電信柱も家も畑も山も自分を追駆けて来るやうに思ふ。堪え難くなって汽車の端から端へ逃げまはる。其處等に転がってゐる荷物は矢張自分の逃げるのを妨げるために置かれてるやうに思ふ。人が脚を前に伸してみれば意味あってさうしてゐるやうに考へる。遂に遂に堪へることが出来ないで汽車から飛び下りて死んでしまふ。初め賊が追手がかかったなと思うた時に、心が一転して狂つてゐる。それから其れへと迷路を辿り辿って行く處まで行かず、唯賊の気持を書いた丈だ。不自然は無論で、だから神秘なのだ。まア気持小説だ、どうしても地を歩いてる人じやない。神秘派だ。表象派だが狂気日記だ。²⁹⁵

二葉亭四迷は小説「賊」の粗筋を紹介し、末尾にはアンドレーエフが主人公の「賊」の心理変化の描写を称賛し、「気持小説」とも呼ばれ、神秘主義と表象主義を持った作品であり、狂気の日記でもあると評している。二葉亭四迷は、アンドレーエフの「賊」を描いた「狂気日記」を紹介し、「賊」を描いた「狂気日記」を紹介し、高く評価しているが、明治の終わりまでにはこの作品は日本語に翻訳されることはなかった。

二葉亭四迷に続き、アンドレーエフを明治文壇で紹介したのは昇曙夢だった。上記の統計によると、アンドレーエフを紹介した20篇の文章の中で、少なくとも11篇は昇曙夢の手によって書かれたことである。昇曙夢は早くも『露西亜文学研究』でアンドレーエフの創作特徴を紹介し、アンドレーエフは現代ロシア文壇の最新の傾向を代表する作家として知られ、作品には写実主義、象征主義、神秘主義の三つの傾向が含まれていると述べている。²⁹⁶その後、昇曙夢は「アンドレーエフの傑作と人生観」、「露国文壇の新傾向」、「最近の露西亜文壇」、「露国新進作家自叙伝」等の文章の中でアンドレーエフを、ゴーリキーに続くロシア文学の重要作家として明治文壇に紹介し、さらにアンドレーエフの生涯と創作を明治文壇に紹介した。また、明治42年(1909)8月、昇曙夢が『東京二六新聞』で評論文「露国文学に於ける狂的分子」を發表し、ドストエフスキーをはじめとするロシアの作家たちが書いた狂人を描いた小説を並べ、最後にアンドレーエフの小説「私の日記」の粗筋を紹介した。

上田敏、二葉亭四迷、昇曙夢のほか、研究者たちが何度も取り上げた「レオニド・アンドレイエフ論」を發表した作者は、夏目漱石の門下生で、東京帝国大学文学部独文科を卒業した小宮豊隆(1884-1966)である。小宮豊隆の文章の冒頭では、アンドレーエフの作品についての知識源は二葉亭四迷の翻訳「血笑記」および「七死刑囚物語」、初期の短編小説集しかなかったと指摘した。また、「血笑記」以外の作品は全部ドイツ語訳で読んだと述べており、その中のドイツ語訳の短篇小説集の16篇の題名を並べた。²⁹⁷筆者の調査により、この16篇の題名はドイツ語訳の『深淵その他の小説』(Abgrund und andere Novellen)の作品とほぼ一致していることが明らかになっている。このドイツ語訳本はまた、周樹人がアンドレーエフ文学の重要な参考資料として読んでいた。このことは少なくとも、小宮豊隆と周樹人は共通のドイツ語訳を通じて、アンドレーエフの作品を読んだということを示している。

3. 明治期におけるアンドレーエフの翻訳と周樹人

「明治期ロシア文学翻訳年表稿」によると、明治39年(1906)から45年(1912)までの7年間で、以下のように51部アンドレーエフの作品が日本語に翻訳された。これは明治期においてロシア文学の翻訳の6.8%を占めている。²⁹⁸それぞれ、上田敏訳の「旅行」(「旅行」)(1906)、上田敏訳の「これはもと」(「昔話」)(1907)、二葉亭四迷訳の「血笑記」(「血笑記」)(1908)、草野柴二訳の「人間伝」(アンドレーエフの新劇曲梗概) (「人の一生」)(1908)、草野柴二訳の「天使」(「天使」)(1908)、佐藤迷羊訳の「嘘」(「嘘」)(1908)、上田敏訳の「クサカ」(「クサカ」)(1909)、中村星湖訳の「外国人」(「外国人」)(1909)、上田敏訳の「恐怖」(「沈黙」)(1909)、上田敏訳の「里子」(「里子」)(1909)、上田敏訳の「心」(「心」)(1909)、中村星湖訳の「汽車を待つ間」(「汽車を待つ間」)(1909)、昇曙夢訳の「深淵」(「深淵」)(1909)、中村春雨訳の「信仰」(「ワシーリー・フィヴェイスキーの生涯」)(1909)、高貞訳の「マルセイユの歌」(「マルセイエーズ」)(1909)、訳者不記の「二等大尉カブルウコフ」(「二等大尉カブルウコフ」)(1909)、中村春雨訳の「沈黙」(「沈黙」)(1909)、森鷗外訳の「犬」(「クサカ」)(1910)、森鷗外訳の「人の一生」(「人の一生」)(1910)、吹田蘆風訳の「笑ひ」(「笑い」)(1910)、河野桐谷訳の「ラザラス」(「ラザラス」)(1910)、中村星湖訳の「復活者の世は美しく」(「復活者の世は美しく」)(1910)、山崎貞訳の「沈黙」(「沈黙」)、草野柴二訳の「刑場到着」(「七死刑囚物語」)(1910)、山本迷羊訳の「警鐘」(「警鐘」)(1910)、森鷗外訳の「歯痛」(「ベン・トビット」)(1910)、森脇毅訳の「石垣」(「石垣」)(1910)、草野柴二訳の「絞首台まで」(「七死刑囚物語」)(1910)、昇曙夢訳の「霧」(「霧の中」)(1910)、真杉興訳の「マルセイエイズ」(「マルセイエーズ」)(1910)、車田訳の「マルセイユ」(「マルセイエーズ」)(1910)、溪水訳の「警鐘」(「警鐘」)(1910)、白露生訳の「時の進行」(「七死刑囚物語」)(1910)、中村星湖訳の「贈物」(「贈物」)(1910)、乳木生訳の「復

活者の美しき生活」（「復活者の世は美しく」）（1910）、中村白葉訳の「河」（「河」）（1910）、米川正夫訳の「黒き仮面」（「黒い仮面」）（1910）、大森大次訳の「書物」（「書物」）（1911）、長沢武雄訳の「同胞の愛」（「隣人の愛」）（1911）、相馬御風訳の「七死刑囚物語」（「七死刑囚物語」）（1911）、長沢武雄訳の「どうして毒歯が生えたかという蛇の話」（「どうして毒歯が生えたかという蛇の話」）（1911）、森脇白夜訳の「イスカリオテのユダ」（「イスカリオテのユダ」）（1911）、竹友藻風訳の「ラザロ」（「ラザラス」）（1912）、浦瀬白雨訳の「嘘」（「嘘」）（1912）、増田初子訳の「沈黙」（「沈黙」）（1912）、箕子太郎訳の「都会」（「都会」）（1912）等である。

以上の調査によると、明治の最後の6年間においては、アンドレーエフの『七死刑囚物語』は4回翻訳されており、最も多く翻訳された作品である。ただ、作品を完全に翻訳しているのは相馬御風（1883-1950）だけである。他の訳者は何れも作品の一部分のみを翻訳している。小説「沈黙」と「マルセイエーズ」は3回翻訳された。ここで注目すべきことは、周樹人は1919年に東京にいる周作人に、必ず相馬御風の翻訳した『七死刑囚物語』を買ってくるように伝えたことである。このことから、周樹人が留学後もなお明治文壇のアンドレーエフの受容に注目していたことが明らかになった。明治末期の日本人の翻訳者たちが、様々な言語の訳本を通じて日本にアンドレーエフの作品を翻訳した。例えば、二葉亭四迷、昇曙夢はロシア語訳本を通じて、山本迷羊、森鷗外はドイツ語訳本を通して、上田敏、中村星湖はフランス語訳本で、草野柴二、相馬御風は英語訳本を通して翻訳活動を展開している。この現象はアンドレーエフが明治末期の文壇で人気を集めたことと明らかに関係がある。

周樹人が留学生活を終える前に、上記の51部の作品のうち、11部が発表された。中でも、三つの作品が注目されている。

一つ目は『血笑記』である。「血笑記」の冒頭部で二葉亭四迷により翻訳され、『趣味』第3巻第1号に発表された。その後、易風社が同年7月に全訳の『血笑記』を出版した。

周樹人は後に『血笑記』の何ページか翻訳したことを思い出し、『域外小説集』でもこの作品の翻訳計画を予告していた。

二つ目は「嘘」である。明治41年（1908）12月、山本迷羊は『太陽』14巻16号に小説「嘘」を発表したが、翌年3月に周樹人はドイツ語訳本によってこの作品（「謾」）を翻訳し、『域外小説集』の第一冊に発表した。明治期のアンドレーエフ文学に関する評論文には、「嘘」についての紹介は殆どない。筆者の調査した限りでは、小宮豊隆の評論文「レオニド・アンドレイエフ論」だけ次のように小説「嘘」を紹介している。

此點に於て、アンドレイエフの象徴を翫賞するに足りる丈の、感受性の鋭敏を缺いてゐるんだと云ふことが出来ると思ふ。「嘘」でも其通り、書いてある處は、自分の女が、他の立派な男に自分を身かへた、自身は女に欺されたんだと云ふ疑念から、遂に女を殺ろす。女を殺ろして牢屋へぶち込まれて、猶考へ込む、嘘はまだいつまでも此世に残ってるやうに思ふのが一篇の趣向であるが、最後の「女は死んでも、嘘は死なない」と悶える處に、作者の、名状すべからざる胸裏の苦痛が、ありありと浮き上がって感ぜられるのである。

上記に述べた通りに、小宮豊隆はこの文章の冒頭で、自分が読んだアンドレーエフの作品は「血笑記」、「七刑人物語」と初期の短編小説集だけであると指摘し、「血笑記」以外の作品はドイツ語訳本で読み、また、ドイツ語訳の短篇小説集の16篇の作品の題名を並べた。この16篇の題名はドイツ語訳版の『Abgrund und andere Novellen』の作品とほぼ一致していることが筆者の調査で明らかになっている。崔文東の考証によると、このドイツ語訳本は周樹人がアンドレーエフを読むための重要な参考資料の一つである。これは少なくとも、小宮豊隆と周樹人が共通のドイツ語訳を通じて、アンドレーエフの作品を読んだこということを示している。

三つ目は『七死刑囚物語』である。周樹人は1919年に東京にいる周作人に、必ず相馬御風の翻訳した『七死刑囚物語』を買ってくるように伝えた。このことを通じて、周樹人は留学後も一貫して明治文壇のアンドレーエフの受容に注目していることを示している。

第二節 明治期におけるガルシンの翻訳・紹介と周樹人

1. 先行研究

周樹人は日本留学時代に、ガルシン²⁹⁹の小説「四日」（「四日間」）を翻訳し、『域外小説集』第2巻に掲載した。周作人もガルシンのもう一つの小説「邂逅」（「邂逅」）を翻訳し、『域外小説集』第1巻に掲載した。また、『域外小説集』第1巻の新訳予告によると、周氏兄弟がガルシンの小説「紅花」（「赤い花」）も翻訳する計画があった。1922年、魯迅はまたガルシンの小説「ごく短い小説」を翻訳し、1929年に上海朝花社が出版した『近代世界短編小説集』に収録された。1929年、魯迅はまた『最近ロシア文学研究』（井田孝平訳、聚芳閣出版、1926年）に基づいて、「人間の天才——ガルシン」という文章を翻訳した。周樹人は留学が終わった後も、一貫してガルシンのことを愛読し、関心を持ち続けていた。周作人も、ガルシンは周樹人が留学時代に好きなロシア文学者の一人だったと回想し、また兄と同様に、周作人本人もガルシンの作品を愛読し、彼の小説「懦夫」（「臆病者」）を翻訳する計画があった。³⁰⁰

ガルシンの作品が魯迅の創作に与えた影響について、周作人は、ガルシンの「紅い花」と魯迅の小説「長明灯」に似ているところがあると指摘している。それは二つの作品とも「狂人」を描いた作品だと述べている。³⁰¹周作人のこのヒントによって、多くの研究者はガルシンの小説「紅い花」が魯迅の作品「長明灯」に与えた影響について分析している。³⁰²そのほか、谷行博は二葉亭四迷訳の「四日間」と周樹人の翻訳した「四日」のテキストについて分析を行ったことがある。³⁰³史福興も魯迅の散文詩「秋夜」の中の「笑い声」の描写は、ガルシンの「四日」の主人公「吾」の呻きを参照する可能性が高いと指摘した。³⁰⁴孫郁は魯

迅の小説「酒楼にて」の人物設計と構造方式がどちらもガルシンの小説「邂逅」と似ているところがあると指摘した。³⁰⁵ 崔文東は『域外小説集』に収録された二篇のガルシンの小説の底本を考証した。³⁰⁶ 上記の先行研究では、谷行博と崔文東の論文が、日本留学時期の周樹人が、ガルシンの作品と接触したルートを調査している。本論では、明治期におけるガルシンの受容の調査を通して、日本留学時期の周樹人とガルシンの関わりを再考する。

まず、周樹人が書き残したテキストを通して、彼のガルシン論をまとめる。周樹人が最初にガルシンを紹介したテキストは、1909年に出版された『域外小説集』の「雑識」の中のガルシンに関する部分である。この「雑識」において、周樹人は簡単にガルシンの生涯を紹介し、また、ガルシンの戦争と発狂の経験を次のように紹介した。「露土戦争のときに志願兵となり負傷して帰還し、『四日間』と『兵卒イヴァーノフの回想』を書いた。氏は世をはかなむことははなはだしく、ついに発狂し、かなり経ってからようやく治った。

『赤い花』一篇はその様子を自ら書いたものである」³⁰⁷。「「ごく短い小説」訳者附記」の中で、魯迅は同じくガルシンの戦争と発狂の経験に注目した。

彼が注目されるようになったのは、露土戦争に従軍したときの印象をもとにした短篇『四日間』によってであり、のちに続けて『臆病者』、『邂逅』、『画家たち』、『兵卒イヴァーノフの回想より』などの作品を発表しており、すべてよく知られている。しかし彼の芸術的天分が発達するにつれ、ますます病的になり、人を憂い、世を厭うようになって、ついに発狂し、精神病院に入った。³⁰⁸

上記のテキストを通して、周樹人はガルシンの戦争体験をもとにした「四日」、「臆病者」、「兵卒イヴァーノフの回想より」、そして狂気に陥った自分を描いた「紅い花」など作品を紹介し、ガルシンは「ツァーリ・アレクサンドル三世の政府の圧迫下において、真っ先に絶叫して、この世の苦しみを一身に担った小説家である」³⁰⁹と感じ、彼の作品は悲観、

哀傷、博愛、象徴、人道などの特徴を示しており、その作品の人物は中国では見られないと考えたのである。

ここで一言述べておきたいのは、周樹人同様に、周作人もガルシンの従軍と発狂の体験に注目していたことだ。周作人は「ロシアの戦争小説」（「俄国之戦争小説」、1917）の中で、ガルシンの「四日」とトルストイの「セワストーポリ」、アンドレーエフの「紅笑」などの作品は全部「世界戦争文学の精華」と評価していた。³¹⁰また、自分が日本留学時期に最初にロシア文学に触れた「ロシアの大作家」の中で、周作人はガルシンの極めて少ない作品を好んで、小説「臆病者」を翻訳する計画もあったと述べている。³¹¹以上の分析を通して、ロシアの小説家ガルシンは、従軍と発狂の体験をもとにして創作した「四日」、「紅い花」、「臆病者」などの作品に、当時東京で外国の文芸作品を探し求めていた周氏兄弟が深く引きつけられている。

2. 明治期におけるガルシンの紹介と周樹人

ここで、ガルシンについて簡単に紹介しておく。ガルシンはロシアの小説家である。5歳のときに、母が家庭教師の革命思想家と駆け落ちし、8歳のときに母に引き取られた。ペテルブルクの中学を卒業し、鉱山大学に入ったが、露土戦争が始まると志願し一兵卒として入隊した。負傷して准尉となって予備役に入った。この経験を元に創作されたのが、「四日間」であった。ガルシンの文名はこれによって確立した。³¹²明治期におけるガルシンについての評論文章は、筆者が調査した限りでは、以下の10点がある。

①狄「露国文学の厭世的傾向」、『日本人』第185号、明治36年4月。

②小山内薫「露国の小説家ウラヂミール・カラレンコ」、『新小説』第11年第12巻、明治39年。

③二葉亭四迷「露国文学談片」、『太陽』第13巻第5号、明治40年4月。

④草野柴二「十九世紀露西亜文学概観」、『文章世界』3巻6号、明治41年5月。

- ⑤馬場孤蝶「ガルシンと其作品」、『文章世界』第3巻第13号（明治41年10月）。
- ⑥昇曙夢「煩悶の人ゴーゴリ（近代露文学の特徴）」、『読売新聞』、明治42年4月18日。
- ⑦昇曙夢「露国文学に於ける狂的分子」（上）、『東京二六新聞』、明治42年8月5日。
- ⑧古川鴨雨「ガルシンの生涯」、『世界文芸』1巻2号、明治43年5月。
- ⑨昇曙夢「悲劇としての露西亜文学」（上）、『東京二六新聞』、明治44年10月28日、
「悲劇としての露西亜文学」（下）、『東京二六新聞』、明治44年11月2日。
- ⑩八杉貞利「露西亜文学の天才 フセオロド、ガルシン」、『東亜之光』7巻2号、明治45年6月。

この10篇の評論文の中で、専門的にガルシンを紹介したのは馬場孤蝶、古川鴨雨、八杉貞利の3つの文章である。アンドレーエフに比べれば明治文壇では、ガルシンに対する関心は極めて低い。明治36年（1903）4月、「狄」という筆名の作者は「露国文学の厭世的傾向」を發表し、ロシアの多くの作家の「作物の主人公は精神的に死せるか、生きたる死人か、或は社会より見放されし人民のみ也」と述べている。³¹³ガルシンもその中の一人である。二葉亭四迷は2篇のガルシンの小説を翻訳した。また、彼は評論文「露国文学談片」の中で、「レルモントーフ、プーシュキン、ツルゲネフ、ガルシンなどは、実に立派な文章を書いて居る」と述べている。³¹⁴

明治文壇ではじめて全面的にガルシンを紹介したのは、馬場孤蝶だった。馬場孤蝶は「ガルシンと其作品」の中で、まず、ガルシンの生涯を紹介した。そして、彼は重点的にガルシンが精神病院に入院した体験と露土戦争に従軍した経験を紹介している。ガルシンの「発狂体験」については、次のように紹介している。

所でガルシンが発狂したのは、世間によくある失恋とか事業の失敗とかに基くのでは無くして、原因はむしろ身体上の病気から来て居るのである。一体其生立からが、一寸通例人とは変って居るのが、無論それは家庭の及ぼした影響もあつたらしい。³¹⁵

また、ガルシンの「従軍体験」について、次のように述べている。

ガルシンは自ら進んで志願兵となって、従軍することになる。同年三月一日、キシネフから出発して南方土耳其領に入った。此従軍中、あらゆる戦争の悲惨な光景に唯さへ鋭敏な神経を甚く刺激された。それが自然彼の作の上に出ることになったのだ。³¹⁶

その他、馬場孤蝶はガルシンの「従軍」に関する小説「戦争」、「従卒とその士官」、「四日間」及びガルシンの「発狂」に関する小説「赤い花」などの4篇の小説の粗筋を紹介した。この評論文を通して、馬場孤蝶が理解しているガルシン文学のキーワードは「発狂」と「従軍」である。注目すべきことは、馬場孤蝶が小説「赤い花」を紹介する時に、以下に引用したように、ロシア文学の中で「狂人」を主人公とする作品を一つの重要な文学現象として討論し、アンドレーエフの「赤い笑」とゴーゴリの「狂人日記」と比べれば、その独特なところは作者が「狂人」になってから創作した「狂人」の作品であり、即ち、「狂人」が「狂人」を書くことである。

これは狂人を主人公として描いたものである。尤も狂人を描いたものには、露西亜で云つても、近い所でアンドレーエフの『赤き笑』、少し古い所ではゴオゴルの『狂人日記』などの有名な作があるが、いづれも狂人で無い人が狂人を描いたものである。唯『赤い花』のみは、一旦狂人になった経験のある人が書いたのだから、珍らしい作物の一つと云は無ければならぬ。³¹⁷

その後、昇曙夢、古川鴨雨、八杉貞利などの評論文にもガルシン及び彼の作品に言及した。以上の説明から分かるように、明治文壇でガルシンを紹介する文章は極めて少ないが、周氏兄弟はこの少ない紹介文を通して、ロシアの作家ガルシンに興味を持ちはじめ、さらに、日本語訳のガルシン小説以外、それぞれの視野をガルシン文学のドイツ語訳と英語訳に向けている。

3. 明治期におけるガルシンの翻訳と周樹人

「明治期ロシア文学翻訳年表稿」によると、明治37年（1904）から明治45年（1912）までの8年間で7部のガルシンの作品が日本語に翻訳された。これは明治期における翻訳されたロシア文学の1.1%を占めている。³¹⁸それぞれ、二葉亭四迷訳の「四日間」（「四日間」）（1904）、二葉亭四迷訳の「根無し草」（「夢語り」）（1906）、草野柴二訳の「信号」（「信号」）（1909）、前田晁訳の「赤い花」（「赤い花」）（1909）、作者不明訳の「赤い帽子」（1909）、吹田蘆風訳の「果敢ない恋」（「ごく短い小説」）（1911）、無繫生訳の「血染めの信号」（「信号」）（1912）である。

この中で、最も注目したいのは二葉亭四迷訳の「四日間」である。「四日間」は最初に雑誌『新小説』に掲載され、後に小説集『カルコ集』に収録された。谷行博の考証によると、『新小説』に掲載された「四日間」と比べると、小説集『カルコ集』に収録された「四日間」において人名、地名などの改訳したところがある。³¹⁹ここで谷行博の研究を検証するために、以下のように改訳した部分に下線を示しておく。まずは『新小説』に掲載された「四日間」のテキストである。

それからの此始末。ええええ馬鹿らしい！若し夫れ此不幸なる支那兵（毅字軍の服を着けてをつたが）、この支那兵になると、これはまた一段と罪が無かろう。鮫でも漬けたよ

うに船に詰込れて此朝鮮三界へ送付られるまでは、日本の事も牙山の戦も唯噂にも聞いたことなく、唯行けと云われたから来たのだ。若しも厭の何のと云おうものなら、杖百の憂き目を見るは愚かなこと、いずれかの軍門の刀の錆にならうも知れぬところだ。義州邊から此平壤まで長い辛い行軍をして来て、我軍の攻撃に遭って防戦したのであろうが、味方は名に負ふ猪武者、独逸仕込の Patent 付のマウゼル銃にも怯ともせず、前へ前へと進むから、始て怖気付いて逃げようとするところを、誰家のか小男、平生なら持合せの黒い拳固一撃でツイ埒が明きそうな小男が飛で来て、銃劔翳して胸板へグサと。(下線、引用者)

320

次に、小説集『カルコ集』に収録された「四日間」のテキストである。

それからの此始末。ええええ馬鹿め！己は馬鹿だったが、此不幸なる埃及の百姓 (埃及軍の服を着けてをったが)、この百姓になると、これはまた一段と罪が無かろう。鯨でも漬けたように船に詰込れて君士但丁堡へ送付られるまでは、露西亜の事もバルガリヤの事も唯噂にも聞いたことなく、唯行けと云われたから来たのだ。若しも厭の何のと云おうものなら、管の憂き目を見るは愚かなこと、いずれかのパシャのピストルの弾を喰おうも知れぬところだ。スタンブールから此ルシチウクまで長い辛い行軍をして来て、我軍の攻撃に遭って防戦したのであろうが、味方は名に負ふ猪武者、英吉利仕込の Patent 付のピーボヂーにもマルチニーにも怯ともせず、前へ前へと進むから、始て怖気付いて逃げようとするところを、誰家のか小男、平生なら持合せの黒い拳固一撃でツイ埒が明きそうな小男が飛で来て、銃劔翳して胸板へグサと。(下線、引用者)³²¹

二葉亭四迷が『新小説』に掲載した「四日間」に使用した「支那兵」、「朝鮮三界」、「牙山の戦」、「義州邊」、「平壤」などの表現は明らかに日清戦争を指している。それ

は露土戦争を通して、日清戦争の悲惨さを表現したいという意図があったからだ。李冬木も周樹人がガルシンの小説「四日」を翻訳した時に、二葉亭四迷の日本語訳を参考した可能性が高いと推測している。また、「もしも実際に例を探すとすれば、「四日間」第一版であろう。この「翻訳」は、場面が露土戦争から日清戦争に切り替わった朝鮮半島に設定され、主人公も日本兵に変わり、彼の眼中に出現したのは当然「支那兵」であった。第二版に及びこの状況はやっとな変更された。周樹人が参考にしたのは第二版のはずである」と述べている。³²²少なくとも、二葉亭四迷のこの改訳にも翻訳の「日本化」の一例と見られるのである。

崔文東の考証によると、周樹人の蔵書には『Attalea Princeps und andere Novellen』(1903)と『Die rote Blume und ander Novellen』(1906)この二冊のドイツ語訳のガルシンの短篇小説集が収録されている。何れも「四日」のドイツ語訳(Vier Tage auf dem Schlachtfelde/Vier Tage)が収録されていた。また、周作人はガルシン小説の英語訳(Stories from Garshin、1908)に基づいて小説「邂逅」(An Occurrence)を翻訳していることも指摘されている。³²³

以上の明治期におけるガルシンの受容を通して、周樹人は馬場孤蝶の評論文「ガルシンと其作品」や二葉亭四迷の訳文「四日間」を読んで、「狂人」と「戦士」の姿としてのガルシンに強い印象を受けたのだった。そのため、周作人と一緒に英語訳やドイツ語訳のガルシン小説集を収集し、中国にこのロシアの小説家を紹介したいと考えたのである。

第八章 若き日の周樹人に影響を与えたロシアの小説家

明治期におけるトルストイとドストエフスキーの翻訳・紹介と周樹人

はじめに

周樹人は日本留学時代に、最初にトルストイとドストエフスキーの作品を接触した。しかしながら、日本留学時代の周樹人とトルストイ、ドストエフスキーに関する資料が比較的少ないため、日本留学時代の周樹人がトルストイ、ドストエフスキーのどの作品を読んだのか判断が極めて困難なことである。本章では、周氏兄弟の書き残したテキスト及び先行研究に基づいて、明治期におけるトルストイ、ドストエフスキーの翻訳・紹介の考察を通して、トルストイ、ドストエフスキー文学が留日時代の周樹人にとってどのような意味を持っているのかを明らかにする。

第一節 明治期におけるトルストイの翻訳・紹介と周樹人

1. 先行研究

周樹人が最初にトルストイ³²⁴に言及した文章は「破悪声論」（1909）である。「破悪声論」の中で、トルストイの「高く平和を叫んで社会を訴えた」という思想を紹介し、周樹人の批判にも加えた。また、後に創作した「藤野先生」（1926）におけるトルストイの「ロシアと日本の皇帝にあてた一通の手紙」にも言及した。1919年2月、『新青年』に掲載された「随感録・四十六」の中で、トルストイとダーウィン、イプセン、ニーチェの諸人は、「いずれも近代の偶像破壊の大人物である」と述べた。³²⁵また、魯迅は中国におけるトルストイの作品の翻訳にも注目した。例えば、魯迅は「天才の出る前」（1924）で「大勢の人が、トルストイやツルゲーネフやドストエフスキーの名は聞きあきています。でも、彼らの作品がどれだけ中国に訳されたのでしょうか？」³²⁶と述べた。「翻訳のための弁護」（1933）の中で、「中国ではトルストイやツルゲーネフで大騒ぎし、のちまたシンクレアで大騒ぎしたが、彼らの撰集は一冊もないのである。去年はまだ郭沫若先生の盛名で、幸いにも『戦

争と平和』が出版された」³²⁷と記した。「『硬訳』と『文学の階級性』」（1930）の中で、「トルストイは、貴族出身でもとの性情を脱却しきれなかったればこそ、貧民に同情するにとどまり、階級闘争を主張しなかったのである」³²⁸と説明した。「『酔眼』中の朦朧」（1928）の中で、次のようにトルストイの思想について述べている。「ただ中国だけは特別であって、人のまねをしてトルストイを『下劣な説教者』ときめつけることはできても、中国の『目前の情況』については、ただ『事実、社会のどの方面も暗雲に閉ざされた勢力に支配されている』と感じるばかりで、『政府の暴力、裁判・行政の喜劇的仮面を暴露した』トルストイの勇気の何分の一すらもちあわせていない。人道主義が不徹底であることは知っていても、『人を殺すこと草のごとくして声を聞かず』という時代なのに、人道主義的抵抗スラしないのである」³²⁹。魯迅は『文芸と政治の分れ道』（1927）の中で、トルストイの人道主義について、次のように述べている。

ロシアの文学者トルストイは人道主義を説き、戦争に反対して、三冊の分厚い小説――あの『戦争と平和』を書きました。彼自身は貴族でしたが、戦場の生活を体験して、戦争がいかに悲惨なものであるかを実感しました。とりわけ、彼は司令官の鉄板（戦場では、主だった将校たちはみな、鉄板で銃弾を防いだ）の前に近寄ったとき、いっそう胸を刺されるような痛みを感じました。しかも彼は、そのうえ友人たちの多くが戦場で犠牲になるのをこの眼で見たのです。戦争も結局は二つの態度に変わり得ます。一つは英雄で、彼は、ほかの人が死ぬ者は死に、傷つく者は傷ついたのに、自分だけ元気なのを見て、自分をよっぽどすごい人間だと思いこみ、戦場での勇猛ぶりをこうだった。ああだったと自慢します。もう一つは、戦争反対に変わる人で、世界で二度と戦いが起こらないように希望します。トルストイは後者のほうで、無抵抗主義によって戦争を消滅させることを主張しました。こういう主張をした彼を、政府は当然、嫌いました。戦争に反対すれば、ツァーの侵略欲と衝突します。無抵抗主義を主張して、兵士に皇帝のた

めに裁判をしないようになり、誰も皇帝の御機嫌をとらないようになる。皇帝というのは、なんでも人に御機嫌をとらせるものです。御機嫌をとる者がなければ、皇帝もへちまありません。ですから、いっそう政治と衝突するわけです。³³⁰

以上のテキストから分かるように、魯迅はトルストイの人道主義思想を非常に重視し、それと同時に中国におけるトルストイの受容にも注目している。魯迅はトルストイの作品を翻訳したことがないが、トルストイ文学と思想に関する日本語の書籍を数多く集めている。

張華、³³¹韓長経、³³²孫郁³³³などの学者は魯迅とトルストイの関係を考察し、魯迅が最初に日本留学時期にトルストイの思想に触れたと指摘した。池沢実芳は、「藤野先生」におけるトルストイがロシア皇帝と日本天皇にあてた手紙と、周樹人の早期トルストイ観との関連を詳細に調査した。³³⁴また、范国富の論文「魯迅留日時期の思想建築におけるレフ・トルストイ」（「魯迅留日時期思想建构中的列夫・托爾斯泰」）は、日本留学時期の魯迅とトルストイの関係を整理した。³³⁵本論では、先行研究に基づいて、明治期におけるトルストイの紹介・翻訳と周樹人の関連をさらに調べて、留学時期の周樹人のトルストイ観を検討する。

2. 明治期におけるトルストイの紹介と周樹人

まず、ここで、トルストイについて簡単に紹介しておく。レフ・トルストイはロシアの作家である。ヤースナヤ・ポリャーナに伯爵家の四男として生まれた。2歳で母マリアと、9歳で父ニコライと死別した。カザン大学に入学したが、退学した。ヤースナヤ・ポリャーナに戻り、農事改革に取り組むが、農民の猜疑心にあい失敗し、コーカサスの砲兵旅団に士官候補生として入団した。このコーカサスの地で、『幼年時代』、『少年時代』、『青年時代』を執筆し、1857年、ヨーロッパに旅行し、ロシアの農奴制とは対照的な社会的自由に目を身張ったが、またパリでギロチンを目撃することによって、文明が合理的に人間

の命を絶つという野蛮性にも強烈な印象を持った。中年を過ぎて、自分の思想と現実の矛盾に対する救いとしてキリスト教的信仰を求めようになった。「イワンの馬鹿」や「人はなんで生きるか」は、自ら発見した福音書の真理を広く民衆に知らせるために書き上げた民話であった。82歳になって、私有権を放棄するために家出し、1910年11月7日、ヤースナヤ・ポリャーナから200キロほど離れたリャザン・ウラル鉄道の小駅アスターボヴォで病死した。³³⁶日本におけるトルストイの受容について、以下の代表研究がある。昇曙夢の「日本文学と露西亜文学」（『比較文学——日本文学を中心として』、矢島書房、1953年10月）、ア・イ・シフマンの『トルストイと日本』（朝日新聞社、1966）、久保忠夫の「トルストイ」（福田光治編『欧米作家と日本近代文学 第三巻 ロシア・北欧・南欧篇』、教育出版センター、1976年1月）、柳富子の『トルストイと日本』（早稲田大学出版部、1998年9月）等である。本論では、昇曙夢の「日本文学と露西亜文学」から引用し、明治期の文学界と翻訳界におけるトルストイの受容について、それぞれに紹介しておく。まず、明治期の文学界におけるトルストイの受容を見ていこう。

日本では、明治一九年に『戦争と平和』の一部を抄訳した『北欧血戦余塵』が出版されたことは前に述べた通りであるが、トルストイが多少共読書界の注意を惹いたのは明治二〇年代に入ってからのことである。二二・三年頃になると、トルストイの思想・作品・宗教・人物等について、『国民の友』を初め、『真理』、『六合雑誌』、『哲学雑誌』、『早稲田文学』等にかなりまとまった紹介がなされており、明治二三年には『日本評論』に植村正久がトルストイの徹底したヒューマニズムについて論じている。更に二五年には民友社発行の『十二文豪』の一篇として蘆花の『トルストイ伝』が出ている。今日から見れば聊か物足りない気もするが、当時のものとしてはなかなかまとまった本で、著者の造詣の深かったことを何うに足るものがある。この機運にうながされて、トルストイの作品もだんだん紹介されるようになった。その頃博文館から『世界文庫』と

いう翻訳叢書が発行されていたが、その第八篇として明治二六年に田山花袋の手によってトルストイの『コサアク兵』が訳されている。……これより前に、森鷗外の訳に成る『瑞西館』（『リュツェルン』）が『水沫集』（明治二五年）に出ており、幸田露伴の手によって『初陣』（『セバストーポリ』）が『国会新聞』に訳出されているのは天下の珍とすべきであろう。同じ頃『裏錦』という婦人雑誌には、林丘子という人のかかなり調達な口語訳で『おひたちの記』（『幼年時代』）が連載され、十三回で未完のまま終わっている。が、すぐその後をうけて、民話『二人の老翁』が操岳仙史の訳で、やはり『裏錦』に出ている。……だが、以上に紹介といった程度であって、トルストイの作品の本格的な翻訳は、明治二七年に小西増太郎と尾崎紅葉との共訳という形で出た『名曲クロイツァ』をもって嚆矢とする。³³⁷

それから、明治期の思想界におけるトルストイの受容について、昇曙夢は以下のように紹介している。

更に降って日露戦争の頃になると、トルストイの非戦論などが新聞に載って、トルストイは愈々興味を中心となった観があった。加藤直士の訳した『我が宗教』、高橋五郎の『杜伯品藻』等何もこの時代に前後して出た。特に『我が宗教』は当時の若い人々のロマンチックな憧憬と宗教的煩悶とに悩んでいた時代思潮に投じて広く愛読され、多大の影響を与えたものである。社会小説『火の柱』や『良人の自白』の作者木下尚江を初め、日本の初期社会主義者に与えたトルストイの影響も大きかった。³³⁸

この文章によると、日露戦争の時に、「トルストイの非戦論などが新聞に載って、トルストイは愈々興味を中心となった観があった」ことを明らかにしていた。「藤野先生」におけるトルストイの「汝、悔い改めよ！」という言葉はすなわちこの背景である。周樹人

とトルストイの「ロシアと日本の皇帝にあてた」という手紙の関係について、池沢実芳の実証研究をご参考いただきたい。³³⁹ここから分かるように、日露戦争の背景の下でトルストイの反戦論は周樹人がトルストイの思想に関心を持つ最も早いきっかけになるかもしれない。周樹人が後に翻訳したガルシンの「四日」、アンドレーエフの「血笑記」などの小説もトルストイの反戦思想の延長線上にある。例えば、『域外小説集』のガルシンの「著者事略」における「ガルシンとトルストイは同郷で、トルストイの思想に非常に感化された」と述べた。³⁴⁰周作人も「ロシアの戦争小説」（1917）の中で、ガルシンの「四日」とトルストイの「セワストーポリ」、アンドレーエフの「紅笑」などの作品は全部「世界戦争文学の精華」と評価している。³⁴¹

3. 明治期におけるトルストイの翻訳と周樹人

「明治翻訳文学年表・トルストイ編」により、明治19年（1886）から45年（1912）までの26年間で131部のトルストイの作品を日本語に翻訳された。これは明治期における翻訳されたロシア文学の20%を占めている。³⁴²それぞれ、明治19年森體訳の「泣花怨柳/北欧血戦余塵」（「戦争と平和」）、明治22年森鷗外訳の「瑞西館に歌を聞く」（「リュツェルン」）、明治25年十八公子訳の「黄金鳥」（「黄金鳥」）、明治25年森鷗外訳の「瑞西館」（「リュツェルン」）、明治26年不知庵主人訳の「春風里」（「家庭の幸福」）、林丘子訳の「おひたちの記」（「生い立ちの記・幼年時代」）、残月庵訳の「小児と馬術の稽古」（「どうして私は乗馬を習ったか」）、幸田露伴訳の「初陣」（「セワストーポリ」）、不知庵主人訳の「悽涙」（「ポリクーシカ」）、田山花袋訳の「コサアク兵」（「コサック」）、明治27年操岳仙史訳の「二人の老翁」（「二人の老人」）、無署名訳の「春宵小話」（「読み書き読本」）、小西増太郎訳の「靴師」（「愛あるところには神がある」）、明治28年小西増太郎、尾崎紅葉訳の「名曲クレーツェロワ」（「クロイツェル・ソナタ」）、明治29年小西増太郎訳の「主人と下男」（「主人と下男」）、小西増太郎、尾崎紅葉訳の

「名曲クレーツェロワ」（「クロイツェル・ソナタ」）、小西増太郎訳の「靴師」（「愛あるところには神がある」）、内田不知庵訳の「めをと」（「家庭の幸福」）、小西増太郎訳の「ストスの珈琲店」（「スラートのカフェー」）、太田玉茗訳の「断崖」（「黄金鳥」）、明治30年佚名氏（内田魯庵）訳の「二人巡礼」（「二人の老人」）、松濤庵主人訳の「労働」（「光あるうちに光の中を歩め」）、キ、エ訳の「天国の門」（「悔い改むる罪人」）、有坂生訳の「マリチク、ス、パリチク」（「一寸法師」）、常北生訳の「スラートの珈琲店」（「スラートのカフェー」）、瀬尾枕水訳の「代子」（「洗礼の子」）、軍治柳蔭訳の「浮沈」（「イリヤス」）、明治31年瀬尾枕水訳の「囚人」（「神は真実を見ている、が、すぐには現わさない」）、明治34年安孫子貞治郎訳の「侵入」（「侵入」）、岸上質軒訳の「あれは支那人」、丹下時子訳の「うつつの夢」（「愛あるところには神がある」）、嵯峨の屋お室訳の「セバストウポルの花火」（「セワストーポリ」）、渡辺為蔵訳の「芸術論」（「芸術とは何か」）、嵯峨の屋お室訳の「セバストウポルの落城」（「セワストーポリ」）、明治35年長谷川天溪訳の「大悪魔と小悪魔」（「イワンの馬鹿とその二人の兄弟」）、森しづか訳の「夜と朝」（「復活」）、内田魯庵訳の「馬鹿ものイワン」（「イワンの馬鹿とその二人の兄弟」）、瀬沼夏葉、尾崎紅葉訳の「アンナカレーニナ」（「アンナ・カレーニナ」）、武田桜桃訳の「新竹取物語」（「人はなんで生きるか」）、加藤直士訳の「我懺悔」（「懺悔」）、小川煙村訳の「三老人」（「三人の隠者」）、明治36年武田桜桃訳の「罪の児（童話）」（「洗礼の子」）、中島孤島訳の「幸福」（「イリヤス」）、加藤直士訳の「我宗教」（「我が信仰」）、片上天弦訳の「貧民窟」（「現代の奴隷制度」）、神東惇訳の「人生之意義」（「人生之意義」）、加藤直士訳の「トルストイの人生観」、中島孤島訳の「トルストイのモーパッサン論」（「モーパッサン論」）、神東惇訳の「万国平和会議評言」（「ストックホルム世界平和会議演説草案」）、斎木仙酔訳の「殻粒」（「鶏の卵ほどの殻粒」）、藤波一如、河井醉茗訳の「燈光」（「蠟燭」）、中島孤島訳の「良判事」（「イワン・イリイチの死」）、斎木仙酔訳の『教訓小説集』（「人

はなんで生きるか」など)、明治 37 年高階柳蔭訳の「捕虜の逃走」(「コーカサスの捕虜」)、無署名訳の「落墨記」(「セワストーポリ」)、古沢北冥訳の「人生の三大疑問」(「三つの疑問」)、二葉亭四迷訳の「筒を枕に」(「森林伐採」)、嵯峨の屋お室訳の「セバストウポルの落城」(「セワストーポリ」)、痴雲小訳の「お伽話/馬鹿」(「イワンの馬鹿とその二人の兄弟」)、加藤直士訳の「トルストイの日露戦争観」(「悔改めよ」(日露戦争論))、無署名訳の「露兵(裁伐隊の一節)」(「森林伐採」)、明治 38 年梅北雪淵、沖野五郎訳の「最後の勝利」(「イワンの馬鹿とその二人の兄弟」)、橋本青雨訳の「男女観」(「人生之意義」)、大島蘭秀訳の「行者」(「洗礼の子」)、水口南陽訳の「脚本 悪魔の捕虜」(「最初の酒づくり」)、徳田秋江訳の「ポロジノの役」(「戦争と平和」)、内田魯庵訳の「復活」(「復活」)、小栗風葉訳の「(参考)瀬沼氏のアンナ・カレンナ」(「アンナ・カレーニナ」)、落合浪雄訳の「悲劇/暗の力」、萍雨生訳の「島の翁」(「三人の隠者」)、水口南陽訳の「喜劇脚本/降神術」(「文明の果実」)、鱈鯨生訳の「新羽衣」(「人はなんで生きるか」)、藤野緑一斎訳の「武士道」、明治 39 年林白羽訳の「レビンの迷悟」(「アンナ・カレーニナ」)、内田魯庵訳の「イワンの馬鹿」(「イワンの馬鹿とその二人の兄弟」)、平野万里訳の「楽人のところへ」(「アリペルト」)、ちょいん生訳の「麵包一片」(「小さい悪魔がパンきれの償いをした話」)、安成貞雄訳の「別れ霜」(「三つの死」)、牛山逸民訳の「何故に禍は存する乎」(「読み書き読本」)、山口孤剣訳の「鉄道人夫」(「現代の奴隷制度」)、柴田流星訳の「アンナカレンナ」(「アンナ・カレーニナ」)、江湖生訳の「エリアス爺様」(「イリヤス」)、川上肇、小田頼造訳の「人生の意義」(「人生之意義」)、古河濁流訳の「死の三個」(「三つの死」)、設楽白虹訳の「嗚呼支那人」、有馬祐政訳の「芸術論」(「芸術とは何か」)、筑山正夫訳の「二人巡礼」(「二人の老人」)、明治 40 年中島孤島訳の「悪夢」(「神は真実を見ている、が、すぐには現わさない」)、中島孤島訳の「高加索の囚人」(「コーカサスの捕虜」)、築山正夫訳の「愛の神也」(「愛あるところには神がある」)、江湖

生訳の「雪嵐」（「吹雪」）、百嶋冷泉訳の『トルストイ短篇集』、神崎順一訳の「下僕の生涯」（「スタートのカフェー」）、小林花浪訳の「かは波」（「火を等閑にせば消すべからざらん」）、小田頼造訳の「人道主義」（「われらは何をすべきか」）、徳田秋江訳の「生ひ立ちの記」（「生い立ちの記・幼年時代、少年時代」）、明治41年百嶋冷泉訳の「二人巡礼」（「二人の老人」）、逸見士峰訳の「門付」（「リュツェルン」）、近松秋江訳の「生ひ立ちの記」（「生い立ちの記・幼年時代、少年時代」）、築山正夫訳の「長恨」（「クロイツェル・ソナタ」）、内田魯庵訳の「復活」（「復活」）、明治42年野の人訳の「流刑者」（「神は真実を見ている、が、すぐには現わさない」）、草野柴二訳の「アンナカレンナ」（「アンナ・カレーニナ」）、百嶋冷泉訳の『トルストイ小説集』、榎本秋村訳の「トルストイの教訓及び其の自叙伝」、谷の人訳の「綾子」、神崎沈鐘訳の「人間生活」（「人はなんで生きるか」）、榎本恒太郎訳の「人生の意義」（「人生の意義」）、榎本恒太郎訳の「想神録」、明治43年小田頼造訳の「簡易聖書」（「要約福音書」）、小沢愛囀訳の「悔いたる罪人」（「悔い改むる罪人」）、瀬沼夏葉訳の「アンナ・カナニナの一節」（「アンナ・カレーニナ」）、昇曙夢訳の「杜翁近什数篇（赤い糸、一番美味しい梨、百姓と瓜、猿と豆、穀倉の鼠、兎と獵犬、財産の分配、二匹の馬、猿、犬と鶏と狐、自慢の因果）」（「読み書き読本」）、昇曙夢訳の「杜翁書簡二則」、明治44年田波御白訳の「杜翁小品」（「読み書き読本」）、真山青果訳の「脚本 文明の結果」（「文明の果実」）、一宮栄訳の「三つの死」（「三つの死」）、川島風骨訳の「無宿者」、大住嘯風訳の「性欲論」（「性欲論」）、雨声庵主人訳の「うたかたの記」（「村の三日間」）、砂丘子訳の「人間の要する土地幾許ぞ」（「人にはどれほどの土地がいるか」）、明治45年三上白夜訳の「アリョーシャ」（「壺のアリョーシャ」）、徳田秋江訳の「生ひ立ちの記 青年時代」（「生い立ちの記・青年時代」）、昇曙夢訳の「三奇人」、S. K 訳の「人間と樹木との死」、瀬沼夏葉訳の「行ける屍」、小沢愛囀訳の「童魔と麵パンと」、長沢

武男訳の「閑人の話」、無署名訳の「やどなし」、森田松栄子訳の「トルストイの私信」、秋田雨雀訳の「喜劇 酒のはじまり」（「最初の酒づくり」）である。

アグネス・スメドレーは「魯迅は医学を学ぶことと同時に、日本語の勉強によってトルストイの著作を訳している」という回想を残しているが、³⁴³しかしながら、既存の資料によると、周樹人が日本留学時代に、トルストイのどの文学作品を具体的に読んだのかは断定しにくい。この課題を解決には、さらに多くの新しい資料の発掘を待つ必要があると考えている。

第二節 明治期におけるドストエフスキの翻訳・紹介と周樹人

1. 先行研究

ドストエフスキ³⁴⁴は魯迅の非常に「敬服する」作家である。魯迅はドストエフスキの多くの著作を収蔵しているだけでなく、「『貧しき人々』小序」（1926）と「ドストエフスキの7」（1935）の二つのドストエフスキ文学に関する評論を書いた。魯迅は「ドストエフスキの7」におけるこのように語っている。

回憶して見ると若かったときに偉大な文学者の作品を読んで其の作者を敬服すれども、どうしても愛し（え）ないものは二人有った。一人はダンテで其の『神曲』の煉獄の中に自分の愛する異端が居って、或るものは斜面の岩壁に重い石を押し上げて居る。……もう一人即ちドストエフスキであった。³⁴⁵

（魯迅「且介亭雜文二集・ドストエフスキの7」、今村与志雄訳）

周作人も似たような表現がある。彼は「外国小説」（1944）において、日本留学時代に自分が「ドストエフスキも感心していたが、少し畏敬していた。簡単にひっくり返す勇気がなく、やや疎遠になったことである」³⁴⁶と述べている。魯迅は日本留学時代に創作したテ

キストの中で、ドストエフスキーの名前に言及したことがない。こうした史実からわかるように、周氏兄弟は日本留学時期にすでにドストエフスキーと出会い、ドストエフスキーに感心していたが、感心していると同時に「畏敬」を生み出し、その文学に対して「やや疎遠になっている」ことである。

魯迅とドストエフスキーの先行研究について、李春林の『魯迅とドストエフスキー』（『魯迅與陀思妥耶夫斯基』）はこの二人の作家の文学創作と思想を比較研究したことがある。李春林は魯迅が所蔵したドストエフスキーの作品とドストエフスキー文学についての論著、また魯迅が著作、手紙、日記などで言及した四十数か所のドストエフスキーまたはその著作に関する事実に基づいて、「魯迅はドストエフスキーの作品を訳さなかったが、彼はドストエフスキーに対してかなり熟知しており、詳しく研究している」と結論した。³⁴⁷李春林の研究に続き、魯迅とドストエフスキーの作品と思想に対して、多くの先行研究が行われた。その中で、三つの論文は魯迅がドストエフスキーの影響を受ける過程に対して実証研究を行った。しかしながら、この三つの論文は何れも1913年に魯迅が購入した内田魯庵の翻訳した『罪と罰』という史実を述べたが、これまで魯迅はドストエフスキーの影響を受けたことに言及しなかった。³⁴⁸すでに学者から「魯迅がドストエフスキーの名前に接したのは、日本に留学した時期だ」³⁴⁹と指摘していたが、魯迅がどのような訳本を通して、ドストエフスキーのどの作品に接触したのかなど、より多くの情報を提供していない。本論では明治期におけるドストエフスキーの受容を整理する上で、日本留学時期の周樹人がどのようなルートでドストエフスキーの作品に接触したのかを検討する。

2. 明治期におけるドストエフスキーの紹介と周樹人

ここで、ドストエフスキーについて簡単に紹介しておく。ドストエフスキーはロシアの小説家である。モスクワの慈善病院の医師の次男として生まれた。1838年、工兵士官学校に入った。その後、ペテルブルグ工兵団の勤務を命ぜられるが、一年ほどで辞表を提出し、

職業作家を志した。文壇のデビューはベリンスキーの推挙によって雑誌に発表された『貧しき人々』で、その華々しいデビューは伝説化されていた。やがて、急進的グループに接近し、スパイの密告で逮捕され、死刑の宣告を受けた。だが、死刑宣告は当局の芝居であつたらしく、皇帝の特赦の名目で、シベリア流刑が改めて言い渡された。そして、4年の懲役と兵役勤務を経験し、作家生活に復帰した。³⁵⁰昇曙夢は「ロシヤ文学の伝来と影響（明治胎成期の思出）」で、ドストエフスキーの伝来が日本文壇に与えた影響を次のように回想している。

日本に於けるドストエフスキイの紹介は、ツルゲーネフやトルストイよりは稍々後れている。勿論ツルゲーネフやトルストイの伝来と共に、ドストエフスキイも名前ぐらひは伝はっていたらうが、紹介らしい紹介は明治二十年代に入ってからのことである。それには原書の入手難も原因しているが、一つは作品の性質上容易に親しみ難い所為もあつたらう。でも、明治二十年前後になると、一部の人の間にはドストエフスキイの作品がぼつぼつ読まれていたらしい形跡がある。³⁵¹

それから、昇曙夢は重点的に翻訳者の内田魯庵と高安月郊を紹介した。

遂に明治二十二年の春、英訳の「罪と罰」が日本に伝来して来、それが内田不魯庵後の魯庵の手に入って、ドストエフスキイの移植に一新紀元を開くことになった…然し、これは完成されなかったが、その代り明治二十五年の末に至って、彼の手から「罪と罰」の翻訳が上巻だけ刊行された。それより前明治二十三年春、魯庵は同じく英訳でドストエフスキイの「虐げられし人々」を読んで、また別様の大きな感激を経験した。当時「国民の友」に連載された魯庵の「損辱」（虐げられし人々）に関する梗概批評を一読しただけでも、既にあの頃から彼の海外文芸に対する理解鑑賞が如何に精到で且つ正確であつたかに敬

服する者である。ところが同じ頃、魯庵とは全然何の連絡もなく、ドストエフスキイの作品を読み始めた人に高安月郊がある。月郊と魯庵と並んで、ドストエフスキイの日本伝来には忘るべからざる一人である。³⁵²

また、昇曙夢は柳田泉の観点を引用し、日本について最初にドストエフスキーを紹介した文献を紹介した。

然るに柳田泉の書いたものによれば、同じ年の、これより数ヶ月前に、既にこの小説を紹介したものがある。それは国会新聞（明治二十五年五月二十七日）に出たもので「ドストエフスキイの罪書」と題し、筆者は松原二十三階堂主人である。二十三階堂の自ら語るところによると、彼はこの梗概を二葉亭から聞き出したものであったらしい。これはあまり知られていないが、ドストエフスキイの小説を紹介した最初の文献ではあるまいかと思ふから、ちょっと挙げておいた。³⁵³

「ドストエフスキイの罪書」の作者は松原二十三階堂。本名は松原岩五郎(1866-1935)、別号乾坤一布衣、明治時代の下層に注目した作家、新聞記者である。代表作は『最暗黒之東京』、「狂人日記」などである。松原岩五郎の「狂人日記」と魯迅の「狂人日記」の関連について李冬木の研究成果をご参照して頂きたい。³⁵⁴松原岩五郎の紹介はわずか半年後、内田魯庵ははじめて日本語訳されたドストエフスキイの小説『罪と罰』を出版した。『罪と罰』が出版された後、文壇で大きな反響を呼び、関連する評論文が数多く掲載された。例えば、南海散史の「小説「罪と罰」を読む」（『裏錦』1巻3号、明治26年1月）、十八公子の「不知庵が訳の『罪と罰』」（『城南評論』11巻、明治26年1月）、てっぷの「不知庵訳『罪と罰』」（『青年文学』15巻、明治26年1月）、佚名の「「罪と罰」は如何に批評されしか」（『青年文学』16巻、明治26年1月）、学海居士の「罪と罰の評」（『国民之友』11巻

174号、明治25年12月)、透谷子の「罪と罰」の殺人罪」(『女学雑誌』366号、明治26年1月)。以上の史実から分かるように、明治20年代のドストエフスキー文学の紹介は主にその代表作「罪と罰」に集中していた。

明治30年代に入ると、ドストエフスキーを紹介する評論文が増えはじめた。例えば、明治37年(1904)5月、『慶應義塾学報』に「史伝 薄倨なる露国小説家」に掲載され、ドストエフスキーの生涯を紹介した。同じく明治37年(1904)5月、『中央公論』に「露西亜文学の明星」に掲載された。明治38年(1905)、昇曙夢は『教育界』に「ドストエフスキーの人生観」に発表し、後に著作『露西亜文学研究』に収録された。魯迅は1926年に章叢蕪(1905-1978)訳のドストエフスキーの小説『貧しき人々』のために「『貧しき人々』小序」を執筆した。魯迅自身がこの文章を書く前に、昇曙夢の『露西亜文学研究』を参考にすることを明らかにした。2005年版の人民文学出版社の『魯迅全集・第七巻』に収録されている「『貧しき人々』小序」の注釈⑥と注釈⑨は、この文の一部の引用は、昇曙夢の『露西亜文学研究・ドストエフスキー論』であると指摘している。筆者の確認を通して、注釈⑥で指摘された引用文の部分は、昇曙夢の文章から引用されるほか、引用文にある全段にもこの文章から来ているということである。以下はそれぞれ昇曙夢と魯迅のテキストである。

晩年にもものせし『カラマゾフの兄弟』に於ても青年時代にもものせし『不憫の人々』に於ても又流竄の前後にもものせし作物に於ても全く同一なるを知るべし…ドストエフスキー氏は實際生活の文人として其文学界に働ける三十五年の間前後同一律の人なりし。唯最後の十年間は正教の宣伝者として世に知られ……彼れは有らゆる哲学的觀念を避けて人の心理に実験せる事実を捉へ、以て読者をして、我が思想の経路を追求せしめつつ此

の心理の法則のうちにおのづから倫理的観念を示したり……『不憫の人々』（千八百四十六年）に於ける謙遜の力の如き有なり。³⁵⁵

（昇曙夢「露西亜文学研究・ドストエフスキイ論」）

ドストエフスキイの生涯における執筆期間は、あわせて三十五年、その最後の十年は正教の宣伝にかたよりすぎたとはいえ、その人となりは終始変わらなかったと言ってさしつかえない。作品についても、大きな違いはなかった。彼の最初の『貧しき人々』から、最後の『カラマーゾフの兄弟』にいたるまで、言っているのはすべて同一のこと、すなわち、いわゆる「心中に実験した事実をとらえて、読者に自己の思想の経路を追求させ、この心の法則からおのづと倫理観念を明示させる」というものである。……もちろん、これは「謙遜の力」を明示しているとも言えよう。³⁵⁶

（魯迅「集外集・『貧しき人々』小序」）

北岡正子の研究により、昇曙夢の『露西亜文学研究』は「摩羅詩力説」を執筆した時に参考材料の一つであることがわかった。³⁵⁷そのため、周樹人は留学の時に、この著作に収めたドストエフスキイについての文章を読んだ可能性が高い。

明治40年代に入ると、明治文壇のドストエフスキイ文学に対する紹介はより全面的である。例えば、明治42年（1909）6月、馬場孤蝶は雑誌『新声』第20巻第5号に「ドストエフスキイの小説」を発表し、英語訳のドストエフスキイ小説『貧しい人々』、『虐げられし人々』などの作品を紹介した。明治42年（1909）1月、小杉乃帆流は「ブランデスのドスエヴスキイ論」（『新潮』10巻1号、3号）を発表した。同じく明治42年（1909）1月、加能作次郎も「ドストエフスキイに就いて」（『ホトトギス』12巻4号）を発表し、また、8月に加能作次郎は「トルストイとドストエフスキイ」（『ホ

トトギス』12巻8号)を發表した。明治42年(1909)8月5日から7日まで昇曙夢は『東京二六新聞』に「露国文学に於ける狂的分子」を發表し、ドストエフスキ一の作品をはじめとするロシア文学における「狂人」に関する作品を次のように紹介した。

露西亜文学は由来狂的分子に富んで居るが、中にもドストエフスキイの作物には狂人が沢山出て居る。ドストエフスキイの描いた人物は、主なる人物だけでも、ザット百人は有らうが其四分の一は確かに狂人である。此点に於ては露西亜文学全体を挙げても尚ほ一個のドストエフスキイに及ばざる観がある。斯う云ふ例は露西亜文学、否ドストエフスキイを除いては一寸類の無い事で、多くの作家は狂人の心理を描くのを成るべく避けやうとする気味があるが、ドストエフスキイは特に此方面に力を注いだやうに見える。

358

そのほか、昇曙夢はトルストイ、ゴーゴリ、ガルシン、ゴーリキー、アンドレーエフなどの「狂人」を描いた作品を挙げている。魯迅の最初の白話文小説「狂人日記」は「狂人」を描いた作品で、魯迅自身もこの作品はゴーゴリとニーチェからの影響について言及したことがある。日本に留学していた時、周樹人も「狂人」を主人公にした作品に非常に注目していたので、周樹人は昇曙夢の「露国文学における狂的分子」にも注目した可能性が高いと考えている。

3. 明治期におけるドストエフスキイの翻訳と周樹人

「明治翻訳文学年表・ドストエフスキイ編」によると、明治25年(1892)から45年(1912)までの20年間で19部のドストエフスキイの作品を日本語に翻訳された。これは明治期における翻訳されたロシア文学の3%を占めている。³⁵⁹それぞれ、明治25年内田魯庵訳の「罪と罰」(「罪と罰」)、明治26年高安月郊訳の「損害と侮辱と」(「虐げられし人々」)、

明治27年内田魯庵訳の「損辱」（「虐げられし人々」）、明治35年瀬沼恪三郎訳の「胸算用」（「クリスマス・ツリーと婚礼」）、明治36年橋本青雨訳の「夢現境」（「白夜」）、明治37年瀬沼夏葉訳の「貧しい少女」（「貧しい人々」）、明治37年氏家摩琴訳の「耶蘇降誕祭」（「キリストのヨルカに召された少年」）、明治39年山田枯柳訳の「女主人」（「主婦」）、明治39年上村清延訳の「移転」（「主婦」）、明治39年胆駒古峽訳の「良夜」（「白夜」）、明治40年茅野蕭々訳の「花嫁」（「クリスマス・ツリーと婚礼」）、明治41年瀬沼夏葉訳の「薄命」（「貧しい人々」）、明治41年馬場孤蝶訳の「小児の心」（「ネートチカ・ネズワーノワ」）、明治41年馬場孤蝶訳の「博徒」（「賭博者」）、明治41年斎藤野之人訳の「クリスマスの夜」（「キリストのヨルカに召された少年」）、明治42年衛藤東田訳の「不安」（「罪と罰」）、明治43年阿部干三訳の「囚徒」（「死の家の記録」）、明治44年山本迷羊訳の「クリスマス」（「キリストのヨルカに召された少年」）、明治45年森鷗外訳の「鰐」（「鰐——異常な出来事」）等である。

以上の整理を通して、少なくとも以下の3部のドストエフスキーの作品は周樹人と密接な関係があると考えている。一つ目は、『魯迅目睹書目』によると、周樹人は1913年、内田魯庵訳の『罪と罰』（丸善株式会社、1913年刊）を購入した。³⁶⁰そのため、周樹人は留学の時に明治25年（1892）内田魯庵訳の『罪と罰』に注目した可能性が高いである。二つ目は瀬沼夏葉訳の「貧しい少女」である。魯迅は自分が若かった時にドストエフスキーの小説「貧しき人々」を読んだと述べた。李冬木の研究によると、「「貧しき人々」（1846）は最も早い、また明治期唯一の日本語訳でもある訳が『文芸倶楽部』の明治37年（1904）4月号上の「夏葉女史」の「貧しき少女」であった。当該本は全訳ではなく、抄訳であり、作品中の女性主人公ワーレンカが男性主人公に渡した彼女自身の日記部分だけである。「若かりし頃」の周樹人が読んだものは恐らくこの訳であろう。³⁶¹三つ目は日本語訳ではなく、英語訳の一部の作品である。周作人は「『域外小説集』——〈新生〉乙編」（1961）の中で、ヴォイニッチが編集する『ロシアのユーモア』（The humour of Russia）に基づいて、ス

テプニャクの「一文銭」を翻訳したと回想している。この翻訳小説集はドストエフスキーの小説 The Crocodile（「鱷——異常な出来事」）にも収録している。³⁶²そのため、ドストエフスキーの「鱷——異常な出来事」の英語訳にも日本留学時期の周氏兄弟の周辺に存在している。

終章

本論では周樹人の日本留学の実態及び明治期におけるロシア文学の翻訳と紹介の実態を調査し、次に、各テキストに関連した資料の分析を通して、日本留学時期の周樹人がロシア文学から受容したものを明らかにした。

終章では、主に日本留学時期の周樹人はなぜロシア文学を愛読したのか、明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介は周樹人の「文芸運動」及び後の創作に対していかなる影響を与えたのか、明治期におけるロシア文学の翻訳は清末時期におけるロシア文学の翻訳にとってどのような意味を持っているのか、及び清末ロシア文学の受容史における周樹人の位置づけであるなど、三つの課題を通して留学時期の周樹人と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介の関係を明らかにしていく。

第一節 日本留学時期の周樹人はなぜロシア文学を愛読したのか

李冬木はロシア文学と明治期のインテリ界及び周樹人の関連については、次のように分析している。

ロシア文学が大量に翻訳、紹介されたのは、当然日露戦争の背景と切り離すことはできない。ロシアのインテリが専制に反抗し、大胆に人間性の醜悪と善良を解剖し、様々な方法で精神抗争を展開したことは、疑いなく日本のインテリ界の共鳴を引き起こした。後者は周樹人が留学したあの時期において、正に「ニーチェ」を旗頭とし、国家主義の圧力の下で「自我」空間を確保しようとしていた。これにより「個人」「個性」「精神」「心霊」「超人」「天才」「詩人」「哲人」「精神界の戦士」「真の人」を闘争の武器とした時、敵国のロシア文学を自らの最大の援軍とした。³⁶³

筆者はこの分析に基づいて、日本留学時期の周樹人がロシア文学に注目した以下の三つの理由を提起する。

まずは、大規模かつ高品質の翻訳活動について、上述した通り、明治15年（1882）から明治45年（1912）まで、650篇以上のロシア作品が日本語に翻訳された。作品は小説、詩歌、演劇などさまざまなジャンルにわたっており、その数は多く、規模も大きく、範囲も広い。また、多くの日本近代の有名な作家もロシア文学の翻訳に力を入れていた。周作人は留学時期の魯迅が「日本文学に対しては当時は少しも注意せず、森鷗外、上田敏、長谷川二葉亭等、殆どただその批評や訳文のみを重んじた」³⁶⁴と回想した。ここで周作人が挙げた森鷗外、上田敏、二葉亭四迷などは、何れも作家と翻訳家という二重の身分を持ち、ロシア文学の翻訳に取り組んでいた。森鷗外も周樹人が留学した時に愛した作家の一人である。森鷗外はドイツ語に基づいてトルストイ、レールモントフ、ツルゲーネフなどの作品を翻訳した。上田敏は最初にゴーゴリとアンドレーエフの小説を日本語に翻訳した人である。また、彼は英訳本によってツルゲーネフの散文詩を翻訳した。二葉亭四迷は近代日本のロシア文学翻訳の先駆者で、ロシア語に精通している。彼が翻訳したツルゲーネフの二つの小説「あひびき」と「めぐりあひ」は、日本の言文一致の翻訳文体を確立させ、日本近代文学に重要な影響を与えた。

二つ目の理由は背景に日露戦争があったことである。日露戦争と明治期におけるロシア文学の関連については、本論の第一章で説明しているので、ここでは主に周樹人との関係について述べることにする。日露戦争は周樹人が「医学を捨てて文学を志す」という重要な出来事である。「呐喊・自序」や「藤野先生」における「幻灯事件」の背景には、日露戦争の勃発がある。周樹人と一緒に日本に留学した沈黙民（1878-1969）は「魯迅早年的活動点滴」という回想文の中で、周樹人が日露戦争に対する考えを記録している。周樹人は「ロシアも日本も帝国主義と認識し、何れも中国を侵略した敵である」と考えていたとい

う。³⁶⁵この回想を通して、日本、ロシア、この二つの「中国を侵略した敵」に注目していた。それと同時に、周樹人は「敵国」のロシア文学にも目を向けていたことがわかった。

三つ目の理由はロシア文学の特徴である。馬場孤蝶は「露国文学と本邦現代文学との交渉（一）」の中で、明治期のインテリ界がロシア文学に注目した理由について、以下のよう述べている。「欧州の進歩したる読書界に露国小説が歓迎せらるゝと同じ理由で、即ち、露国小説が、人生の直截な研究を発表したものであるからである」³⁶⁶。魯迅の「ロシアの文学はニコライ二世のときから「人生のため」であった。意味するところが探究にあったのであれ、解決にあったのであれ、神秘におちいって頹廢に溺れたのであれ、その主流はやはり一つ、人生のために、であった」、³⁶⁷「たとえば、「なぜ」小説を書くのかについていえば、わたしはいまだに十余年前の「啓蒙主義」を抱いていて、「人生のために」であるべきであり、かつてこの人生を改良しなければならないと考えている」³⁶⁸などの観点は馬場孤蝶の「露国小説が、人生の直截な研究を発表したものであるからである」の言に非常に近い。また、馬場孤蝶は「露国文学と本邦現代文学との交渉（一）」の中で、以下のことを指摘している。

露西亜の近代小説は、専制治下の国民の一部が、欧州の革命の餘波を受け、自由思想の高潮の飛沫を浴びて、動揺を來たした時代に生じ來った文学である。われ等中年の日本人は、矢張り近頃まで専制の治下にあつたやうな気が為るので——尤も、これは、有司が壓制を為たのでは無くして、人民の方が、壓制に甘じて居たのかも知れぬが、——さういふ露西亜文学は理解し易いのである。専制政府の下にあつた国民は歐洲には多いけれども、極く近代まで、壓制政治の下に苦んで居た歐洲の國民といふのは露西亜の外には多く無いし、且、その小説なるものが、極めて寫眞的で、平凡な日常の出来事までも明瞭に描寫したものであるので、われわれには、痛切な感動を與へるのである。³⁶⁹

周作人も似たような言い方を書き残した。例えば、「ロシアは独立強国であるが、人民は自由を目指して革命を起こしているので、重点的に紹介したい」³⁷⁰と記し、「私たちがロシア語を勉強しているのは自由を求める革命精神と文学に感心しているからだ」³⁷¹と回想した。馬場孤蝶の評論は明治期における知識人のロシア文学に対する態度を代表し、このように人生を暴露して、専制に反抗して、自由を求めて、日常を描写する文学の特徴は当時の日本の知識界が重きを置いたことを受けて、周氏兄弟の共鳴感にも引き起こした。具体的には、個性を主張する浪漫主義詩人たちに対する関心から、自由を求めるロシアの詩人プーシキン、レールモントフは、他の6人の詩人と共に周樹人の執筆した「悪魔派」詩人の系譜を構成している。また国民性の問題に関心を持っている周樹人もロシア文学で国民性の治療法を求めたことである。例えば、錢玄同は『域外小説集』について「ロシア、ポーランドなどの国の崇高な人道主義を注ぎ込み、我が国人の卑劣、陰険、利己的などの汚らわしい心理を薬にする」³⁷²と述べた。周樹人が翻訳したガルシンの小説「四日」は、戦争の残酷さを訴え、人道主義を謳歌した作品の一つである。また林敏潔の研究では、周樹人はアンドレーエフの小説の題名を「謾」と「黙」と翻訳し、中国国民性に欠けている「誠」と「愛」を治療するつもりであることが明らかにされた。³⁷³

特に指摘したいのは、周樹人がロシア文学に注目したのは、明治期の「ニーチェ・ブーム」にも関連していることである。李冬木の研究では、「ニーチェ度」は明らかに当時の周樹人が小説の創作状況を把握し自己の審美的な選択をする一つの基準であることを明らかにしている。³⁷⁴日本の「ニーチェ」に関する最初の文章は「ニーチェ」と「トルストイ」を同列に論じ、二人はヨーロッパの二つの思想の代表者だと述べた。³⁷⁵その後、評論家の中島孤島（1878-1946）が「ニーチェ氏とロシア小説家」（『読売新聞』1901年1月21日）、「十九世紀末の二大小説——トルストイ伯とニーチェ氏」（『読売新聞』4月1日、8日、22日）などの文章を發表し、トルストイとニーチェがヨーロッパの19世紀末の二つの思想をどう表しているのかを紹介した。実際にロシアの作家をニーチェ主義の延長線上に置く

のは、ゴーリキーの作品が日本文壇に翻訳されてからである。周樹人の日本留学時代のニーチェへの関心について、李冬木は「留学生周樹人周辺の「ニーチェ」及びその周辺」で詳しい調査が行われた。³⁷⁶明治期におけるゴーリキーとニーチェの関係、特に二葉亭四迷が翻訳したゴーリキーの小説「二狂人」とニーチェの関係は、李冬木も「「狂人」の越境の旅：周樹人と「狂人」の出会いから彼の「狂人日記」まで」で分析を行っている。³⁷⁷1929年、魯迅はゴーリキーの短篇小説「悪魔」を訳した後、「訳者附記」で「悪魔」の創作時期について、以下のように述べている。「本文から想像してみるに、二十世紀の初めのもので、当然社会主義の信者になっているが、ニーチェ色がまだかなり濃厚なときであったと思われる」³⁷⁸。ここから分かるように、20世紀初期のゴーリキーは魯迅に「ニーチェ色がまだかなり濃厚なとき」という印象を残し、ニーチェを愛読した周樹人は、ゴーリキーをニーチェの延長線上の個性主義的な作家として受け入れた。また周樹人が後に注目して翻訳したアンドレーエフやアルツィバーシェフなどの作家も、このニーチェ主義の延長線上にあるのは言を俟たない。

第二節 明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介は周樹人の「文芸運動」及び後の創作に対して何の影響を与えたのか

筆者の考察によれば、少なくとも以下の三つの面に影響を与えたと言える。まず、明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介は周樹人の文芸活動に対する参考資料を提供した。明治期には数多くのロシアの作家の伝記作品やロシア文学の研究書が出版され、ロシア文学に関する評論文が数多く発表された。留学時期の周樹人が書き残したロシア文学に関する部分からみると、周樹人はこれらの書籍と文章を通してロシア文学に関する知識を獲得した。例えば、「摩羅詩力説」におけるゴーゴリ、プーシキン、レールモントフ、コロレンコなどのロシアの作家を紹介したテキストを通して、周樹人は当時少なくとも以下の5種類の日本語の資料を読んだことが明らかになった。³⁷⁹

- ①昇曙夢『露国文豪ゴーゴリ』、春陽堂、1904年6月。
- ②八杉貞利『詩宗プーシキン』、時代思潮社、1906年。
- ③昇曙夢「レルモントフの遺墨」、『太陽』12巻12号、1906年。
- ④昇曙夢「露国詩人与其詩 六 レルモントフ」、『露西亜文学研究』、隆文館、1907年。
- ⑤小山内薫「露国の小説家ウラヂミール・カラレンコ」、『新小説』第11年第12巻、1906年。

特に注目すべき書籍は、明治40年（1907年）に出版され、30歳未満の青年研究者、昇曙夢が書いたロシア文学研究書『露西亜文学研究』である。この著作には18篇の評論文が収録されており、プーシキン、レルモントフ、ツルゲーネフ、ドストエフスキー、トルストイ、ゴーリキー、アンドレーエフなどの多くのロシアの作家の作品と思想が紹介されている。当時の評論家はこの著作が「甚大の興味と利益とを文界の読書生に興ふべきは云ふまでもない。此種の著述としては稀有と云ひ得るまでに其内容が豊富である」と評価した。³⁸⁰魯迅は1926年に韋叢蕪訳のドストエフスキーの小説『貧しき人々』のために「『貧しき人々』小序」を執筆した。この文章は『露西亜文学研究』に収録された論文を参考した。³⁸¹また、魯迅はかつて言及したことがあるツルゲーネフの演説文「ハムレットとドン・キホーテ」の日本語訳もこの著作に収録された。³⁸²

ここで指摘したいのは、周樹人は日本語の訳本以外に、英訳本とドイツ訳本のロシア文学に対して、非常に関心を持っていることである。周作人は「魯迅について 其二」の中で、彼と周樹人は丸善書店とレクラム文庫を通じて西洋の文学作品を集めたことに触れた。例えば、周作人はブランデスの『露国印象記』とクロポトキンの『露西亜文学の理想と現実』は「19世紀のロシア文学を語るよい参考書である」と評価している。³⁸³北岡正子の研究により、この二冊の英語版の著作は周樹人が「摩羅詩力説」の第七章を執筆した時に参考した材源である。³⁸⁴周作人自身は「ロシアの大作家」の中で、丸善書店で購入した英語版の著作『ロシアの大作家』という著作を通じて、はじめてゴーゴリ、ツルゲーネフ、トル

ストイなどの三人の作家に触れたことを回想している。³⁸⁵周樹人はこうした参考資料を読むだけでなく、その中の重要な内容を自分の創作に取り入れて、自分の言論を構築している。同じく北岡正子の研究により、周樹人は「摩羅詩力説」第七章におけるプーシキンを紹介したテキストの中で、「国民性」という表現を使って、「獣愛」という概念をまとめた。プーシキンが中年の時に表現した「獣性愛国」を批判し、当時の「いつも愛国を唱えている君子」たちを批判した。³⁸⁶

二つ目は周樹人の翻訳活動への影響である。周樹人が留学の時に翻訳して発表したロシアの小説は、『域外小説集』に収録された「謾」、「黙」、「四日」の3篇だけで、数量的には多くない。しかしながら、『域外小説集』の「新訳予告」と周作人の「魯迅について 其二」を通して、周氏兄弟が外国文学を翻訳するために多くの準備をしていたことがわかった。すでに出版した『域外小説集』の前二冊はその中の一部にすぎない。『域外小説集』の前二冊の中で、周作人が翻訳した四篇のロシア小説チャーホフの「威施」、「塞外」、ガルシンの「邂逅」とステプニャクの「一文銭」以外、周氏兄弟が計画的に翻訳したロシアの小説は、ツルゲーネフの「畢旬大野」、「猶太人」、「莓泉」、ガルシンの「絳花」、アンドレーエフの「赤咲記」、レールモンツフの「並世英雄伝」、コロレンコの「海」、「林籟」、チャーホフの「決闘」などである。また、周作人は英訳本に基づいてA・K・トルストイ（1817-1875）の『勁草』（『白銀公爵』）を翻訳した。崔文東は『域外小説集』の底本に対する考証を経て、周樹人が留学する時に購入したドイツ語訳のロシア文学の単行本は百種類を超えたと推測し、『域外小説集』に収録された16篇の外国小説の底本を確定した。崔文東は「明治末期の日本文壇はロシア文学に熱中していたが、ドイツの翻訳の盛況に対して、依然として見劣りしている」と述べた。³⁸⁷筆者の調査では、『域外小説集』に収録された「黙」、「威施」、「邂逅」、「一文銭」などの小説はドイツ語や英語によって翻訳されたものと確認された。理由は『域外小説集』が出版される前に、こうした小説の日本語訳が発見されなかったからである。しかしながら、他のいくつかの小説は日本

語の訳本を参考にした可能性がある。例えば、周樹人本人は二葉亭四迷の日本語訳『血笑記』を何ページか翻訳したことがあると回想しているが、これも恐らく『域外小説集』のための翻訳文であったと推測できる。³⁸⁸ロシア語を勉強する時間は限られており、周樹人は日本語またはドイツ語でロシア文学を翻訳するしかなかった。魯迅が後に翻訳したアルツィバーシェフの『労働者シェヴィリョフ』やゴーゴリの『死せる魂』を通して、日本語訳本とドイツ語訳本に基づいてロシア文学を翻訳したことは魯迅が後にロシア、ソ連文学を翻訳する時の常態となったことは明らかである。魯迅のこのような日本語訳本とドイツ語訳本を併用した翻訳モデルは、明治期におけるロシア文学の日本語訳本と購入したロシア文学のドイツ語訳を同時に翻訳した日本留学時代から始まったと言えるだろう。

三つ目は周樹人の創作活動への影響である。参考資料や翻訳以外に、ロシア文学は周樹人の文学創作に影響を与えた。例えば、周樹人が「魯迅」を筆名として発表した最初の白話小説「狂人日記」が、最も代表的な例である。魯迅は「狂人日記」の創作について、「頼みの綱としたのは、以前に読んだ百余篇の外国作品とわずかな医学上の知識である」と回想した。³⁸⁹また魯迅自身もゴーゴリの同名小説「狂人日記」とニーチェの『ツァラトゥストラはこう語った』が自分の「狂人日記」に与えた影響についても言及している。³⁹⁰『小説叢書』によると、周樹人は最初に二葉亭四迷訳のゴーゴリの「狂人日記」を読んだことが述べられる。李冬木の研究では、ゴーゴリの「狂人日記」のほか、魯迅の「狂人日記」とゴーリキーの「二狂人」、チェーホフの「六号室」、アンドレーエフの「紅笑」などの「狂人」を描くロシア小説との関連が明らかになった。³⁹¹張麗華もアンドレーエフの「心」と「狂人日記」の関連性について言及している。³⁹²また、魯迅のもう一つの小説「薬」もロシア文学から大きな影響を受けた作品である。魯迅はかつて孫伏園に対して、自分の小説「薬」はアンドレーエフの小説「歯痛」とツルゲーネフの作品「労働者と白き手の人」の影響を受けたと語っている。³⁹³この二つの小説はその後、何れも周作人の手によって中国語に翻訳された。また、ゴーゴリの「外套」と「孔乙己」、チェーホフの「大事件」と「兎と猫」、

ツルゲーネフの「草場」と「村芝居」、チャーホフの「叱ッ！」と「幸福な家庭」、ガルシンの「紅い花」や「長明灯」などの作品は、何れも人物、ストーリー、テーマと明らかに似ている所が多い。その中で一部分の作品は周樹人が留学を終えた後、他の言語の訳本で読んだ作品かもしれないが、周樹人とロシア文学及び後のソビエト文学との関連は、明治期におけるロシア文学を起点とした延長線にあるのは言を俟たない。言い換えれば、明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介は周樹人がロシア文学に触れた原点である。

第三節 明治期におけるロシア文学の翻訳は清末時期におけるロシア文学の翻訳にとってどのような意味を持っているのか及び清末ロシア文学の受容史における周樹人の位置づけ

先行研究の調査によると、清末時期におけるロシア文学は少なくとも以下の 29 部が中国語に翻訳された。³⁹⁴それぞれ、1872 年丁韞良訳の「俄人寓言」、1896 年藍文海訳の「父子」、1899 年林樂知と任廷旭が共訳した『俄国政俗通考』、1903 年戢翼翬訳の「俄国情史」、1905 年佚名訳の「枕戈記」、1905 年佚名訳の「曇花夢」、1907 年吳禱訳の「銀鈕碑」、1907 年吳禱訳の「黒衣教士」、1907 年吳禱訳の「憂患余生」、1907 年葉道勝訳の『托氏宗教小説』、1907 年朱陶と陳無我が共訳した「大風雪」、1907 年から 1908 年まで、七曲山民訳の「虎口余生記」、1908 年天蛻訳の「鷹歌」、1908 年佚名訳の『俄王義文第四專政史：不測之威』、1908 年周作人訳の「莊中」、1908 年莫等閑齋主人（陳尺山）訳の「奈何天」、1908 年周作人訳の「一文錢」、1909 年周樹人と周作人が共訳した『域外小説集』第一冊（1909 年 3 月）と第二冊（1909 年 7 月）に収録された「謾」、「黙」、「四日」、「邂逅」、「戚施」、「塞外」、「一文錢」、1909 年陳景韓訳の「俄帝彼得」、1909 年陳景韓訳の「生計」、1909 年包天笑訳の「写真貼」、1909 年包天笑訳の「火車客」、1909 年包天笑訳の「六號室」、1909 年佚名訳の「愚国誌」、1910 年陳景韓訳の「心」、1911 年勿我と冷が共訳した「神槍手」、1911 年熱質訳の「峨眉之雄」、1911 年周瘦鵑訳の「孝子碧血記」、1912 年勿我訳の「棺材匠」である。

先行研究の調査によると、³⁹⁵この 29 部の中国語訳のロシア作品の中で、明治期の日本語訳をもとにして翻訳されたものが以下の 12 冊があり、清末時期におけるロシア文学作品の 41%を占めている。

番号	原作者	日本語訳者	書目情報	中国語訳者	書目情報
1	プーシキン	高須治助	『露国奇聞 花心蝶思録』、法木徳兵衛刊、1883 年 6 月	戢翼翬	『俄国情史』、大宣書局刊印、1903 年
2	トルストイ	二葉亭四迷	「筒を枕に」、金港堂、1904 年 7 月	佚名	「枕戈記」、『教育世界』乙巳 8、10、19 期 (100、102、111 号)、光緒 31 年 (1905) 5、6、11 月
3	レールモン トフ	嵯峨の家主人	「当代の露西亜人」、『太陽』第 10 卷第 5 号、1904 年 4 月	呉禱	「銀鈕碑」、上海商務印書館 1907 年版『袖珍小説』叢書
4	チャーホフ	薄田斬雲	「黒衣僧」、『太陽』第 10 卷第 13 号、14 号、1904 年 10 月、11 月	呉禱	「黒衣教士」、上海商務印書館 1907 年版『袖珍小説』叢書
5	ゴーリキー	長谷川二葉亭	「猶太人の浮	呉禱	「憂患余生」、

			世」、『太陽』第 11 卷第 2 号、1905 年 2 月		1907 年『東方雜 誌』第 4 卷
6	ゴーリキー	上田敏	「鷹の歌」、『芸 文』、1902 年 6 月	天蛻	「鷹歌」、『粵 西』、1908 年
7	プーシキン	昇曙夢	「心づくし」（原 名「彼得大帝の黒 人」）（翻訳小説）、 『新小説』第 12 年第 2 卷、1907 年 2 月	陳景韓	「俄帝彼得」、 『小説時報』 1909 年第 1 期
8	チェーホフ	瀬沼夏葉	「余計者」、『チ ェホフ傑作集』、 獅子吼書房、1908 年 10 月	陳景韓	「生計」、『小 説時報』1909 年 第 2 期
9	チェーホフ	瀬沼夏葉	「写真貼」、『チ ェホフ傑作集』、 獅子吼書房、1908 年 10 月	包天笑	「写真貼」、『小 説時報』1909 年 第 2 期
10	チェーホフ	瀬沼夏葉	「月と人」、『チ ェホフ傑作集』、 獅子吼書房、1908 年 10 月	包天笑	「火車客」、『小 説時報』1909 年 第 3 期
11	チェーホフ	瀬沼夏葉	「六号室」、『チ	包天笑	「六号室」、『小

			エホフ傑作集』、 獅子吼書房、1908 年10月		説時報』1909年 第4期
12	アンドレー エフ	上田敏	『心』、春陽堂、 1909年6月	陳景韓	「心」、『小説 時報』1910年第 6期

この12部の日本語の訳本をもとにして翻訳した中国語訳のロシア小説は全部で6人のロシアの作家、7人の日本の訳者と6人の中国語の翻訳者に関連している。6人の中国語の翻訳者の中で、天蛻ともう1人の情報がはっきりしない翻訳者のほか、残りの戢翼翬(1878-1909)、呉禱(1880?-1925)、陳景韓、包天笑(1876-1973)などの4人は近代中国で最初にロシアの小説を翻訳した翻訳者である。

周氏兄弟のロシア文学の翻訳活動は主に『域外小説集』に集中しており、4人の作家の7篇の小説を翻訳しており、数量的には同じ時期の中国語訳者より多いと見られる。周樹人及び周作人は呉禱、陳景韓、包天笑などの翻訳者と同じで、中国で最初にロシア文学に関心を持った人である。同じ中国で最初にロシア文学を翻訳した人であるが、しかしながら、周樹人のロシア文学に対する関心は、同時期の翻訳者と比べれば、以下の三つの違いがある。

一つ目は、周樹人が日本語訳のロシア文学を集めただけでなく、英訳本とドイツ訳本のロシア小説集を求め続けており、翻訳活動を行っている。藤井省三が指摘したように、「魯迅は日本のアンドレーエフ・ブームの渦中にいたというよりも、日本の文学者と競い合うように翻訳活動をしていたというのがより適切であろう」³⁹⁶。また、彼はロシア文学を理解するために、短い時間でロシア語を勉強していた。ロシア語の勉強に失敗した後、丸善書店を通じてドイツ語訳や英訳のロシア小説集を購入し、様々なルートでロシア文学に関する資料を収集した。

二つ目は、周樹人がロシアの小説を閲読と翻訳する段階にとどまっているだけでなく、彼は明確な問題意識と翻訳動機を持ったことである。例えば上記のように、「悪魔派」詩人の系譜を構築するために、プーシキン、レールモントフの生涯と創作を紹介した。中国の国民性に欠けている「誠」と「愛」を治療するために、アンドレーエフの小説「謾」と「黙」を翻訳した。戦争の残酷さを訴えるために、ガルシンの小説「四日」とアンドレーエフの小説「紅笑」を翻訳した。また、自分が読んだロシア文学の素材を自分の言説の中に構築した。具体的に「摩羅詩力説」の中の、プーシキン、レールモントフ、コロレンコなどの作家を紹介したテキストから見られる。とりわけ、ブランデスの言葉を借りて、プーシキンが中年の時に表した「獣性愛国」を批判したことが、周樹人の早期の「立人思想」の重要な構成部分となっている。

三つ目は、ロシア文学は周樹人の後の文学創作に豊富な文学素材を提供したことである。周樹人と同時期の清末のロシア文学の翻訳者たちもおそらく様々な言語のロシア小説を読んでいるが、自分が読んだ様々なロシア文学の中の人物像、物語の題材、表現の手法に対して芸術的な加工を行い、様々な素材を混ぜて、中国の現実状況に合わせて小説を創作することができたのは周樹人のみである。青年である周樹人のロシア文学に対する吸収と理解、同時期の翻訳者たちを超えていることは明らかである。

上述の考察を通して、「周樹人」から「魯迅」への内的精神のメカニズムにおいて、ロシア文学、とりわけ明治期における翻訳・紹介されたロシア文学の出版物は極めて重要な役割を果たしている。

第四節 今後の課題

本論では、日本留学時期の周樹人と明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介との関係を考察した。今回は、以下の三つの課題の考察について十分に行うことができなかった。

一つ目は、留学時期の周樹人は明治期の翻訳界を舞台に、多くの日本語訳本のロシア文学に接触した。しかしそれと同時に、周樹人は丸善書店を通じて、多くのドイツ語訳のロシア文学作品集を購入している。崔文東が指摘した通り、「明治末期の日本文壇はロシア文学に熱中していたが、ドイツの翻訳の盛況に対して、依然として見劣りしている」³⁹⁷。その次、周作人も英訳本のロシア作品集を通じて周樹人に関連資料を提供した。したがって、日本語訳のほかに、留学時期の周樹人と英訳本、ドイツ語訳本のロシア文学の関わりには、まだ研究余地が大きいと言える。

二つ目は、ロシア文学が周樹人の創作活動に与えた影響である。魯迅は「狂人日記」の創作について、「頼みの綱としたのは、以前に読んだ百余篇の外国作品とわずかな医学上の知識である」と回想した。³⁹⁸しかしながら、「狂人日記」以外に、魯迅が日本留学時期に読んだロシアの小説は彼の他の作品に何の影響を与えたのだろうか。本論では、一部分の日本語訳のロシア小説と魯迅の作品との関連については検討したが、この課題については引き続き掘り下げていく必要がある。

三つ目は、留学後の魯迅と日本語訳のロシア文学の関係である。本論は「魯迅とロシア文学」という課題の一部となっている。上述したように、周樹人とロシア文学及び後のソビエト文学との関連は、明治期におけるロシア文学を起点とした延長線にあるのは言を俟たない。即ち、魯迅は留学を終えた後も、相変わらず数多くの日本語訳を通してロシア文学を読み、翻訳している。筆者は本博士論文をもとに、「留学後の魯迅と日本語訳のロシア文学」というテーマを今後の課題として研究を続け、展開していくつもりである。

注釈

序章

¹ 魯迅「華蓋集・青年必讀書」、『魯迅全集』第4巻、学習研究社、1992年4月、第22頁。

本論の魯迅の引用は同全集よりである。

² 李冬木「魯迅与日本書」、『魯迅精神史探源 進化与國民』、秀威資訊科技股份有限公司、2019年5月、第15頁。

³ 孫郁『魯迅与俄国』、人民文学出版社、2015年3月、第2頁。

⁴ 許広平「略談魯迅与蘇聯文学的關係」、『許広平文集』第2巻、江蘇文芸出版社、1998年1月、第519頁。

⁵ 王友貴『翻譯家魯迅』、南開大学出版社、2016年、第2頁。

⁶ R. M. Bartlett 作、石孚訳「新中国的思想界領袖魯迅」、李何林編『魯迅論』、陝西人民出版社、1984年2月。

⁷ 松枝茂夫訳「魯迅について 其二」、『周作人隨筆集』、改造社、1938年6月、60頁。

⁸ 姚錫佩「魯迅初読「狂人日記」的信物——介紹魯迅編定的「小説訳叢」」、『魯迅藏書研究』、魯迅博物館魯迅研究室編、中国文聯出版公司1991年版、第299-300頁。

第一章

⁹ 丸山昇、伊藤虎丸、新村徹編『中国現代文学事典』、1985年9月初版、東京堂出版、313-315頁を参照。

¹⁰ 李冬木「<周樹人>から<魯迅>へ—留学時代を中心に—」、『人文学研究の諸相 佛教大学・中国社会科学院文学研究所国際シンポジウム論集』、佛教大学推進部、2019年12月、353-369頁。

¹¹ 北岡正子『魯迅文学の淵源を探る——「摩羅詩力説」材源考』、汲古書院、2015年6月。

¹² 中島長文「藍本「人間の歴史」(上)」、『滋賀大國文』第16号、1978年。

藍本「人間の歴史」(下)、『滋賀大國文』第17号、1979年。

- 13 宋声泉「科学史教篇」藍本考略、『中国現代文学研究叢刊』、2019年第1期。
- 14 清水賢一郎「国家と詩人——魯迅と明治のイプセン」、『東洋文化』第74号、1994年3月。
- 15 李冬木「留学生周樹人周辺の「尼采」及其周辺」、張釗貽編『尼采与華文文学論文集』、新加坡八方文化創作室、2013年11月。山東社會科学院『東嶽論叢』2014年第3期轉載。
- 16 汪衛東「新發現魯迅「文化偏至論」中有關施蒂納的材源」、『中国現代文学研究叢刊』、2008年第9期。
- 17 藤井省三『ロシアの影 夏目漱石と魯迅』、平凡社、1985年4月、145頁。
- 18 崔文東「青年魯迅与德語「世界文学」——『域外小説集』材源考」、『文学評論』、2020年第6期。
- 19 魯迅「集外集・「紅笑について」について」、『魯迅全集』第9卷、159-163頁。
- 20 川戸道昭等編「明治期ロシア文学翻譯年表稿」、『明治翻譯文学全集37・ゴーゴリ集』、大空社、2000年4月、341-370頁。
- 21 残月生「露国文学の紹介者」、『裏錦』14卷164号、1906年。
- 22 柳田泉「明治、大正時代のロシア文学の移入」、『学燈』第66卷1月号、1969年1月。
- 23 魯迅「華蓋集続編・即座支日記」、『魯迅全集』第4卷、370頁。
- 24 魯迅「且介亭雜文二集・ドストエーフスキイの7」、『魯迅全集』第8卷、457頁。
- 25 姚錫佩「魯迅初読「狂人日記」的信物——介紹魯迅編定的「小説訳叢」」、魯迅博物館魯迅研究室編『魯迅藏書研究』、中国文聯出版公司1991年版、第299-300頁。
- 26 松枝茂夫訳「魯迅について 其二」、『周作人隨筆集』、改造社、1938年6月、60頁。
- 27 松枝茂夫訳「魯迅について 其二」、『周作人隨筆集』、改造社、1938年6月、61-62頁。
- 28 周作人「知堂回想録 七九 学俄文」、『周作人散文全集』第13卷、広西師範大学出

版社、2009年、376-377頁。訳文は大東和重の論文「中国における日本を經由したロシア・ソビエト文学受容の一側面：昇曙夢の紹介・翻訳を中心に」（『言語と文化』第18号、2015年）を引用。

²⁹ 許寿裳『亡友魯迅印象記 十六 雑談翻訳』、上海文化出版社、2006年7月、54頁。

³⁰ 郭沫若「契珂夫在東方」、『沸羹集』、『郭沫若全集 文学編』第19卷、人民文学出版社、1992年1月、469頁。

³¹ 史沫特萊「憶魯迅」、孫郁、黃喬生編『海外回響 國際友人憶魯迅』、河北教育出版社、2000年7月、第5頁。

³² 中国社会科学院文学研究所魯迅研究室編『1913-1983 魯迅研究學術論著資料索引匯編 分冊』、中国文聯出版公司、1990年7月。

第二章

³³ プーシキンは中国語で「普希金」と表記される。明治期には「プシキン」、「プーシキン」と表記された。周樹人は「普式庚」、「普希金」と表記した。本論では「プーシキン」を用いることとする。

³⁴ 中島長文「藍本「摩羅詩力説」第七章」、『颯風』第6号、1974年4月。

北岡正子『魯迅文学の淵源を探る——「摩羅詩力説」材源考』、汲古書院、2015年6月。

³⁵ 姚錫佩「魯迅初読「狂人日記」的信物——介紹魯迅編定的「小説訳叢」」、『魯迅藏書研究』、魯迅博物館魯迅研究室編、中国文聯出版公司1991年版、第299-300頁。

³⁶ 陳漱渝「尋求反抗和叫喊的呼声——魯迅最早接觸過哪些域外小説？」、『魯迅研究月刊』、2006年第10期。

³⁷ 俞航「魯迅眼中的俄国詩人：形象学視野下的「摩羅詩力説」」、『中南大学学报（社会科学版）』第20卷第6期、2014年12月。

³⁸ 川戸道昭等編『世界文学総合目録 第8巻 ロシア編』、大空社、2012年7月、601頁

を参照。

³⁹ 佐藤繁好「日本におけるプーシキン書誌(翻訳・研究・紹介文献目録)第一編(1883-1944)」、
『窓』56号、1986年3月。

⁴⁰ 北岡正子『魯迅文学の淵源を探る——「摩羅詩力説」材源考』、汲古書院、2015年6月。

⁴¹ 周作人「知堂回想録 翻訳小説下」、鐘叔河編『周作人散文全集13』、広西師範大学出版社、2009年、372頁。

⁴² 周作人「關於自己」、鐘叔河編『周作人散文全集7』 広西師範大学出版社、2009年、804-805頁。

⁴³ 川戸道昭等編「明治翻訳文学年表・プーシキン編」、『明治翻訳文学全集36 プーシキン/レールモントフ集』、大空社、1999年12月。作品の現代日本語訳名は川戸道昭等編『世界文学総合目録 第8巻 ロシア編』(大空社、2012年7月)を参照。

⁴⁴ 嵯峨の家主人訳「巴黎の夫人」(上)、『太平洋』、1902年8月11日。嵯峨の家主人訳「巴黎の夫人」(下)、『太平洋』、1902年8月18日。

⁴⁵ 日本近代文学館編『日本近代文学大事典 第三巻』、講談社、1977年、37頁。

⁴⁶ 馬場孤蝶「『白夜集』を読みて(一)-(九)」、『東京二六新聞』、1908年12月1、3-10日。

⁴⁷ 昇曙夢「馬場君に答ふ」、『東京二六新聞』、1908年12月13日。

⁴⁸ 昇曙夢「『白夜集』の弁(下)」、『東京二六新聞』、1909年2月28日。

⁴⁹ 昇曙夢「研究と翻訳との十々年」、『文章世界』7巻2号、1912年2月1日。

⁵⁰ 榎内裕子「昇曙夢の初期翻訳」、源貴志、塚原孝編『昇曙夢 翻訳・著作選集 翻訳篇2』、クレス出版、2011年。

榎内裕子「ツルゲーネフ移入における昇曙夢」、『比較文学年誌』49期、2013年。

⁵¹ 荒井由美「陳景韓の漢訳プーシキン(上)」、『清末小説から』138号、2020年7月。

⁵² 梁艶「従上田敏翻訳的「心」看転訳的功与罪」、『日語教育与日本学』第4輯、2014年。

-
- 53 李冬木「「狂人」の越境の旅：周樹人と「狂人」の出会いから彼の「狂人日記」まで」、『佛教大学文学部論集』第105号、2021年3月。
- 54 昇曙夢訳「心づくし（原名「彼得大帝の黒人」）（翻訳小説）」、『新小説』第12年第2巻、1907年2月。
- 55 陳景韓訳「俄帝彼得」、『小説時報』、1909年第1期。
- 56 レールモントフは中国語で「萊蒙托夫」と表記される。明治期には「レルモントフ」と表記された。周樹人は「來爾孟多夫」、「萊蒙托夫」と表記した。周作人は「勒孟埤夫」と表記した。本論では「レルモントフ」を用いることとする。
- 57 北岡正子『魯迅文学の淵源を探る——「摩羅詩力説」材源考』、汲古書院、2015年6月。
- 58 姚錫佩「魯迅初読「狂人日記」的信物——介紹魯迅編定的「小説訳叢」」、『魯迅藏書研究』、魯迅博物館魯迅研究室編、中国文聯出版公司1991年版、第299-300頁。
- 59 陳漱渝「尋求反抗和叫喊的呼聲——魯迅最早接觸過哪些域外小説？」、『魯迅研究月刊』、2006年第10期。
- 60 川戸道昭等編『世界文学総合目録 第8巻 ロシア編』、大空社、2012年7月、642頁を参照。
- 61 周作人「關於自己」、鐘叔河編『周作人散文全集7』、広西師範大学出版社、2009年、804-805頁。
- 62 周作人「中国人之愛国」、鐘叔河編『周作人散文全集1』、広西師範大学出版社、2009年、74-75頁。
- 63 宋劍「周作人『近代欧州文学史』（十九世紀）主要材源初探——以法国、俄国、北欧重点作家為例」、温州大学碩士論文、2018年5月。
- 64 川戸道昭等編「明治翻訳文学年表・レールモントフ編」、『明治翻訳文学全集36 プーシキン/レールモントフ集』、大空社、1999年12月。作品の現代日本語訳名は川戸道昭等編『世界文学総合目録 第8巻 ロシア編』（大空社、2012年7月）を参照。

-
- 65 樽本照雄『清末民初小説目録』、齊魯書社、2002年4月。
- 66 姜訓祿「中国出版的萊蒙托夫作品、論著」、『俄羅斯文芸』、2014年7月。
- 67 川戸道昭等編「明治翻訳文学年表・レールモントフ編」、『明治翻訳文学全集 36 プーシキン/レールモントフ集』、大空社、1999年12月。
- 68 中島長文編『魯迅目睹書目 日本書之部』、宇治市木幡御蔵山、私版300部、1986年3月。
- 69 馮至「笑談虎尾記猶新」、上海文芸出版社編『魯迅回憶録 一集』、上海文芸出版社、1978年、86頁。
- 70 日本近代文学館編『日本近代文学大事典 第二卷』、講談社、1977年、93-94頁。
- 71 嵯峨の屋主人「文学者としての前半生」、『文章世界』第3巻第7号、1908年5月。

第三章

- 72 ゴーゴリは中国語で「果戈理」、「果戈里」と表記される。明治期には「ゴーゴリ」、「ゴゴリ」、「ゴゴル」と表記された。周樹人は「鄂戈理」、「果戈理」、「果戈里」と表記した。本論では「ゴーゴリ」を用いることとする。
- 73 魯迅「南腔北調集・私はどのようにして、小説を書き始めたか」、『魯迅全集』第6巻、第342頁。
- 74 魯迅「且介亭雜文二集・『中国新文学大系』「小説二集」序」、『魯迅全集』第8巻、第273頁。
- 75 田大畏「果戈理作品的早期中文訳本（一九二〇-一九四九）」、『世界文学』、2020年第1期。
- 鄭明艷「不合時宜的“死魂靈”？——論魯迅与 20 世紀 30 年代果戈理訳介」、『勵耕学刊』、2009年第1期。
- 76 魯迅「且介亭雜文二集・諷刺について」、『魯迅全集』第8巻、第314頁。

-
- 77 魯迅「且介亭雜文二集・「諷刺」とは何か」、『魯迅全集』第8巻、第367頁。
- 78 魯迅「且介亭雜文二集・ほとんど何事も起こらなかった悲劇」、『魯迅全集』第8巻、第413-414頁。
- 79 林林「魯迅和果戈理」、『崇高的忧郁』に収録され、1941年1月、文献出版社。張夢陽編『1913-1983 魯迅研究學術論著資料匯編 第三卷』から引用、中国文聯出版公司出版、1987年3月、411-413頁。
- 80 竹内実「魯迅とゴーゴリ 二つの〈狂人日記〉」、初刊『世界文学』、1966年3月。後に『魯迅周辺』に収録され、東京：畑田書店、1981年、第219-237頁。
- 81 韓長経「魯迅与果戈理」、『魯迅与俄羅斯古典文学』に収録され、上海文芸出版社、1981年、113-134頁。
- 82 王富仁「魯迅前期小説与果戈里」、『魯迅前期小説与俄羅斯文学』、天津教育出版社、2008年、36-61頁。
- 83 彭定安「魯迅的〈狂人日記〉与果戈理的同名小説」、『魯迅与中外文化的比較研究』、中国文聯出版公司、1986年、226-239頁。
- 84 寇志明著、黄喬生訳「魯迅与果戈理」、『魯迅研究月刊』、2002年第7期。
- 85 孫郁「魯迅与果戈理遺產的几个問題」、『文学評論』、2013年第3期。
- 86 李冬木「「狂人」の越境の旅：周樹人と「狂人」の出会いから彼の「狂人日記」まで」、『佛教大学文学部論集』第105号、2021年3月。
- 87 姚錫佩「魯迅初読「狂人日記」的信物——介紹魯迅編定的「小説訳叢」」、『魯迅藏書研究』、魯迅博物館魯迅研究室編、中国文聯出版公司1991年版、第299-300頁。
- 竹内良雄「魯迅の初期文学観の成立を探る——魯迅自身が編んだ「小説訳叢」をもとに」、『慶応義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』第15号、1995年。
- 88 松枝茂夫訳「魯迅について 其二」、『周作人隨筆集』、改造社、1938年6月、61-62頁。
- 89 周作人「魯迅的文学修养」、『魯迅的青年時代』、鐘叔河編『周作人散文全集12』、广西師

範大学出版社、2009年、644-645頁。

⁹⁰ 周作人「外国小説」、『苦口甘口』、鐘叔河編『周作人散文全集 9』、广西師範大学出版社、2009年、198頁。

⁹¹ 周作人「俄国大作家」、陳子善、趙国忠編『周作人集外文 1927-1945』、上海人民出版社、2020年1月、616-617頁。

⁹² 周作人「哀弦篇」、鐘叔河編『周作人散文全集 1』、广西師範大学出版社、2009年、145頁。

⁹³ 川戸道昭等編『世界文学総合目録 第8巻 ロシア編』、大空社、2012年7月、70頁を参照。

⁹⁴ 秦野一宏「日本におけるゴーゴリ——ナウカ版全集（昭9）の出るまで」、『ロシア語ロシア文化研究』15号、1983年9月。

⁹⁵ 西海枝静「露国文豪ゴゴリの傑作レウヰゾルを読む」、『江湖文学』、1896年11月。

⁹⁶ 西海枝静「露国文学と農民」、『帝国文学』3巻11、12号、1897年11月、12月。

⁹⁷ 嵯峨之屋室「露国天才の詩人プーシキン及びゴーゴリ」、中村光夫編『明治文学全集・17・二葉亭四迷 嵯峨の屋おむろ集』、筑摩書房、1971年11月、355頁。

⁹⁸ 桂英子「露国の滑稽作家」、『新小説』第2年第5巻、1897年4月。

⁹⁹ 「新著月旦」、『裏錦』第142号、1904年8月25日。

¹⁰⁰ 李冬木「「狂人」の越境の旅：周樹人と「狂人」の出会いから彼の「狂人日記」まで」、『佛教大学文学部論集』第105号、2021年3月。

¹⁰¹ 昇曙夢『露国文豪ゴーゴリ』、春陽堂、1904年6月、第2頁。

¹⁰² 昇曙夢「露国の自然主義」、『早稲田文学』29号、1908年4月。

¹⁰³ 秦野一宏「日本におけるゴーゴリ翻訳・紹介文献——戦前篇」、『早稲田大学図書館紀要』24号、1984年6月。

-
- 104 昇曙夢「煩悶の人ゴーゴリ（近代露文学の特徴）」、『読売新聞』、1909年4月18日。
- 105 周作人「『狂人日記』里的人」、鐘叔河編『周作人散文全集10』、广西師範大学出版社、782頁。
- 周作人「礼教吃人」、鐘叔河編『周作人散文全集12』、广西師範大学出版社、188頁。
- 106 昇曙夢「研究と翻訳との十ヶ年」、『文章世界』7巻2号、1912年2月。
- 107 中村星湖「二葉亭四迷論」、『早稲田文学』50号、1910年1月。
- 108 昇曙夢「ロシア文學の傳來と影響（明治胎生期の思出）」、ソヴェト研究者協会文学部会編『ロシア文学研究 第2集』、新星社、1947年。
- 109 大空社が出版した『明治翻訳文学全集』の「明治ロシア文学翻訳年表稿」により、筆者は明治期のロシア作品の日本語訳の数を計算した。第1部の日本語訳のロシア作品を出版した明治15年(1882)から明治45年(1912)まで、665部ロシア作品が日本語に訳された。
- 110 秦野一宏「ゴーゴリの二葉亭訳をめぐって」、『ロシア語ロシア文学研究』26号、1994年10月。
- 111 日本近代文学館編『日本近代文学大事典 第三巻』、講談社、1977年、180-181頁を参照。
- 112 中島長文編『魯迅目睹書目 日本書之部』、宇治市木幡御蔵山、私版300部、1986年3月、54頁。
- 113 中村光夫「魯迅と二葉亭」、『文藝』6月号、1936年。
- 波多野鹿之助「二葉亭と魯迅」、『文学』22巻10号、1954年。
- 王確「『狂人日記』和『浮雲』的創作启示」、『東北師大学報』、1992年12月。
- 劳模「从魯迅和二葉亭四迷看中日近現代文学的不同特質」、『中国比較文学』、1994年6月。
- 于九涛「二葉亭四迷与魯迅的关系考辯」、『日本学論壇』、2003年6月。
- 于九涛、王吉鵬「被遺忘的筆路藍縷者」、『甘肅社会科学』、2003年7月。

汪衛東「「狂人日記」影响材源新考」、『文学評論』、2018年第5期。

李冬木「“狂人”的越境之旅——从周樹人与“狂人”相遇到他的〈狂人日記〉」、『文学評論』、2020年第5期。

¹¹⁴ 秦野一宏「日本におけるゴゴリ——ナウカ版全集（昭9）の出るまで」、『ロシア語ロシア文化研究』15号、1983年9月。

¹¹⁵ 秦野一宏「ゴゴリの二葉亭訳をめぐって」、『ロシア語ロシア文学研究』26号、1994年10月。

¹¹⁶ 秦野一宏「ゴゴリの二葉亭訳をめぐって」、『ロシア語ロシア文学研究』26号、1994年10月。

¹¹⁷ 二葉亭四迷「余が翻訳の標準」、『成功』、1906年10月。

¹¹⁸ 周作人「知堂回想録 七九 学俄文」、『周作人散文全集』第13卷、広西師範大学出版社、2009年、376-377頁。訳文は大東和重の論文「中国における日本を經由したロシア・ソビエト文学受容の一側面：昇曙夢の紹介・翻訳を中心に」（『言語と文化』第18号、2015年）を引用。

¹¹⁹ 周作人「〈域外小説集〉——〈新生〉乙編」、『知堂回想録』、鐘叔河が編集『周作人散文全集13』、広西師範大学出版社、2009年、392頁。

¹²⁰ 日本近代文学館編『日本近代文学大事典 第三卷』、講談社、1977年、14頁を参照。

¹²¹ 竹内好『魯迅』、未来社、1961年5月、102頁。

¹²² 韓長経『魯迅与俄羅斯古典文学』、上海文芸出版社、1981年、125頁。

¹²³ 姜錚「魯迅怎樣借鑒果戈理」、『北方論叢』、1983年第2号。

¹²⁴ 西本翠蔭訳「外套」、『文芸倶楽部』第15巻第8号、1909年6月。以下の「外套」の引用は同文よりである。

¹²⁵ 魯迅「呐喊・孔乙己」、『魯迅全集』第2巻、第367頁。以下の「外套」の引用は同文よりである。

第四章

¹²⁶ ツルゲーネフは中国語で「屠格涅夫」と表記される。明治期には「ツルゲネフ」、「ツルゲーネフ」と表記された。周樹人は「屠格涅夫」、「屠格納夫」、「屠介納夫」等と表記した。本論では「ツルゲーネフ」を用いることとする。

¹²⁷ 魯迅「墳・天才の出るまえ」、『魯迅全集』第1巻、第231頁。

¹²⁸ 魯迅「華蓋集続編・即座支日記」、『魯迅全集』第4巻、370頁。

¹²⁹ 魯迅「集外集・『奔流』編校後記（一—十二）」、『魯迅全集』第9巻、217頁。

¹³⁰ 孫伏園「魯迅先生二三事・葉」、孫郁、黃喬生編『魯迅先生二三事——前期弟子憶魯迅』、河北教育出版社、2000年7月、56頁。

¹³¹ 姚錫佩「魯迅初読「狂人日記」的信物——介紹魯迅編定的「小説叢書」、魯迅博物館魯迅研究室編『魯迅藏書研究』、中国文聯出版公司1991年版、第299-300頁。

¹³² 「『域外小説集』（第一冊）以后訳文及新書豫告」、「『域外小説集』（第二冊）以后訳文及新書豫告」、劉運峰編『魯迅全集補遺（増訂本）』、天津人民出版社、2018年7月、583-584頁。

¹³³ 周作人「知堂回想録 翻訳小説下」、鐘叔河編『周作人散文全集13』、広西師範大学出版社、2009年、372頁。

¹³⁴ 松枝茂夫訳「魯迅について 其二」、『周作人隨筆集』、改造社、1938年6月、60頁。

¹³⁵ 姚錫佩「從藏書看魯迅与屠格涅夫的文学淵源」、魯迅研究室編『魯迅藏書研究』、中国文聯出版公司出版、1991年12月、126頁。

¹³⁶ 周作人「魯迅与日本社会主義者」、鐘叔河編『周作人散文全集12』、広西師範大学出版社、2009年、678頁。

¹³⁷ 姚錫佩「從藏書看魯迅与屠格涅夫的文学淵源」、魯迅研究室編『魯迅藏書研究』、中国文聯出版公司出版、1991年12月、126頁。

-
- 138 秋吉収「魯迅とツルゲーネフ」、『中国文学評論』、1995年10月。
- 139 川戸道昭等編『世界文学総合目録 第8巻 ロシア編』、大空社、2012年7月、273頁を参照。
- 140 昇曙夢「日本文学と露西亜文学」、『比較文学——日本文学を中心として』、矢島書房、1953年10月。
- 141 李艷麗「晩清俄国小説訳介路径及底本考——兼析「虚無党小説」」、『外国文学評論』、2011年第1期。
- 142 魯迅「南腔北調集・中国とロシアの文字の交りを祝す」、『魯迅全集』第6巻、291頁。
- 143 藤井省三『ロシアの影 夏目漱石と魯迅』、平凡社、1985年4月、145頁。
- 144 昇曙夢「日本文学と露西亜文学」、『比較文学——日本文学を中心として』、矢島書房、1953年10月。
- 145 昇曙夢「日本文学と露西亜文学」、『比較文学——日本文学を中心として』、矢島書房、1953年10月。
- 146 周作人、魯迅訳『現代日本小説集』、新星出版社、2006年、268頁。
- 147 北岡正子『魯迅文学の淵源を探る——「摩羅詩力説」材源考』、汲古書院、2015年6月。
- 148 魯迅「集外集・『奔流』編校後記（一～十二）」、『魯迅全集』第9巻、217-218頁。
- 149 錢理群『豊富的痛苦——堂吉訶徳与哈姆雷特的東移』、北京大学出版社、2007年1月、156-157頁。
- 150 川戸道昭等編「明治期ロシア文学翻訳年表稿」、『明治翻訳文学全集 37・ゴーゴリ集』、大空社、2000年4月、341-370頁。
- 151 陳漱渝「尋求反抗和叫喊的呼声——魯迅最早接触過哪些域外小説？」、『魯迅研究月刊』、2006年第10期。
- 姜异新「百来篇外国作品尋繹——留日生周樹人文學閱讀視域下的“文之覺”」（上）、（下）、『魯迅研究月刊』2020年第1期、第2期。

152 陳漱渝「尋求反抗和叫喊的呼聲——魯迅最早接觸過哪些域外小說？」、『魯迅研究月刊』、2006年第10期。

153 張會森、陳智仁等訳『屠格涅夫全集 第七卷』を参考、河北教育出版社、2000年。

154 竹内好「魯迅と二葉亭」、『竹内好全集 第一卷』、筑摩書房、1980年9月。

155 崔文東「青年魯迅与德語“世界文学”——〈域外小説集〉材源考」、『文学評論』、2020年第6期。

156 代表的な研究：孫玉石『「野草」研究』、中国社会科学院出版社、1982年。

片山智行『魯迅「野草」全訳』、平凡社、1991年。

秋吉収『魯迅 野草と雑草』、九州大学出版会、2016年11月。

157 秋吉収『魯迅 野草と雑草』、九州大学出版会、2016年11月、86頁。

第五章

158 チェーホフは中国語で「契訶夫」と表記される。明治期には「チェホフ」、「チェーホフ」と表記された。周樹人は「契訶夫」と表記した。本論では「チェーホフ」を用いることとする。

159 R. M. Bartlett 作、石孚訳「新中国的思想界領袖魯迅」、李何林編『魯迅論』、陝西人民出版社、1984年2月。

160 周作人は「独応」を筆名として雑誌『河南』第8期（1908年12月）に「莊中」を發表し、後に「莊中」は名を変えて「戚施」として『域外小説集』第一冊（1909年3月）に収録される。

161 魯迅「擬購德文書目」、劉運峰編『魯迅全集補遺』（増訂本）、天津人民出版社、2018年7月、394頁。

162 孫郁「在德、俄話題之間」、『魯迅与俄国』、人民文学出版社、2015年3月、第70頁。

163 孫郁『魯迅与俄国』、人民文学出版社、2015年3月、第40-49頁、70頁、9-14頁。

-
- 164 松枝茂夫訳「魯迅について 其二」、『周作人隨筆集』、改造社、1938年6月、60頁。原文は「この外にガルシンがあった。その『四日』の一篇はすでに『域外小説集』中に訳載した。又『紅い花』は、レールモントフ(M. Lermontov)の『当代の英雄』、チャーホフ(A. Tecekhov)の『決闘』と共に好きだったがつひに訳されなかった。又コロレンコ(V. Korolenko)が大好きだったが、その後私がその『マカールの夢』一篇を訳したきりだ。」
- 165 郁達夫「記念柴霍夫」、『郁達夫文集 第七卷 文論』、花城出版社、1983年11月、119頁。
- 166 郭沫若「契珂夫在東方」、『沸羹集』、『郭沫若全集 文学編』第19卷、人民文学出版社、1992年1月、469頁。
- 167 趙景深「魯迅與柴霍夫——在復旦大學講演」、『文学周報』第8卷第19期、1929年6月。中国社会科学院文学研究所魯迅研究室編『1913-1983 魯迅研究學術論著資料匯編 索引分冊』、中国文聯出版公司、1990年7月。
- 168 張華「魯迅和契訶夫」、『魯迅和外国作家』、陝西人民出版社、1981年4月。
- 169 韓長経「魯迅与契訶夫」、『魯迅与俄羅斯古典文学』、上海文藝出版社、1981年9月。
- 170 王富仁「魯迅前期小説与契訶夫」、『魯迅前期小説与俄羅斯文学』、陝西人民出版社、1983年10月。
- 171 孫郁「与契訶夫相逢」、『魯迅与俄国』、人民文学出版社、2015年3月。
- 172 李家宝、黄忠順「“医学作品”特質的“神怪小説”——論契訶夫漢化歷程的起点」、『外国文学研究』、2016年第12期。
- 王晶晶「西方思想与中国現實的相遇——論日訳「六号室」対「狂人日記」的影響」、中国魯迅研究会、蘇州大學文學院『魯迅研究与四十年来中国社会思想文化——紀念中国魯迅研究会成立四十周年學術研討會論文集』、2019年11月13-15日。
- 李冬木「「狂人」の越境の旅：周樹人と「狂人」の出会いから彼の「狂人日記」まで」、佛敎大學『文学部論集』105号、2021年3月。

-
- 173 趙景深「魯迅与柴霍夫——在復旦大学講演」、『文学周報』第8巻第19期、1929年6月。
中国社会科学院文学研究所魯迅研究室編『1913-1983 魯迅研究學術論著資料匯編 索引分冊』、中国文聯出版公司、1990年7月。
- 174 谷行博『『石罅』はいかに作られたか』、『野草』52号、1993年。
- 175 郭惠玲「兩顆孤独痛苦的心靈——「苦惱」与「祝福」的比較」、『貴州師專学報（社会科学版）』、1989年2月。
- 176 川戸道昭等編『世界文学総合目録 第8巻 ロシア編』、大空社、2012年7月、120頁を参照。
- 177 柳富子「明治・大正期のチェーホフ」、『図説翻訳文学総合事典』第5巻『日本における翻訳文学（研究編）』、大空社、2009年11月。
- 178 長谷川天溪「魯国作家 チェーホフ氏逝く」、『文芸倶楽部』10巻13号、1904年10月。
- 179 澤瀉水舎主人「露国文豪チエホフ」、『新小説』9年10巻、1904年10月。
- 180 柳富子「明治・大正期のチェーホフ」、『図説翻訳文学総合事典』第5巻『日本における翻訳文学（研究編）』、大空社、2009年11月。
- 181 残月生「露国文豪チェーホフの書翰」、『太陽』12巻11号、1906年8月。
- 182 鸚鵡公「露国二作家の遺墨」、『帝国文学』12巻9号、1906年9月。
- 183 北岡正子『魯迅文学の淵源を探る——「摩羅詩力説」材源考』、汲古書院、2015年6月。
- 184 「近代三十六文豪」、『文章世界』3巻6号、1908年5月。
- 185 安成貞雄「チエホフ論」、『文庫』37巻2号、1908年6月。
- 186 北岡正子『魯迅文学の淵源を探る——「摩羅詩力説」材源考』、汲古書院、2015年6月。
- 187 馬場孤蝶「新訳『チェーホフ短篇集』」、『慶應義塾学報』139号、1909年2月。
馬場孤蝶「チェーホフ短篇集『接吻』」、『早稲田文学』40号、1909年3月。
- 188 舘島亘『ロシア文学翻訳者列伝』、東洋書店、2012年3月、155頁。
- 189 瀬沼夏葉「チエホフに就て」、『新潮』10巻3号、1909年3月。

-
- 190 山田松濤「チェホフとコロレンコ」、『新小説』14年3巻、1909年3月。
- 191 瀬沼夏葉「チェホフの脚本『叔父ワアニヤ』」、『早稲田文学』42号、1909年5月。
- 192 小山内薫「チエエホフの診察」、『文章世界』第4巻第6号、1909年5月。
- 193 張宇飛「魯迅の「摩羅詩力説」材源の新発見：ロシア作家コロレンコについて」、『中国言語文化研究』19号、2019年8月。
- 194 昇曙夢「ロシヤ文學の傳來と影響（明治胎生期の思出）」、ソヴェト研究者協会文学部会編『ロシヤ文学研究 第2集』、新星社、1947年。
- 195 川戸道昭等編「明治期ロシア文学翻訳年表稿」、『明治翻訳文学全集 37・ゴーゴリ集』、大空社、2000年4月、341-370頁を参照。
- 196 川戸道昭等編『世界文学総合目録 第8巻 ロシア編』、大空社、2012年7月。本論の現在のチェーホフ作品名の引用は同書よりである。
- 197 昇曙夢「ロシヤ文學の傳來と影響（明治胎生期の思出）」、ソヴェト研究者協会文学部会編『ロシヤ文学研究 第2集』、新星社、1947年。
- 198 収録される小説は「六号室」、「里の女」、「余計者」、「人影」、「月と人」、「写真帖」、「たはむれ」、「叱ッ!」、「艶福男」、「村役場」、「失策」、「官吏の死」、「をんな」である。
- 199 小山内薫「チエエホフの診察」、『文章世界』第4巻第6号、1909年5月。
- 200 山崎貞「大事件」、『大陸作家小品』、博文館、1910年4月。
- 201 正宗白鳥「故人の追憶」、『文芸』、1935年10月。
- 202 樽本照雄「呉禱の漢訳チェーホフ」、清末小説研究会『清末小説』33号、2010年。
- 203 三宝政美「中国におけるチェーホフ——1920年代の翻訳・紹介を通して」、『富山大学人文学部紀要』15号、1989年。
- 204 魯迅記念館編『魯迅日文作品集』、上海文芸出版社、1981年、50-58頁。
- 205 周作人『『呐喊』衍義 八一 「兔和猫」』、周作人著、止庵編『關於魯迅』、新疆人民出

版社、1997年、272頁。

206 李長之、南雲智訳『魯迅批判』、徳間書店、1990年5月、150頁。

207 竹内好『魯迅』、未来社、1961年5月、104頁。

208 銭理群「從「兔和猫」読起」、『語文建設』、2003年第3期。

209 胡德才「「兔和猫」在魯迅創作中的意義」、『魯迅研究月刊』、2004年第2期。

210 神西清、原卓也『チェーホフ全集6』、中央公論社、1960年8月初版、481頁。

211 魯迅「呐喊・兎と猫」、『魯迅全集』第2巻、第170頁。

212 神西清、原卓也『チェーホフ全集6』、中央公論社、1960年8月初版、119頁。

213 神西清、原卓也『チェーホフ全集6』、中央公論社、1960年8月初版、117-118頁。

214 魯迅「呐喊・兎と猫」、『魯迅全集』第2巻、第170頁。

215 許寿裳『亡友魯迅印象記』、上海文化出版社、2006年7月、22頁。

216 銭理群「從「兔和猫」読起」、『語文建設』、2003年第3期。

217 許寿裳『亡友魯迅印象記』、上海文化出版社、2006年7月、22頁。

第六章

218 コロレンコは中国語で「柯羅連珂」と表記される。明治期には「カラレンコ」、「コロレンコ」と表記された。周樹人は「凱羅連珂」、「柯羅連珂」と表記した。本論では「コロレンコ」を用いることとする。

219 魯迅『三閑集・文芸と革命』、『魯迅全集』第5巻、172頁。

220 魯迅『南腔北調集・中国とロシアの文字の交りを祝す』、『魯迅全集』第5巻、292-293頁。

221 小説「末光」の初の中国語訳は韋素園によって訳された。翻訳集『最後の光芒』は1931年に上海商務印書館が出版した。韋素園訳の「末光」の名前は「最後の光芒」である。小山内薫の表現は「終りの光」である。三津木春影の名前は「短日」である。本論の表現は

「末光」を用いることとする。

222 伊藤虎丸『魯迅と終末論—近代リアリズムの成立—』、龍溪書舎、1975年11月、第152頁。

223 魯迅『墳・摩羅詩力説』、『魯迅全集』第1巻、149頁。

224 周作人「關於魯迅之二」、周作人著、止庵校訂『魯迅的青年時代』、石家莊：河北教育出版社、2001年9月、129頁。

225 戈宝権『『域外小説集』的歴史価値』を参照、伍国慶編『域外小説集』に収録、嶽麓書社、1986年、第9頁。

226 周新萍「魯迅与柯羅連科簡論」、『徐州師範大学学报』、2002年6月。

227 川戸道昭等編『世界文学総合目録 第8巻 ロシア編』、大空社、2012年7月、96頁を参照。

228 小山内薫「露国の小説家ウラヂミール・カラレンコ」、『新小説』第11年第12巻17頁、1904年12月。

229 小山内薫「露国の小説家ウラヂミール・カラレンコ」、『新小説』第11年第12巻17頁、1904年12月。

230 日本近代文学館編『日本近代文学大事典・第五巻』、講談社、1977年11月、194-196頁。

231 尾形国治編『『新小説』解説・総目次・索引』、不二出版、1985年1月、「解説」部分第13頁を参照。

232 竹内良雄「魯迅の初期文学観の成立を探る——魯迅自身が編んだ「小説訳叢」をもとに」、『慶応義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』第15号、1995年。

233 苺心訳「四日間」、『新小説』第9年第7巻、1904年7月。

234 馬場孤蝶訳「灯台守」、『新小説』第9年第9巻、1904年9月。

235 浩浩歌客訳「流人」、『新小説』第9年第6巻、1904年6月。

-
- 236 李冬木「狂人之誕生——明治時代的「狂人」言説与魯迅的「狂人日記」、『文学評論』、2018年第5期。
- 237 日本近代文学館編『日本近代文学大事典・第一巻』、講談社、1977年11月、332-334頁。
- 238 魯迅「墳・摩羅詩力説」、『魯迅全集』第1巻、148頁。
- 239 魯迅「墳・摩羅詩力説」、『魯迅全集』第1巻、94頁。
- 240 伊藤虎丸『魯迅と終末論—近代リアリズムの成立—』、龍溪書舎、1975年11月、第152頁。
- 241 趙瑞蕪「中外詩歌多彩光輝的旅程——讀魯迅「摩羅詩力説」隨想」、『魯迅「摩羅詩力説」注釈・今訳・解説』、天津人民出版社、1982年4月、252頁。
- 242 魯迅「墳・摩羅詩力説」、『魯迅全集』第1巻、149頁。
- 243 明治期におけるコロレンコの作品の日本語訳に関しては、次の二点の資料を参照。
川戸道昭等編「明治期ロシア文学翻訳年表稿」、『明治翻訳文学全集 37・ゴーゴリ集』、大空社、2000年4月、341-370頁。
国立国会図書館編『明治・大正・昭和翻訳文学目録』、風間書房、1959年9月。
- 244 崔文東「青年魯迅与德語“世界文学”——〈域外小説集〉材源考」、『文学評論』、2020年第6期。コロレンコのドイツ語訳の小説集目録を贈っていただいた香港城市大学の崔文東先生に改めて感謝申し上げます。
- 245 ゴーリキーは中国語で「高爾基」と表記される。明治期には「ゴーリキイ」、「ゴルキイ」、「ゴルキー」等と表記された。周樹人は「高爾基」、「戈理奇」、「戈理基」等と表記した。本論では「ゴーリキー」を用いることとする。
- 246 魯迅「墳・「他媽的」について」、『魯迅全集』第1巻、299頁。
- 247 魯迅「且介亭雜文二集・「葉紫『豊収』序」」、『魯迅全集』第8巻、254頁。
- 248 魯迅「集外集拾遺・『自由をかちとる波』小序」、『魯迅全集』第9巻、370頁。

-
- 249 魯迅「集外集拾遺・ゴーリキー『一月九日』訳本の小序」、『魯迅全集』第9巻、470頁。
- 250 馮雪峰「關於魯迅在文学上的地位」、孫郁、黄喬生編『馮雪峰憶魯迅』、河北教育出版社、2000年7月、124頁。
- 251 「〈域外小説集〉著者事略」、鐘叔河編『周作人散文全集1』、廣西師範大学出版社、153頁。
- 252 松枝茂夫訳「魯迅について 其二」、『周作人隨筆集』、改造社、1938年6月、61-62頁。
- 253 姚錫佩「魯迅眼中的高爾基」、魯迅研究室編『魯迅藏書研究』、中国文聯出版公司出版、1991年12月、151頁。
- 254 李冬木「“狂人”的越境之旅——从周樹人与“狂人”相遇到他的〈狂人日記〉」、『文学評論』、2020年第5期。
- 汪衛東「「狂人日記」影响材源新考」、『文学評論』、2020年第5期。
- 255 李冬木「「狂人」の越境の旅：周樹人と「狂人」の出会いから彼の「狂人日記」まで」、『佛教大学文学部論集』第105号、2021年3月。
- 256 『世界文学大事典』編纂委員会、『世界文学大事典2』、集英社、1997年1月。
- 257 ブルナ・ルカーシュ「ゴーリキー文学受容史：明治四〇年前後の隆盛期を中心に」、『文藝と批評』11巻9号、2014年5月。
- 258 昇曙夢「ロシヤ文學の傳來と影響（明治胎生期の思出）」、ソヴェト研究者協会文学部会編『ロシヤ文学研究 第2集』、新星社、1947年。
- 259 昇曙夢「ロシヤ文學の傳來と影響（明治胎生期の思出）」、ソヴェト研究者協会文学部会編『ロシヤ文学研究 第2集』、新星社、1947年。
- 260 李冬木「留学生周樹人周辺の「尼采」及其周辺」、張釗貽編『尼采与華文文学論文集』、新加坡八方文化創作室、2013年11月。山東社会科学院『東嶽論叢』2014年第3期を轉載した。
- 李冬木「「狂人」の越境の旅：周樹人と「狂人」の出会いから彼の「狂人日記」まで」、『佛

教大学文学部論集』第105号、2021年3月。

261 昇曙夢「文学者ゴリキイ」、『時代思潮』第2巻第21号、1905年10月。

262 昇曙夢「文学者ゴリキイ」、『時代思潮』第2巻第21号、1905年10月。

263 昇曙夢「文学者ゴリキイ」、『時代思潮』第2巻第21号、1905年10月。

264 昇曙夢「文学者ゴリキイ」、『時代思潮』第2巻第21号、1905年10月。

265 二葉亭四迷「ゴーリキイとアンドレーエフの近業」、『趣味』2巻10号、1907年10月。

266 魯迅「訳文序跋集・「悪魔」訳者附記」、『魯迅全集』第12巻、543頁。

267 川戸道昭等編「明治翻訳文学年表 ゴーリキー編」、『明治翻訳文学全集44・ゴーリキー集』、大空社、2000年4月、429-434頁。

268 ゴーリキー作品の現在の日本語訳名はブルナ・ルカーシュの「ゴーリキー翻訳年表—明治三五（一九〇二）年—大正12（一九二三）年」（『文藝と批評』11巻9号、2014年5月）を参照。

269 二葉亭四迷「小説の題のつけ方」、『文章世界』第2巻第13号、1907年11月。

270 周作人「知堂回想録 七九 学俄文」、『周作人散文全集』第13巻、広西師範大学出版社、2009年、376-377頁。訳文は大東和重の論文「中国における日本を經由したロシア・ソビエト文学受容の一側面：昇曙夢の紹介・翻訳を中心に」（『言語と文化』第18号、2015年）を引用。

第七章

271 アンドレーエフは中国語で「安特萊夫」、「安特來夫」、「安德烈耶夫」等と表記される。明治期には「アンドレーエフ」、「アンドレエフ」と表記された。周樹人は「安特萊夫」、「安特來夫」、「安特列夫」等と表記した。本論では「アンドレーエフ」を用いることとする。

272 松枝茂夫訳「魯迅について 其二」、『周作人隨筆集』、改造社、1938年6月、61-62

頁。

²⁷³ 松枝茂夫訳「魯迅について 其二」、『周作人隨筆集』、改造社、1938年6月、61-62頁。

²⁷⁴ 許欽文「在老虎尾巴的魯迅先生」、『許欽文散文集』、浙江文藝出版社、1984年11月、369頁。

²⁷⁵ 魯迅「且介亭雜文二集・『中国新文学大系』「小説二集」序」（『魯迅全集』第8巻、第273頁）、孫伏園「魯迅先生二三事・藥」（孫伏園、許欽文等『魯迅先生二三事—前期弟子憶魯迅』、河北教育出版社、2000年7月、56頁）、馮雪峰「關於魯迅在文學上的地位附記」（馮雪峰著『馮雪峰憶魯迅』、河北教育出版社、2000年9月、124頁）を参照。

²⁷⁶ 谷行博「「謾・黙・四日」-上-魯迅初期翻訳の諸相」、『大阪経大論集』132期、1979年11月。

谷行博「「謾・黙・四日」-下-魯迅初期翻訳の諸相」、『大阪経大論集』135期、1980年5月。

²⁷⁷ 王富仁『魯迅前期小説与俄羅斯文学』、天津教育出版社、2008年。

²⁷⁸ 藤井省三『ロシアの影：夏目漱石と魯迅』、平凡社、1985年4月。

²⁷⁹ 程麻『溝通与更新：魯迅与日本文学関係發微』、中国社会科学出版社、1990年1月。

²⁸⁰ 竹内良雄『魯迅の初期文学観の成立を探る——魯迅自身が編んだ「小説訳叢」をもとに』、『慶応義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』第15号、1995年。

²⁸¹ 林敏潔「「誠」と「愛」——魯迅訳「謾」と「黙」について」、『東方学』101期、2001年1月。

²⁸² 張麗華『現代中国「短篇小説」的興起：以文類形构為視角』、北京大学出版社、2011年4月。

²⁸³ 梁艷「周作人とアンドレーエフ：「歯痛」の翻訳をめぐって」、中国文芸研究会『野草』91期、2013年2月。

-
- 284 陳紅「兩篇魯訳安特萊夫的底本問題」、『日語学習与研究』、2015年第5期。
- 285 小川利康「周氏兄弟与安德烈耶夫」、孫郁主編『魯迅：在傳統与世界之間 「2016年魯迅文化論壇」暨國際學術研討會論文集』、人民日報出版社、2019年5月。
- 286 李冬木「「狂人」の越境の旅：周樹人と「狂人」の出会いから彼の「狂人日記」まで」、『佛教大学文学部論集』第105号、2021年3月。
- 287 崔文東「青年魯迅与德語「世界文学」——『域外小説集』材源考」、『文学評論』、2020年第6期。
- 288 魯迅「訳文序跋集・『域外小説集』「雜識」」、『魯迅全集』第12卷、第218頁。
- 289 魯迅「訳文序跋集・「靄の中へ」訳者附記」、『魯迅全集』第12卷、第247頁。
- 290 魯迅「書簡Ⅰ・二五〇九三〇 許欽文宛」、『魯迅全集』第14卷、第184頁。
- 291 川戸道昭等編『世界文学総合目録 第8巻 ロシア編』、大空社、2012年7月、17頁を参照。
- 292 藤井省三『ロシアの影：夏目漱石と魯迅』、平凡社、1985年4月。
- 293 上田敏「鏡影録」、『芸苑』巻第8、1906年8月。
- 294 谷行博「「謾・黙・四日」-上-魯迅初期翻訳の諸相」、『大阪経大論集』132期、1979年11月。
- 谷行博「「謾・黙・四日」-下-魯迅初期翻訳の諸相」、『大阪経大論集』135期、1980年5月。
- 295 二葉亭四迷「露西亜文壇の傾向」、『キヌタ』、1908年4月。
- 296 昇曙夢『露西亜文学研究』、隆文館、1907年、298-299頁。
- 297 小宮豊隆「レオニド・アンドレイエフ論」、『ホトトギス』12巻7号、1909年4月。
- 298 川戸道昭等編「明治期ロシア文学翻訳年表稿」、『明治翻訳文学全集 37・ゴーゴリ集』、大空社、2000年4月、341-370頁。

-
- ²⁹⁹ ガルシンは中国語で「迦爾洵」と表記される。明治期には「ガルシン」と表記された。周樹人は「迦爾洵」と表記した。本論では「ガルシン」を用いることとする。
- ³⁰⁰ 周作人「俄国大作家」、陳子善、趙国忠編『周作人集外文 1927-1945』、上海人民出版社、2020年1月、616-617頁。
- ³⁰¹ 周作人『彷徨衍義・「長明燈」』、周作人著、止庵校訂『魯迅小説裏の人物』、河北教育出版社、2001年9月、219頁。
- ³⁰² 王敬文「魯迅的「長明燈」与迦爾洵的「紅花」」、『武漢師範学院学報(哲学社会科学版)』、1983年6月。
- 馬克安・高利克「魯迅的「吶喊」与迦爾洵安特萊夫和尼采的創造性對抗」(上)、(下)、『魯迅研究動態』、1989年1月、3月。
- 馬克安・高利克、伯拉第斯拉瓦、丁松「魯迅的「長明燈」与 V.M. 迦爾洵的「紅花」兩部短篇小説的文学比較觀」、『魯迅研究月刊』、1993年5月。
- 張竹筠「物象与象征——魯迅的「長明燈」与迦爾洵的「紅花」之比較」、『河北師範大学学報(社会科学版)』、1991年4月。
- 李春林「兩位「人性的天才」的「吶喊」与「絶叫」魯迅与迦爾洵的比較研究」(上)、(下)、『魯迅研究月刊』、2004年10月、11月。
- ³⁰³ 谷行博「魯迅訳「四日」における神恵の所在」、『大阪経大論集』164号、1985年5月。
- ³⁰⁴ 史福興「魯迅取法於迦爾洵一例」、『天津師大学報』、1985年第3期。
- ³⁰⁵ 孫郁「從迦爾洵到阿爾誌跋綏夫」、『魯迅与俄国』、人民文学出版社、2015年、162-182頁。
- ³⁰⁶ 崔文東「青年魯迅与德語「世界文学」——『域外小説集』材源考」、『文学評論』、2020年第6期。
- ³⁰⁷ 魯迅「訳文序跋集・『域外小説集』「雜識」」、『魯迅全集』第12卷、第219頁。
- ³⁰⁸ 魯迅「訳文序跋集・「ごく短い小説」(二)訳者附記」、『魯迅全集』第12卷、第

534 頁。

309 魯迅「訳文序跋集・「ごく短い小説」(二) 訳者附記」、『魯迅全集』第 12 卷、第 534 頁。

310 周作人「俄国之戦争小説」、鐘叔河編『周作人散文全集 1』、广西師範大学出版社、2009 年、303 頁。

311 周作人「俄国大作家」、陳子善、趙国忠編『周作人集外文 1927-1945』、上海人民出版社、2020 年 1 月、616-617 頁。

312 川戸道昭等編『世界文学総合目録 第 8 卷 ロシア編』、大空社、2012 年 7 月、46 頁を参照。

313 狄「露国文学の厭世的傾向」、『日本人』第 185 号、1903 年 4 月。

314 二葉亭四迷「露国文学談片」、『太陽』第 13 卷第 5 号、1907 年 4 月。

315 馬場孤蝶「ガルシンと其作品」、『文章世界』第 3 卷第 13 号、1909 年 1 月。

316 馬場孤蝶「ガルシンと其作品」、『文章世界』第 3 卷第 13 号、1909 年 1 月。

317 馬場孤蝶「ガルシンと其作品」、『文章世界』第 3 卷第 13 号、1909 年 1 月。

318 川戸道昭等編「明治期ロシア文学翻訳年表稿」、『明治翻訳文学全集 37・ゴーゴリ集』、大空社、2000 年 4 月、341-370 頁。

319 谷行博「魯迅訳「四日」における神恵の所在」、『大阪経大論集』164 号、1985 年 5 月。

320 二葉亭四迷訳「四日間」、『新小説』第 9 年第 7 卷、1904 年 7 月。

321 二葉亭四迷訳「四日間」、『カルコ集』、春陽堂、1908 年。

322 李冬木「「狂人」の越境の旅：周樹人と「狂人」の出会いから彼の「狂人日記」まで」、『佛教大学文学部論集』第 105 号、2021 年 3 月。

323 崔文東「青年魯迅与徳語「世界文学」——『域外小説集』材源考」、『文学評論』、2020 年第 6 期。

第八章

³²⁴ トルストイは中国語で「托爾斯泰」と表記される。明治期には「トルストイ」と表記された。周樹人は「托爾斯泰」、「托爾斯多」、「陀爾斯泰」と表記した。本論では「トルストイ」を用いることとする。

³²⁵ 魯迅「熱風・随感録 四十六」、『魯迅全集』第1巻、413頁。

³²⁶ 魯迅「墳・天才の出るまえ」、『魯迅全集』第1巻、231頁。

³²⁷ 魯迅「准風月談・翻訳のための弁護」、『魯迅全集』第7巻、293頁。

³²⁸ 魯迅「二心集・「硬訳」と「文学の階級性」」、『魯迅全集』第6巻、33頁。

³²⁹ 魯迅「三閑集・「酔眼」中の朦朧」、『魯迅全集』第5巻、258頁。

³³⁰ 魯迅「集外集・文芸と政治の分れ道」、『魯迅全集』第9巻、150-151頁。

³³¹ 張華『魯迅和外国作家』、陝西人民出版社、1981年4月。

³³² 韓長経『魯迅与俄羅斯古典文学』、上海文芸出版社、1981年。

³³³ 孫郁『魯迅与俄国』、人民文学出版社、2015年3月。

³³⁴ 池沢実芳「魯迅「藤野先生」ノート——トルストイの「ロシアと日本の皇帝にあてた1通の手紙」をめぐって」、福島大学経済学会『商学論集』第61期、1992年11月。

³³⁵ 范国富「魯迅留日時期思想建构中的列夫・托爾斯泰」、『魯迅研究月刊』、2016年第10期。

³³⁶ 川戸道昭等編『世界文学総合目録 第8巻 ロシア編』、大空社、2012年7月、418頁を参照。

³³⁷ 昇曙夢「日本文学と露西亜文学」、『比較文学——日本文学を中心として』、矢島書房、1953年10月。

³³⁸ 昇曙夢「日本文学と露西亜文学」、『比較文学——日本文学を中心として』、矢島書房、1953年10月。

339 池沢実芳「魯迅「藤野先生」ノート——トルストイの「ロシアと日本の皇帝にあてた1通の手紙」をめぐって」、福島大学経済学会『商学論集』第61期、1992年11月。

340 『域外小説集・著者事略』、『魯迅全集』第10巻、人民文学出版社、2005年、174頁。

341 周作人「俄国之戦争小説」、鐘叔河編『周作人散文全集1』、广西師範大学出版社、2009年、303頁。

342 川戸道昭等編『明治翻訳文学全集39・トルストイ集II』、大空社、1999年5月、369-378頁。

343 史沫特萊「憶魯迅」、孫郁、黃喬生編『海外回響 國際友人憶魯迅』、河北教育出版社、2000年7月、第5頁。

344 ドストエフスキーは中国語で「陀思妥耶夫斯基」と表記される。明治期には「ドストエフスキー」、「ドストエフスキイ」、「ドストエーヴスキイ」等と表記された。周樹人は「陀思妥耶夫斯基」、「陀思妥夫斯基」、「陀思妥夫斯基奇」、「妥思托以夫斯基」等と表記した。本論では「ドストエフスキー」を用いることとする。

345 魯迅「且介亭雜文二集・ドストエーヴスキイの7」、『魯迅全集』第8巻、457頁。

346 周作人「外国小説」、『苦口甘口』、鐘叔河編『周作人散文全集9』、广西師範大学出版社、2009年、198頁。

347 李春林『魯迅与陀思妥耶夫斯基』、安徽文藝出版社、1985年、3-4頁。

348 丁世鑫「対魯迅接受陀思妥耶夫斯基影響的客觀性与歴史性分析」、『陰山学刊』（社会科学版）、2007年4月。

沈露儒「魯迅接受陀思妥耶夫斯基影響的根據与發展過程」、『蘇州大学学报』（哲学社会科学版）、2008年9月。

白井澄世「魯迅と1920～1930年代中国におけるドストエフスキイ——文学の伝播：同時代の日本・ロシアとの関係を中心に」、『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第12号、2009年10月。

-
- 349 孫郁「陀思妥耶夫斯基的遺產」、『魯迅与俄国』、人民文学出版社、2015年、99頁。
- 350 川戸道昭等編『世界文学総合目録 第8巻 ロシア編』、大空社、2012年7月、343頁を参照。
- 351 昇曙夢「ロシヤ文學の傳來と影響（明治胎生期の思出）」、ソヴェト研究者協会文学部会編『ロシヤ文学研究 第2集』、新星社、1947年。
- 352 昇曙夢「ロシヤ文學の傳來と影響（明治胎生期の思出）」、ソヴェト研究者協会文学部会編『ロシヤ文学研究 第2集』、新星社、1947年。
- 353 昇曙夢「ロシヤ文學の傳來と影響（明治胎生期の思出）」、ソヴェト研究者協会文学部会編『ロシヤ文学研究 第2集』、新星社、1947年。
- 354 李冬木「『狂人』の越境の旅：周樹人と『狂人』の出会いから彼の『狂人日記』まで」、『佛教大学文学部論集』第105号、2021年3月。
- 355 昇曙夢『露西亞文学研究・ドストエフスキイ論』、隆文館、1907年12月、第172頁。
- 356 魯迅「集外集・『貧しき人々』小序」、『魯迅全集』第9巻、139頁。
- 357 北岡正子『魯迅文学の淵源を探る——「摩羅詩力説」材源考』、汲古書院、2015年6月。
- 358 昇曙夢「露国文学に於ける狂的分子」、『東京二六新聞』1909年8月5日、6日、7日。
- 359 川戸道昭等編『明治翻訳文学全集 45・ドストエフスキー集 II』、大空社、1998年5月、365-366頁。
- 360 中島長文編『魯迅目睹書目 日本書之部』、宇治市木幡御蔵山、私版300部、1986年3月。
- 361 李冬木「『狂人』の越境の旅：周樹人と『狂人』の出会いから彼の『狂人日記』まで」、『佛教大学文学部論集』第105号、2021年3月。
- 362 周作人「〈域外小説集〉——〈新生〉乙編」、『知堂回想録』、鐘叔河が編集『周作人散文全集 13』、广西師範大学出版社、2009年、392頁。

終章

- 363 李冬木「「狂人」の越境の旅：周樹人と「狂人」の出会いから彼の「狂人日記」まで」、『佛教大学文学部論集』第105号、2021年3月。
- 364 松枝茂夫訳「魯迅について 其二」、『周作人隨筆集』、改造社、1938年6月、60頁。
- 365 沈颺民「魯迅早年的活動点滴」、『魯迅回憶錄（散篇）（上冊）』、北京出版社、1997年、52-53頁。
- 366 馬場孤蝶、昇曙夢「露国文学と本邦現代文学との交渉（一）」、『趣味』3巻4号、1908年4月。
- 367 魯迅「南腔北調集・『豎琴』前記」、『魯迅全集』第6巻、第264頁。
- 368 魯迅「南腔北調集・私はどのようにして、小説を書き始めたか」、『魯迅全集』第6巻、第343頁。
- 369 馬場孤蝶、昇曙夢「露国文学と本邦現代文学との交渉（一）」、『趣味』3巻4号、1908年4月。
- 370 周作人『魯迅的青年時代（十二） 再是東京』、1956年10月。鐘叔河編『周作人散文全集13』、広西師範大学出版社、2009年4月、615頁。
- 371 周作人『知堂回想錄 第二巻 学俄文』、河北教育出版社、2001年9月、249、250頁。
- 372 錢玄同「我对周豫才（即魯迅）君之追憶与略評」、『魯迅回憶錄（散篇）（上冊）』、北京出版社、1997年、93頁。
- 373 林敏潔「「誠」と「愛」——魯迅訳「謾」と「黙」について」、『東方学』101号、2001年1月。
- 374 李冬木「「狂人」の越境の旅：周樹人と「狂人」の出会いから彼の「狂人日記」まで」、『佛教大学文学部論集』第105号、2021年3月。
- 375 無署名「欧州における徳義思想の二代表者フリデリヒ、ニツシュ氏とレオ、トウストイ

伯との意見比較」(『心海』第5号、無署名、明治26年(1893)12月)、「ニツシュ氏とレオ、トウストイ伯徳義思想を評す」、『心海』第5号、1894年1月。高松敏男、西尾幹二編『日本人のニーチェ研究譜』、1982年、白水社、289-298頁。

376 李冬木「留学生周樹人周辺の「尼采」及其周辺」、張釗貽編『尼采与華文文学論文集』、新加坡八方文化創作室、2013年11月。山東社會科学院『東嶽論叢』2014年第3期轉載。

377 李冬木「「狂人」の越境の旅：周樹人と「狂人」の出会いから彼の「狂人日記」まで」、『佛教大学文学部論集』第105号、2021年3月。

378 魯迅「訳文序跋集・「悪魔」訳者附記」、『魯迅全集』第12巻、543頁。

379 北岡正子『魯迅文学の淵源を探る——「摩羅詩力説」材源考』、汲古書院、2015年6月。張宇飛「魯迅の「摩羅詩力説」材源の新発見：ロシア作家コロレンコについて」、『中国言語文化研究』19号、2019年8月。

380 星湖生「二葉亭、曙夢両氏の近業 『露西亞文学研究』『片恋』『カルコ集』」、『早稲田文学』(第二次)29号、1907年4月。

381 魯迅「集外集・『貧しき人々』小序」、『魯迅全集』第9巻、139頁。

382 錢理群『豊富的痛楚——堂吉訶德与哈姆雷特的東移』、北京大学出版社、2007年1月、156-157頁。

383 周作人『知堂回想録 翻訳小説下』、鐘叔河編『周作人散文全集13』、河北教育出版社、2001年9月、372頁。。

384 北岡正子『魯迅文学の淵源を探る——「摩羅詩力説」材源考』、汲古書院、2015年6月。

385 周作人「俄国大作家」、陳子善、趙国忠編『周作人集外文1927-1945』、上海人民出版社、2020年1月、616-617頁。

386 北岡正子『魯迅文学の淵源を探る——「摩羅詩力説」材源考』、汲古書院、2015年6月。

387 崔文東「青年魯迅与徳語「世界文学」——『域外小説集』材源考」、『文学評論』、2020年第6期。

-
- 388 魯迅「集外集・「紅笑について」について」、『魯迅全集』第9巻、159-163頁。
- 389 魯迅「南腔北調集・私はどのようにして、小説を書き始めたか」、『魯迅全集』第6巻、第342頁。
- 390 魯迅「且介亭雜文二集・『中国新文学大系』「小説二集」序」、『魯迅全集』第8巻、第273頁。
- 391 李冬木「「狂人」の越境の旅：周樹人と「狂人」の出会いから彼の「狂人日記」まで」、『佛教大学文学部論集』第105号、2021年3月。
- 392 張麗華『現代中国「短篇小説」的興起：以文類形构為視角』、北京大学出版社、2011年4月。
- 393 孫伏園「魯迅先生二三事・藥」、孫郁、黃喬生編『魯迅先生二三事——前期弟子憶魯迅』、河北教育出版社、2000年7月、56頁。
- 394 阿英編『晚清文学叢鈔 俄羅斯文学訳文卷』（上冊）、（下冊）、中華書局、1960年。
- 林德海「關於普希金作品的最早中訳本〈俄国情史〉」、『文献』、1985年第2期。
- 樽本照雄「トルストイ最初の漢訳小説——「枕戈記」について」、『大阪経大論集』50巻6号、2000年3月。
- 李艷麗「晚清俄国小説訳介路徑及底本考——兼析“虚無党小説”」、『外国文学評論』、2011年第1期。
- 付建舟「清末民初俄国小説訳介路徑綜考(上)」、『清末小説から』115号、2014年10月。
- 付建舟「清末民初俄国小説訳介路徑綜考(下)」、『清末小説から』116号、2015年1月。
- 付建舟『清末民初小説版本経眼録・俄国小説卷』、中国致公出版社、2015年。
- 395 樽本照雄「トルストイ最初の漢訳小説——「枕戈記」について」、『大阪経大論集』50巻6号、2000年3月。
- 樽本照雄「吳禱の漢訳チャーホフ」、『清末小説』33号、2010年。

樽本照雄「吳禱の漢訳ゴーリキー」（上）、『清末小説から』101号、2011年4月。

樽本照雄「吳禱の漢訳ゴーリキー」（下）、『清末小説から』102号、2011年7月。

荒井由美「陳景韓の漢訳プーシキン」（上）、『清末小説から』138号、2020年7月。

荒井由美「陳景韓の漢訳プーシキン」（下）、『清末小説から』139号、2020年10月。

³⁹⁶ 藤井省三：『ロシアの影：夏目漱石と魯迅』、平凡社、1985年4月、144頁。

³⁹⁷ 崔文東「青年魯迅与徳語「世界文学」——『域外小説集』材源考」、『文学評論』、2020年6期。

³⁹⁸ 魯迅「南腔北調集・私はどのようにして、小説を書き始めたか」、『魯迅全集』第6巻、第342頁。

参考文献

中国語（ピンインローマ字順）

著書

阿英編『晚清文学叢鈔 俄羅斯文学訳文卷』（上冊）、（下冊）、中華書局、1960年。

陳子善、趙国忠編『周作人集外文 1927-1945』、上海人民出版社、2020年1月。

程麻『溝通与更新：魯迅与日本文学關係發微』、中国社会科学出版社、1990年。

程麻『魯迅留学日本史』、陝西人民出版社、1985年。

付建舟『清末民初小説版本経眼録・俄国小説卷』、中国致公出版社、2015年。

郭沫若『郭沫若全集』、人民文学出版社、1992年1月。

韓長経『魯迅与俄羅斯古典文学』、上海文芸出版社、1981年。

李春林『魯迅与陀思妥耶夫斯基』、安徽文藝出版社、1985年9月。

李何林編『魯迅論』、陝西人民出版社、1984年2月。

李冬木『魯迅精神史探源 進化与国民』、秀威資訊科技股份有限公司、2019年5月。

李冬木『魯迅精神史探源 個人・狂人・国民性』、秀威資訊科技股份有限公司、2019年5月。

劉柏青『魯迅与日本文学』、吉林大学出版社、1985年12月。

劉運峰編『魯迅全集補遺（增訂本）』、天津人民出版社、2018年7月。

魯迅『魯迅全集』、人民文学出版社、2005年11月。

魯迅博物館編『魯迅訳文全集』、福建教育出版社、2008年3月。

魯迅博物館編『魯迅年譜』、人民文学出版社、2000年9月。

魯迅記念館編『魯迅日文作品集』、上海文芸出版社、1981年。

『魯迅大辞典』編委会編『魯迅大辞典』、人民文学出版社、2009年12月。

魯迅博物館魯迅研究室編『魯迅藏書研究』、中国文聯出版公司1991年版。

彭定安『魯迅与中外文化的比較研究』、中国文聯出版公司、1986年。

錢理群『豐富的痛苦——堂吉訶德与哈姆雷特的東移』、北京大学出版社、2007年1月。

上海文芸出版社編『魯迅回憶錄 一集』、上海文芸出版社、1978年。

孫郁、黃喬生編『馮雪峰憶魯迅』、河北教育出版社、2000年7月。

孫郁、黃喬生編『海外回響 國際友人憶魯迅』、河北教育出版社、2000年7月。

孫郁、黃喬生編『魯迅先生二三事——前期弟子憶魯迅』、河北教育出版社、2000年7月。

孫郁、黃喬生編『魯迅与日本人：亞洲的近代与“個”的思想』、河北教育出版社、2000年7月。

孫郁『魯迅与俄国』、人民文学出版社、2015年3月。

孫郁主編『魯迅：在傳統与世界之間 「2016年魯迅文化論壇」暨國際學術研討會論文集』、人民日報出版社、2019年5月。

孫玉石『「野草」研究』、中国社会科学院出版社、1982年。

藤井省三、陳福康譯『魯迅比較研究』、上海外語教育出版社、1997年3月。

王富仁『魯迅前期小說与俄羅斯文学』、天津教育出版社、2008年。

王友貴『翻譯家魯迅』、南開大学出版社、2016年。

許廣平『許廣平文集』、江蘇文芸出版社、1998年1月。

許欽文『許欽文散文集』、浙江文藝出版社、1984年11月。

許壽裳『亡友魯迅印象記』、上海文化出版社、2006年7月。

伊藤虎丸、李冬木譯『魯迅、創造社与日本文学：中日近現代比較文学初探』、北京大学出版社、2005年11月。

郁達夫『郁達夫文集』、花城出版社、1983年11月。

張華『魯迅和外国作家』、陝西人民出版社、1981年4月。

張会森、陳智仁等譯『屠格涅夫全集 第七卷』、河北教育出版社、2000年。

張麗華『現代中国「短篇小說」的興起：以文類形构為視角』、北京大学出版社、2011年4月。

張釗貽編『尼采与華文文学論文集』、新加坡八方文化創作室、2013年11月。

趙瑞蕪『魯迅「摩羅詩力說」注釈・今訳・解説』、天津人民出版社、1982年4月。

止庵編『周作人訳文全集』、上海人文出版社、2019年6月。

中国社会科学院文学研究所魯迅研究室編『1913-1983 魯迅研究學術論著資料索引匯編分冊』、中国文聯出版公司、1990年7月。

鐘叔河編『周作人散文全集』、广西師範大学出版社、2009年。

周作人、魯迅訳『現代日本小説集』、新星出版社、2006年。

樽本照雄『清末民初小説目録』、齊魯書社、2002年4月。

學術誌

陳紅「兩篇魯迅安特萊夫的底本問題」、『日語學習与研究』、2015年第5期。

陳漱渝「尋求反抗和叫喊的呼聲——魯迅最早接觸過哪些域外小説？」、『魯迅研究月刊』、2006年第10期。

崔文東「青年魯迅与德語「世界文学」——『域外小説集』材源考」、『文学評論』、2020年第6期。

丁世鑫「对魯迅接受陀思妥耶夫斯基影響的客觀性与歷史性分析」、『陰山學刊』（社会科学版）、2007年4月。

范国富「魯迅留日時期思想建构中的列夫·托爾斯泰」、『魯迅研究月刊』、2016年第10期。

郭惠玲「兩顆孤独痛苦的心靈——「苦惱」与「祝福」的比較」、『貴州師專學報（社会科学版）』、1989年2月。

胡德才「「兔和猫」在魯迅創作中的意義」、『魯迅研究月刊』、2004年第2期。

姜訓祿「中国出版的萊蒙托夫作品、論著」、『俄羅斯文芸』、2014年7月。

姜异新「百來篇外国作品尋繹——留日生周樹人文学閱讀視域下的“文之覺”」（上）、（下）、『魯迅研究月刊』2020年第1期、第2期。

姜錚「魯迅怎樣借鑒果戈理」、『北方論叢』、1983年第2号。

寇志明著、黃喬生譯「魯迅與果戈理」、《魯迅研究月刊》、2002年第7期。

鄭明艷「不合時宜的“死魂靈”？——論魯迅與20世紀30年代果戈理譯介」、《勵耕學刊》、2009年第1期。

勞模「從魯迅和二葉亭四迷看中日近現代文學的不同特質」、《中國比較文學》、1994年6月。

林德海「關於普希金作品的最早中譯本〈俄國情史〉」、《文獻》、1985年第2期。

李春林「兩位「人性的天才」的「吶喊」與「絕叫」魯迅與迦爾洵的比較研究」（上）、（下）、《魯迅研究月刊》、2004年10月、11月。

李冬木「“狂人”的越境之旅——從周樹人與“狂人”相遇到他的〈狂人日記〉」、《文學評論》、2020年第5期。

李家寶、黃忠順「“醫學作品”特質的“神怪小說”——論契訶夫漢化歷程的起點」、《外國文學研究》、2016年第12期。

李艷麗「晚清俄國小說譯介路徑及底本考——兼析“虛無黨小說”」、《外國文學評論》、2011年第1期。

梁艷「從上田敏翻譯的「心」看轉譯的功與罪」、《日語教育與日本學》第4輯、2014年。

馬克安·高利克「魯迅的「吶喊」與迦爾洵安特萊夫和尼采的創造性對抗」（上）、（下）、《魯迅研究動態》、1989年1月、3月。

馬克安·高利克、伯拉第斯拉瓦、丁松「魯迅的「長明燈」與V.M. 迦爾洵的「紅花」兩部短篇小說的文學比較觀」、《魯迅研究月刊》、1993年5月。

潘青「留日時期的溝通與對話——魯迅與十九世紀俄羅斯文學」、青島大學碩士論文、2006年5月。

錢理群「從「兔和貓」讀起」、《語文建設》、2003年第3期。

沈露儒「魯迅接受陀思妥耶夫斯基影響的根據與發展過程」、《蘇州大學學報》（哲學社會科學版）、2008年9月。

- 史福興、「魯迅取法於迦爾洵一例」、《天津師大學報》、1985年第3期。
- 宋劍「周作人『近代歐洲文學史』（十九世紀）主要材源初探——以法國、俄國、北歐重點作家為例」、溫州大學碩士論文、2018年5月。
- 宋聲泉「『科學史教篇』藍本考略」、《中國現代文學研究叢刊》、2019年第1期。
- 孫郁「魯迅與果戈理遺產的幾個問題」、《文學評論》、2013年第3期。
- 田大畏「果戈理作品的早期中文譯本（一九二〇—一九四九）」、《世界文學》、2020年第1期。
- 汪衛東「『狂人日記』影響材源新考」、《文學評論》、2018年第5期。
- 汪衛東「新發現魯迅『文化偏至論』中有關施蒂納的材源」、《中國現代文學研究叢刊》、2008年第9期。
- 王晶晶「西方思想與中國現實的相遇——論日譯『六號室』對『狂人日記』的影響」、中國魯迅研究會、蘇州大學文學院『魯迅研究與四十年来中國社會思想文化——紀念中國魯迅研究會成立四十周年學術研討會論文集』、2019年11月13-15日。
- 王敬文「魯迅的『長明燈』與迦爾洵的『紅花』」、《武漢師範學院學報（哲學社會科學版）》、1983年6月。
- 王確「『狂人日記』和『浮雲』的創作啟示」、《東北師大學報》、1992年12月。
- 于九濤、王吉鵬「被遺忘的筆路藍縷者」、《甘肅社會科學》、2003年7月。
- 于九濤「二葉亭四迷與魯迅的關係考辯」、《日本學論壇》、2003年6月。
- 俞航「魯迅眼中的俄國詩人：形象學視野下的『摩羅詩力說』」、《中南大學學報（社會科學版）》第20卷第6期、2014年12月。
- 張竹筠「物象與象征——魯迅的『長明燈』與迦爾洵的『紅花』之比較」、《河北師範大學學報（社會科學版）》、1991年4月。
- 周新萍「魯迅與柯羅連科簡論」、《徐州師範大學學報》、2002年6月。
- 竹內良雄、王惠敏譯「魯迅的〈小說叢〉及其他」、《魯迅研究月刊》、1995年第7期。

新聞・雑誌類

『小説時報』

『新青年』

日本語

著書（五十音順）

ア・イ・シフマン『トルストイと日本』、朝日新聞社、1966年。

秋吉収『魯迅 野草と雑草』、九州大学出版会、2016年11月。

阿部兼也『魯迅の仙台時代：魯迅の日本留学の研究』、東北大学出版会、1999年11月。

伊藤虎丸等訳『魯迅全集』、学習研究社、1992年4月。

伊藤虎丸『魯迅と終末論—近代リアリズムの成立—』、龍溪書舎、1975年11月。

伊藤虎丸『魯迅と日本人：アジアの近代と「個」の思想』、朝日新聞社、1983年4月。

加藤百合『明治期露西亜文学翻訳論攷』、東洋書店、2012年12月。

上田敏『心』、春陽堂、1909年6月。

川戸道昭等編『世界文学総合目録 第8巻 ロシア編』、大空社、2012年7月。

川戸道昭等編『明治翻訳文学全集 36・プーシキン/レールモントフ集』、大空社、1999年12月。

川戸道昭等編『明治翻訳文学全集 37・ゴーゴリ集』、大空社、2000年4月。

川戸道昭等編『明治翻訳文学全集 38・トルストイ集 I』、大空社、1997年10月。

川戸道昭等編『明治翻訳文学全集 39・トルストイ集 II』、大空社、1999年5月。

川戸道昭等編『明治翻訳文学全集 40・ツルゲーネフ集 I』、大空社、1996年10月。

川戸道昭等編『明治翻訳文学全集 41・ツルゲーネフ集 II』、大空社、1997年4月。

川戸道昭等編『明治翻訳文学全集 42・チェーホフ集 I』、大空社、1998年11月。

川戸道昭等編『明治翻訳文学全集 43・チェーホフ集 II』、大空社、2000年10月。

川戸道昭等編『明治翻訳文学全集 44・ゴーリキー集』、大空社、2000年4月。

川戸道昭等編『明治翻訳文学全集 45・ドストエフスキー集 II』、大空社、1998年5月。

川戸道昭等編『続明治翻訳文学全集<翻訳家編>10・二葉亭四迷集』、大空社、2002年1月。

川戸道昭等編『続明治翻訳文学全集<翻訳家編>13・内田魯庵・嵯峨の屋お室集』、大空社、2002年6月。

川戸道昭等編『続明治翻訳文学全集<翻訳家編>14・馬場孤蝶集』、大空社、2003年3月。

川戸道昭等編『続明治翻訳文学全集<翻訳家編>17・上田敏集』、大空社、2003年7月。

片山智行『魯迅「野草」全訳』、平凡社、1991年。

北岡正子『魯迅 救亡の夢のゆくえ:悪魔派詩人論から「狂人日記」まで』、関西大学出版部、2006年3月。

北岡正子『魯迅日本という異文化のなかで:弘文学院入学から「退学」事件まで』、関西大学出版部、2001年3月。

北岡正子『魯迅文学の淵源を探る——「摩羅詩力説」材源考』、汲古書院、2015年6月。

国立国会図書館編『明治・大正・昭和翻訳文学目録』、風間書房、1959年9月。

神西清、原卓也『チェーホフ全集 6』、中央公論社、1960年8月。

『世界文学大事典』編纂委員会、『世界文学大事典』、集英社、1997年1月。

瀬沼夏葉『露国文豪 チェホフ傑作集』、獅子吼書房、1908年10月。

仙台における魯迅の記録を調べる会が編集する『仙台における魯迅の記録』、平凡社、1978年2月。

高松敏男、西尾幹二編『日本人のニーチェ研究譜』、1982年、白水社、289-298頁。

竹内実『魯迅周辺』、畑田書店、1981年。

竹内好『竹内好全集 第一巻』、筑摩書房、1980年9月。

竹内好『魯迅』、未来社、1961年5月。

中村光夫編『明治文学全集・17・二葉亭四迷 嵯峨の屋おむろ集』、筑摩書房、1971年11月。

中島長文編『ふくろうの声：魯迅の近代』、平凡社、2001年6月。

中島長文編『魯迅目睹書目 日本書之部』、宇治市木幡御蔵山、私版300部、1986年3月。

日本近代文学館編『日本近代文学大事典』、講談社、1977年。

昇曙夢『白夜集：露国名著』、章光閣、1908年。

昇曙夢『露国文豪ゴーゴリ』、春陽堂、1904年6月。

昇曙夢『露西亜文学研究』、隆文館、1907年。

齋島亘『ロシア文学翻訳者列伝』、東洋書店、2012年3月。

馬場孤蝶『泰西名著集』、如山堂、1907年7月。

潘世聖『魯迅・明治日本・漱石：影響と構造への総合的比較研究』、汲古書院、2002年1月。

福田光治編『欧米作家と日本近代文学 第三巻 ロシア・北欧・南欧篇』、教育出版センター、1976年1月。

藤井省三『ロシアの影 夏目漱石と魯迅』、平凡社、1985年4月。

藤井省三『魯迅事典』、三省堂、2002年4月。

藤井省三『魯迅と日本文学：漱石・鴎外から清張・春樹まで』、東京大学出版会、2015年8月。

二葉亭四迷『二葉亭四迷全集』、岩波書店、1964年9月。

松枝茂夫訳『周作人随筆集』、改造社、1938年6月。

丸山昇、伊藤虎丸、新村徹編『中国現代文学事典』、東京堂出版、1985年9月。

李長之、南雲智訳『魯迅批判』、徳間書店、1990年5月。

李冬木『魯迅の研究：「国民」と「進化」』、佛教大学通信教育部、2002年3月。

梁艶『清末明初における欧米小説の翻訳に関する研究：日本経由を視座として』、花書院、2015年3月。

八杉貞利『詩宗プーシキン』、時代思潮社、1906年6月。

柳富子『トルストイと日本』、早稲田大学出版部、1998年9月。

山崎貞訳注『大陸作家小品』、博文館、1910年4月。

吉田富夫『魯迅点景』、研文出版、2000年9月。

学術誌（五十音順）

秋吉収「中国におけるツルゲーネフ受容——民国時期の文壇を中心に」、『高知女子大学紀要 人文・社会科学編』第44号、1996年。

秋吉収「魯迅とツルゲーネフ」、『中国文学評論』、1995年10月。

荒井由美「陳景韓の漢訳プーシキン（上）」、『清末小説から』138号、2020年7月。

荒井由美「陳景韓の漢訳プーシキン（下）」、『清末小説から』139号、2020年10月。

池沢実芳「魯迅「藤野先生」ノート——トルストイの「ロシアと日本の皇帝にあてた1通の手紙」をめぐる」、福島大学経済学会『商学論集』第61期、1992年11月。

佐藤繁好「日本におけるプーシキン書誌（翻訳・研究・紹介文献目録）第一編（1883—1944）」、『窓』56号、1986年3月。

沢本香子「吳禱漢訳レールモントフ『銀紐碑』——日記「当代の露西亜人」」、『清末小説から』142号、2021年7月。

三宝政美「中国におけるチェーホフ——1920年代の翻訳・紹介を通して」、『富山大学人文学部紀要』15号、1989年。

清水賢一郎「国家と詩人——魯迅と明治のイプセン」、『東洋文化』第74号、1994年3月。

白井澄世「魯迅と1920～1930年代中国におけるドストエフスキイ——文学の伝播：同時代の日本・ロシアとの関係を中心に」、『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第12号、2009年10月。

大東和重「中国における日本を經由したロシア・ソビエト文学受容の一側面：昇曙夢の紹介・翻訳を中心に」、『言語と文化』第18号、2015年。

竹内良雄「魯迅の初期文学観の成立を探る——魯迅自身が編んだ「小説訳叢」をもとに」、『慶応義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』第15号、1995年。

谷行博「『石罅』はいかに作られたか」、『野草』52号、1993年。

谷行博「「謾・黙・四日」-魯迅初期翻訳の諸相-(上)」、『大阪経大論集』132号、1979年11月。

谷行博「「謾・黙・四日」-魯迅初期翻訳の諸相-(下)」、『大阪経大論集』135号、1980年5月。

谷行博「魯迅訳「四日」における神恵の存在」、『大阪経大論集』164号、1985年3月。

樽本照雄「トルストイ最初の漢訳小説——「枕戈記」について」、『大阪経大論集』50巻6号、2000年3月。

樽本照雄「トルストイ最初の漢訳小説——「枕戈記」について」、『大阪経大論集』50巻6号、2000年3月。

樽本照雄「吳禱の漢訳ゴーリキー」（上）、『清末小説から』101号、2011年4月。

樽本照雄「吳禱の漢訳ゴーリキー」（下）、『清末小説から』102号、2011年7月。

樽本照雄「吳禱の漢訳チャーホフ」、清末小説研究会『清末小説』33号、2010年。

張宇飛「魯迅の「摩羅詩力説」材源の新発見：ロシア作家コロレンコについて」、『中国言語文化研究』19号、2019年8月。

中島長文「藍本「摩羅詩力説」第七章」、『颶風』第6号、1974年4月。

中島長文「藍本「人間の歴史」(上)」、『滋賀大文』第16号、1978年。

中島長文「藍本「人間の歴史」(下)」、『滋賀大國文』第17号、1979年。

中村光夫「魯迅と二葉亭」、『文藝』6月号、1936年。

波多野鹿之助「二葉亭と魯迅」、『文学』22巻10号、1954年。

昇曙夢「ロシア文學の傳來と影響(明治胎生期の思出)」、ソヴェト研究者協会文学部会編『ロシア文学研究 第2集』、新星社、1947年。

昇曙夢「日本文学と露西亜文学」、『比較文学——日本文学を中心として』、矢島書房、1953年10月。

長谷部宗吉「昇曙夢 著作年譜(稿)(1)」、『札幌大学女子短期大学部紀要』51号、2008年3月。

長谷部宗吉「昇曙夢 著作年譜(稿)(2)」、『札幌大学女子短期大学部紀要』52、53号、2009年3月。

長谷部宗吉「昇曙夢 著作年譜(稿)(3)」、『札幌大学女子短期大学部紀要』54、55号、2010年3月。

長谷部宗吉「昇曙夢 著作年譜(稿)(4)」、『札幌大学女子短期大学部紀要』56、57号、2011年3月。

付建舟「清末民初俄国小説訳介路徑総考(上)」、『清末小説から』115号、2014年10月。

付建舟「清末民初俄国小説訳介路徑総考(下)」、『清末小説から』116号、2015年1月。

ブルナ・ルカーシュ「ゴーリキー文学受容史：明治四〇年前後の隆盛期を中心に」、『文藝と批評』11巻9号、2014年5月。

ブルナ・ルカーシュの「ゴーリキー翻訳年表——明治三五(一九〇二)年-大正12(一九二三)年」、『文藝と批評』11巻9号、2014年5月。

秦野一宏「ゴーゴリの二葉亭訳をめぐって」、『ロシア語ロシア文学研究』26号、1994年10月。

秦野一宏「日本におけるゴゴリ——ナウカ版全集（昭9）の出版まで」、『ロシア語ロシア文化研究』15号、1983年9月。

秦野一宏「日本におけるゴゴリ翻訳・紹介文献——戦前篇」、『早稲田大学図書館紀要』24号、1984年6月。

榎内裕子「ツルゲーネフ移入における昇曙夢」、『比較文学年誌』49期、2013年。

榎内裕子「昇曙夢の初期翻訳」、源貴志、塚原孝編『昇曙夢 翻訳・著作選集 翻訳篇2』、クレス出版、2011年。

柳富子「明治・大正期のチェーホフ」、『図説翻訳文学総合事典』第5巻『日本における翻訳文学（研究編）』、大空社、2009年11月。

李冬木「「狂人」の越境の旅：周樹人と「狂人」の出会いから彼の「狂人日記」まで」、『佛教大学文学部論集』第105号、2021年3月。

李冬木「<周樹人>から<魯迅>へ——留学時代を中心に」、『人文学研究の諸相 佛教大学・中国社会科学院文学研究所国際シンポジウム論集』、佛教大学推進部、2019年12月。

新聞・雑誌類

『朝日新聞』

『裏錦』

『江湖文学』

『学燈』

『慶應義塾学報』

『江湖文学』

『時代思潮』

『趣味』

『新古文林』

『新小説』

『新潮』

『太平洋』

『太陽』

『帝国文学』

『東京二六新聞』

『日本人』

『文芸』

『文芸倶楽部』

『文庫』

『文章世界』

『読売新聞』

『早稲田文学』

付録1 参考年表（1902－1912年）

	主な文学作品および事項	参考事項
1902 明治35年 光緒28年	1月、登張竹風『ニイチェと二詩人』 （人文社） 3月、松原二十三階堂「狂人日記」 （『文芸倶楽部』第8巻第4号） 4月、煙山専太郎『近世無政府主義』 （東京専門学校出版部） 8月、宮崎滔天『三十三年の夢』（国 光書房） 8月、桑木巖翼『ニーチエ氏論理説 一斑』（育成会） 8月、木村鷹太郎『文界之大魔王： バイロン』（大学館） 9月、森鷗外訳『即興詩人』（春陽 堂） 10月、梁啓超「論小説与群治之関 係」、『新中国未来記』、『新小説』 に掲載	1月、嘉納治五郎、東京に弘 文学院設立。 1月30日、日英同盟成立。 2月、梁啓超『新民叢報』を 創刊。 4月4日、魯迅、友人ら六人 と南京から大貞丸に乗船、 この日、横浜着。 10月、梁啓超『新小説』を 創刊。 11月、愛国学社結成。 12月、京師大学堂、正式に 開学。 12月、高山樗牛死去。
1903 明治36年 光緒29年	3月、嵯峨の山人訳「妖婦伝」、『新 小説』第8年第3巻に掲載 5月、徳富蘆花『不如帰』（民友社） 6月、周樹人「斯巴達之魂」、「哀 塵」（『浙江潮』第5期）	1月29日、留日学生1000余 人、春節（旧正月）の祝賀 会を東京清国留学生会館で 開催。 2月17日、月刊誌『浙江潮』

	<p>6 月、野の人「国家と詩人」、『帝國文学』第 9 卷第 6 号</p> <p>9 月、嵯峨の山人訳「水車小屋」、『新小説』第 8 年第 10 卷</p> <p>10 月、山田美妙訳『血の涙』（内外出版協会）</p> <p>10 月、周樹人「説鉛」、「中国地質略論」（『浙江潮』第 8 期）</p> <p>10 月、周樹人訳『月界旅行』（東京進化書社）</p> <p>12 月、周樹人訳『地底旅行』第一、二回（『浙江潮』第 10 期）</p> <p>12 月、戢翼翬訳『俄国情史』（大宣書局刊印）</p>	<p>東京で創刊。</p> <p>3 月 10 日、魯迅、許寿裳らとともに、弘文学院内の講道館牛込分場で柔道を習う。</p> <p>4 月、東京で中国人留学生はロシアに反対する拒俄義勇隊の組織を決定。</p> <p>6 月、清朝、学生の革命運動の取り締まりを命令。</p> <p>7 月、『革命軍』の著者鄒容、上海巡捕房に自首し逮捕される。</p> <p>11 月、堺利彦、幸徳秋水ら平民社を創設。</p> <p>12 月、蔡元培らは上海で『俄事警聞』を創刊。</p>
<p>1904</p> <p>明治 37 年</p> <p>光緒 30 年</p>	<p>1 月、姉崎正治『復活の曙光』（有朋館）</p> <p>5 月、丘浅次郎『進化論講話』（開成館）</p> <p>6 月、昇曙夢『露国文豪ゴーゴリ』（春陽堂）</p> <p>8 月 14 日、幸徳秋水「トルストイ翁</p>	<p>2 月、日露戦争はじまる。</p> <p>2 月、雑誌『時代思潮』を創刊する。</p> <p>3 月、上海で『東方雑誌』を創刊する。</p> <p>4 月、周樹人、弘文学院を卒業。</p>

	<p>の非戦論を評す」、『平民新聞』第40号</p> <p>10月、昇曙夢訳「くさ場」、『新小説』第9年第10巻</p>	<p>7月、チャーホフ死去。</p> <p>9月、周樹人、仙台医学専門学校の入学式を参加。</p> <p>9月、『新新小説』創刊、主編陳冷血。</p> <p>11月、蔡元培、陶成章ら上海で光復会結成。</p>
<p>1905</p> <p>明治38年</p> <p>光緒31年</p>	<p>1月-8月、夏目漱石の『吾輩は猫である』は『ホトトギス』に掲載</p> <p>1月、木村鷹太郎訳『海賊』（尚友館）</p> <p>4月、周樹人訳「造人術」（『女子世界』第4、5期）</p> <p>10月、嵯峨の家主人訳「東方物語」、『文芸倶楽部』第11巻第13号に掲載</p> <p>10月、長光迂人訳「森林」、『新古文林』第1巻第7号に掲載</p> <p>12月、栗林枯村訳「宿命論者」、『新古文林』第1巻第10号</p>	<p>6月、東京で雑誌『二十世紀之支那』を創刊。</p> <p>7月、科挙制度廃止。</p> <p>8月、中国同盟会成立、孫文を総理に選出。</p> <p>11月、日本文部省、清国留学生取り締まり規則を公布。</p> <p>11月、革命同盟会の機関紙『民報』創刊。</p> <p>12月、弘文学院の中国人留学生、取り締まり規則に抗議して授業ボイコットを開始。</p> <p>12月8日、陳天華は横浜大森海岸で投身自殺。</p>
1906	3月、岡上梁、高橋正熊共訳『宇宙	1月、堺利彦ら日本社会党結

<p>明治 39 年 光緒 32 年</p>	<p>の謎』（有朋館） 3 月、姉崎正治『国運と信仰』（弘道館） 5 月、周樹人と顧琅共著『中国鉱産志』（上海普及書局） 5 月、二葉亭主人訳「むかしの人」、『早稲田文学』〔第二次〕第 5 号に掲載 5 月、夏目漱石『漾虚集』（大倉書店） 6 月、八杉貞利『詩宗プーシキン』（時代思潮社） 6 月、丘浅次郎『進化と人生』（東京開成館） 12 月、小山内薫「露国の小説家ウラヂミール・カラレンコ」、『新小説』11 年 12 巻に掲載</p>	<p>成。 3 月、周樹人、仙台医学専門学校を退学。 夏、周樹人、一時帰国し、朱安と結婚、周作人を連れて再来日。 5 月、イプセン死去。 6 月、周樹人、東京独逸語専修学校に入学。 7 月、東京の中国人留学生、章炳麟歓迎会を開催。 11 月、東京で『民報』一周年記念会、参加者六千人。</p>
<p>1907 明治 40 年 光緒 33 年</p>	<p>1 月、夏目漱石『鶉籠』（春陽堂） 2 月、昇曙夢訳「心づくし（原名「彼得大帝の黒人」）（翻訳小説）」、『新小説』第 12 年第 2 巻に掲載 3 月-5 月、二葉亭主人訳「狂人日記」、『趣味』第 2 巻第 3-5 号に掲載</p>	<p>2 月、足尾銅山にストライキ。 6 月、パリで雑誌『新世紀』を創刊する。 7 月 6 日、光復会の徐錫麟は安徽巡撫恩銘を殺害、蜂起</p>

	<p>3月、二葉亭主人訳「二狂人」、『新小説』第12年第3巻に掲載</p> <p>4月、上田敏『文芸講話』（金尾文淵堂）</p> <p>5月、夏目漱石『文学論』（大倉書店）</p> <p>6月、斎藤信策『芸術と人生』（昭文堂）</p> <p>6月23日から夏目漱石の『虞美人草』は『朝日新聞』に掲載</p> <p>7月、馬場孤蝶訳『泰西名著集』（如山堂）</p> <p>7月、無極「狂人論」、『帝国文学』第13巻第17号</p> <p>9月、田山花袋「蒲団」、『新小説』第12年第9巻に掲載</p> <p>10月31日から二葉亭四迷の『平凡』は『朝日新聞』に掲載する</p> <p>12月、二葉亭主人『カルコ集』（春陽堂）</p> <p>12月、昇曙夢『露西亞文学研究』（隆文館）</p> <p>12月、周樹人「人間の歴史」（『河南』第1号）</p>	<p>するも失敗。</p> <p>7月13日、光復会の秋瑾、逮捕される（15日処刑）。</p> <p>8月、張継、劉師培ら東京で「社会主義講習会」を發起。</p>
--	---	---

	<p>呉禱訳「銀鈕碑」、「黒衣教士」（上海商務印書館 1907 年版『袖珍小説』叢書）</p>	
<p>1908 明治 41 年 光緒 34 年</p>	<p>1 月、二葉亭四迷訳『カルコ集』（春陽堂）</p> <p>1 月、高浜虚子『鶏頭』（春陽堂）</p> <p>2 月-3 月、周樹人「摩羅詩力説」（『河南』第 2、3 号）</p> <p>3 月、二葉亭四迷『平凡』（如山堂）</p> <p>4 月 7 日から島崎藤村の『春』は『朝日新聞』に掲載する</p> <p>6 月、「科学史教篇」（『河南』第 5 号）</p> <p>7 月、国木田独歩『独歩集』（近事画報社）</p> <p>7 月 25 日から夏目漱石の『夢十夜』は『朝日新聞』に掲載</p> <p>8 月、「文化偏至論」、「裴象飛詩論」（『河南』第 7 号）</p> <p>8 月、二葉亭四迷訳『血笑記』（易風社）</p> <p>8 月、芳賀矢一『国民性十論』（富山房）</p> <p>9 月 1 日から夏目漱石の『三四郎』</p>	<p>6 月、二葉亭四迷、朝日新聞ロシア特派員として、訪露に出発。</p> <p>6 月、赤旗事件起こる。</p> <p>9 月、欽定憲法大綱公布。</p> <p>11 月 14 日、光緒帝死去。</p> <p>11 月 15 日、西太后死去。</p> <p>12 月 3 日、宣統帝即位。</p>

	<p>は『朝日新聞』に掲載する</p> <p>10月、瀬沼夏葉訳『露国文豪 チェホフ傑作集』（獅子吼書房）</p> <p>11月、昇曙夢訳『白夜集』（章光閣）</p> <p>12月、周樹人「破悪声論」（『河南』第8号）</p>	
<p>1909</p> <p>明治42年</p> <p>宣統元年</p>	<p>3月、周樹人、周作人共訳『域外小説集』第一冊出版</p> <p>5月、夏目漱石『三四郎』（春陽堂）</p> <p>6月、上田敏訳『心』（春陽堂）</p> <p>6月、西本翠蔭訳「外套」、『文芸倶楽部』第15巻第8号に掲載</p> <p>7月、周樹人、周作人共訳『域外小説集』第二冊出版</p> <p>8月、二葉亭主人『乞食』（彩雲閣）</p> <p>8月5日-7日、昇曙夢「露国文学に於ける狂的分子」（上）、（中）、（下）、『東京二六新聞』に掲載</p> <p>陳景韓訳「俄帝彼得」、『小説時報』、1909年第1期</p> <p>陳景韓訳「生計」、包天笑訳「写真貼」、『小説時報』、1909年第2期</p> <p>包天笑訳「火車客」、『小説時報』、</p>	<p>1月、雑誌『スバル』を創刊する。</p> <p>5月、二葉亭四迷、露国より帰国途上ベンガル湾上にて死す。</p> <p>8月、斎藤信策死去。</p> <p>8月、周樹人の留日生活を終え、中国に戻る。</p> <p>9月、周樹人、杭州浙江兩級師範学堂教員となる。</p> <p>10月、伊藤博文、ハルビン駅で韓国人の安重根のため狙撃され即死。</p> <p>11月、トルストイ死去。</p>

	<p>1909年第3期</p> <p>包天笑訳「六号室」、『小説時報』、</p> <p>1909年第4期</p>	
<p>1910</p> <p>明治43年</p> <p>宣統二年</p>	<p>1月、夏目漱石『それから』（春陽堂）</p> <p>6月、上田敏『渦巻』（大倉書店）</p> <p>6月、昇曙夢『露西亜現代代表的作家六人集』（易風社）</p> <p>10月、昇曙夢訳『どん底：脚本』（聚精堂）</p> <p>陳景韓訳「心」、『小説時報』、1910年第6期</p>	<p>5月、大逆事件。</p> <p>8月、日、韓合併。</p> <p>8月、周樹人、紹興府中学堂教員兼教務長となる。</p>
<p>1911</p> <p>明治44年</p> <p>宣統三年</p>	<p>1月、夏目漱石『門』（春陽堂）</p> <p>1月、生田長江訳『ツアラトウストラ』（新潮社）</p> <p>1月、昇曙夢『偉人トルストイ伯』（春陽堂）</p> <p>9月、昇曙夢訳『六人集』（靑山書店）</p>	<p>1月、幸徳秋水ら12名死刑。</p> <p>5月、周樹人は周作人夫妻を迎えに東京へ行く。</p> <p>10月10日、湖北省都武昌にて革命党の蜂起を起こる。</p> <p>11月、周樹人は浙江山会初級師範学堂校長となる。</p>
<p>1912</p> <p>明治45年（大正元年）</p>	<p>6月、昇曙夢訳『毒の園』（新潮社）</p> <p>9月、夏目漱石『彼岸過迄』（春陽堂）</p>	<p>1月、孫文が南京で中華民国臨時政府の初代臨時大統領に就任。</p>

<p>中華民国元年</p>	<p>11月、王国維、日本京都で『宋元劇曲考』完成</p>	<p>1月14日、光復会の陶成章は上海で暗殺される。</p> <p>2月、周樹人、南京に行き教育部に勤務。</p> <p>3月、袁世凱、北京で臨時大統領に宣誓就任。中華民国臨時約法公布。</p> <p>5月、周樹人は臨時政府の移転に伴い北京に転居。</p>
---------------	-------------------------------	--

付録2 日本留学時代の周樹人が目睹したロシア文学に関する日本語訳の書目

(1) 作品

- ①「心づくし（原名「彼得大帝の黒人」）（翻訳小説）」、昇曙夢訳、『新小説』第12年第2巻、明治40年（1907）2月1日。
 - ②「狂人日記」、二葉亭主人訳、『趣味』第2巻第3-5号、明治40年（1907）3月-5月。
 - ③「むかしの人」、二葉亭主人訳、『早稲田文学』〔第二次〕第5号、明治39年（1906）5月1日。
 - ④「外套」、西本翠蔭訳、『文芸倶楽部』第15巻第8号、明治42年（1909）6月1日。
 - ⑤「宿命論者」、栗林枯村訳、『新古文林』第1巻第10号、明治38年（1905）12月。
 - ⑥「東方物語」、嵯峨の家主人訳、『文芸倶楽部』第11巻第13号、明治38年（1905）10月1日。
 - ⑦「妖婦伝」、嵯峨の山人訳、『新小説』第8年第3巻、明治36年（1903）3月1日。
 - ⑧「水車小屋」、嵯峨の山人訳、『新小説』第8年第10巻、明治36年（1903）9月1日。
 - ⑨「くさ場」、昇曙夢訳、『新小説』第9年第10巻、明治37年（1904）10月1日。
 - ⑩「森林」、長光迂人訳、『新古文林』第1巻第7号、明治38年（1905）10月。
 - ⑪「二狂人」、二葉亭四迷訳、『新小説』第12年第3巻、明治40年（1907）3月1日。
 - ⑫『血笑記』、二葉亭四迷訳、易風社、明治41年（1908）。
- （以下の作品は筆者の推測である）
- ⑬「四日間」、二葉亭四迷訳、『新小説』第9年第7巻、明治37年（1904）7月1日。
 - ⑭『罪と罰』、内田魯庵訳、内田老鶴圃出版、明治25年（1892）11月。
 - ⑮「猫児」、なでしこ（小山内薫）訳、『新古文林』第2巻第3号、明治39年（1906）3月。
 - ⑯『決闘』、小山内薫訳、梁江堂、明治43年（1910）4月。

(2) 評論

- ①昇曙夢『露国文豪ゴーゴリ』、春陽堂、1904年6月。
- ②八杉貞利『詩宗プーシキン』、時代思潮社、1906年。
- ③昇曙夢「レルモントフの遺墨」、『太陽』12巻12号、1906年。
- ④昇曙夢『露西亜文学研究』、隆文館、1907年。
- ⑤小山内薫「露国の小説家ウラヂミール・カラレンコ」、『新小説』第11年第12巻、1906年。

付録3 清末時期における日本語訳をもとに翻訳したロシアの文学作品

番号	原作者	日本語訳者	書目情報	中国語訳者	書目情報
1	プーシキン	高須治助	『露国奇聞 花心蝶思 録』、法木 徳兵衛 刊、1883 年6月	戢翼翬	『俄国情史』、大 宣書局刊印、1903 年
2	トルストイ	二葉亭四迷	「筒を枕 に」、金港堂、 1904年7月	佚名	「枕戈記」、『教 育世界』乙巳8、 10、19期(100、 102、111号)、光 緒31年(1905)5、 6、11月
3	レールモン トフ	嵯峨の家主 人	「当代の露 西亜人」、『太 陽』第10巻 第5号、1904 年4月	呉禱	「銀鈕碑」、上海 商務印書館1907 年版『袖珍小説』 叢書
4	チェーホフ	薄田斬雲	「黒衣僧」、 『太陽』第 10巻第13 号、14号、	呉禱	「黒衣教士」、上 海商務印書館 1907年版『袖珍小 説』叢書

			1904 年 10 月、11 月		
5	ゴーリキー	長谷川二葉 亭	「猶太人の 浮世」、『太 陽』第 11 卷 第 2 号、1905 年 2 月	呉禱	「憂患余生」、 1907 年『東方雜 誌』第 4 卷
6	ゴーリキー	上田敏	「鷹の歌」、 『芸文』、 1902 年 6 月	天蛻	「鷹歌」、『粵西』、 1908 年
7	プーシキン	昇曙夢	「心づくし」 (原名「彼得 大帝の黒 人」)(翻訳 小説)、『新 小説』第 12 年 第 2 卷、 1907 年 2 月	陳景韓	「俄帝彼得」、『小 説時報』1909 年第 1 期
8	チェーホフ	瀬沼夏葉	「余計者」、 『チェホフ 傑作集』、獅 子吼書房、 1908 年 10 月	陳景韓	「生計」、『小説 時報』1909 年第 2 期
9	チェーホフ	瀬沼夏葉	「写真貼」、	包天笑	「写真貼」、『小

			『チェホフ傑作集』、獅子吼書房、1908年10月		説時報』1909年第2期
10	チェーホフ	瀬沼夏葉	「月と人」、『チェホフ傑作集』、獅子吼書房、1908年10月	包天笑	「火車客」、『小説時報』1909年第3期
11	チェーホフ	瀬沼夏葉	「六号室」、『チェホフ傑作集』、獅子吼書房、1908年10月	包天笑	「六号室」、『小説時報』1909年第4期
12	アンドレーエフ	上田敏	『心』、春陽堂、1909年6月	陳景韓	「心」、『小説時報』1910年第6期

謝辞

筆者は2014年8月に西北大学・佛教大学の交流協定に基づく短期交換留学生として佛教大学に1年間留学し、その後、再び私費留学生として佛教大学に留学し、合わせて約7年間を京都で過ごしました。この間、佛教大学から、住居の提供、奨学金の給付、学費の免除などの多大な援助を受けることができました。これらの援助のおかげで約6年間の研究の成果を学位請求博士論文にまとめることができました。まず何より私の研究生生活を支えていただいた佛教大学に対して深く感謝しております。

佛教大学に留学し、交換留学生を経て2017年4月に修士課程に入学した後、研究活動全般にわたり格別なるご指導とご高配を賜りました李冬木先生に心より感謝申し上げます。筆者が大学院生になって以来、本研究の構想から文献・資料の収集方法、学会発表、論文作成に至るまで、終始一貫して暖かいご指導とご鞭撻を頂きました。李先生との出会いがなければ、今日の私はなかったと思います。さらに、佛教大学において様々なご教示を賜りました吉田富夫先生、辻田正雄先生、中原健二先生、荒木猛先生、黄当時先生、鶴飼光昌先生、若杉邦子先生、瀬邊啓子先生、楊韜先生、石崎博志先生、孫潔先生、孫樹喬先生、坂井健先生に心より感謝申し上げます。また、佛教大学の藤田一乗先生はいつもご丁寧な日本語チェックをしてくださいました。衷心よりお礼申し上げます。

そして、本研究の趣旨を理解し、貴重な資料を快く提供して下さった皆様に心から感謝申し上げます。本専攻文学研究室、勉強会の各位には研究遂行にあたり日頃より有益な討論や助言をいただきました。ここに感謝の意を表します。

2020年4月から2022年3月まで奨学金を提供してくださいました橋本循記念会に心より感謝いたします。

最後に、私の長年の留学生生活を支えてくれました両親に心から感謝します。

2021年10月31日

張宇飛